

# 学位請求論文

## 明治期仏教と初期社会主義

―大逆事件に関係した五人の仏教者たちを中心に―

仏教文化専攻

上山 慧

序	1
第一章 内山愚童の仏教社会主義とその行動	7
第一節 内山愚童の社会主義と仏教思想	7
(一) 社会主義思想への共鳴	7
(二) 宗教者としての愚童	15
第二節 秘密出版『入獄紀念 無政府共産』	25
第三節 獄中手記「平凡の自覚」と無題「遺稿」	35
第二章 高木顕明の思想的変遷	43
第一節 浄泉寺入寺前とその後の顕明	43
第二節 「余が社会主義」の執筆	52
第三節 社会主義への接近と信仰生活の確立	61
第三章 峯尾節堂の社会主義とその「転向」	70
第一節 峯尾節堂と社会主義との関係	70

第二節	節堂執筆の論説について	80
第三節	獄中手記「我懺悔の一節」	87

#### 第四章 井上秀天と初期社会主義との関係について……………93

第一節	「神戸平民倶楽部」の会員	93
第二節	中央の社会主義者との交流	99
第三節	井上秀天と大逆事件	105

#### 第五章 『牟婁新報』と毛利柴庵の思想……………111

第一節	『牟婁新報』の創刊と「新仏教徒同志会」との関係	111
第二節	毛利柴庵の日露戦争観	119
第三節	『牟婁新報』への弾圧	126
(一)	官吏侮辱事件	126
(二)	大逆事件	136

#### 結 章……………147

註

参考文献

## 序章

### 第一節 本論の主題

日本の社会主義運動は、幸徳秋水と堺利彦らが結成した平民社による日露戦争への非戦論から本格的にはじまっている。一九〇三（明治三六）年十一月一日、幸徳と堺は、週刊『平民新聞』を創刊し、その創刊号の一面の「宣言」で次のことを説いている。

一、自由、平等、博愛は人生世に在る所以の三大要義也。

一、吾人は人類の自由を完からしめんがために平民主義を奉持す、故に門閥の高下、財産の多寡、男女の別より生ずる階級を打破し一切の圧制束縛を除去せんことを欲す。

一、吾人は人類をして平等の福利を受けしめんが為に社会主義を主張す。故に社会をして生産、分配、交通の機関を共有せしめ、其の経営處理一に社会全体の為にせんことを要す。

一、吾人は人類をして博愛の道を尽さしめんが為に平和主義を唱導す。故に人種を區別、政体の異同を問はず、世界を挙げて軍備を撤去し、戦争を禁絶せんことを期す。

一、吾人既に多数人類の完全なる自由、平等、博愛を以て理想とす。故に之を実現するの手段も、亦た国法の許す範囲に於て多数人類の世論を喚起し、多数人類の一致協同を得るに在らざる可からず、夫の暴動に訴えて快を一時に取るが如きは、吾人絶対に之を否認す。

この幸徳と堺らの運動には多くの仏教者が同調し関心を寄せていた。堺利彦は、週刊『平民新聞』の後継雑誌『直言』で、次のことを述べている。

全体日本の社会主義者には耶蘇教出の人が多いが、仏教の人も亦決して少なくない。本社の齋藤兼次郎君が日蓮宗の信者なるが事は御存じの方も多いでせう。箱根の内山愚堂<sup>マヤ</sup>君は曹洞宗、鷲尾教導君は真宗、それから新仏教連には杉村縦横、毛利柴庵、和田不可得等の人々がある。先日は又、伊藤証信君が巢鴨の湖<sup>マヤ</sup>〔古〕白庵から態態遊びに見えた二

多くの仏教者が同調し関心を寄せていたことは、一九一〇（明治四三）年の大逆事件に、曹洞宗の内山愚童（死刑）、真宗大谷派の高木顕明（無期懲役）、臨済宗妙心寺派の峯尾節堂（無期懲役）が連座し、曹洞宗の井上秀天と真言宗の毛利柴庵も参考人として取り調べを受けていることからあきらかである。

明治期仏教と初期社会主義に関する研究は、吉田久一の著書『日本近代仏教史研究』（吉川弘文館 一九五九年）から本格的にはじまっているとともに、大逆事件と仏教の関係についての研究の基礎を作り上げた。しかしそれ以降、大逆事件と仏教の関係についての研究は、事件に連座したという経緯もあるためか、愚童・顕明・節堂の三人に焦点があてられてきており、彼らの生涯を扱った著書も数多く出されている。

一九八〇年代後半以降、中国・北朝鮮・ソビエト連邦・東欧諸国などの社会主義諸国において、経済状況の停滞や民主的自由の欠如などが原因で、一時期は社会主義の終焉とまでいわれていたという三。しかし、日本では、一九〇一（明治三四）年五月一八日に結成された社会民主党が、その宣言書の理想綱領のなかで、人種差別反対の人類同胞主義、軍備全廃の平和主義、階級制度廃止の平等主義をかかげている四。さきにふれた平民社の宣言でも、自由・平等・博愛の三大要素を唱えている。松沢弘陽によれば、初期社会主義は「社

会主義の世界に未だ一義的に公定されたオースドクシイが形成されない時代」だったため、平民社の「中心人物」を核にして、「多様な人々の多分に混沌たる諸思想」の状態にあり、「この状態のうちには多様な発展の可能性が孕まれていた」としている<sup>五</sup>。「混沌たる諸思想の状態」にあった初期社会主義の一端をあきらかにするためには、大逆事件に関係した五人の仏教者たちの個々の思想をみていく必要がある。

## 第二節 先行研究と本論の構成

第一章では、内山愚童の社会主義やその行動について考察していく。愚童は、大逆事件に連座し処刑されたという経緯もあり、事件に関する先行研究ではしばしば注目され、その生涯を扱った著書も柏木隆法・森長英三郎・眞田芳憲らによって刊行されている。また、曹洞宗からもブックレットが出されている<sup>六</sup>。しかし、大逆事件に連座した仏教者のなかで唯一死刑に処されたためか、愚童と大逆事件との関係についての研究が多く、彼の思想を重点的に考察した研究はほとんどみられない<sup>七</sup>。したがって、愚童と大逆事件との関係だけではなく、彼の仏教（宗教）思想と社会主義との関係を考察していきたい。

第二章では、高木顕明の思想的な遍歴を中心に考察していく。顕明については、真宗大谷派のブックレットや資料集をはじめ、大東仁や菱木政晴によって単著が刊行されている<sup>八</sup>。また、被差別部落解放・非戦論・廃娼やその実践の先駆者という観点や立場からの研究が多く出されている。末木文美士は、著書『近代日本の思想・再考Ⅰ 明治思想家論』（トランスビュー二〇〇四年）で、「高木顕明の社会主義」として、顕明の社会主義にふれている。しかし、「論旨が明瞭で、その思想をよくうかがうことができる」として、顕明が執

筆した「余が社会主義」から、その思想を検討している<sup>九</sup>。そのため、「余が社会主義」を執筆する前後の顕明の思想に関する研究はまったく出されていない。本稿では、浄泉寺に入寺する前から大逆事件に連座する直前までの間、顕明がどのような思想を抱いていたのかを、その変遷に注目し考察していきたい。

第三章では、大逆事件前後における峯尾節堂の思想について考察していく。節堂は、大逆事件に連座した仏教者のなかでも先行研究が最も少なく、臨済宗妙心寺派のブックレットをはじめ、中川剛マックスや田中伸尚の単著が出されている程度である<sup>一〇</sup>。節堂は獄中手記に「我懺悔の一節」があるが、中川はこの手記を「内容は事件の無実を訴えるのではなく、判決を受入れて恩赦を求める内容」であり、「悲痛な叫びも史実から離れては資料にならない」としてふれていない<sup>一一</sup>。辻本雄一も「大石誠之助の人柄への批判が顕著なもの、模範囚としてのみせかけなのか、どうか。(略)しかし一方で、事件の捏造の構造を正確に見抜いていることもまた確かなのだ」<sup>一二</sup>として、著書『熊野・新宮の「大逆事件」前後 大石誠之助の言論とその周辺』で節堂のことを取り上げていない。本稿では、峯尾節堂と社会主義との関係のみならず、「我懺悔の一節」の再評価も含めた、彼の思想的な「転向」についてもみていきたい。

第四章では、大正・昭和期にかけての東洋思想研究家・仏教研究家である井上秀天と初期社会主義との関係について考察していく。秀天は、社会批判や平和論に関する論説を数多く発表し、東洋思想に関する著書を複数出しているためか、佐橋法竜の単著のほか、福島寛隆・赤松徹真・近藤俊太郎・守屋友江・石井公成などによる研究が出されている<sup>一三</sup>。しかし、そのほとんどが秀天の仏教思想や平和論に関する研究であり、社会主義との関係

について扱った研究はほとんどみられない<sup>一四</sup>。吉田久一は『日本近代仏教史研究』で、秀天と社会主義者との関係についてもふれているが、「岡林寅松（野花）とは、三十九年頃から知り合ったが深い交際はなかった。秋水の演説を東京で聞いたことはあったが、はじめて会ったのは大阪である。しかし、ほとんど言葉も交わしていない。『大阪平民新聞』は購読していたが、森近には余り好感を持っていなかった。（略）したがって、社会主義者との深い交流はほとんどなかった」<sup>一五</sup>と述べている。しかし、秀天は神戸市における週刊『平民新聞』読者会・社会主義研究会の「神戸平民倶楽部」の会員であり、幸徳秋水・森近運平ら中央の社会主義者とも交流していた。秀天は、「新仏教徒同志会」の機関雑誌である『新仏教』に論説をたびたび寄稿しており、その内容は社会批判や平和論に関するものが多いが、社会主義や大逆事件に言及したものもあり、それらの資料などから社会主義者との交流をはじめ秀天と社会主義の関係を重点的に考察していくことにする。

第五章では、新資料を含めた『牟婁新報』や『新仏教』に掲載された毛利柴庵の記述を中心に、柴庵の仏教思想と社会主義との関係や、日露戦争では開戦論を主張した彼の戦争観、大逆事件をはじめとした『牟婁新報』への官憲による弾圧を考察していきたい。柴庵が和歌山県田辺で発行していた『牟婁新報』は、一九五九（昭和三四）年に関山直太郎によって、社会主義に関する記事だけを収めた『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』（吉川弘文館 一九五九年）として刊行され、二〇〇一年から二〇〇四年にかけて一九〇〇（明治三三）年四月の創刊号から一九一九（大正八）年一二月までの号が復刻された<sup>一六</sup>。さらに二〇〇三年には和歌山県田辺市内の古書店から一九〇四（明治三七）年二月九日から翌年一月四日までの日露戦争を中心とした号外一八五枚が発見されており、新発見の資料を含め



た、柴庵の仏教思想と社会主義の関係や大逆事件についての研究が出されておらず、とくに大逆事件をはじめとした『牟婁新報』への弾圧に関しては再検討が必要である。柴庵については、佐藤任の単著のほか、門奈直樹・武内善信・堀口節子らによる研究が出されている<sup>一七</sup>。柴庵に関しては、彼を社会主義者とするか否かの問題があり、この点については従来の先行研究ではまったく追及されていない。吉田久一は、『新仏教』での柴庵の記述を中心に彼の思想を考察し、柴庵について「彼を社会主義者の範疇に入れることばできないだろう」<sup>一八</sup>としている。柴庵と親交があり大逆事件に連座し処刑された成石平四郎も、柴庵を「社会主義ノコトハ研究シタノダロト思ヒマスガ主義者デハ無イト思ヒマス現ニ私ガ同人ト談話スルトキニモ同人ハ僕ハ社会主義デモキリスト教帝国主義デモ何デモ良イ処ヲ採用スルノデアル君等ノ如キ社会主義者デアルト言フ様ナコトハ意見ガセマイト申シテ居リマシタ」<sup>一九</sup>と述べている。しかし、堺利彦は「新仏教徒同志会」の社会主義者に杉村縦横・和田不可得らとともに柴庵の名前をあげたり<sup>二〇</sup>、「吾柴庵兄の如きは、恐らくは是れ社会改良家と革命家との間の子であらう」<sup>二一</sup>とも述べたりしている。

本稿では、大逆事件に連座した内山愚童・高木顕明・峯尾節堂のみならず、事件容疑者として取り調べを受けた井上秀天と毛利柴庵を事例に、彼らの仏教（宗教）思想と社会主義との関係を重点的に考察し、その思想において彼らなりの独自性や、彼らに共通している部分をあきらかにしていきたい。それは、初期社会主義の一端だけではなく、彼らの思想や行動がどのような可能性をしめしたものであったのかをあきらかにしていくことにもつながっているのである。

## 第一章 内山愚童の仏教社会主義とその行動

### 第一節 内山愚童の社会主義と仏教思想

#### (一) 社会主義思想への共鳴

内山愚童は一八七四（明治七）年五月一七日、宮大工と菓子木型製作の職人である父・直吉と、母・カヅニの長男として、新潟県北魚沼郡小千谷町六八九番戸に生まれた。幼名は慶吉。地元の小千谷高等小学校を卒業後、一八九七（明治三〇）年四月に神奈川県宝増寺住職・坂詰孝童のもとで得度し、一八九八（明治三一）年九月から翌一八九九（明治三二）年二月まで曹洞宗第二学林で修学、本科二年級を修業した。一九〇三（明治三六）年四月、神奈川県箱根にある大平台村（現・箱根町大平台）の曹洞宗林泉寺に移り住み、一九〇四（明治三七）年二月九日に住職となったが、このころから社会主義にも関心を抱くようになった。

一九〇四（明治三七）年二月、週刊『平民新聞』の読書投稿欄である「予は如何にして社会主義者となりし乎」に、愚童は次のような文章を寄稿している。

内山愚童氏（相州箱根）余は仏教の伝道者にして曰く一切衆生悉有仏性 曰く此法平等無高下 曰く一切衆生的是吾子 これ余が信仰の立脚地とする金言なるが余は社会主義の言ふ所の右金言と全然一致するを発見して遂に社会主義の信者となりしものなり二三

「一切衆生悉有仏性」は、『大般涅槃經』卷第八の「如来性品 第十二」の「一切衆生に悉く仏性有り」二四から引用したものと推測される。この一節は、『大般涅槃經』で数多く書かれており二五、『大般涅槃經』における中心的な教義のひとつといえよう。

「是法平等無有高下」は、『金剛般若波羅蜜經』の「この法は平等にして高下有ることなし」<sup>二六</sup>からの引用である。身分の差別なく誰でも仏になることができることを説いたものであり、仏教世界での平等性を説いている。

「一切衆生皆是吾子」は、『妙法蓮華經』卷第二の「譬喻品 第三」にある「一切衆生は皆、これ吾が子なるに 深く世の樂に著して 慧心あること無し。三界は安きこと無く 猶、火宅の如し」<sup>二七</sup>から引用したものである。欲界<sup>二八</sup>・色界<sup>二九</sup>・無色界<sup>三〇</sup>の三界を燃える家に例えて、そこから衆生を救い出したいという意味である。この一節のあとに「諸の衆生をして 三界の苦を知らしめ 出世間の道を 開示し演説するなり」<sup>三一</sup>と述べられており、仏法を広める際の精神を説いたものと思われる。

仏教經典の一節を引用して、仏教の教義と社会主義がまったく一致するという認識をしめしているが、これらの教義はそれぞれ精神的な理想を説いたものであり、現実世界での実現を説いた言葉ではない。しかし、愚童はこれらの經典に書かれている理想世界の実現の具体的な方法手段として、社会主義に到達したのであろう。

愚童は大逆事件の公判廷でも仏教者を志した理由と社会主義に共鳴した理由について、「人類幸福主義ノ為苦痛ヲ救済スルノ目的ニテ宗教ニ入ル然シ人ハパンノミニテ活クル能ハサルト共ニ精神ノミニテ話タ〔活ク〕ル能ハス是ニ於テ經濟問題ヲ研究スルノ必要ヨリ社会主義ニ入ル」<sup>三二</sup>と述べたと、弁護人の今村力三郎は自身のノートにメモしている。曹洞宗で得度する以前から、愚童は人類幸福主義を抱いていたとともに、宗教は個人の内面の信仰のみならず、現実の社会問題や經濟問題とも関係しているととらえていたことがうかがえる。

愚童は、大逆事件時の第一回参考人調書（明治四三年七月二五日）でも、河島台蔵予審判事の「参考人ハ何時カラ社会主義<sup>マ</sup>ニ成ツタノカ」という質問に対して、次のように答えている。

明治三十七年ニナリマシタ、如何ナル所カラソシナ事ニ成ツタカト申シマスト、私共ノ宗門デ以前支那ニ於テ各僧侶ノ修業<sup>マ</sup>スル所ヲ見マスト、一時ニ貳百人モ三百人モ一ツ所ニ在テ、同一ノ衣服同一ノ飯食ニ依ツテ共同生活ヲ為シテ居ルノハ如何ニモ美ナル有様デアル、是ヲ一村一郡一國ノ上ニ其制度ヲ施シタナラバ、余程良ヒ制度ガ出来ルダロウト云フ理想ヲ抱テ居リマシタ、然ル所、其当時平民新聞ヲ讀ンデ見マシタラバ、私ノ抱テ居ル主義ト同一デアリマシタカラ、私ハ其所デ社会主義中ノ無政府共產主義者ト成ツタ次第デス<sup>三三</sup>

「予は如何にして社会主義者となりし乎」への寄稿や、公判廷での証言、この第一回参考人調書<sup>三四</sup>によれば、愚童の社会主義思想は、僧侶になる以前から抱いていた人類幸福主義や、仏教の教義のみならず、中国でみた<sup>三五</sup>とされる<sup>三五</sup>仏教者の共同生活の姿がベースであると述べられている。

では、このころの愚童は、どのようにして社会主義を実現しようと考えていたのであるうか。「予は如何にして社会主義者となりし乎」に続いて、週刊『平民新聞』第一二号の「読書と記者」欄に、愚童の次のような投書が掲載されている。

予の考に依れば今日社会主義の理想が貴族や富豪より唱導せらるゝこと、教主悉多太子の如く財を捨てて位を捨てゝ一平民になるの自覚を生ぜざれば福音の実現困難なることゝ存候若し愚意に少しだも同感の節有之候はゞ貴族富豪を感化するの手段など御教

授願度候（箱根大平六、内山愚堂氏） 三六

「悉多太子」とは釈尊の王子時代の名前であるシッダールタのことである。シッダールタは、王子の位や妃や財産を捨て、カピラヴァストウの王城を出て仏教を広めたので、仏教は世界の宗教になることができた。これと同じように、貴族や富豪が財や位を捨てて一平民になって唱導するならば、社会主義の実現は成功するので、貴族や富豪を感化する方法を教えてほしいということである。社会主義に共鳴しはじめたころの愚童は、王子の位や妃や財産を捨てた釈尊と同じように、貴族や富豪も財や位を捨てれば、一夜にして社会主義の理想郷が建設できると考えていたのであろう。しかし、「記者」は、この愚童の質問に対して、次のように答えている。

悉多太子ほどの偉人が悉多太子ほどの地位から滅多に出ようとは思はれませんが、成程貴族富豪の中に社会主義者が出来まいとも限りません、現に西洋には貴族の同主義者が少くはありません、有名なる虚無党のクロポトキンは露国の皇族であります、然し大体から見れば貴族富豪の多数が容易に社会主義者にならうとは思はれませんが、それは特に貴族富豪など、云はずに、何でも善いから国民の多数、人類の多数に此思想を伝播すれば、革命は自然に行はれる事と我々は信じて居ります、それに昔からの歴史を御覧なさい、社会の上流の革命の動機を發した例がありますか、我々は只中以下の社会に一人でも多くの同主義者を作る事が目下の急務だと考へます（記者） 三七

「記者」は、愚童が述べたような貴族や富豪を感化するのではなく、民衆に社会主義を啓蒙するほうが、社会主義の理想郷が自然に建設されると述べている。「記者」からみれば、日本の貴族や富豪がシッダールタのように自ら財や位を捨てるはずがなく、愚童の質問は

単なる一仏教者の理想論程度としかとらえていたのであろう。

愚童が林泉寺住職に就いたのと同時期の一九〇四（明治三七）年二月に日露戦争が開戦すると、同年二月一五日付で曹洞宗は「普達 甲第十一号 全国末派寺院」三八を出して、全国各地の門末寺院に戦争への協力を呼びかけている。この曹洞宗の戦争協力への動きに対して、愚童は非戦論を唱えていた。週刊『平民新聞』第一五号（明治三十七年二月二一日）に、愚童は出征兵士の母親に同情する「兵士の母」を投稿している。

兵士の母 汽車中兵士の母なる人の斯く談るを聞き申候「ハイ誠に有難ふ御座ります、人様が国家の為になる、イヤ名譽であると仰せ下さりますのは実に勿体ないが、有難迷惑で御座ります、忤に出られましては嫁と孫と私でドウすることも出来ませぬ、運能くて忤の帰る頃は私等は餓死して居りましたよー、政岡ぢやありませんが死ぬるが忠義と云ふ理窟は私には解りません、ナゼ強い子供を持った者は死なねばならふのでしやう乎」、余は之を聞いて思はず落涙仕り候、兵士の母は皆同様ならんと存じ候（内山愚童氏） 三九

また、のちの秘密出版『帝国軍人座右之銘』でも、公権力や資本家への抵抗とともに、非戦論を展開している。

戦争は総（すべ）て罪惡也（なり）。常に専制者と相場師とを利するに過ぎざる者也。故に吾人は曰（言）ふ。決して犠牲の羊となる勿れ。卑しむ可（べ）き好（奴）隷たるたるを止（や）めよ。虐殺者に絶縁（純縁）の宣告を放て（なせよ）。而して諸君自身の生命を保護するに勉めよ。（略）／諸君よ、諸君にして若（も）し国境の外送らるゝ事あらば、諸君は即ち貪婪（慾）飽（あ）くき（あくなき）銀行屋（や）及び投資機の犠牲

たるを忘るゝ勿れ。而して諸君が病氣或は負傷等の為に、帰り来らん時、諸君の母国は諸君に対して何をか為す。誠に此の母は（其コク家は）鬼婆の如き継母たる也（なり）。／是れ即ち（この故に）吾人非軍（グン）備主義者が（は）、〇〇〇（ソウ脱営）以（モツ）て開戦の宣告に応ぜんと決したる所以也（理由なり）。／奴隷よ（諸君よ）、諸君の（は諸君の）鉄鎖を破れ。而して〇〇〇〇〇（人類同ほう）を愛するの人となれ。而して若し諸君の血を流すの要あらば、そは諸君の幸福と自由とのためにせよ<sup>四〇</sup>。

週刊『平民新聞』に寄稿するなど、社会主義に共鳴していた以上は、非戦論にも同調するのは当然である。しかし、非戦論を唱えたのには愚童個人の問題もあつたといえよう。愚童の妹・ヨシの夫・渡辺彦作は、結婚わずかにして予備役召集を受けて、旅順攻防戦に出征し戦死している。愚童は妹のためにも非戦論を唱えざるを得なかつたと考えられる。このような愚童の思想形成の背景には、自身の幼少期の生活や林泉寺の檀徒の生活が大きく影響を及ぼしていると考えられる。愚童の父・直吉は、宮大工をしていたといわれるが、松方デフレ政策による不況のなか、神社仏閣の新築修理の依頼はなく、菓子木型を生業として家計を営んでいた。森長英三郎は「直吉一家の家計は想像に絶するものがあつたにちがいない。慶吉はその性格形成にもっとも重要な小学校時代に、貧乏の苦痛と、政治不信を身にしみて知ったわけである」<sup>四一</sup>と述べている。

大平台の住民について、岩崎正純によれば、一八八八（明治二一）年の大平台村の経済状況は、村民の七八％は年間一〇〇円<sup>四二</sup>以下の収入しかなく、ただ一軒三〇〇〇円以上の収益をあげている林泉寺総代の渡辺勘右衛門にしても、塔ノ沢の鈴木善左衛門や、宮ノ下の山口仙之助と比較すると、年間収入は半分以下である。これは、当時の大平台には温泉

がなく、観光収入がなかったためと推測される。大平台村一戸あたりの年間収入は一七二円であつたのに対して、西隣の底倉村は五四五円と格差がある。一八八八（明治二一）年の記録には、大平台村の戸数四二戸のうち三七戸は木地挽・塗師職で、村全体が箱根細工事業に従事していたという<sup>四三</sup>。林泉寺を実際に訪れた堺利彦は、「僕は曾て大平台の林泉寺に彼（筆者注・愚童）を訪うた時彼は箱根細工の丸盆に達磨の彫物をやつて居た、貧乏寺のお住持はコンナ内職をもし玉ふのだ」<sup>四四</sup>と書いている。「内職」とあるので、賃金を得る目的で彫物をしていたのであろう。愚童の父・直吉は、宮大工と菓子木型製作の職人だったので、愚童も小千谷にいたころに覚えた技術を活かして、大平台の村民たちに加わって、彫物をやつていたと思われる。

愚童は林泉寺を訪れたキリスト教社会主義者の石川三四郎に対し、大平台の住民について、「深き熱誠を以て」<sup>四五</sup>次のように語つたという。

当地の民業は昔より木細工を以て主となす、唯だ人民甚だ固陋にして遠大なる企図を志す能はず、殊に個人主義利己主義強く、共同の事業など容易に起らず、造林業の如き或る程度迄は成就すべきの地利あれども唯だ手を束ぬるのみ、工業其他の業も技術其ものは多少の発達あるも収入は多きを得ず、困窮は日に増加し行くこと甚だしく、彼等人民自身も、数年の後には皆家を失ひ業を失ひ、当地に住する能はざるに至るべきを自覚しながら、自ら之が救済に尽さんと志す者なく、只管己れ一個の小利を貪りて各地を排擠し、而して資本家をして此間に乗じて益々暴利を獲取せしむ、歎ずべきなり、余は現在の成人は到底語る可からざるを覚り、今は専ら青年と少年との教導に尽力しつゝあり、幸にして平民新聞の如き、平民文庫の如き、此郷民を救ふの最



適業あり、常に各数部を分配して回読せしむ（略）／其土地で死ぬ積で無ければ其地の人を救ふことは出来ぬと思ひます<sup>四六</sup>

石川が記す住民の「固陋」<sup>四七</sup>は、大平台だけではなく、全国各地の農村でみられたことであると考えられる。しかし、愚童は大平台の住民の「固陋」を打破しようとしていたのも確かである。石川によれば、「毎夜愚堂<sup>ママ</sup>氏の教を受けんとて当寺に会する小年十数名あり、喫飯中既に登場する者多し」<sup>四八</sup>と書いている。このことは、一九〇八（明治四一）年八月から翌一九〇九（明治四二）年七月までの社会主義者の動向について、内務省警保局が作成した極秘資料である「社会主義者沿革」第二にも、「土地ノ児童等ニ夜間無報酬ニテ書物ノ教授ヲ為シ授業後簡易ニ主義上ノ説明ヲ与へ又小学校教師ト交際ヲ結フ等漸ヲ追フテ之カ注入ヲ企図シ居リシモノ、如シト云フ」<sup>四九</sup>と記録されている。

愚童の大平台の子どもたちへの啓蒙活動の視点は、村民、とくに青年層にも向けられていた。一九〇四（明治三七）年ごろ、愚童は大平台の青年有志と協力して、修養と社会教育の実践を目的とした「青年組合」を結成している。また、愚童は週刊『平民新聞』第三六号（明治三十七年七月一七日）に、

小生居住は海拔一千尺、温泉が無いのが欠点に候へども：小生は昨年四月本師に死なれ、其後茲に住職いたせし所謂新世帯でござる：小生は独身生活で家内猫の親子と小生とで三個米は村の人が持つて来てマア三人なら食う丈あります：小生居宅は小生居住中夏期平民倶楽部として広く同志の来遊を待、二三人連の一二泊は山料地にて平民的同臥の覚悟さえあれば何時にても歓迎致候<sup>五〇</sup>

と寄せているように、「夏期平民倶楽部」を組織し、同志の来訪を広く呼びかけている。こ

の愚童の呼びかけに応じたのであろうか、林泉寺には、石川をはじめ、幸徳秋水・堺利彦・小田頼造（野声）・山口義三（孤剣）<sup>五一</sup>らが訪れている。週刊『平民新聞』や社会主義の書籍を「常に各数部を分配して回読せし」めていたのは、愚童が組織した「青年組合」や「夏期平民倶楽部」の活動を指しているものと思われる。

これらの愚童の啓蒙活動は、大平台だけにとどまらず、大平台の周辺の村々にも及んでいたと考えられる。岩崎正純による大平台村の南に位置する須雲川村に住んでいた古老からの聞き取りによれば、大平台の坊さんが大きな男と山を越えてやってきては、村で面白い節回しで世の中のからくりを批判した歌をうたって説教したという。須雲川村民のなかには、その歌を覚えた人もおり、愚童が大逆事件に連座し刑死したあとまたたび歌っていた村民がいたという<sup>五二</sup>。愚童は、大平台のみならず、箱根一帯の民衆の「固陋」をも打破しようと企図していたのであろう。

明治維新以降の産業革命によって、地主は小作地の上昇や、それによる米価の上昇で収入は増加していった。しかし、自前の土地をもっていない小作人は、地主や資本家の搾取によってさらに困窮していくしかなかった。小千谷時代からの貧窮の体験と強い政治不信に加え、貧しい生活のなかで困窮していく大平台の村民の実態を、林泉寺住職として目の当たりにしたことが、愚童が社会主義に共鳴し、その啓蒙活動を展開していったのである。

## （二）宗教者としての愚童

ここまで林泉寺の住職になったころの愚童の社会主義やその啓蒙活動についてみてきたが、林泉寺の住職、または宗教者としての愚童はどうであったのであろうか。

林泉寺の住職に就いてから三ヶ月後の一九〇四（明治三七）年五月三〇日付で、愚童が温泉村常泉寺住職・折橋大光に寄せた書簡のなかで次のことを書いている。

罪惡の糊塗である、人として為すべき事で無いと云ふ原因の為に煩悶また煩悶を重ね、疲れてとろ／＼とすれば愚と笑ふ勿れ、亡師に腑甲斐なきを罵られ笑はれて眼さむれば、罪惡を糊塗せし事に責められてとろ／＼夜が明けて終つたのです、／嗚呼此煩悶いかにして癒やさなか、予は直ちに仏前に読経して且つ謝し且つ祈れり、自己の意志が薄弱であつたと将来仏天の加護に就て、顧れば宝珠院に於ける過去の歴史は罪惡であつた、今や改革の好時期である而るに又もかくして罪惡を糊塗する、嗚呼罪惡を糊塗する之れ予が煩悶の種にして、此煩悶の原因を除去せんか、（略）／今や予は予の煩悶を愈やささんが為めに公明の処置に出でざるを可らず、しかも其罪惡の糊塗を赤裸々として予に利するや否やは問題の外にて、今より察するも十中の七人に不利ならん、これ予にとりては高き価を以て精神の煩悶を購ひたるものなれば悔む事なしと覺悟いたします／扱てかく自己の躰度<sup>マヤ</sup>を明示して之より如何なる作戦計画をなすかは未定に候も、さりとて今に於ては誰れの指導を仰ぐと云う場合でなく、只だ慈愛なる仏陀に依るの外はありません <sup>五三</sup>

愚童は翌三一日にも折原に書簡を出しており、そこで「罪惡」や「煩悶」について次のように記している。

予には到底恩金云々は罪惡であります、売寺制度が宗内の裏面に暗流する以上は罪惡の糊塗である。予か昨日の書面に過去の宝珠院は罪惡であつたとは其れであります、／そうして其罪惡の一部分は亡師の關係する処であるから予の<sup>マヤ</sup>「は」煩悶するので予

が三十五円を広瀬氏に渡し其が為に後住が出金を減ずるは之れ罪惡を小にするので、予が立脚地よりの希望は少くも当祖に於て恩金云々売寺制度の暗流を防止したのであります、されば昨日御勧誘の其金子を以て他の事業に使用する事は予が立脚地よりして応ずる事の出来ないで之れ亦御了察を願ひます（略）／末光剛仙氏（筆者注・宝珠院の新任住職）今日来られ一昨日の訂約の件承知の旨に候へば右宜しく奉願候／併しながら予はどうしても一昨日の訂約をして罪惡にあらずと言ふ事を合点いたす事の出来ないのは残念の至りに存候、／要するに貴下と予の衝突点は売寺制度の罪惡と非罪惡とに御座候（略）将来に於ける罪惡退治には敵を捉ばざる覺悟に候へば右御承知の程を偏に奉願候 五四

書簡に書かれている「宝珠院」は、林泉寺入寺前の愚童が修行していた寺院であり、「亡師」は宝珠院住職で愚童の修行の師でもあった寺沢大計と思われる。これらの書簡は、曹洞宗内で行われていた売寺制度の矛盾に対して、愚童が批判したことにより、折橋との間で問題が起こったとみられる。売寺制度とは、寺院の住職の交代が行われる際、後住が先住に対して、その寺院の権利に関して金銭の譲与を行うことである。つまり、金銭による寺院の権利の売買であり、この金は先住の退職金と老後の恩を兼ねたような性格をもっており、このような慣習は非公認だが公然と行われていたという<sup>五五</sup>。寺沢が亡くなったあと、その後住である末光剛仙が寺沢の遺族との間で金銭の譲与を行うことになったので、このことに愚童は制度自体を罪惡ととらえ煩悶したのである。三日付の書簡では、「残念の至りに存候」と不本意ながら制度を認めたが、「将来に於ける罪惡退治には敵を捉ばざる覺悟に候」と売寺制度を撤廃する運動を展開すると書いている<sup>五六</sup>。

愚童が林泉寺の住職として、仏教本来の教義を守り、実践していかうとする態度は、「覚書」からもうかがえる。この「覚書」は、一九〇六（明治三九）年二月一日に檀家総代の渡辺勘右衛門・細川定吉・鈴木庄蔵らに出されたものである。そこには次のことが記されている。

一 林泉寺檀信徒トシテ葬祭ヲ為サントスル者ハ生前信者タルノ義務ヲツクス<sup>一</sup>ヲ承諾アリタシ（略）

従来林泉寺檀信徒トシテ林泉寺ヲ維持スルノ義務ヲ承諾セラレシ諸氏ニ対シテ、カ<sup>ハ</sup>ル提出ヲ為スルハ一見不審ノ事ト認メラレンモ吾人其職ニアル者ヨリ見ルトキ、聊カ物足ラヌ思ヒナキニ非ズ

抑モ宗教ノ信者トシテ尤モ重ンズル処ハ其教ノ如何ナヤヲ聞キテ之ヲ信ジ以テ処世ノ方針トナスニアル<sup>一</sup>何レノ宗教モ共通ノ規則ナリ（略）

然ルニ従来ノ如ク、タ<sup>ゞ</sup>寺院ノ維持費ニ応ズルノ義務ノミヲ以テ葬祭仏事ヲ為シテ足レリトセバ、之リ曹洞宗ノ面目ヲ汚スノ甚ダシキノミナラズ、諸氏ノ身ニトリテモ馬鹿ラシキノ極ト云フベシ（略）

一 墓地整理委員ヲ設ケテ各自所有墓地ト無主墓地トヲ区別セラレタシ（略）

戸数ノ増植<sup>マ</sup>ニ從ヒ之レト共ニ墓地ノ必用ヲ生ズルハ当然ノ<sup>一</sup>ニシテ一朝事アルニ臨ンデ其都度交渉云々モアマリ誉メタ話ニアラズ、故ニ早速之ヲ整理シテ其憂ヒナカラシメンガ為ナリ<sup>五七</sup>

これによれば、愚童は檀徒が寺院を義務的に維持し、これに対して住職が葬祭に応じるという、従来の檀徒と寺院の關係に疑問をもち、「宗教ノ信者トシテ尤モ重ンズル処ハ其教

ノ如何ナヤヲ聞キテ之ヲ信ジ以テ処世ノ方針トナスニアル」と提案している。また、墓地についても墓地整理委員会を設けて、無縁墓を整理し、寺院経営の合理化を訴えている。このような愚童のラジカルな主張が檀徒に受け入れられたのかは不明である。しかし、石川三四郎は、最晩年の一九五六（昭和三一）年に刊行した『自叙伝』（理論社 一九五六年）で、自身が影響を受けた宗教者として、海老名弾正や内村鑑三などのクリスチャンとともに、愚童の名前をあげている。

内山愚童君は、禅宗の修業鍛錬に非凡な上達を示した人で、真に生死を超越した心境を開いた人でありました。この事實は、内山君と交際している間にしばしば遭遇した処であつて、私は幾度驚異の目を見開いたかしのほどもでした。幸徳と共に死刑に処せられた時でも、いささかも心を動かす様子さえ現わさず、極めて平静にかつ明らかに、絞首台に登ったといひます。立ち会った教誨師も、これには頭を下げたそうです 五八

石川は、クリスチャンであるにもかかわらず、仏教者の愚童を高く評価している。仏教本来の教義をラジカルに守ろうとする愚童の姿勢に石川はひかれていたのである。そのためか、石川は一九〇四（明治三七）年九月一〇日と一九〇六（明治三九）年五月一四日の二回も林泉寺を訪れている。

一度目の訪問は、病氣療養先の小田原から林泉寺を訪れており、そのときの模様を週刊『平民新聞』第四五号（明治三七年九月一八日）で「函根大平台小集」と題して報告している。それによれば、愚童は石川に対して、さきにふれた大平台の住民の「固陋」について話した際、石川は「其土地で死ぬ積で無ければ其地の人を救ふことは出来ぬと思ひます」

という愚童の言葉に深い感銘を受け、「心中病を冒しても一席の演説を試ん」と決心した。そして当夜、愚童の通知で寺に集まった村民三〇余名の前で、石川は「貧者多き所以、競争の弊、交通発達に伴ふ競争の増大、協同の必要、消費組合の話、(略)社会主義の解釈」などを二時間にわたって演説し、翌日小田原に戻った<sup>五九</sup>。

それから一年以上が経った一九〇六(明治三九)年四月二八日、足尾銅山鉍毒問題に取り組んでいた石川は、栃木県による堤防の破壊工事を阻止するため<sup>六〇</sup>谷中村を訪れた。破壊工事の予定日前夜、田中正造が泰然としてすぐに寝入ったのに対し、石川は官憲との流血沙汰を予想して怯懦の心を抱いた。翌日、官憲は現れなかったが、石川は「苟も十字架を負うて社会運動に身を投じたと称するものが、びくびくしたのでは見つともない、だが私はそのびくびくの方らしい」という慚愧の念を抱き、やがて信仰上の煩悶を起こした<sup>六一</sup>。この信仰上の煩悶を鎮めるために、石川は林泉寺を訪問しており、そのときのことを『自叙伝』と「平民の信仰」(『新紀元』第九号 明治三九年七月一〇日)に記している。『自叙伝』には、林泉寺を訪れたときのことを次のように書いている。

私は帰京の翌日(筆者注・実際の日付は五月一四日)箱根大平台の内山愚童君を訪うて、このことを訴えました。愚童君は暫時の静坐を勧めてくれました。愚童君の寺は小さな寺ではあるが、見晴らしのよい、静かな所で、お正月に一人の生活ですから、瞑想、清閑を妨げる何ものもありませんでした。(略)心はしーんとして静寂の底に沈む。その時です。突如として心の窓が開け「十字架は生れながら人間の負うたものだ」と気がつきました。それは、真に歓天喜地のうれしさでありました。その時、製茶に専心している和尚のところに行ってこれを告げると、「あー、その通りだよ、それだ

よ！」とうなづきました。それは一週間の坐禅の中ごろのことでした<sup>六二</sup>

「平民の信仰」でも、「此の砕けし思を懷けね我は、敬愛する禅僧愚童兄が精舎に入り、暫し黙想の客となつて我が心の乱緒を整へんものと、かくは旅行を思ひ立ちし也」とあり、「吾道は單純に十字架を負ふに在り」、「十字架を負はざる一切の事業には生命無し」と書いている<sup>六三</sup>。のちに石川は、一九〇六（明治三九）年に二月に結成された日本社会党の機関紙である日刊『平民新聞』の筆禍により、一九〇七（明治四〇）年四月二五日から一年以上入獄しているが、その間に『一休和尚伝』<sup>六四</sup>・『禅門宝訓』<sup>六五</sup>・『釈尊一代記』<sup>六六</sup>・『大乘起信論』・『碧巖窟』<sup>六七</sup>といった仏教に関する書籍を読んでいる。また、石川の獄中の思索をもとに書かれた『虚無の靈光』でも、「絶対他力の信仰」や「人生の実状」として、一休の「世の中に寝た程楽はなきものを、知らぬたわけが起きてはたらく」、「わが役は、心にいらぬ役なれど、天の作者のさし図是非なし」という歌や、釈尊の「此世の有様は恰も電光の如く、石火の如く、無常のものである」という言葉をあげている<sup>六八</sup>。また、この著書には「無我」・「大我」・「無礙光」などの仏教用語もみられる<sup>六九</sup>。石川の思想形成には、愚童との交流を契機として、仏教からも何らかの影響を受けていたと推測される。さて、愚童と親交のあった宗教関係者として、もうひとりあげておきたいのが伊藤証信である。伊藤は、真宗大学（現・大谷大学）の研究生であったが、一九〇四（明治三七）年八月二七日夜、枕辺で突然靈感に打たれ、「無我の愛」を悟った。翌一九〇五（明治三八）年三月、この靈感体験を基に東京・巢鴨の大日堂に無我苑を開いて修養運動をはじめ、同年六月には機関雑誌として『無我の愛』を創刊した。しかし、この伊藤の運動は真宗大学学監・南条文雄の反発を招き、大学当局は伊藤に運動の中止を勧告した。これに対して、



伊藤は同年一〇月、無我愛運動を進めるために僧籍を返上し、『無我の愛』第一〇号を「脱宗号」と銘打った。この決断は大きな反響を呼び、幸徳秋水・堺利彦・徳富蘆花などが賛辞を寄せたが、愚童もそのひとりであった。「脱宗号」発行後の一九〇五（明治三八）年一月はじめごろ、愚童は伊藤に次のような手紙を出している。

脱宗号謹んで拝読仕候、何人も今の世に在つて、真面目に道の為に働かんとする者は、魔窟より発する本山の偽法には堪えられません、／私などは先日、貴宅を訪問せしとき、その意中を語ろうと思ふたが、翻つて一考すると、折角因縁あつて住職した今の地が、三百年來、曹洞宗の信仰の下にあり乍ら、高祖道元の性格は勿論、其名も知らぬといふ気の毒な人ばかりであるから、之を見捨てゝ去る時は、千万劫此地に仏種を植ゆる事は出来ぬ、／それで本山から住職罷免のあるまでは無我の真理を劍として、一生懸命に戦ふ覚悟で居りますが、今は四面楚歌の聲で、いつ落城するやらわからない、それは自然の成り行きに任せるとして、私も何とかして月一回位は大日堂を訪れたいと思ふけれど、自己の小さき力は、大なる周囲の事情に敗れるのでその意を得ません、請ふ同情あれ、次に同朋諸氏よ、私の処も無我の愛の看板はないが、事實はそうに違いないから、修養と伝道とを兼ねて遠慮なしに御出て下さい、独身生活の殺風景も、無我愛に住する私には、自然の広長舌を伴といて、日一日と妙境に進む心地が致します。〇

この手紙は、「脱宗号」を読んでの感想だが、曹洞宗の本山を「魔窟」と称し、本山から発する命令などを「偽法」としている。さらに、「折角因縁あつて住職した今の地が、三百年來、曹洞宗の信仰の下にあり乍ら、高祖道元の性格は勿論、其名も知らぬといふ気の毒

な人ばかりであるから、之を見捨てゝ去る時は、千万劫此地に仏種を植ゆる事は出来ぬ」とも述べている。愚童が当時の曹洞宗やその僧侶を批判的にみているだけではなく、彼が林泉寺住職としての決意もうかがえる。

その『無我の愛』にはじめて愚童の名字が登場するのは第六号（明治三五年八月二五日）である。同号の「四面呼応」に、愚童は次のような通信を寄せている。

敬愛する無我苑同朋諸君よ、予は兄等と信仰の門戸を異にしたり、予は応無所住而生其心に於て確信を得たり、而して兄等の無我苑に対して同じ高嶺の月を見るの感あり、希くば共に同朋として教界に伴はれよ、就ては九月初旬、予は無我苑を訪はんとす、而して願くば二三週間諸兄と住食を共にせんとす、諸兄は之を許さるや否や、禪堂生活費に慣れし予は、大日堂の生活に興味を有することと存候乱筆多罪<sup>七一</sup>

この『無我の愛』への投稿以降、愚童は伊藤の無我苑をたびたび訪問している。愚童がはじめて無我苑を訪れたのは一九〇五（明治三八）年九月ごろである。そのときの感想や愚童の印象を伊藤は次のように書いている。

比頃は訪問者も追々に増して来た。先日、箱根の愚童和尚が来られて、半日談ぜられたが、其信仰、其思想、全く吾人と同一であつたのは嬉しかった。殊に社会主義観、国家観、現今の教界に対する考へが、吾人と符号を合すが如くであつたので、吾人は、将来互に提携し誘掖すべき良師友は此人であると、洵に頼もしく感じて居る<sup>七二</sup>

千葉耕堂『無我愛運動概観』（無我愛運動史料編纂会 一九七〇年）によれば、伊藤もたびたび林泉寺を訪れ、親しく語り合っていたという<sup>七三</sup>。伊藤も愚童の思想や行動に共鳴していたのであろう。

さらに一九〇六（明治三九）年には、愚童は箱根で「修道苑」の設立を計画している。同年九月二六日付で愚童が伊藤に寄せたはがきには、「余は今、修道苑の計画に従事す、遅くも四十年の三四月には今の境遇を脱して専心修道と伝導に従事せんとす、それ計画略々、途につかば補助せられんを希望す」<sup>七四</sup>と書かれている。この計画は一年前から進められていたとみられ、一九〇五（明治三八）年九月一〇日発行の『無我の愛』第七号には「芦の湖畔！この精霊に対し、禅堂に入るの時、生は意慮不到の境に遊ぶこと屡なり。生は同人と共に、こゝに修養の室を作りて、以て後進を誘導せんと計画しつゝあり」<sup>七五</sup>との愚童の通信が載っている。これらのはがきや通信から、伊藤の運動に影響を受けた愚童が、真宗の立場からの無我苑にならって、禅の立場からの仏教的な修養の場として「修道苑」を設立しようとしていたと推測される。しかし、この「修道苑」の拠点が林泉寺内に設けられるのか、林泉寺とは別に芦ノ湖畔に設けようとしていたのかは不明である。

一九〇六（明治三九）年十一月一八日付で、愚童が伊藤に寄せた手紙のなかに、「僕、県下の同志（勿論大同小異は免れず）と神奈川教報を発行する事にいたしました、何卒兄の立場より見たる女子教育に就て寄書の労を採つて頂きたい」<sup>七六</sup>と書かれている。伊藤への手紙にある『神奈川教報』とは「修道苑」の機関雑誌であつたと推測される。この『神奈川教報』は、日刊『平民新聞』第一号（明治四〇年一月一日）に、「内山愚堂<sup>マヤ</sup> 本月より月刊『神奈川教報』を発行す箱根大平台林泉寺住職元の如し喝」<sup>七七</sup>と載っており、一九〇七（明治四〇）年一月に月刊誌として実際に発行されたようである。その後、『神奈川教報』（第三号） 箱根大平台林泉寺にして古き社会主義者なる内山愚童氏の発行する所、宗教問題及び社会問題につき毎号有益の記事多し」<sup>七八</sup>と、第三号まで発行されていたという

が、現在もこの『神奈川教報』の実物はみつかっていない。

曹洞宗教団を批判し、仏教本来の教義をラジカルに守ろうとする愚童の姿勢の背景には、貧困生活を送る大平台の住民があった。事実、愚童は石川に「其土地で死ぬ積で無ければ其地の人を救ふことは出来ぬと思ひます」<sup>七九</sup>と語っている。愚童の考えていた仏教とは、さきにふれた伊藤への手紙にあるように、「曹洞宗の信仰の下にあり乍ら、高祖道元の性格は勿論、其名も知らぬといふ気の毒な人ばかりであるから、之を見捨て」ずに、「本山から住職罷免のあるまでは無我の真理を剣として、一生懸命に戦ふ」というものであった<sup>八〇</sup>。民衆の立場から仏教を問い直そうとする愚童の姿勢は、戦争に協力するなど権力に従属していく教団とは対立するものだが、彼が社会主義に共鳴し、その啓蒙活動を展開していく理由と同じであったといえよう。

## 第二節 秘密出版『入獄紀念 無政府共産』

日露戦争終結後の一九〇六（明治三九）年六月から翌一九〇七（明治四〇）年二月にかけて、「非戦論」という共通の理念を失った社会主義運動は、幸徳秋水・大杉栄ら直接行動派、片山潜・田添鉄二・西川光二郎ら議会政策派、堺利彦・森近運平ら中間的折衷派（議会政策・直接行動併用論者）などに分裂し、対立の道をつきすすんでいった<sup>八一</sup>。

このころから愚童は直接行動論に傾倒するようになった。一九〇八（明治四一）年一月一日に、伊藤証信に宛てて記したはがきには次のことが書かれている。

僕はそれに反して近頃思想の変化を来たした、／弱者の味方たる宗教者のやり方が馬鹿気に見えて堪らぬ、昨年の暮には小田君（筆者注・小田頼造）がト翁（筆者注・ト

ルストイ)の人道主義を送ってくれたので、ト翁のやりかたも、念をいれて調べたが、  
圧政な政府とボイコットする事は大賛成であるが、其個人主義はどうも厭き足らぬ、  
／僕はどうしても社会的に人の上に人を頂かぬ世界を造りたくなつた、／目下は其事  
に就て苦心して居る、その結果爆裂弾かピストルか、武器に於ては決定せぬ／いづれ  
の政府も政府ほど暴悪な者はない、／武器を持つて平民を押しつゝ租税を奪ひつゝあ  
る、此暴悪を制する事は宗教家の力では駄目である、今の宗教家にして真個に天国の  
作造に心がくるならば、此政府を倒させねば駄目である、珠数つまくる其手に常に爆  
弾を携へつゝあらねばならぬ／僕は経巻を棄てゝ何を採らんか、こは目下の研究問題  
でまだ決定はせぬ<sup>八二</sup>

愚童の思想において、国家権力に対する反逆性を高める転換点ともなった事件が赤旗事  
件である。この事件は、一九〇八(明治四一)年六月二二日、新聞紙条例違反による刑期  
を終えて出獄した山口孤剣の歓迎会のあと、一部のものが「無政府」・「無政府共産」と書  
かれた赤旗をふりまわし、待ち構えていた警官隊と衝突し、大杉栄・堺利彦・山川均・荒  
畑寒村らが逮捕された事件である<sup>八三</sup>。この事件に対して、愚童は事件に抗議すべく、一九  
〇八(明治四一)年秋ごろに『入獄記念 無政府共産』を秘密出版した<sup>八四</sup>。

『入獄記念 無政府共産』は、その体裁は大きめの文庫本で、表紙と本文で一六頁とい  
う小冊子である。表紙は赤地に白抜きで「無政府共産」と右横書き二行に書いた旗がひら  
めいており、「革命」と記した三角旗や「入獄記念」という文字も添えられている。本文は  
「小作人ハナゼ苦シイカ」という表題からはじまっているが、ここまでは木版印刷であり、  
本文からは不十分な活字を組み合わせた活版印刷となっている。

この『入獄記念 無政府共産』で、愚童は「小作人諸君。諸君もキツト今の金持や大地主のやうに、ゼイタクをしたいであらう。タマニハ遊んでおつて、ウマイ物をたべたいであらう。けれども、それが諸君に出来ないといふのは、諸君が一つの迷信を持つておるからである」<sup>八五</sup>と小作人に問いかけている。そして、小作人に植え付けられた迷信として、次の三点をあげている。

△諸君は地主から田や畑をつくらしてモロウカラ、其お礼として小作米をヤラネばならぬ。

△諸君は、政府があればこそ、吾々百姓は安心して仕事をしておることが出来る。其お礼として税金をださねばならぬ。

△諸君は国にグン備がなければ、吾々百姓は外国の人に殺されてしまふ。それだから若い丈夫の者を、兵士にださねばならぬ<sup>八六</sup>

さらに続けて愚童は、

此三つのマチガツタ考へが深くシミ込んでおるから、イクラ貧乏しても、小作米と、税金と、子供を兵士に出すことに、ハン対することが出来なくなつておる。モシモ小作米をださなくても宜しい<sup>マ</sup>、税金をおさめなくても宜しい。かわい子供<sup>マ</sup>を兵士にださなくても宜しいなど云ふ者があれば、ソレハむほんにन्दである、国賊である、など云ふて、其じつ自分たちの安樂自由の為になることを、聞く事も読む事もせずにしまふ。コ、ハ一番よく考へて、読んでいたゞきたい<sup>八七</sup>

と、「今すぐにも其迷信ヲステサイすれば、諸君はほんとうに安樂自ゆうの人となる」<sup>八八</sup>と訴えている。そのため、『入獄記念 無政府共産』の内容の重点としては、小作米不納・

納税拒否・兵役拒否になるが、それに加えて天皇制否定もあげられる。

まずは小作米不納である。愚童は、小作米を地主に出す必要のない理由について、次のように述べている。

ナゼ小作米を地主にださなくても宜しい者かと云ふに、ソレハ小作人諸君が、耕す所の田や畑を、春から秋まで、鋤もいれず、タネもまかず、コヤシもせず、ホツテおいてゴらんない。秋がきたとて米一粒出来ませぬ。夏になつても麦半ツブとれる者でない。コゝを見れば、スグにしろではないか。秋になつて米ができ、夏になつて麦ができるのは、百姓諸君が一年中、アセ水ながして、やすまずに働いた為である。ソウして見れば自分が働いて出来たコメや麦は、ノコラズ百姓諸君のものである。何をネボケテ地主へ半分ださねばならぬと云ふ理クツがあるか――土地は天然しぜんにあつた者を、吾等の先祖が開こんして食物の出来るやうなしたのである。其土地をたがやしてトつタ物を、自分の者にするのが、何でムホンニンであるか。／小作人諸君。諸君は、ながい間地主に盗まれてきたのであつたが、今といふ今、此迷ひがさめて見れば、ながいながい恨みのハラキセに、年ごを出さぬバカリでなく、ヂヌシのクラにある、麦でも金でもトリカヘス権利がある。ヂヌシのクラにアルすべての者をトリダスことは、決して泥坊ではない。諸君と吾等が久しく奪はれたる者を、回復する名誉の事業である八九

小作人の困窮の原因は、地主制にあるとして、地主制を否定している。大平台の住民の多くは、年間収入一〇〇円以下という貧困生活を送っており、地主や資本家から小作人が搾取を受けている実態を目の当たりにして、地主制そのものを否定したと推測される。納

税拒否についても、この小作米不納の延長線上として主張しているといえよう。

諸君はヨークかんがいて見たまへ。年が〔ら〕<sup>ママ</sup>年中、あせ水ながして作った物を、半分は地主と云ふ泥坊にトラレ、のこる半分で、酒や醤油や塩やこやしを買ふのであるか、其酒にも、コヤシにも、スベテの物に、ノコラズ政府と云ふ大泥坊の為にトラレル税金がかゝつて、其上に商人と云ふ泥坊が、モウケやがる（略）／ツギニ、政府に税金をださなくても宜しいと云ふことは何故ナゼであるか。小作人諸君。ムズカシイ理くつはいらぬ。諸君は政府という者のある為に、ドレダケの安樂が出来ておるか。少しでも之が政府様のアリガタイ所だといふことがアツタナラ、言つて見たまい。昔から泣く子と地頭には勝たれぬといふて、無理な圧制をするのか、お上の仕事とキマツテおるではないか。コンナ厄介の者をイカしておく為に、正直に働いて税金をだす小作人諸君は貧乏しておるとは、馬鹿の頂上である。／諸君は、こんな馬鹿らしい政フに税金を出すことをやめて、一日もハヤク厄介ものを亡ぼしてシマフではないか。そうして親先祖の昔より、無理非道盗まれた政フの財産をトリ返して、みんなの共有にしやうではないか。之は諸君が当然の権利で、正義をおもんずる人々は、進んで万民が自由安樂の為に政府に反抗すべきである九〇。

この主張も、大平台の住民の生活実態から唱えたと考えられる。ここでは、小作米不納についての主張で非難した地主だけではなく、政府や資本家を「泥坊」や「大泥坊」という言葉で批判している。愚童にとって政府・資本家・地主の存在は、経済的格差の原因であり、民衆の立場から資本主義を批判している。

次に兵役拒否である。愚童は、社会主義に共鳴しはじめたころから非戦論を唱えていた



が、この小冊子では政府の打倒をも唱えている。

男の子が出来ればナガイ間、貧乏のなかで育てあげ、ヤレうれしヤ、コレカラ、でんばたの一まいも余分に作つて、借金なしでも致したいと思ふまもなく、廿一となれば、イヤデモ何でも、兵士にとられる。そうして三年の間、小遣ゼニを送つて、キ、タクもない、人ゴロシのけいこをさせられる。それで戦争になれば、人を殺すか、自分で殺されるかと云ふ、血なまぐさい所へ引っぱりだされる」／セガレが兵士に三年とられておるうちに、家におるおやぢは、ツマコをつれてコジキに出だしたといふ者もある。兵士にでたセガレは、うちが貧乏で金は送つてくれず、金がなければ、古兵にイジメられるので、首をク、つて死んだり、川へとびこんで死んだり、又は鉄道で死んだりした者が、何ほどあるかしれぬのである。(略)／小作人諸君。諸君はひさしき迷信の為に、国にグンタイがなければ、民百姓は生きておられん者と信じておつたであらう。ナルホド、今も昔も、いざ戦争となれば、ぐんたいのない国は、ある国に亡ぼされてしまふに極つておる。けれども之は、天子だの政府だのと云ふ大泥坊があるからなのだ。／戦争は政府と政府のケンクワでわないか。ツマリ泥坊と泥坊が、ナカマげんくわする為に、民百姓がなんぎするのであるから、この政府といふ泥坊をなくしてしまへば、戦争といふ者は無くなる。戦争がなくなれば、かわい<sup>ママ</sup>子供を兵士にださなくても宜しいと云ふことわ、スグにしれるであらう。／ソコデ小作米を地主へ出さないやうにし、税金と子供を兵士にやらぬやうにするには、政府と云ふ大泥坊を無くしてしまふが一番はやみちであるといふことになる<sup>九一</sup>

『入獄記念 無政府共産』では、徴兵制に対して非協力による不服従を主張している。

しかし、徴兵されて兵士になった者はどうするべきかについては何も書いていない。愚童は、別の秘密出版『帝国軍人座右之銘』では、自らを「吾人非軍（グン）備者」<sup>九二</sup>と称し、最後に「来るべき革命は無政府共産。即ち政治的にも経済的にも、最も自由なる社会を造るにある。而して諸君のそう脱營は、之を成功せしむる一大原因なり。諸君希くば、それ勉めよ」<sup>九三</sup>と述べている。眞田芳憲によれば、一九〇八（明治四一）年三月三日に東京・麻布の歩兵第一連隊で兵卒三二人の脱走事件が、同年三月一八日には大阪の歩兵第六二連隊でも脱走事件が起こったという<sup>九四</sup>。愚童の兵士に対する脱營の呼びかけは、これらの事件から発想を得たのであろう。

最後に『入獄紀念 無政府共産』のなかでも、最大の特徴といえる天皇制否定である。愚童は、「なぜにおまいは貧乏する、ワケをしらずば、きかしやうか、天子金もち、大地主、人の血をすふダニがおる」<sup>九五</sup>と唱え、次のように述べている。

今の政府を亡ぼして、天子のなき自由国にすると云ふことが、なぜむほんにんのすることではなく、正義をおもんずる勇士のすることであるかと云ふに、今の政フの親玉たる天子といふのは、諸君が小学校の教師などよりダマサレテおるような、神の子でも何でもないのである。今の政フの親玉たる天子といふのは、諸君が小学校の教師などよりダマサレテおるような、神の子でも何でもないのである。今の天子の先祖は、九州のシミから出て、人殺しや、ごう盗をして、同じ泥坊なかまのナガスネヒコなどを亡ぼした、いはゞ熊ざか長範や大え山の酒呑童子の、成功したのである。神様でも何でもないのである、スコシ考へて見ればスグしれる二千五百年ツゞキもうしたといへば、サモ神様でゝもあるかのやうに思はれるが、代々外はバンエイに苦しめられ、内はケ

ライの者にオモチヤにせられて来たのである。／明治になつても其如く、内政に外交に天子は苦しみ通しであらうがな。(略)／コンナニわかりきつた事を、大学のハカセだの学士だのと云ふヨウムシ共は、言ふこともかくことも出来ないで、ウソ八百で人をダマシ自らを欺いておる。又小学校の教師なども、天子のアリガタイ事をとくにはコマツテおるが、ダンぐうそが上手になつて、一年三どの大祝日には、ソラトボけたまねをして、天子は神の子であると云ふことを、諸君や諸君の子供に教へ込んでおる。そうして一生涯、神の面をかぶつた泥坊の子孫の為に、働くべく、使ふべく教えられるから、諸君は、イツマデも貧乏とハナレルコトは出来ないのである 九六

愚童は、天皇制が実は社会的な不平等や民衆の抑圧の根源であるとして、その否定を公然と主張した。しかし、当時の社会主義者の間でも、天皇制の否定を公然と表明することはタブーとされていた<sup>九七</sup>。大逆事件で予審判事をつとめた河島台蔵が「上下数千年ヲ通ジテ小冊子ニモセヨ、斯克ノ如キ大悪ノ著書ヲナシ、秘密出版シテ配布ヲナシタルハ、恐ク愚童一人デアロウ」<sup>九八</sup>と記録した理由である。のちの大逆事件の公判でも、この内容は問題視されたのであろうか、判決理由に「其小冊子ハ暴慢危激ノ文詞ヲ以テ之ヲ填メ貴族金持云々ノ俚謡ヲ改竄シテ天子金持云々トシテ之ヲ卷中ニ収メタルカ如キ不臣ノ心情掩フヘカラサル者アリ」<sup>九九</sup>と書かれている。「天子のなき自由国」という愚童が理想とした国家は、当時の国家権力からみれば、天皇制を真正面から否定するものであり、到底容認することができない内容であつた。

このほかにも、小作人の困窮した生活を「前世からの悪報であらふ」と説く仏教者の言葉を「二十世紀といふ世界てきの今日では、そんな迷信にだまされておつては、末には牛

や馬のやうにならねならぬ。諸君はそれをウレシイと思ふか」と批判している。別の秘密出版『無政府主義道德非認論』一〇〇では、その表紙で「道德と宗教とは、泥坊の番頭の役を勤むる者なり」一〇一と書き、当時の宗教や宗教者について次のように批判している。

今の宗教は、富者が貧者を圧制する事を防ぐにはもはや何の効能もない、但し宗教の無能と欠陥とが、漸くしれ渡つた結果、之を以て一般人民が、今の社会制どに対する反抗をとどめる事も亦困難になり、従つて彼等を永遠に奴隸的服従の地位を保たんが為に、宗教は既に何等の權威もなくなつた一〇二

愚童は、当時の曹洞宗やその僧侶を批判し、仏教を問いただしていたことは前述したが、これらの秘密出版からも彼の宗教・宗教者批判の一端が見受けられる。

そして、『入獄紀念 無政府共産』は、最後に無政府共産の理想国の実現方法について述べている。

然らばいかにして、此正義を實行するやと云ふに、方法はいろ／＼あるが、マヅ小作人諸君としてわ、十人廿人でも連合して、地主に小作米をださぬこと、政府に税金と兵士をださぬことを実行したまへ。諸君が之を実行すれば、正義は友をますものであるから、一村より一ぐんに及ぼし、一ぐんより一県にと、遂に日本全国より全世界に及ぼして、コ、ニ安楽自由なる無政府共産の理想国が出来るのである。／何事も犠牲なくして出来る者ではない。吾と思わん者は此正義の為に、いのちがけの運動をせよ（略）／此小冊子は、ながき／＼迷信の夢より諸君を呼び醒まし、ちかい将来になさねばならぬ、吾等の革命運動を謬釈せざる為に、広くかつ深く伝道せねばならぬのでありますから、無政府共産と云ふコトが意得せられて、ダイナマイトを投ずるコトを

も辞せぬといふ人は、一人でも多くに伝道して貰ひたい。しかし又、之を読んでも意  
得の出来ぬ人は、果して現在の社会は正義の社会であるか、又吾人の理想は、今の社  
会に満足するや否やを、深く取調べを願<sup>マ</sup>「ひ」たい一〇三

小作米不納・納税拒否・兵役拒否を改めて唱えているだけではなく、「安楽自由なる無政  
府共産の理想国」を実現するための伝道を主張している。愚童は、この『入獄記念 無政  
府共産』で天皇制を否定するなど急進的な主張をしていたが、実際は単なる過激な暴力主  
義者ではなかった。一九〇九（明治四二）年九月五日付で、愚童は神戸の岡林寅松と小松  
丑治に寄せた書簡のなかで、「トリストイ<sup>マ</sup>は来るべき新社会は、無抵抗主義の人が多く集ま  
つて出来るので、決して革命によつて出来ないといふが、一理あると思ふ、そうするには、  
やはり伝道だネー、そうして級数的にドン／＼無我的の人間を造つていたゞきたい」一〇四  
と書いており、伝道についての姿勢は最後まで変わらなかったと思われる。

この『入獄記念 無政府共産』は、一〇〇〇部刷られ、全国各地に送付されたが、当時の  
社会主義者の間でもタブーとされてきた天皇制を否定するなど、あまりにも内容が過激と  
して同志たちに受け入れられなかった。しかし、愛知県亀崎鉄工所職工で、のちに大逆事  
件の中心人物となる宮下太吉は、送られてきた『入獄記念 無政府共産』の内容に共鳴し、  
愛知県大府駅でお召し列車の通過を見送りに来た民衆にこの小冊子を配布したところ、民  
衆は天皇を神格化していて反応が悪かった。そこで天皇も同じ血を流す人間であることを  
証明するために、爆裂弾による天皇暗殺を計画するという経緯が生まれていく。

大平台の住民の生活実態を林泉寺住職として目の当たりにしていたうえ、赤旗事件など  
の政府による社会主義運動への弾圧が、『入獄記念 無政府共産』などの秘密出版にみられ

るように、愚童の思想をさらにラジカルなものにさせていくことになった。天皇制否定などの急進的な主張に注目されることが多い『入獄紀念 無政府共産』だが、その出版の目的は、過激な暴力主義を扇動するためではなく、「安楽自由なる無政府共産の理想国」を實現させるためにあった。しかし、小作人をはじめとする民衆が「迷信」を信じている以上は、その「迷信」から目覚めさせる必要がある。そのためにも、愚童は秘密出版によつて、「迷信」から民衆を目覚めることと、「安楽自由なる無政府共産の理想国」の實現の意義を説こうとしたのである。

### 第三節 獄中手記「平凡の自覚」と無題「遺稿」

一九〇九（明治四二）年五月二四日、愚童は『入獄紀念 無政府共産』などの秘密出版による出版法違反と、林泉寺からダイナマイトが見つかったこと<sup>一〇五</sup>による爆発物取締罰則<sup>一〇六</sup>違反で逮捕されるが、大逆事件に連座し、一九一一（明治四四）年一月二四日に死刑となるまでの獄中生活で、「平凡の自覚」と無題「遺稿」という二本の手記を書いている。「平凡の自覚」は後半を欠き、無題「遺稿」は表題を含めた前文を欠いているので、いずれも完全なかたちでは現存していない。しかし、無題「遺稿」には、「明治四十二年十月廿六日 愚童」<sup>一〇七</sup>と書かれており、「平凡の自覚」もこれと前後した時期に書かれたものと考えられる。

「平凡の自覚」はまず「自覚」について次のように説明している。

自覚トハ自ラ覚ルノデアル。自ラ覚ルトハ、他人ノ知ラヌ事ヲ發明スルト云フノデハナイ。他人カラ教ハツタノデハ駄目ダト云フデハナイ。他カラ教ハツタ者デモ、自分

ガ発見シタノデモ、ソレニハ関係ナシニ、自心ニ深く消化セラレテ吾物ニナツタ処ヲ  
自覺ト云フノデアルー〇八

愚童によれば、「自覺」とは、他人から教わったものや、自分で発見したものと関係なく、  
自らの心に深く理解し、自分のものとして身につけることとしている。そして、これに続  
けて、すべての人に共通すべき自覺をあげている。

コノ自覺ニ階級ヲツケテ見タナラバ沢山ノ高下ガ出来ルノデ、宗教家ノ自覺ト政治家  
ノ自覺ハ同ジト云ワレヌ。哲学者ノ自覺ト宗教家ノ自覺トハ違ツテオルカモ知レヌ。  
イヤ同ジ宗教者ニシテモ東西古今其人々ニ依ツテ同一トハ往カヌノデアリマス。ノカ  
クノ如ク人ト時ト処トニ依ツテ千差・万別ノ自覺ハアル者ノ、其間ニ共通スル点ガア  
ルデアラウ。同ジク人トシテ生活シテ往ク上ニ就テ其間ノ利害ト云フ者ガアルデアラ  
ウ。学者モ無学者モ貴キ賤キモ富メルモ貧シキモ、共力シテ自覺セネバナラヌ者ガ、  
ナケレバナラヌ。私ハ之ヲ平凡ノ自覺ト云フノデアリマスー〇九

現実世界には、身分・地位の高下、知識・財産の多寡があるが、それを超えて共通しな  
ければならない自覺が「平凡の自覺」であると説いている。

その「自覺」の具体的なことを「自覺的行動」という項目に記している。愚童によれば、  
それは「一個人ノ發達モ国体トシテノ發達モ同ジイ者」<sup>ママ</sup>ー一〇だという。

例ヘバ一個人ノ幼少ノ時代ニハ凡テノ利害ガ父兄・長者ノ意ノマヽデアルケレドモ、  
成長シテカラハ、自己ノ意ニ逆フテ父兄ニ盲従スル事ナク、即チ自覺的ニ行動スル。  
ソレト同様ニ、国体モ幼稚ノ時代ニハ、腕力ノ大ナル人、智識ノ多イ人、富ノ大ナル  
人ニ服従シテ居リマスケレドモ、自由ノ力量ヲ自覺スル迄ニ進ンデ来ルト、小ニシテ

ハ一村ノ政治、大ニシテハ一国ノ政治ニ、各個人ガ参与スル事ニナリマス。初メハ国王ノ為ニ吾等人民ハ生存シテ居ルト教エラレテ、其二盲従シテ来タモノガ、政府ハ吾等人民ノ為ニ働ク機関デアルト自覚スルニ至リマシタ。即チ民本主義、或ハ民主々義ヲ唱ヘルヤウニ、ナツテ来タノデアルー。

「国王ノ為ニ吾等人民ハ生存シテ居ル」のではなく、「政府ハ吾等人民ノ為ニ働ク機関」という「民本主義」・「民主々義」に基づく「自覚」は、個人だけではなく、同時に政治の問題にもかかわってくることを指摘している。しかし、当時の天皇主権の国家では、このような政治的自覚は天皇制の否定につながっていたといえよう。

この項目では、「自覚的行動」に関連して、「宗教家ノ自覚、学者ノ自覚ハ、ドウデアリマスカ知リマセンケレドモ、私共平凡ノ自覚ニ満足シテ居ル者ハ、人民各自ガコ、迄、自覚シテクレバ充分デアルト思フデアリマス」<sup>一一</sup>とある。宗教者である愚童が、「宗教家ノ自覚」や「学者ノ自覚」は、「平凡ノ自覚」とは異なると強調している。この背景には、愚童が当時の曹洞宗やその僧侶に対して批判的な見方をしていたことと関係があると推測される。

これらの前書きに続いて、この手記の目録が載っており、ここでは「個人ノ自覚」・「家庭ノ自覚」・「市町村ノ自覚」・「国家ノ自覚」・「世界ノ自覚」・「工場ノ自覚」とある<sup>一二</sup>。しかし、実際は「個人ノ自覚」・「家庭ノ自覚」・「村民の自覚」<sup>マ</sup>・「市町村の自覚」<sup>マ</sup>・「工業界之自覚」<sup>マ</sup>・「農業界ノ自覚」と進み、その中途まで現存している。

「個人ノ自覚」からでは、自由とその獲得の意義について次のように述べている。  
カク奮闘シテ得ル処ノ自由トハ如何ナル者デアルカ。一口ニ之ヲ云フナラバ、自己ノ



意思ニ從ツテ何事モ行動ヲシ、決シテ他ノ為ニ之ヲ妨ゲ枉ゲラル、事ノ無イ、即チ飽クマデ自己ノ意思ヲ尊重シ、ソレト同等ニ他人ノ意思ヲ尊重シテ、平和ニ生活ヲナシ往ク事デアル。要スルニ人類ノ終局目的ハ独立自活・相互扶助ニアル。語ヲ更エテ云フナラバ、自由・平等・博愛ノ実現ニアルノデアル<sup>一一四</sup>

愚童は、別の箇所でも「吾々人類ハ決シテ牛ヤ馬ノヤウニ、或ル強權ニ統治セラレナケレバ、生活シテ往カレヌト云フ者デナク、独立独歩・自治自適・自由自在ニ行動シテ生活イタスベキ者デアル。コレガ吾人平凡ノ自覚デアル<sup>一一五</sup>と論じている。さらに愚童は、コノ自覚ニ遠イ者モアルデアロウ。又近ヅイテ居ル者モアロウ。又コノ平凡ノ自覚ヲ超越ヘテ高ク控エテ居ル人モアロウガ、要スルニ何人モコ、マデ進マネバナラヌノデアル。タトヒ「ヘ」日ハ暮レテ山路ノ麓ニ居ルヤウナ人達デモ、決シテ落胆スルニハ及バヌ。必ズ自覚ノ山頂ニ向ツテ一歩ハ一歩ト進ンデ行ク事ガ出来ル<sup>一一六</sup>と、いかなる人も「平凡の自覚」の境地に到達しなければならないし、かついかなる人でも到達できると説いている。

また、女性の「自覚」に關係して、「女子ハ男子ノ附属物デハナイ（略）ソレ女子トテモ労働ヲスル。ケレドモ従来ノ如ク男子ノ附属物トシテ従タル労働デナク、独立ノ職業ヲ学ンデ置カネバナラヌト云フノデアル<sup>一一七</sup>と今日の男女平等にもつながる提言をしている。「家庭ノ自覚」では、封建的な家父長制的權威を否定し、「衣食住ヲ平等ニシテ、家事ヲ各自相当ニ分担シテ努メ行キ、一週一回乃至一月一回ノ家政会ヲ開キテ、家族共ニ一家ノ利害ヲ討論・説論」することを提案している<sup>一一八</sup>。

「村民の自覚<sup>ママ</sup>」では、「一村民トシテ尤モ親密・平和ニ交ツテ往カネバナラヌ者ガ、ソウ

往カヌト云フハ、第一番ニコノ貧富ノ差別デ其貧富ノ差別ヲ、大ナラシムルノハ、私有制度デアル」として、「今日自治制度ガ行ハレテモ、同一村民ニシテ、公民権ニアル者ト無イ者トガアル。公民権ノアル者ハ一村ノ自治ニ参与スル事ガ出来ルガ、公民権ノ無イ者ハ一村ノ自治ニ関係スル事ガ出来ヌ。／又同ジ公民権ガアツテモ、一級選民ト二級選民トハ權利ニ大小ガアルノデアル」と、政治的權利の不平等を指摘し、「私有制度」を廃止して「共有制度」の必要性を主張した。しかし、現状ではその実現は困難であるため、「マヅ村内ニ公共的ノ営造物（筆者注・小学校、授産場、病院、公会堂など）ヲ多ク設備スル事ニ有力者ヲ勧誘シ、一般村民ニ之ガ恩沢ニ欲セシムルベキデアル」と提案している<sup>一九</sup>。「市町村の自覚」でも、「市長或ハ村長、或ハ市町ノ議員諸氏ガ公共的ノ精神ヲ修養シテ、市町各住民ノ個人性ヲ尊重シ、公共的営造物ヲ充分ニ完備」<sup>二〇</sup>するよう求めている。

「工業界之自覚」<sup>ママ</sup>では、「今日ノ工業界ハ国民經濟ヲ基本トシテ、国家ハ自給自足ヲセネバナラヌト、之ガ為ニ保護政策或ハ關稅政策ヲ採ツテ國際的競争ヲナサン」としているが、愚童は「一日モ早クコノ有害・無益ナル國際的競争ヲ廢絶セシメナクテハナラヌ」として、生産機關の公有化を主張した。その実現には、「自覚セシ資本家」と「自覚セシ労働者」が必要であり、資本家は「資本ニ依ツテ生活スルト云フ旧来ノ罪惡ヲ排斥シテ、人ハ凡テ労働ニ依ツテ衣食スベキ者」であることを自覚し、労働者は「團結ヲ健因（堅固）ニシ、資本家ニモ出金サセ、労働者各自モ出金シテ、天為・人為ヨリ来ル災害ヲ可能的、滅失セシメネバナラヌ」と主張した。また、労働者の育成のため、老人・病人・身体障害者を保護する保険や、共同の病院、共同のクラブを設けることを提案している<sup>二二</sup>。

「農業界ノ自覚」では、「其第一ハ土地ノ公有ニ初マラネバナラヌ」として、「今日ノ所

有者ト云フ地主ナル者ガ占有シテ之ニ依ツテ収獲〔穫〕ノ半バヲ私スルト云フハ、理ニ於テ罪惡ノ大ナル者ト云ハネバナラヌ」と地主制を批判している。そして、「人ハ労働ニヨツテ生活ナスベキデアル。決シテ土地所有權ノ故ヲ以テ、他人ノ勞力ヲ盜ンデ之ニ衣食スルハ永遠ニ滅ヒセニ入ル事ヲ自覺シテ、土地ハ須ラク公有トナシ、以テ労働ヨリ得ル収獲〔穫〕物ヲ労働者ノ有タラシメ、自己ハ自己ノ才能ト勞力ニ依ツテ衣食スベク、幸福ノ樂天地ニ安住スベキデアル」と唱えている「三三」。「農業界ノ自覺」の具体的な方法も書かれていたとみられるが、この項目で手記が途絶えているため、これ以降の文章は現存していない。

さて、もうひとつの獄中手記である無題「遺稿」は、自由と幸福を実現するために、労働者・民衆が自己の「理性」に従つて物事を觀察し、思考して行動することの重要性を、佐倉惣五郎や大塩平八郎をはじめ、釈尊やキリストといった宗教者や、古代ギリシアの哲学者ディオゲネスの名前をあげて主張している。

人々の幸福の為に、確固動すことの出来ない信念の上に立〔つ〕て、いづれなりとも自由に行動せよと勤めるのである。／一時の感情や、生理的の要求に原づく物質欲のそれではなく、理性に要求に従つて行動して欲しい。若し其行動が理性の欲求に従ふての行動であつて見れば、不幸、事業は半途に挫折し、身は彈頭上の露と消ゆるの時も、超然、微笑して居ることが出来る（略）／この不公平の世の務を改革しやうと、其根元を探検する為に、一命を半途に棄てる麒麟児も、東西古今の学者が、社会幸福の為に研究した断案を吞込んで、これが実行運動に着手し、不幸中途に牢獄の苦を忍ぶ硬骨漢も、数多百姓の苦痛を除いてやろうと直訴をした其為にはりつけにせられた佐倉惣五郎のやうな人も、古今類なき大飢饉に、奉行の不仁を憤ふりて、大阪天満の米倉

を打破り、数多の貧民の飢を満たさんとして、其功ならざりし、大塩平八郎のやうな人達も、これが確固たる自分の信念の従するまゝに行動をとった者ならば、実に人間として幸福の人と言ふべきである。／＼お釈迦という宗教家は、王位を棄てゝ乞食になつた。ダイオジニーといふ哲学者は、一生桶の中で寝たり起きたりして居つた。それで此二人は帝王も奪ふことの出来ない喜びをもつて世渡りをした。キリストは十字架の上で殺されたるも拘はらず、万民を購ふ為だといふて喜んで死んだ。凡そこんな具合に、自己の理性に従つて行動をとつた人は幸福者である一二三

この手記は、愚童の死刑が執行される一年三ヶ月前に書かれたものだが、このころから自らの最期について覚悟していたことがうかがえる。つまり、自己の「理性」に従つて生きた「幸福の人」として、最期を迎えようとしていたのである。

さらに愚童は、この無題「遺稿」で生存権・生活権の平等を訴えている。これは「平凡の自覚」に書かれている「独立自活・相互扶助」、「自由・平等・博愛」、「独立独歩・自治自適・自由自在」にもつながっている内容といえよう。

せめては日に十時間の労働で、一週間に一度一日程度の休日を得、寒いにつけこんな具合にマア理想を求めて、さてそれに向つて一足でも進んでゆくのが、人の職分である。そして今の世のありさまと、自分はどんな境地にあるのであるかを調べて見るのが順序である。／＼暑さにつけ、それ相応の衣服を着て、病める時には応分の滋養物を給せられ、休日には又それ相応の文芸娯楽や、自分の好む宗教的修養に費やすことの出来るだけには、お互ひに、此世の中をして見たいではないか。これはあながち自己一人の望みではない。万民凡て此望みがあるのである。(略) さすれば今の世の中で、

万民ひとしく望む公平に働いて公平に衣食住の供給を受くるといふ為に、一足でも二足でも自分の能力「の」かぎり、各種の方面に運動するといふのは、即ち理性に従って行動するといふことになるのではなからうか<sup>一二四</sup>

「万民ひとしく望む公平に働いて公平に衣食住の供給を受」け、文化的・宗教的な願望を満たすことは「万民凡て此望みがある」として、生存権・平等権・自由権が民衆の当然の権利であることを訴えている。この愚童の主張からは、当時の労働者や民衆の生活や自由が、いかに抑圧されていたのかがうかがえる。

「平凡の自覚」と無題「遺稿」には、秘密出版『入獄紀念 無政府共産』に書かれていた天皇制否定などの急進的な主張はみられない。とくに「平凡の自覚」は、社会主義・無政府主義という言葉を一言も使わずに、その主義や主張を記している。愚童の思想の特徴は、ラジカルな主張もあるが、実際は個人の「理性」によって「自覚」に到達することで、「独立・自由」・「自治」という個人の尊厳や責任と、「相互扶助」・「共同」という他者との共生と連帯に基づいた理想社会を実現することであった。

## 第二章 高木顕明の思想的変遷

### 第一節 浄泉寺入寺前とその後の顕明

高木顕明は、一八六四（元治元）年五月二日に愛知県西春日井郡下小田井村（現・清須市西枇杷島町）に生まれ、幼名は山田妻三郎といった。実家は菓子商を営んでいたが、父親が熱心な真宗門徒だったため、一七歳ごろまでに得度し、真宗大谷派僧侶となった。地元の尾張小教校（のちの旧制尾張中学、現・名古屋大谷高等学校）を修了してからは、愛知県下の寺院を転々とした。この間、海東郡神守村（現・津島市）養源寺の神守空観<sup>二二五</sup>にも師事している。三〇歳のときに名古屋市道仁寺の高木義答の養子となり、高木姓を名乗るようになった。

一八九四（明治二七）年ごろ、顕明は京都市内で「日蓮宗非仏教」という講演を行っており、その講演録が同年八月二四日に法蔵館から刊行されている<sup>二二六</sup>。講演の内容は、日蓮の経歴、日蓮宗が折伏の修行として依拠する四箇格言<sup>二二七</sup>への非難、日蓮宗の「唱題成仏」<sup>二二八</sup>への批判である。顕明は、演説会を開く理由について、「今日宗教社会は云何なる<sup>マ</sup>時であり升私しは即ち比較宗教の時代であるふと信して居り升。（略）比較宗教の今日に彼等か如き者共（筆者注・日蓮宗）か仏教として許し置かるゝなれハ我々が信する所の仏教各宗の頭の上に云何なる大弊害を来たすかも知るへからさる事て御座やしよー」<sup>二二九</sup>と述べている。とくに顕明は、「唯々彼等の輩ハ野心を以て我々か信する処の御経に傷が付けたい仏説が破りたいとそれ耳考へて居る悪魔邪見の所為としか思われません」<sup>二三〇</sup>、「全体法華経に依る真実の行者なれハ安樂行に住し忍に安住して他教他宗を誹るへき筈のなきを日蓮ハ無闇に他経を破り他宗を誹るハやつぱし法華を信すると見せて仏経を破らんとする大

悪無道の大罪人です」<sup>一三二</sup>と、日蓮宗や日蓮の他の仏教教団に対する非寛容さや排他性を非難の対象にしている。演説の内容は、日蓮の経歴、日蓮宗が折伏の修行として依拠する四箇格言<sup>一三三</sup>への非難、日蓮宗の「唱題成仏」<sup>一三三</sup>への批判である。

『日蓮宗非仏教』の内容のなかでも、このころの顕明の思想をうかがううえでは次の二点が重要である。ひとつ目が国体護持・天皇尊崇である。「我国維新已前否な維新已後に於ても宗教の我が国体を保護し我が政治を補助したる者何に者で御座升す<sup>マ</sup>仏教者は宜しく其の当を得ませんでしたか」<sup>一三四</sup>と、仏教が国体護持であると主張している。さらに、講演の礼辞では「天皇陛下万歳 仏教万歳 京都市諸君万歳」<sup>一三五</sup>とまで述べている。

ふたつ目が被差別部落に対する差別的な意識である。顕明は、日蓮を「悪魔とも蛇蝎とも名の附け様のなひ大悪僧」<sup>一三六</sup>、「浅学無識」<sup>一三七</sup>、「邪見放逸の悪魔外道」<sup>一三八</sup>といい、日蓮宗を「謗法邪見の輩」、「邪教邪宗」<sup>一三九</sup>ときびしい言葉で批判している。このような日蓮や日蓮宗に対する批判のなかで、顕明は「私しハ法華経を破す<sup>マ</sup>のではありません法華経即ち天台宗を破る<sup>マ</sup>のでは御座いけません即ち穢多の子日蓮か教祖として弘通したる日蓮宗を以て非佛教であると申すのであり升」<sup>一四〇</sup>と、日蓮の思想ではなく、部落差別を利用して、日蓮とあわせて日蓮宗を批判している。このほかにも日蓮のことを「房州長狭郡の穢多団五郎の子」<sup>一四一</sup>と表現している部分もあり、顕明は日蓮を攻撃する手段として、部落差別を利用して<sup>一四二</sup>いる。

この演説から、浄泉寺に入寺する前の顕明は、国体護持・天皇尊崇の考えをもつ仏教者であったとともに、被差別部落に対して差別意識をもっていたことがうかがえる。

その顕明が和歌山県新宮の浄泉寺に入寺したのは一八九七（明治三〇）年のことであり、

その二年後の一八九九（明治三二）年一二月に住職に就いた。浄泉寺は、新宮藩主水野家の菩提寺的な寺院であり、初代藩主・水野重仲の命を受けた浜松普法山善照寺の別院住職・小幡玄祐によって開基された。山号の「遠松山」は遠州浜松から取ったものだという。しかし、この浄泉寺は、被差別部落の門徒を多く抱える寺院でもあった。顕明自身は「浄泉寺ノ門徒百八十名ノ内百二十名ハ特殊ノ人間」<sup>一四三</sup>と述べているが、大逆事件の際に浄泉寺を実際に調査した真宗大谷派奈良教務所職員の藤林深諦の「復命書」によれば、町内三〇戸、町内の被差別部落約六五戸<sup>一四四</sup>、三重県の被差別部落二〇戸の合計約一一五戸とされている<sup>一四五</sup>。数に相違はあるが、被差別部落の門徒が多いことは確かである。

浄泉寺に入寺した直後の顕明については、顕明と親交のあった新宮教会牧師の沖野岩三郎が、大逆事件後に「彼の僧」（『煉瓦の雨』福永書店 一九一八年所収）という小説にしている。その小説によれば、顕明と被差別部落の門徒との出会いは、入寺直後に葬式で三重県の被差別部落の門徒の家に泊まったことがはじめてだという。顕明がはじめてその門徒の家に泊まった際、顕明は彼らの生活に嫌悪感を抱いた。風呂に入ることとなったが、その風呂の底がヌルツとして気持ち悪い。出された夕食も南無阿弥陀仏を唱えながら味噌汁を口にしたが、「とうとう彼は腹具合が悪いと言つて、其晩は何も食べなかった。彼は寢床に横はつたが布団が妙に臭く感じた」という。そして、顕明は「世の中には食べられないで悲<sup>マ</sup>み、着る布団が無くて困る者が多いのに、御飯が食べられない、布団がきたない杯と言つて斯うまで苦しむとは何事ぞ」と自らを戒めている<sup>一四六</sup>。

別の沖野の小説「日記を辿りて」（『失はれし真珠』和田弘栄堂・警醒社書店 一九二一年所収）には、沖野をモデルにしたと思われる「私」が「あなたが若し然ういふ（筆者注・



そういふカゝ部落のお産れだつたら檀中から嫌はれるのですか」と尋ねると、顕明をモデルにした「高尾住職」は次のように答えている。

えゝゝ嫌はれますとも、夫れは無理の無いことです。私が此寺へ来て間も無い時でした。私は初めて川向ふの檀家のお葬式へ行つて其所へ宿つた事がありました。縮緬の座布団に絹夜具なんですが、私には其の縮緬のザラゝしたのが、却つて気味悪く、絹のツルゝする沢が又た心持よく無いのです。行つた晩は先ア何とか言つて御飯を食わずに我慢しましたが、翌朝お膳に對つて坐つた時、私は生れて以来初めての真剣な南無阿弥陀仏を唱へました。御飯を一口口へ頬張つては南無阿弥陀々々々々と一生懸命に唱へながらグツと鵜呑に吞込むのです。しかし味噌汁はどうしたつて感じが悪くて飲込めませんでした。お碗を口の所まで持つて行くと、既う胸がむかゝツとして来るのです。私は現在斯ういふ檀家のお布施で生きてゐるのです、夫れに矢張り斯うであつたのですから、何の関係もない人達から卑しめられ嫌がられるのも無理は無い事だと思ひました<sup>一四七</sup>

この沖野の「彼の僧」と「日記を辿りて」は、小説であるため、書かれている事柄のなかでどれが事実であり、どのことが沖野のフィクションであるのかが問題である。しかし、戦後になってからの沖野の回想「大逆事件の思い出―回想の人々―（一）」（『文芸日本』昭和三〇年九月号 文芸日本社 一九五五年）には、顕明と被差別部落の門徒との出会いについて、次のように書かれている。

ある日私は彼と二人で熊野川に沿うて川奥へ旅行した。その時彼は痛切な告白を私にした。彼が一個寺の住職として紀州に來た当時、水平社員である信者の家に行つて食

事をする時の苦心を、泣かんばかりに語った。思想上では水平社も何もない。一口吸うては唱名し、唱名しては又一口吸い、やつと一杯の味噌汁を食べ終わるのである。これは少しでも食べ残すようでは信者の尊敬を受けることが出来ない、ご飯はそうでもないが味噌汁を吸うことは、まことに辛かった<sup>一四八</sup>

「彼の僧」や「日記を辿りて」は、この旅行での顕明の告白を題材にして書かれたと考えられる。沖野は、このほかにも大逆事件を題材にした小説を数多く発表しているが、「彼の僧」や「日記を辿りて」のように、顕明らの実際の言動をもとにして書かれたものと推測される。そして、この入寺直後の被差別部落の門徒との出会いのち、顕明は被差別部落の改善といえる行動に取り組むようになる。

顕明と交流のあった峯尾節堂によれば、浄泉寺入寺後の顕明は「檀家の者がひどいどぶ漕へなんかした銭や下駄なんかを修覆したゼニを貰って生きてをるのは、どうも堪えられない。寺の飯を食ふのは罪だ、厭やだ」<sup>一四九</sup>として自活を考えた。さらには「穢多の小供を集めて、読書を授けたり、御堂の賽銭を集めて筆・紙・墨を買って学生に与へたり、拙づかつたらしいが、御説教も毎月欠かさずにやつた」<sup>一五〇</sup>という。顕明が、貧しい生活状況にあった被差別部落の門徒からの布施に頼らず生活していたことや、部落民の子どもや学生の学習支援に取り組んでいたことがうかがえる<sup>一五一</sup>。とくに部落民の子どもや学生の学習支援は、顕明による被差別部落の改善に向けた行動の一環といえよう。

しかし、部落民との交流のために、顕明は他の仏教寺院から除け者にされ<sup>一五二</sup>、町内の門徒からも嫌悪感を抱かれた<sup>一五三</sup>。そのため、顕明は一九〇二、三年ごろから新宮教会のクリスチャンと交流するようになり<sup>一五四</sup>、教会で説教をしたこともあったという<sup>一五五</sup>。こ

の新宮教会は、大逆事件に連座し刑死した大石誠之助<sup>一五六</sup>の一族と関係が深く、大石の長兄・余平が建てたものであり、父の増平と次兄の玉置西久らが教会員であった<sup>一五七</sup>。

あるとき、新宮で差別事件が起こった。その経緯について、沖野岩三郎が大逆事件で顕明の弁護人をつとめた平出修に寄せた手紙には、次のように書かれている。

私の教会員で先達而貴下を訪問した玉置西久君が町内で最初に高木君の壇中たる特殊部落民を日傭に傭った。教会員二村隆二といふのが屋根板を製する職工として多くを使用した。すると屋根板の職工たちは「新平を此の職場に入れてはならぬ」と云つて、

白昼半鐘鳴らして職工の非常召集をしたなどの事がある<sup>一五八</sup>

この事件を契機に教会員たちは、被差別部落に行つて「虚心会」という会合をつくり、部落民との交流を図った。顕明と新宮教会は、さらに親密に交流するようになり、そしてそのような関係から教会と関係のあった大石誠之助と交流をはじめたのである<sup>一五九</sup>。

沖野の「日記を辿りて」によれば、この事件を契機にできた虚心会について、「大宮君の時代から僕の教会員と君の所の壇中とが月に一度づつ会合して親睦を図つてゐた」とある<sup>一六〇</sup>。この「大宮君」とは、間宮小五郎のことであり、一九〇二（明治三五）年一〇月末まで新宮教会牧師をつとめていた<sup>一六一</sup>。間宮は、週刊『平民新聞』で熊野地方に社会主義をはじめて輸入した人物として紹介されており<sup>一六二</sup>、顕明の活動にも理解をしめしていたと思われる。しかし、「月に一度づつ会合して」いたという虚心会は、第二回と第三回しか記録が残っていない。第二回虚心会は、一九〇六（明治三九）年一月二七日に開かれ、『牟婁新報』が一九〇六（明治三九）年一月三〇日付でその模様を報じている。

虚心会親睦会／東郡新宮町に一個清新の会あり虚心会といふ、コハ同地新平民諸君を

慰籍せんがために設けたるものなり、さても去二十七日同地大字永山小林兼松方に第二回親睦会を開しが、会する者四十二人、山口福松氏開会の辞を述べ、玉置西久、菅谷菊次郎、若林利次郎、松根善作、榎本五六諸氏の演説あり、成江秀治氏は小説琵琶歌の一節を朗読せり、茶話会の席上にては浄泉寺住職高木顕明氏の法話あり、玉置西久氏の謡曲ありて中々に趣味多きものなりき一六三

第三回虚心会は、一九〇八（明治四一）年一月三日に開かれ、出席者のひとりであった新宮中学教諭で大石誠之助と交流があつた小野芳彦が日記にその様子を記録している。

虚心会 浄泉寺高木顕明君、玉置西久君の首唱により一種下等階級の種族と世間卑まれ居る長町新平民の人々とうち混じて茶話懇談の会を開きて之を虚心会と称し、いはれなき世間の悪習慣を打破せんことを企図せられつつありとの事ハ新聞紙上にて聞知し居りしが、今夜その第三回を浄泉寺に開かれしにつき吾等も出席せり 中原刑事、沖野牧師、玉置西久君、成江秀治君、榎本、小倉、広里等基督教信徒の諸人、中学校の田中教諭、浄泉寺の檀徒の人数名、長山よりは小林、松根、中野、菅谷等の諸氏七、八人出席、ドクトル大石ハ風邪の為不参金五十銭寄附せらる 会費は五銭づつにて会は六時半ごろより車座になりて開かれ、中原、田中、沖野、高木、玉置の諸君及松根、中野、小林の諸君及吾等も互におもひおもひに坐談を試ミしが、吾等ハ明日下里へ年札に赴く都合あれば九時半ごろ一步先へ帰宅せり／当夜の話題となりしは矢張、この階級的陋習の事にて田中君、沖野君、中原君、高木君初吾等に於ても、気の毒なる長山諸君の今尚世間より受けつつある一種の隔ての幕を打破せんとするには、諸君の側に於ても各自互に相戒めて品性を高むることに力を致さるる事、児女をしてつとめて

就学せしむる事尤も緊要なるべき事、もし夜学会様のものを起されなば吾等に於ても出席教授の労を辞せざるべしと語り且つ希望せるに諸氏に於ても大に感謝の意を表し居れり 一六四

間宮の赴任期間と、顕明が教会と交流をはじめた時期を照らし合わせると、虚心会は一九〇二（明治三五）年ごろにつくられ、はじまった当初は月に一回ずつ行なわれていたのが、日露戦後に年一回程度の会合になったと考えられる。しかし、「日記を辿りて」によれば、顕明はこの虚心会に対して不満をもっていたことが次の言葉からみられる。

虚心会といふ会が出来てゐました。しかし私は彼の会にも不賛成です。虚心平気でお前達に安際してやるぞ！といふ態度に出られては矢張り軽蔑せられたのと同じ事です、教会の人達の頭の中にも依然として私の壇中を一段下に見る古い習慣が残つて居るのです。頭の中では排斥して置いて外面だけ体裁善く交際するといふのは夫れは少々偽

善：先ア偽善ですナ 一六五

虚心会に関する資料をみるかぎり、会合には警察関係者なども参加しており、のちの水平社が行った差別者に対する糾弾のような部落差別の撤廃を目的とした会合ではなく、むしろ部落民との融和を目的にした会合のようにみえる。顕明にとっては不満であった虚心会だが、当時の情勢では部落民との融和的な会合で限界だったのであろう。しかしその一方で、一九〇九（明治四二）年一〇月一六日には「風俗矯正に関する講話会」が新宮で開催されており、地元新聞の『熊野新報』がそのときの様子を次のように報じている。

特殊部落改善の方法を講ずる方法を以て、同部落視察のため来郡せる本県警察部詰巡查部長黒沢精一は、再昨十六日当町に來り、同夜七時より大字永山小林直吉方に於て

風俗矯正に関する講話会を開けり、出席者五六十人にして、先づ最初遊木町長開会の挨拶を述べ、続いて横巻当警察署長、黒沢部長の講話あり、終つて高木顕明謝辞を述べ九時頃閉会せり一六六

この講話会は、虚心会のようにクリスチャンなどの有志が開いたものではなく、町長や警察署長が出席するなど行政が開催したものである。和歌山県では一九〇九（明治四二）年から被差別部落の改善に着手したが一六七、新宮ではすでに虚心会の活動があったため、早い時期に講話会が開催できたと推測される。そして、講話会の最後に謝辞を述べているように、顕明はこのような行政による部落改善にも協力していたのである。

ところで、顕明は浄泉寺入寺後の活動から被差別部落解放の先駆者というイメージが強い。しかし、沖野の「大逆事件の思い出―回想の人々―（一）」には、さきにふれた熊野川への旅行の際、顕明は沖野に「今でも食事を出された時、汁椀のふたに汚れたものがくつついていた時は、第一に胸がむかむかして来る、その度に自分の思想がまだまだ平等思想になつていないのだとなさけなくなる。修業マヤが足りないのである」一六八とも嘆いていたという。沖野によれば、この旅行の直後に顕明は大逆事件に連座したという。また、沖野の「日記を辿りて」のなかで、「高尾住職」は「私」に次のことを語っている。

私（筆者注・高尾住職）にさへ―これだけ同情を有つてゐる私にさへ―強い遺伝と習慣との勢力が、彼の人達（筆者注・被差別部落民）を斯んなにまで嫌はしめるのかと思ふと私は本当に恐ろしくなりました。今では最う私も平気で檀家へ行つてお茶も飲むし御飯も食べますが、しかし未だ私の心には少うしの引懸りが残つてゐます。夫れは私が彼あいふ（筆者注・あいふ力）部落の産れだといはれると、直ぐ士族だ

の昔は武士だったのと古臭い思想が心の奥から這出して来るので解ります。夫れを私は悲しい事だとは思つてゐますが：これは随分困難な問題です一六九

さらに、「高尾住職」は「各宗の坊さん達も私の素性を彼これ言ふのです。疑ふなら私の原籍を調べてみるが宜い。私は愛知県の立派な士族で家業は代々菓子屋ですから」一七〇と、「私」に自らの身分を説明している。顯明は、浄泉寺に入寺したのちも自身の差別意識との葛藤に苦しんでおり、大逆事件の直前までその葛藤が続いていたことが沖野の回想や小説からうかがえる。部落解放の先駆者のイメージが強い顯明だが、実際は浄泉寺の被差別部落の門徒との交流を通じて、自身の差別意識との葛藤のなかで、自らの思想を変化させていったのである。

## 第二節 「余が社会主義」の執筆

一九〇四（明治三七）年二月、日露戦争が開戦すると、真宗大谷派は各陸軍師団と各海軍鎮守府に「一朝有事ノ日ニ際会セハ必ス従軍布教使ヲ派遣」するとの内容が書かれた「慰問状」を発したり、「時局問題切迫」として戦争遂行の部署である「臨時奨義局」を発足させたりしている一七一。そして、日露両国との間で戦闘がはじまった二月八日一七二には、大谷派法主・大谷光瑩（現如）の「垂示」が出された。

今般滿韓保全ノ問題ニ起因シ露国ト交戦ノ端ヲ啓キ竟ニ本日ヲ以宣戦ノ／大詔ヲ煥発シ給ヘリ帝国ノ安危繫リテ此一举ニ在リ洵ニ国家ノ大事何事力之ニ過シ苟モ帝国ノ臣民タルモノ此時ニ際シ宜シク義勇君国ニ奉スヘキナリ予テ教示スル処ノ二諦相依ノ宗議ニ遵ヒ朝家ノ為メ国民ノ為メ御念仏候ヘシトノ祖訓ヲ服膺シ専心一途報国ノ忠誠ヲ

抽シ奮テ軍氣ノ振興ヲ希図シソノ軍役ニ従フモノハ速ニ他力本願ヲ信シテ平生業成ノ安心ニ住シ身命ヲ国家ニ致シ勇往邁進以テ国威ヲ海外ニ発揚シ内外一致同心戮力海岳ノ天恩ニ奉答スヘシ是則帝国臣民ノ義務ヲ尽スモノニシテ即亦本宗念仏行者ノ本分ヲ守ルモノナリ門末ノ輩宜シク／詔勅ノ／聖旨ヲ奉体シ竭誠尽力スヘシ<sup>一七三</sup>

真宗の「二諦相依」<sup>一七四</sup>の「教義」や、「朝家ノ為メ国民ノ為メ御念仏候ヘシ」<sup>一七五</sup>という親鸞の消息（手紙）の一節を持ち出して戦争への協力を唱えている。このような宗門の状況のなかで、顕明は非戦論に関心を抱くようになった。

非戦論に関心を抱くようになった理由について、顕明は大逆事件時の第一回予審調書で次のように述べており、被差別部落の門徒との交流から非戦論に関心を抱くようになったことがうかがえる。

浄泉寺ノ門徒百八十名ノ内百二十名ハ特殊ノ人間ニテ貧シク暮シ居リ他ノ寺院ノ檀徒ノ如ク戦時ニ際シ或ハ戦勝祈禱トカ其他戦争ニ関係セル諸々ノ支出ヲモ為シ得ス誠ニ氣ノ毒ニ感シマシタ夫レテ私モ自然非戦論ヲ唱ヘル様ニナリ夫レヨリ社会主義ニ関スル新聞雑誌書籍等ノ購読ヲ為シ社会主義ノ研究ヲ始メタノテス<sup>一七六</sup>

一九〇四（明治三七）年一〇月、顕明は「余が社会主義」を執筆している。執筆の理由について、顕明は供述調書で「私ハ明治三十七年中「余カ社会主義」ト題スル論文様ノモノヲ書ヒテ見マシタカ夫レハ私ノ仏教家トシテノ立場ヨリ立論シタノテ当時ハ純粹ナ社会主義者テハアリマセヌテシタ」<sup>一七七</sup>と言ひ、「私は真宗大谷派の僧侶です。それで南無阿弥陀仏の信仰によつて心靈の平等を得、それによつて社会主義者のいう平等の人域に達しなければならぬということを書いたのです」<sup>一七八</sup>と述べている。



その「余が社会主義」の緒言で、顕明は次のことを述べている。

余が社会主義とはカールマルクスの社会主義を稟けたのではない。又トルストイの非戦論に服従したのでもない。片山君や枯川君や秋水君の様に科学的に解釈を与へて天下に鼓吹すると云ふ見識もない。けれども余は余丈けの信仰が有りて、実践して行く考へであるから夫れを書いて見たのである。何れ読者諸君の反対もあり、御笑ひを受ける事である。しかし之は余の大いに決心のある所である（一七九）

顕明は、片山潜・堺利彦（枯川）・幸徳秋水のみならず、マルクスやトルストイの名前をあげて、自分の社会主義は彼らの社会主義や非戦論とは異なることをまず強調している。顕明の社会主義は、マルクス主義などの理論から生まれたものではなく、自らの真宗の信仰に立ち、その実践から出てきたものであるといえよう。これは本論のはじめに「社会主義とは議論ではないと思う。一種の実践法である。或人は社会改良の預言ぢやと云ふて居るが余は其の第一着手ぢやと思ふ」（一八〇）と書いていることからもうかがえる。

本論で顕明は「余は社会主義は政治より宗教に關係が深いと考へる。社会の改良ハ先づ心靈上より進みたいと思ふ」（一八一）として、「信仰の対象」を教義・人師・社会の三つに分け、さらに「信仰の内容」も思想回轉・実践行為とに分けている（一八二）。まず信仰の対象である「教義」については、

即ち南無阿弥陀仏であります。此の南無阿弥陀仏は天竺の言で有りて真二御仏の救済の声である。闇夜の光明である。絶対的平等の保護である。智者にも学者にも官吏にも富豪にも安慰を与へつゝあるが、弥陀の目的は主として平民である。愚夫愚婦に幸福と安慰とを与へたる偉大の呼び声である（一八三）

と説いており、「南無阿弥陀仏」を「絶対的平等の保護」とみている。

「人師」としては、釈尊と親鸞の名前をあげ、釈尊は「帝位を捨て、沙門と成り、吾れ人の抜苦与樂の為ニ終生三衣一鉢で菩提樹下ニ終」った「靈界の偉大なる社会主義者」であり、親鸞も「御同朋御同行と云ふたのや、僧都法師の尊さも僕従者の名としたり」と唱えた「心靈界の平等生活を成したる社会主義者」であるという。そして、釈尊と親鸞の人生から、「仏教は平民の母にして貴族の敵なりと云ふたのである」と主張している<sup>一八四</sup>。

「社会」とは、極樂という「理想世界」のことであり、「余は極樂を社会主義の實踐場裡であると考へて居る」といい、極樂では阿弥陀如来と菩薩・行者・衆生が差別されていないため、「真ニ極樂土とは社会主義が実行せられてある」と説いている<sup>一八五</sup>。宗教の平等性はあくまでも精神的なものであり、現実社会の変革は意図されていない。しかし、顕明は「真ニ極樂土とは社会主義が実行せられてある」と説くように、極樂を手本にして、現実社会に平等の社会主義の世界を実現しなければならぬと主張した。

「信仰の内容」の第一の「思想回轉」は、「一念帰命とか、行者の能信」ともしているが<sup>一八六</sup>、顕明によれば、それは信仰世界のなかの問題だけではないといえよう。

或一派の人物の名誉とか爵位とか勲賞とかの為に一般の平民が犠牲となる国ニ棲息して居る我々であるもの。或は投機事業を事とする少数の人物の利害の為に一般の平民が苦しめられねばならぬ社会であるもの。富豪の為に貧者は獸類視せられて居るではないか。飢に叫ぶ人もあり貧の為に操を売る女もあり雨に打るゝ小兒もある。

富豪や官吏は此を翫弄物視し是を迫害し此を苦役して自ら快として居るではないか。

／○外界の刺激が斯の如き故ニ主観上の機能も相互ニ野心で満ち々々て居るのである。

実に濁世である。苦界である。闇夜である。悪魔の為に人間の本性を殺戮せられて居るのである。／＼○しかるに御仏は我等を護るぞよ救うぞよ力になるぞよと呼びつゝある。此の光明を見付けた者は真二平和と幸福とを得たのである。厭世的の煩悶を去りて楽天的の境界ニ到達したのである――と考へる。／＼○さながら思想は一変せざるべからずだ。御仏の成さしめ給ふ事を成し御仏の行ぜしめ給ふ事を行じ御仏の心を以て心とせん 一八七

ここには、受け身一方の阿弥陀仏信仰ではなく、自ら積極的に「御仏の行」を果たそうとする実践的な姿勢がうかがえる。そのため、「信仰の内容」の第二は「思想の回転が御仏の博愛ニ深く感じたるものなれば如来の慈悲心を体認せねば（体認か耐忍か此所の耐忍は諦認と書くをよしとするか）ならん。此を実践せねばならん」と「実践行為」になる 一八八。

大勲位侯爵に成りたとて七十ヅラして十七や八の妙齡なる丸顔を翫弄物にしては理想の人物とは云はれんである。戦争に勝たと云ふても兵士の死傷を顧ざる將軍なれば我々の前には三文の価値もない。華族の屋敷を覗ひたと云ふて小児を殴打した人物等には実に不埒千万ではないか。／＼○否ナ我々は此の様な大勲位とか將軍とか華族とかと云ふ者に成りたいと云ふ望みはない。此の様な者になると働くのではない。唯だ余の大活力と人労働とを以て実行せんとするものは進歩向上である。共同生活である。

生産の為に労働し、得道の為に修養するのである 一八九

以上のことを述べたうえで、顕明は「余が社会主義」を次のように結論付ける。

此の闇黒の世界に立ちて救ひの光明と平和と幸福を伝道するは我々の大任務を果すのである。諸君よ願くは我等と共に此の南無阿弥陀仏を唱へ給ひ。（略）何となれば此の

南無阿弥陀仏は平等に救済し給ふ声なればなり。諸君よ願くは我等と共に此の南無阿弥陀仏を唱へて貴族的根性を去りて平民を軽蔑する事を止めよ。何となれば此の南無阿弥陀仏は平民に同情之声なればなり。諸君願くは我等と共に此の南無阿弥陀仏を唱へて生存競争の念を離れ共同生活の為に奮励せよ。何となれば此の南無阿弥陀仏を唱ふる人は極楽の人数なればなり。斯の如くして念仏に意義のあらん限り心靈上より進で社会制度を一変するのが余が確信したる社会主義である一九〇

顕明をはじめ、彼とともに「南無阿弥陀仏」を唱える決意をしたすべての人たちが、「極楽」という平等世界を獲得すると主張している。そして、念仏は社会制度を根本から一変させる「社会主義」であると位置づけている。

さて、「余が社会主義」では、「社会主義」と題しているように、平等主義論だけではなく、日露戦争に対する非戦論も主張している。顕明の非戦論は、まず「信仰の対象」である「教義」に登場する。

嗚呼我等二力と命とを与へたるは南無阿弥陀仏である。／〇実に絶対過境の慈悲である。御仏の博愛である。此を人殺のかけ声にしたと聞て喜んで居る人々は唯だあきれより外ハない。斯ふして見ると、我国には宗教と云ふ事も南無阿弥陀仏と云う事も御訳りニ成た人が少なひと見える。／〇詮ずる処余ハ南無阿弥陀仏には、平等の救済や平等の幸福や平和や安慰やを意味して居ると思ふ。しかし此の南無阿弥陀仏に仇敵を降伏するという意義の発見せらるゝである―か一九一

「教義」と正反対である戦争を「平等の救済や平等の幸福や平和や安慰やを意味」する「南無阿弥陀仏」から批判している。「平等」をくりかえし主張しており、「敵国」や「仇

敵」を否定し、「平等」であるがために戦争を否定するということが、顕明の非戦論の核になつていたと思われる。

「信仰の対象」の「社会」でも、「極楽世界には他方之国土を侵害したと云ふ事も聞かねば、義の為ニ大戦争を起したと云ふ事も一切聞かれた事はない。依て余は非開戦論者である。戦争は極楽の分人の成す事で無いと思ふて居る」一九二と述べている。極楽世界では阿弥陀仏がほかの極楽世界を侵略したことはないので、「極楽の分人」である仏教徒は戦争をするべきではないと主張している。

非戦論に関係して、「戦勝を神仏に捧る宗教者があると聞ては嘆せざるを得ぬ。否ナ哀れを催し御機之毒に感じられるのである」一九三と戦争協力に加担する宗教者を批判している。その宗教者の例として、「余は南条博士の死るハ極楽ヤツツケロの演説を両三回も聞いた。あれは敵害心を奮起したのであるーか。哀れの感じが起るではないか」一九四と、顕明と同じ大谷派僧侶で、戦争協力の布教を積極的に行っていた南条文雄の演説をあげている。

日露戦争の際、大谷派法主はさきの「垂示」に続けて、二月一九日に「直命」一九五と「親示」一九六を出している。大谷派では、法主の「親示」が出されると、その内容について説く「複演」が行われ、「特派布教使」一九七である仏教学者で真宗大学学監の南条文雄がその役目をつとめた。その南条の「複演」で次のような一節がある。

（明治）十年の戦争の時第二丁卯艦の水兵朝侍繁十郎といふ者は敵地の偵察を命ぜられて端艇に乗りて薩摩の陸に近づいた時弾丸の雨の如くに飛び来る中て何んの構ふものか死ねは極楽たと云て自分も人も共に励まして能く任務を尽したと教誨美譚に記してある 一九八

この「死ねば極楽」という一節は、のちの十五年戦争で「戦争布教」の第一人者となる  
暁鳥敏も「弾丸雨飛の中に行くについても南無阿弥陀仏と称へて進め、死ねば極楽だと信  
じて進め」一九九と説いている。また、のちに大谷大学学長となる大須賀秀道も「死ねば極  
楽と思へばこそ、死ぬ覚悟も定つて、奮闘することが出来るのである」二〇〇と述べている。  
この一節は、大谷派僧侶の間で、相当流布したとみられる。そして、南条自身もこの一節  
を気に入ったのか、「身心二命談」(『戦争法話』法蔵館 一九〇四年)でも同じ内容を話し  
ている。

明治十年の西南の役に第二丁卯艦の水兵朝侍繁十郎なる者は、弾丸の雨の如くに飛び  
来る中に於て、何の構ふものか、死ねば極楽だ、やつつけろと叫んで、自らも励まし  
他の水兵も励まして、端艇を敵地に漕ぎ寄せ、敵地探検マツの任務を果たせしことは教誨  
美譚に記してある二〇一

この「身心二命談」では、「死ねば極楽だ」のあとに、「複演」にはなかった「やつつけ  
ろ」という言葉が加えられている。南条自身が戦意高揚のために、このような過激な言葉  
にしたと推測される。

このような大谷派への批判は、南条だけではなく、法主にまでも及んでいる。顕明は、  
「余が社会主義」の最後で法主を「或人」と表現し、親鸞の消息を持ち出して法主批判を  
展開している。

終りに臨で或人が開戦論の証文之様ニ引証して居る親鸞聖人の手紙之文を抜出して、  
此の書が開戦を意味せるか、平和の福音なるかは宜しく読者諸君の御指揮を仰ぐ事と  
せん。／○御消息集四丁の右上略「詮じ候処ろ御身に限らず念仏申さん人々は我が御

身の料は思召さずとも朝家の御為め国民の為め念仏申し合せ給ひ候はゞ目出度候べし往生を不定に思召さん人は先ず我往生を思し召して御念仏候べし我が御身の往生一定と思召さん人は仏の御恩を思し召さんに御報恩の為に御念仏心に入れて申して世の中安穩なれ仏法弘まれと思召すべしとぞ覚へ候」已上二〇二

法主を「或人」と表現しているのは、泉恵機によれば、法主批判は宗門内での懲罰の対象になることを知っていたからと推測している二〇三。この「余が社会主義」は、自身の信仰から非戦論や平等主義論を説いているだけではなく、法主や南条文雄といった大谷派をも批判している小論である。そのため、これを世間に出したいと考えていても、宗門からの懲罰を考えると、出すことができなかったと思われる。事実、この「余が社会主義」は、雑誌や新聞などに掲載されたものではなく、大逆事件の家宅搜索の際に浄泉寺から発見されたものである二〇四。

そして、顕明は、「余が社会主義」のなかだけではなく、実際の社会生活のなかでも日露戦争に対して非戦論を主張していた。沖野岩三郎は平出修に寄せた書簡のなかで、「日露戦争当時、非戦論の説をきいて理ありとなし、大いに平和論を主張した。各宗寺院が戦勝祈禱会を行つても、高木君は真宗にはそんな祈禱をする式も教義もないから断然賛成しなかった」二〇五と記しており、沖野の小品「生を賭して」『生を賭して』警醒社書店・弘栄堂一九一九年所収）にも次のことが書かれている。

日露戦争の際、町の各宗寺院は敵国降伏の戦捷祈禱を執行した。併し、T、Kは其仲間に入らなかつた。何となれば彼の信ずる宗旨は絶対他力であつて、祈禱禁厭は宗門の法度で禁じられて居るから、彼は真宗の信仰を堅く守つた。これが為めに彼は各宗

の僧侶から国賊視せられた。／戦終つて各宗寺院は二千余円の金を集めて、戦捷記念碑を建てようとした。T、Kは又其の運動に反対した。弥陀一体の外私には礼拝すべきものが無い。記念碑を建て、其の金文字にお経を読むで何になるかと言ふ論法は再び各宗寺院の怒を買ふに到つた二〇六

この顕明の行動は、沖野が平出に寄せた手紙のなかで、「何やかやらで高木君は町内の各宗寺院と一致の行動が出来なかつた為、鬱屈の気は社会主義の言論に耳を傾けるに至つたのである」二〇七と書いているように、地域の仏教界から、さらに孤立していくことになった。しかし、その一方で交流を深めていったのが、大石誠之助ら社会主義者や沖野岩三郎らクリスチャンであつた。

### 第三節 社会主義への接近と信仰生活の確立

顕明が社会主義に接近したきっかけは、一九〇三（明治三六）年一〇月、非戦論を主張して、幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三が『萬朝報』を退社したことに関心をもつたことである。それから週刊『平民新聞』、『直言』、『光』、日刊『平民新聞』といった社会主義新聞・雑誌を購読し、大石誠之助からも社会主義に関する書籍を借りて読んでいた二〇八。とくに顕明は、「私ハ特ニ内村ノ人格ヲ慕ヒ居リマシタ」二〇九と述べているように、クリスチャンである内村を慕っていた。証人訊問でも「大石などから書物を借りて社会主義の研究をしたことがあります。また東京から無名で同主義の雑誌を送ってきましたので、読んでおりました」二一〇と供述している。また、一九〇八（明治四一）年一月六日付で大石が友人の徳美夜月に寄せたはがきにも、「未来の経済組織は今高木君がよんで居られます」二一一と記



されている。沖野岩三郎は、平出修に寄せた手紙で、「高木君は社会主義の理論は大石君から聞いたかも知れぬが、纏った書籍の数冊否一冊も読んでない」<sup>二二二</sup>と書いているが、実際は大石から社会主義の書籍を借りて読んでいた。

一九〇六（明治三九）年末ごろから、顕明は大石方にほぼ毎日のように出入りするようになり、大石も月に一、二度浄泉寺を訪れるようになった<sup>二二三</sup>。顕明の第一回予審調書によれば、「大石誠之助方ニ出入シテ社会主義ノ説明杯ヲ聞キ遂ニ大石ノ感化ヲ受ケテ主義者トナツタノテスカ愈々無政府共産ヲ主張スル様ニナツタノハ明治四十一年暮頃カラテス」<sup>二二四</sup>と述べている。さらに予審判事が「然ラハ其方ハ無政府共産ヲ主張シ治者被治者ノ關係殊ニ君主ヲ否認スルト云フ訳ニナツタノカ」と質問すると、「左様テス今トナツテ見レハ誠ニ恐縮ノ至リテスカ其当時ハ君主ヲモ否認スル氣ニナツタノテス」と供述している<sup>二二五</sup>。沖野の「日記を辿りて」には、第一節でふれた顕明の被差別部落への差別意識に対する葛藤に関連して、「高尾住職」が「私」に対して次のことを語っている。

これは随分困難な問題です。どうしたつて我々の頭から誤った階級思想を根本から打碎かねば、彼等（筆者注・被差別部落民）をも自分と平等に思ふ事は出来ません。私も永年仏説阿弥陀経を誦んで生活をしました。西方極楽浄土へ行けば貴賤貧富の区別の無い事も説きました。しかし私の頭では矢張り彼等を汚ないものゝやうに輕蔑してゐましたけれども、近頃大星さんや鳴野さんと御交際するやうになつて、全然私の思想を覆されました。私には福沢諭吉先生の言はれたやうに、天は人の上に人を作らず人の下に人を作らずといふ事が余程解つて来ました<sup>二二六</sup>

大星は大石誠之助、鳴野は大逆事件に連座し刑死した成石平四郎のことである。顕明は

大石や成石から階級思想の打破を学んでいたことがうかがえる。

第三回予審調書でも、予審判事は顕明に「無政府主義ノ説ハ貧富ノ懸隔及社会上ノ階級ヲ除キ治者被治者ノ關係殊ニ皇室ヲモ否認スルト言フノカ」と質問している。この質問に對して、顕明は「左様テアリマス併シ私ハ主トシテ共產制度ニ賛成シテ居ルノテス」と答えている二一七。

別の供述調書では、予審判事から「証人ノ政府ニ對スル意見如何」と問われると、顕明は「無政府社会主義テアリマシテ皇室ハ勿論富貴等凡テ存在ヲ認メナイノテス」但阿弥陀アルノミ」と答えている二一八。この供述について、大逆事件で顕明の弁護人をつとめた平出修は次のように述べている。

彼（筆者注・顕明）は無政府主義と云ふも弥陀の存在を認めて居る、（略）それ以上に彼に皇室に対する考などないのを、何故か予審判事は窮迫して居る、余は日本国民として、かかる窮迫をして無理にも皇室を消滅せしむると云ふ答を求めやうとする司法官の方針を甚だ不快に思ふのである、それはともかく此答弁より見ても、高木には何の危険なる思想のない事は明である二一九

顕明は、「日蓮宗非仏教」の演説のなかで国体護持・天皇尊崇を唱えていたが、大逆事件の際も天皇制を否定する考えではないものの、阿弥陀仏を重視する考えに変化している。これらの供述から、日露戦後の顕明は仏教を基盤とした共產制度の考えをもっていたものと思われる。君主（皇室）の否認に関する供述については、平出の意見書にもあるように、予審判事の誘導尋問によるものと考えられる二二〇。

ところで、一九〇八（明治四一）年七月二一日、幸徳秋水は、病氣療養先の郷里の高知

県中村（現・四万十市）から東京へ向けて出発したが、その途次の七月二五日から八月八日にかけて、船中で悪化した病気を療養するべく新宮の大石誠之助のもとに滞在している。この新宮滞在中の八月三日、浄泉寺で幸徳をむかえた談話会が開かれた。一九〇八（明治四一）年八月六日付の『熊野新報』には、「一記者」が幸徳の談話について記した「談話会略記」という記事が掲載されている。

談話会略記 既報のとほり去る三日の午后七時頃から当町浄泉寺に談話会が開かるゝと云ふことであつたが、存外集りが少なかつたので、八時何分と云ふに開始された、今般は、社会主義者幸徳秋水氏の談話があるといふので、お顔丈けでもと出かける連中もあつて、珍来者も少なかつた、司会者大石氏が遅かつたので、沖野五点氏開会の挨拶があつて、夫れから幸徳秋水氏の社会主義より見たる自然主義觀の談話に入る、極く沈着なる態度で、団扇を捻ね操りもて話し出<sup>ママ</sup>ずる所は、文芸に現はれたる自然主義は、一種のアナキリズムとも見るべきもので、所謂、人生々活の実相を在りの儘に描写すると云ふにある柄、其作者が創作に従事せん觀念に於て一毫も社会上の圧制を認めず、唯モウ自然の儘、在りの儘即ちリアルを主として居るのである、随つて社会主義の思想と相似たる点が少なくない、社会主義が現代社会の実相を飽足らずとして、更に完全なる理想境を実現せんと力むるが如くに、自然主義も個人的自覺を与へんとするが如きは一致すべきものであるうか極言すれば、自然主義は一種の虚無主義無政府主義とは異形同質のもので、何れにも革命的思想は炎々として、包まれて居る様に思はれると論じ、進んで各国社会主義及虚無党の比較論評に入つて、ツマリ何れも無宗教主義のものであると結論された、夫れから大石、沖野、高木、幸徳諸氏の

間に宗教と社会主義、新宮雜感などの談話の交換があつて、十時といふに閉会した、当夜は其筋より敢て政談に渡らざる事の注意があつたために、最も直截なる意見に接し得なかつた事は甚だ遺憾に存する所であつた（一記者） 三二

また、来会者のひとりであつた小野芳彦は、一九〇八（明治四一）年八月三日の日記に、幸徳の談話の内容を次のように書いてゐる。

今夜七夕様送り来りて後浄泉寺に至り社会主義者の一領袖幸徳秋水氏無政府党觀の談話を聴く 氏は年なほ若く風采宮地貞四郎君に似たる人にて故中江兆民先生門下の逸足なり 氏ハ社会主義鼓吹者にて我町の大石禄亭君等と意氣投合せる間柄の人にてその筆の明快犀利なると同じくその談論もまた頗る明快なり 氏は社会主義を鼓吹するも他の激越なる無政府党とは大にその意見を異にせらるゝことなるがその談話の大要は真正なる欧米無政府党の純倫理觀は絶対に個人以外の権利存在を認めず 同胞人類の権利を自然のまゝに伸長せしめ以てその幸福を図らんとするにありて政府といふ治者の存在を許すべからずとするのみならず また宗教ハ人間に対し或事を命令すといふなる神といふものの存在をも認めざるものなり 彼等は已に特別なる権利を握て同胞の上に立つものあるを許さざるものなり 故に彼等はその主義を徹底せんが為には水火をも辞せず また熱中のあまり危険なること乱暴極まることを敢てすることあるも彼等は他の共産党等の如くこれによりて何等の利福（権利伸長以外）を求めんとするに意あるものにあらず 此点よりすれば彼等は極めて清浄なるものなり潔白なるものなり 無政府黨員ハ主権者暗殺の如きことを屢々敢てしつゝあり 極めて危険なるものに相違なし乍併執政者暗殺の事ひとり無政府黨員のミこれを行ふといふべからず

愛国の志士仁人之を敢てせることあるは古今歴史の明に示すところなり 故に暗殺の如き危険乱暴なることを敢てすといふ一事を以て一概に抹殺し去るべきにあらず 況や無政府黨員ミな 獐猛なる人物のみにあらず 品性高き志士あり学理に深き傑物あり 而して無政府主義者の早晚我邦にも侵入し来るべきは免かれがたきの趨勢たり 吾人忠良なる帝国臣民はいかにして之に対すべきか大に攻究を要すべきの事たり 吾人ハ無政府党を喜ぶものあらず之を排するものなり 併しながら漫然たゞ危険なりといふ一言の下に之を看過するが如きは事の宜しきを得るものにあらず 宜しく学理の上よりも事実の上よりも十分に攻究すべきの問題なりと考ふるなり<sup>二二二</sup>

幸徳の談話を聞いた顕明は、「私ハ幸徳ノ説ヲ聞ヒテ益々社会主義ニ熱心トナリマシタ」<sup>二二三</sup>と述べているが、幸徳の談話の内容を「幸徳ハ最早言論や文章ヲ以テ主義ノ伝道ヲ為スヘキ時テナイ直接行動ヲ為サネハ到底目的ヲ達スルコトハ出来ナイ米国ノ如キモ貧富ノ懸隔甚タシイカラ大ニ主義者力運動シテ居ル露西亜ノ同志スラ米国ニ参ツテ運動シテ居ル次第テアルト言ヒ」<sup>二二四</sup>と供述している。しかし、幸徳の談話会に関する資料からは「最早言論や文章ヲ以テ主義ノ伝道ヲ為スヘキ時テナイ直接行動ヲ為サネハ到底目的ヲ達スルコトハ出来ナイ」という主張はみられない。そのため、顕明が幸徳の談話を聞いて、「益々社会主義ニ熱心」になったのかはきわめて疑わしい。

幸徳よりも長く滞在し、顕明と親しく交流したのは新村忠雄である。新村は、長野県埴科郡屋代町（現・千曲市）の出身で、郷里でキリスト教の洗礼を受けたが、信仰に疑問をもち、やがて週刊『平民新聞』などの社会主義新聞・雑誌を読んで社会主義者・無政府主義者となった。一九〇九（明治四二）年二月ごろから幸徳秋水の書生となるが、幸徳らの

「平民社」が解散となったため、同年四月一日から八月二〇日まで大石のもとで薬局生をしている。宮下太吉の「明治天皇暗殺計画」に加わり、新宮から計画に使う爆裂弾の薬品を宮下に送付している。一九一〇（明治四三）年五月二五日に長野県の自宅で爆発物取締罰則違反の容疑で逮捕され、のちに刑法第七三条「大逆罪」違反で翌一九一一（明治四四）年一月二四日に死刑となった。顕明は新村について次のように供述している。

問 忠雄モ無政府共產論者テアルカ

答 左様テス忠雄ハ最モ過激ナル論者テス

問 忠雄ヨリ直接行動ノ事ニ付テ話ヲ聞ヒタ事カアルカ

答 屢々聞キマシタ同人ハ私宅ニモ参リヌ私モ大石方ニ同人ヲ訪問シマシタ

問 如何ナル事ヲ忠雄ヨリ聞ヒタカ

答 忠雄ハ常ニ過激ナル事ヲ申シ幸徳ハ是非直接行動ヲ遣ラネハナラヌト主張シテ居ルカ自分モ之ニ同意シ爆裂弾ヲ造リ東京ノ諸官省ヲ焼払ヒ大臣ヲ暗殺シ親爺ヲ遣ッ付ケルトカ天子ヲ遣ッ付ケルトカ言ヒ尚ホ愈々事ヲ挙クル際ニハ電灯会社ニ居ル同志ニ通シテ諸官省并ニ各個人ノ宅ニ多量ノ電気ヲ送り東京市内ニ於テ同時ニ大炎ヲ起サシムルト申シテ居リマシタ<sup>二二五</sup>

しかし、峯尾節堂は大逆事件の公判廷で「新村忠雄モ此法廷ニ来ルマテ斯ノ如キ恐ロシキ人トハ不知」<sup>二二六</sup>と述べており、新村が顕明らに「暴力革命」を主張していたのかは疑問である。節堂によれば、顕明は「僕の社会主義は絶対に暴力手段を非とする者である」<sup>ママ</sup>。随つて世の直接行動派と相容れざる者である。平和に温和に仏陀の慈悲・光明の下に貧富相握手すべき理想の実現を企図する者である」<sup>ママ</sup> <sup>二二七</sup>と節堂にたびたび語っていたという。

新村から「暴力革命」の主張を聞いていたとしても、顕明は「暴力革命」のような過激な主張は受け入れなかったと思われる。

新村は、弁護士而今村力三郎に寄せた書簡で「成石平四郎初め紀州の同志は皆全く関係を断ち居り、殊に主義を棄てたるもののみにて候」<sup>二二八</sup>と書いているが、顕明とは新宮を離れてからも交流を続けており、大逆事件の家宅搜索の際に顕明のもとから新村よりの手紙が四通も押収されている。その内容は、「女子につきての御注意よくよく心に銘じて居ります」<sup>二二九</sup>や、「郷里で少し勉強して見ようと思へ（い）昨日帰郷しました。これから同志歴訪のつもりです」<sup>二三〇</sup>、「今は新宮も淋しいですね、（略）思へば大変なお世話になったのも一年前になりました」<sup>二三一</sup>というものである。また、名古屋市西区笹島堀内町一丁目で菓子製造商を営んでいた実兄の水谷縫三郎のもとにいた顕明に、同志の内山愚童や菅野須賀子らの様子を伝えて、「名古屋から木曾路を善光寺詣に入ら（っ）しやいまし。是非是非御三人でいらして下さい。セメテモの恩返しに御案内は勿論費用は必ず小生が引受けます」<sup>二三二</sup>と書いたはがきを送っている。いずれも、個人的な内容の手紙が多く、思想的なものや「暴力革命」の実行計画を伝えたものがないため、新村が顕明のことを個人的にも慕っていたことがうかがえる。

幸徳や大石ら社会主義者と交流していた顕明であったが、最終的に社会主義から離れ、自らの信仰に生きることを選んだ。沖野の「生を賭して」<sup>マ</sup>には、顕明が社会主義への関心が薄れ、信仰生活に戻っていったことが書かれている。

四十三年の春であった。私は一人の大学生を伴って彼れの寺院を訪問した時、彼は種々と宗教問題を語った末に、

「どうしても南無阿弥陀仏だ、絶対に信頼すると云ふ信仰でなければ救はれない。私も以前のやうに南無阿弥陀仏を唱へませう。」

と云つた。私は驚いた。彼れの思想が斯様な告白をしなければならぬ迄荒んで居らうとは知らなかつた。帰途に私は大学生に対つて、

「T君は全く他力の力を失つて居たんだねえ」と言つた。すると

「無論さ、夫れを捨てなくちや、唯物主義の社会政策とは一致しないぢやないか、併し彼の男の社会政策は境遇から来た感情だからね。」

と答えた。私も夫れを承知した。其後私が彼を訪問した時、彼と彼の妻と八つになる養女とが、食前に南無阿弥陀仏と合掌して唱へて居るのを見た、リバイバルだねえと私は自らに言つた二三三

大石誠之助は大逆事件時の検事聴取書で「私ハ当地付近ニテ此頃社会主義ニ付テ交際シテ居ルノハ当町高木顕明ト云フ僧侶ト崎久保誓一ト云フ熊野新報社員位ノモノデス」二三四と述べている。顕明は、大逆事件のころには社会主義から遠ざかつていたが、大石とは交流を続けていたことがうかがえる。しかし、峯尾節堂がいうように、この大石との交流が官憲から顕明の「主義の内容などは解らう筈もなく、一も二もなく熱心なるソシアリスト又はアナキストなりと見込みをつけられてをつた」二三五ことにつながったのであろう。



### 第三章 峯尾節堂の社会主義とその「転向」

#### 第一節 峯尾節堂と社会主義との関係

峯尾節堂は一八八五（明治一七）年四月一日に父・徳三郎、母・うたの長男（次男とも）として和歌山県東牟婁郡新宮町二番地で生まれた。幼名は正一。一八九二（明治二五）年一二月八日に三重県南牟婁郡相野谷村（現・紀宝町）大字桐原松原寺の俵本（耕宗）宜元のもとで得度し、一八九六（明治二九）年に高等小学校二年を卒業したのち、新宮町臨済宗妙心寺派松巖院の小僧となり、一九〇〇（明治三三）年九月一二日に節堂と改名した。一九〇二（明治三五）年に修学のため妙心寺にはいったが、まもなく眼病にかかったため翌年帰郷し、七月三十一日付で知客職という何らかの理由で修業できなかった者が寺院などに雇われる際の資格を得た。一九〇四（明治三七）年七月三十一日、節堂は和歌山県東牟婁郡九重村（現・新宮市熊野川町）大字相須の真如寺の留守居僧となり、ついで一九〇六（明治三九）年に相野谷村泉昌寺にはいるが、給料の面で檀家と折り合わず二、三ヶ月で寺を去った。大逆事件時の節堂の第一回予審調書によれば、その後三重県度会郡穂原村（現・南伊勢町）西来寺、同郡二見村<sup>ママ</sup>二<sup>三六</sup>（現・伊勢市）禅棟寺、和歌山県東牟婁郡七川村（現・古座川町）大宝寺などを転々とし、一九〇九（明治四二）年二月に泉昌寺の留守居僧になったという<sup>二三七</sup>。また、証人調書にはこれに新宮の松巖院と清閑院が加わっている<sup>二三八</sup>。

一九〇五（明治三八）年四月一五日に蔵主・主座職、一九〇七（明治四〇）年二月二六日に前堂職をそれぞれ取得しているが、蔵主・主座職の資格を得たころ、節堂は仏教雑誌『無我の愛』に短信を寄せている。

『無我の愛』日夜繰り返へしく拝読いたし居り候。煩悶しげき身の、容易に其境に體

達すること能はず、苦悶罷在候処。昨今稍得るところ有之、嬉しく存じ候。信仰さへ確立せば、パンや、衣服や、住家や、乃至世間の毀誉褒貶やば、恁麼なつても宜敷きもの敷と存じ候。雨降らばふれ、雨楽しく候。風吹かばふけ、風楽しく候。以上<sup>二三九</sup>この『無我の愛』には、数多くの社会主義者が関心を寄せていたことは第一章で前述したが、新宮からは大石誠之助（禄亭）<sup>二四〇</sup>とクリスチャンの成江秀治（醒庵）<sup>二四一</sup>が通信を寄せている。高木顕明も、一九〇八（明治四一）年一月二五日の浄泉寺での談話会で、「講談無我の愛」というテーマで談話をしている<sup>二四二</sup>。大石の影響によるものであろうか、新宮での『無我の愛』の購読者は多かったとみられ、節堂も新宮での『無我の愛』の購読者のひとりであつたことがうかがえる。

ところで、沖野岩三郎は「生を賭して」で節堂の印象を次のように記している。

下駄屋の若い主人が家庭問題に苦しんで居るので、其の相談對手になつて呉れと言つて私を訪問した黒衣の僧侶M、Sは丈の高い顔の長い、咽喉部に大きな瘤のあるガラ／＼声の男であつた。彼れは此の町の生れで幼少な時から小僧になつて其頃は隣の田舎寺に住職をして居たのである。／＼M、Sは俳句が上手で且つ新刊の文学書をよく読んで居た。私が彼に初めて会つた時、彼は既に平民新聞や新時代などを読んで居て、私によくトルストイだとか木下尚江だとか云ふ人の思想について意見を吐いて居た。けれども流石は宗教家だけあつて私の位置境遇に同情する所があつて、頭ごなしの議論などは決して持ちかけて来なかつた。けれども随分猛烈な所もあつて、今の明治学院教授山本秀煌君が講演に来て呉れた時などはM、Sの質問の態度は恰も後鉢巻に玉櫛と云ふ様な勢であつた。あつて<sup>マ</sup>Oドクトルが「Mは仇討でもする様な意気込だつた

ね」と言つて笑つたのであつた<sup>二四三</sup>

沖野が「俳句が上手で且つ新刊の文学書をよく読んで居た」と述べているように、節堂は「草声」という雅号で俳句をつくっていた。節堂は、清水礁波<sup>二四四</sup>・徳美夜月・清水友猿らの俳句結社「吹雪会」に参加しており、一九〇八（明治四一）年夏ごろの吹雪会五句集では選者のひとりをつとめている<sup>二四五</sup>。新宮で発行されていた文芸雑誌『はまゆふ』には節堂の俳句が何本か散見できる<sup>二四六</sup>。相野谷村泉昌寺でも常に丸善から書物を借り読みしていたらしく<sup>二四七</sup>、節堂の実弟・三好慶吉（五老）も「新宮中の僧侶の中でいちばん読書家であつたこと、手あたり次第読むというような人でした。社会主義に興味をもつようになつたのもそういうところからでしょう」<sup>二四八</sup>と述べており、文学好きでもあつたことがうかがえる。慶吉は節堂が社会主義に関心をもつようになったのは読書家であつたためと推測しているが、節堂と大石誠之助が知り合つたのは俳句仲間を通じてであつた。

一九〇七（明治四〇）年三月、節堂は俳句仲間で地元の『熊野実業新聞』記者でもあつた徳美夜月の紹介により、大石とはじめて出会つた。節堂は、大石に紹介状を書いてもらい、僧侶をやめて新聞記者になるため、同年三月に上京して幸徳秋水のもとを訪ねた。しかし、日刊『平民新聞』が廃刊したときで適当な勤め口はなく、堺利彦から「坊主に徹しろ」と一喝されて帰郷した<sup>二四九</sup>。大逆事件時の証人調書では、一九〇七（明治四〇）年二月ごろから社会主義に関する書籍や新聞を読んで社会主義者になつたと述べているが<sup>二五〇</sup>、三好慶吉によると、一九〇五（明治三八）年ごろから非戦論に関心をもち、キリスト教社会主義者の安部磯雄の著書を読んで宗教は社会主義でなければならぬと考えるようになり、自坊の檀家をまわる際も貧しい家からまわつていたという<sup>二五一</sup>。

沖野の「生を賭して」には、一九〇八（明治四一）年秋ごろ、節堂が沖野のもとへやってきて、二人で「死にし人の在りし世の事どもを語らった」とき、節堂は次のことを語ったという。

どうしても禅宗は無神唯物論である。誰がどう言っても唯物論の根底に立たねば釈迦何物ぞ我何物ぞと云ふ域には到達出来ない。と言つて友達が死ねば悲しい。無霊無神だと知りつゝも記念会の一回でもしてやりたくなる。此間の矛盾した消息が何物かの形になつて現はれねばならない。もう自分達は樹下石上でもあるまい、一つ法衣を脱いで社会の為に実際の働きをして見たい。U、Gも禅宗から実行主義に移つたのだ。

其の心裡は私に了解出来る<sup>二五二</sup>

この節堂の言葉に沖野は別に異論は挟まなかつたという。「U、G」とは内山愚童のことであり、「禅宗から実行主義に移つた」とは『入獄紀念 無政府共産』などの秘密出版のことと思われる。また、沖野の回想「大逆事件の思い出―回想の人々―（二）」（『文芸日本』昭和三〇年一〇月号 文芸日本社 一九五五年）には、節堂が社会主義者の会合に参加していたことが記されている。

峯尾節堂は紀州新宮町の生まれで、禅宗寺の青年僧であつた頃共産主義の書物を読み、その主義主張が禅宗の教義と一致する云つて、熱心に共産主義の書物を読みあさつた。そのうちに試験を受けて、新宮町から熊野川を隔てた禅宗寺の住職となつたが、墨染の法衣にいや気がさし、背広の洋服を作つてそれを着るようになり、新宮町に共産主義者の会合がある時は必ず背広服を着て出て来た<sup>二五三</sup>

法衣ではなく背広を着て社会主義者の会合に参加していたのは、「法衣を脱いで社会の

為に実際の働きをして見たい」という考えによるものであろう。しかし、実際の節堂は、「僕は僧侶だと言つて徒衣徒食するが嫌さに、此の寺へ来て自ら働いて食はうとするのだが、毎日菜畑へ糞を担いで行つたり薪を割つたり、到底此の弱い身体が堪へられさうにもない。寧ろ思ひ切つて還俗しようか知ら」と沖野に言つたり、「〇ドクトルの所へ薬局生に置いて呉れと申込んで来た」り、「始終グラ／＼と迷つて居た彼は遂に内村さんの聖書の研究を読み出した。そして思ひ切つて同志社の神学部へ入学しようか知ら」と沖野に相談をしている<sup>二五四</sup>。この節堂の様子は、俳句仲間からも「まんまると剃り得ぬ頭霞みけり（草声子に）」<sup>二五五</sup>と詠まれるほどであつた。

節堂が「始終グラ／＼と迷つて居た」ことは、彼の生活面からもうかがえる。節堂は、大逆事件に連座した際、弁護士は今村力三郎・花井卓蔵・磯部四郎らに「覚書」を出している。そこには、一九〇八（明治四一）年秋ごろから冬ごろの生活について、「或ル芸妓ニ恋慕シテ母ノ全財産ナル二百円ノ金ヲ消費シテキタノデス。其レハ四十一年ノ十一月頃カラノ事デ（略）尤モ芸妓ニ熱中シテキタ頃ト思ヒマス。芸妓ノ名ハ三国家内三玉ト申シ、放蕩ヲシタ料理店ハ三国家、三好楼、二葉楼、及他ニ二三軒アリマス」<sup>二五六</sup>と述べている。大石誠之助や高木顕明は日露戦争終結後に新宮に新しく設置された遊郭に対しては廃娼を主張していた。しかし、節堂の場合は母親の全財産を盗み、その金を使って遊郭で放蕩するという僧侶としては荒んだ生活を送っていた。節堂は、和歌山県下や三重県下の寺院を転々としており、安住の場所を得られなかったため、その心理的な不安から「始終グラ／＼と迷つて居た」のであろう。

このような不安定で荒んだ生活を送る一方で、節堂は大石をはじめ、成石平四郎や崎久

保誓一ら新宮で活動していた社会主義者とも交流していた。一九〇八（明治四一）年二月四日付で、節堂は成石平四郎にはがきを寄せており、そこには七川村大宝寺の縁側で膝を抱える自画像を描いて、その余白で次のことを書いている。

如上の画ハ僕の近来稍々痩せながらも、健かなると報告する者也／御兄思想主義は如何ん。何れ我等の事業は生命を捨ててかからねばならぬ。十分修養の後は牢獄で死ぬまでだ。／クロポトキン翁の著書を読みたい志願にて英語の勉強を始めた、併し一生之に従事するつもり也、一寸でハユカヌ／無政府主義を奉ずる者は其の主義の尊厳偉大なるを少しなりとも汚さざるが為めの其の言行の摯実なるを要すと切に感ず／演説会は幾日頃ナルヤ、禄亭先生ハ来ルナルヤ二五七

このはがきは節堂の思想が最もラジカルだった時期に書かれたものといえよう。沖野の「生を賭して」にも、明治期に最も広く用いられた英語教科書であるナショナル読本の第二巻をもつてきて、知らない英単語の意味を聞いたりしたと書かれている二五八。

ところで、一九〇八（明治四一）年七月二五日から八月八日まで、幸徳秋水が新宮の大石のもとに滞在した際、八月三日に高木顕明の浄泉寺で幸徳をむかえた談話会が開かれたが、その談話会に節堂も参加している。のちに大逆事件の供述調書で、幸徳の談話を「浄泉寺ノ談話会ニ於テ幸徳ヨリ無政府共産主義ノ実行ヲ為スヘキ適当ナル時機テアル事ヲ聞キ殊ニ幸徳ノ言語態度力頗ル悲壮テアツタ為メ大ニ感動シ益々無政府共産主義ヲ主張スル様ニナリマシタ」二五九と述べている。しかし、第二章でふれた幸徳の談話の内容からは、「無政府共産主義ノ実行ヲ為スヘキ適当ナル時機テアル」という主張はみられない。そのため、節堂が「幸徳ノ言語態度力頗ル悲壮テアツタ為メ大ニ感動シ益々無政府共産主義ヲ

主張スル様」になったのかはきわめて疑わしい。

一九〇九（明治四二）年四月一日から八月二〇日まで新村忠雄が大石宅で薬局生をしていたとき、新村は節堂・成石平四郎と相談し、滋賀県大津の『滋賀日報』で記者をしていた崎久保誓一を呼び戻して、節堂・成石と三人で新聞の発行を計画している二六〇。節堂は第二回予審調書で「同年六七月頃ト思ヒマスカ大石ト成石平四郎、新村忠雄、私四人力速玉大社境内ノ氷屋ニ集リ鮎ヲ喰ツタ事カアリマス」二六一と述べており、発行計画はそれにあがったものと思われる。この三人の計画には大石も賛成し資金を出すと言っていたが、大石が一向に資金を出さなかったため、結局計画は実現しなかった二六二。

大石や成石のみならず、幸徳・堺・新村ら社会主義者と交流していた節堂であったが、最終的に社会主義から遠ざかった。獄中手記「我懺悔の一節」（後述）によれば、ある日節堂は大石に次のように語ったという。

私は社会主義なんぞはつまらないと思ひます。自分にも其の理由は解らないが何んだか左様に私は感じてならない。就いては今迄私はあなた方に同主義者らしくも振舞ひましたが自今同主義と絶交す。そして私は本当に腹から公共心も犠牲心も無い者が偉らそうに社会の安寧・幸福や民衆の平和・向上を云ふのは、虚偽にあらざれば偽善也。

偶々其んなことを云ふ人は大偽善者だ二六三

節堂はそのまま大石とは絶縁したという。大石と絶縁した理由について、節堂は「大石ハ社会主義ヲ唱ヘ平等ヲ主張シナカラ實際ハ却ツテ貴族主義ニテ自分ノ家庭ハ嚴重ニシ妻子ニハ贅沢ヲ許シ而シテ他人ニ向ツテハ妻ハ不必要テアルトカ其他種々ノ事ヲ申スノテス彼ノ書ヒタ家庭破壊論ノ如キハ彼ノ実行ト全ク相違シテ居ルノテス」二六四と第一回予審調

書で述べている。しかし、節堂の「覚書」では、大石との絶縁は、大石の主張と私生活との矛盾によるものではなく、将来の一身一家のために社会主義から離れると大石に伝えたところ、そのことを大石に批判されたためだとしている。

私ハ大石ノ宅ヘ遊ビニハ行ク者<sup>ママ</sup>ノ、イツ迄、迂路々々シテキル訳ニユキマセンカラ、一方自己ノ放蕩ホ止ムルト共ニ、将来ハ真面目ニ一身一家ノ処法ヲ講ゼザル可カラズト思ヒ、一日大石ニモ其ノ由ヲ話シ、自己ガ社会主義ナドハ嫌イニナリマシタ、且ツ人間ハ誰レデモ一身一家ヲサヘ修メタラ好イデハナイカ。ト申シマシタ、而シテ私ハ如何シテモ、法律ヤ権力ヤ服従ナシニ世ノ中ガ修マルト云フ理屈ガ解セラレナイト云フ<sup>ママ</sup>モ大石ニ申シマシタ、其時大石ハ私ニ向ツテ君ハホントウノ苦勞ヲシタ<sup>ママ</sup>ガ無イカラ駄目ヂヤト申シマシタ。此時以来大石ノ宅ニハ行キマセンデシタ尤モ行キマシテモ薬取りノ用事デ門ロマデ行クダケデ、決シテ依前<sup>ママ</sup>ノ様ニ座敷ニ上リナドシテ親シイ交際ナドハシマセナダ、大石初メ其他ノ関係者ハ勿論大石ノ妻<sup>ママ</sup>君ヤ高木顕明ノ妻<sup>ママ</sup>君ナドモ私ガ主義ヲ廃メタ<sup>ママ</sup>ヲ知ツテオリマス兎モ角紀州デ一番早く主義ヲヤメタノハ私デス、夫レハ四十二年八月頃ノ<sup>ママ</sup>デス<sup>二六五</sup>

「覚書」では、節堂が社会主義から遠ざかり、大石と絶縁したのは一九〇九（明治四二）年八、九月ごろとなっている。しかし、京都医科大学病院へのどの腫物の手術にきていた節堂は、一九〇九（明治四二）年一〇月三日付で大石にはがきを送っている。

一日に当地に着いて、此の宿に尻を据えました、夜月（筆者注・徳美夜月）、二楼（筆者注・山路二郎）両兄に逢ひました、例の公判は明日だと今日、夜兄を訪ふたら言つてをりました、併し空気が至極平穏だと言つてをりました、あすタンコブを診て貰う



つもりです、多分入院することになりでせう。古本<sup>ママ</sup>やを見物すると本が欲しくてたま  
らぬのには閉口します、之れも悪煩惱手呵々<sup>二六六</sup>

「例の公判」とは、大石が「無門庵主人」の名前で、徳美が記者をつとめる『京都日出  
新聞』に投稿した「家庭破壊論」が、幸徳秋水・管野須賀子らが出す『自由思想』の第二  
号（明治四二年六月一〇日）に転載したことで発禁処分を受け、それが『京都日出新聞』  
にも波及したことである<sup>二六七</sup>。大石に関係した公判のことを記すなど、この節堂のはがき  
からは、一九〇九（明治四二）年八、九月ごろに社会主義から遠ざかり、大石と絶縁した  
ようには見受けられない。

また、高木顕明は、節堂が大石方に出入りしなくなった理由は、のどの腫物の手術の借  
金を大石に申込んだところ拒絶されたからだと述べている<sup>二六八</sup>。顕明がいう大石との金銭  
問題について、節堂自身は次のように供述している。

問 大石ニ金ノ借用ヲ申込<sup>ン</sup>テ拒絶サレタ様ナ事ハナイカ

答 左様ナ事ハアリマセヌ

問 何カ衝突カアツテ社会主義ヲ廃メタノテハナイカ

答 左様ナ事ハアリマセヌ私ハ無政府共產主義ノ主張ハ到底実行カ出来ナイト言フ事  
ヲ悟リ加之我国体トシテ斯様ナ主義ハ不都合テアルト言フ事カ判リマシタ又一面  
私ハ幼少ノ時ヨリ仏教ニヨツテ養成セラレタ身テアルカラ旁ニ社会主義ハ厭ニナ  
ツタノテス<sup>二六九</sup>

「覚書」でも、幼少期から学んだ仏教と、社会主義が相容れないものであるため、社会  
主義から遠ざかったと書いている。

私ハ最初カラ社会主義ハ唯一種ノ議論デ、到底行ハル、者デハ無イト信ジテ居マシタ。而シテ私ハ幼少ノ頃カラ、御経ヤ漢籍ヤ心学ノ様ナ服従的道德ト云フ教育ヲ受ケタ者デスカラ、他ノ科学ヲ修メタ書生ノ様ナ物質一遍ノ議論ニ如何シテモ心酔熱中スルヲガ出来ナカツタノデス。要スルニ其頃私ハ単ニ大石ノ宅ヘ遊びニ行ツテ酒食ノ交際ヲシテ居ツタニ過ギナイノデスニセヨ。

ここでは、自らの仏教思想と社会主義が相容れない存在であると述べているだけではなく、社会主義は到底実行できないものだとも悟ったとも述べている。節堂はさきにふれた成石に寄せたはがきで、「何れ我等の事業は生命を捨ててかからねばならぬ。十分修養の後は牢獄で死ぬまでだ」や、「無政府主義を奉ずる者は其の主義の尊厳偉大なるを少しなりとも汚さざるが為めの其の言行の摯実なるを要すと切に感ず」ニセーと書いていた。大逆事件の直前に、節堂は社会主義から保守的な思想に「転向」していたことがうかがえる。

三好慶吉によれば、兄・節堂の使いで大石宅に行った際、大石から「帰ったら兄貴にそう云ってくれ。もう余り社会主義の本を読むな。どだい警察がうるさいから、別のものを読むように」と言われたというニセニ。これについて、関山尚太郎は晩年の慶吉から「四十歳もいくつか超えて思慮分別に富んだ彼（筆者注・大石）は、血気にはやる青年に殊に郷党の後輩に対しては、平生より余り無茶しないようにいましめていたらしい」ニセ三と聞き取っている。大逆事件当時、節堂は満二五歳で、生活も不安定だったため、節堂の思想がラジカルにならないよう気にかけていたのであろう。

沖野の「生を賭して」には、大逆事件の証人ニセ四として上京し、帰郷後に沖野のもとを尋ねた節堂は、「検事の質問中に、あなたの事をも尋ねて居ました。私は自分が無神論者で

ない事と、あなたが一神論者で虚無主義になり得ない事を言つて置きました。(略)今は斯うして法衣を纏つて禅宗の寺には居りますが、私の将来はどうしても矢張り人格的の神を拝する宗教にならねば満足出来ません」<sup>二七五</sup>と語つたという。この節堂の発言から、事件のころには、節堂はすでに社会主義から遠ざかったことは確かである。しかし、宗教に関しては、社会主義から遠ざかる前にも「どうしても禅宗は無神唯物論である。誰がどう言つても唯物論の根底に立たねば釈迦何物ぞ我何物ぞと云ふ域には到達出来ない」<sup>二七六</sup>と語っている。最終的に社会主義から遠ざかった節堂だが、「人格的の神を拝する宗教にならねば満足出来ません」という考えは一貫して変わらなかつたと推測される。

## 第二節 節堂執筆の論説について

節堂は、前節でふれた『無我の愛』への短信のほかに、地元新聞にも論説を寄せている。これらの論説は、社会主義から遠ざかる前の節堂が、どのような宗教思想や社会主義を抱いていたのかがううえでは重要な資料といえよう。

一九〇九(明治四二)年一月一二日付の『熊野実業新聞』に、節堂の「啓蒙録」が掲載されている。その冒頭で節堂は次のように書いている。

某といふ匿名でさる住職を誹毀した投書が十日のよしあし草に載つてゐた、そこで、僕は此の事実の真相を表白して江湖一般の誤解を啓かねばならぬ位置にをることを断つておく、まこと、僕は某のいつた如く位牌を焼いた事に干与した人間である、否な其の主張者であり又下手人である<sup>二七七</sup>

『熊野実業新聞』で位牌を焼却した僧侶がいることを批判した投書<sup>二七八</sup>があつたが、そ

れは誤解であるとともに、それに関与し実行したのは自分であると名乗り出ている。そして、節堂は位牌を焼却した経緯や理由を述べている。

之れは某自身も先刻承知の通り永らく本堂の裏の漬物納屋や鄙下の古籠に胴の断々に絶ぎれた物や、首天蓋の飛んでしまった化物的の木片ぢやないか、形々しく大切な霊牌数百枚なんて吹聴してあるから、本堂の祠堂から金箔付の立派な位牌を放り出して、さんざ、焼き払ってしまったように見えるが、事實は役に立たぬ、首のとれたる木片や胴体を失った位牌の死屍を法に依つて荼毘したまでである、(略)只唯、掃除の邪魔になることを数百年？長い々々時間、小僧や客僧共を苦しめた、イレモノフタゲノの位牌の化けもの共を、文明的衛生流で、而も之れでも塔婆を建て香を炷き誦経声裡に荼毘し了したのだ二七九

位牌をむやみに焼却したのではなく、破損した位牌を掃除のために焼却したという合理的な理由であつた。また、卒塔婆を建て、香をたいて読経し焼却したとあるので、あくまでも仏教的な作法にのっとつて位牌を焼却したようである。

最後に節堂は「某君自身が頑冥固陋な旧思想から来た悪感情の暴露が此の位牌に祟つたまで」と述べ、「某君が野卑なる心地と浅薄なる其の頭のふるぼけたるを憫笑せねばならぬ事を言つて置く」と二ハ〇、位牌を焼却した僧侶がいることを批判した「某」を逆に批判している。この「啓蒙録」は、「某」の投書への反論だけではなく、社会主義に接近していた節堂が「某」の「旧思想」を批判する論説でもあつた。

これまで節堂の新聞への寄稿で確認できるものは、この『熊野実業新聞』に掲載された「啓蒙録」だけとされてきた。しかし、近年『熊野新報』にも「草声」の名前で「忘れら

れたる根本義」を投稿していたことが新たに発見された<sup>二八二</sup>。これは『熊野新報』の一九〇九（明治四二）年六月一二日付から同年六月一八日付までの三回にわたって掲載されたものである。

第一回の冒頭で節堂は次のように述べている。

試練の悪魔に対抗して一度ナザレの基督により説破せられし「人は麵麴のみにて生くる者にあらず」の語は、いかに剛愎驕傲貪婪厭くなき人の于の耳朵を驚かせし□より、世は人は皆な挙げてパンの蓄積を之れ事として人間の能事了れりとなすの時、人に道徳心を鼓吹し宗教的自覚を喚起せしめしものは実に此の敬語の偉力ならずんばあらず。遮莫、星移物換、人間の生命の自覚に諷□を与へたる此の巧妙なる敬語の上にも、時代の暗遷黙移は遂に俄に幾分功德力の下落を示せるを悟らざる可らず<sup>二八二</sup>

沖野の「生を賭して」には、節堂は「遂に内村さんの聖書の研究を読み出した。そして思ひ切つて同志社の神学部へ入学しようか知ら」<sup>二八三</sup>とあるが、冒頭でキリストの言葉を書いていることから、実際にキリスト教の研究をしていたことがうかがえる。しかし、節堂によれば、現実の「資本家本位の経済組織は世界の富を壟断して少数富豪階級の独占に帰し少数の富者は益々富み多数の貧者愈々貧しく」なり、「俚諺に反して稼ぐに追い付く貧乏の人の愈々益々社会の全域に出現したる世を見るに至りぬ」と批判している<sup>二八四</sup>。それでも「今日の文明を招致したる最大の原因は、能く人類てふ一団が他動物よりも、より早く其の相互扶助の社会精神を発揮して共同団結の挙に出」<sup>二八五</sup>たためと、相互扶助の精神を評価している。そして、「人間の歴史は全頁皆な之れ良薬を以て綴られたる英雄の伝記の如く見」えるが、実際は「地味なる人間相互の和楽や耕耘や架橋や開墾や音楽や文芸や教

育」によって成り立っている<sup>二八六</sup>。しかし、「今日文明社会に見る万般の事項を伝へずして、却つて一人の殺伐たる弑虐の功名談を語らんとす」るので、「有般の民衆は拍盲に此の面白ろき殺生を偉として遂に自己の今日あるを得せしめたる人間相互の愛他心や共同心や博愛心を忘却し去」ったと主張している<sup>二八七</sup>。節堂にとって歴史は、英雄の伝記や功名譚によって成り立っているのではなく、「相互扶助の社会精神を發揮し」た民衆によって成り立っていると考えていたのであろう。しかし、このような節堂の歴史観は、大石誠之助ら社会主義者を通じてのものだったのか、節堂独自のものだったのかは不明である。

続く第二回では、少数の富者と大多数の貧者について、次のように述べている。

事実少数の者は山積の富を擁して日夜高尚なる文学を解し美妙なる繁栄を弄し終年逸榮に鑒く而して最大多数の貧者は奈何、彼等は貧家に生れて一毫の富をも有せざるが故に、終世目に一丁字無く而もパンの為に檻樓を寒宵に□げて奔馳せざる可らず、噫、此の貧困者に何の罪過かある、所謂前世の果報なるもの乎、否否否、皆な之れ資本土地の独占私有の現社会制度が把持し来れる悪現象のみ。(略)少数者が壟断せる富も元来は社会即ち大多数の者の生産せし所也、生産者何故に缺乏し何故に貧窮なるぞ、少数者之れが生産物を掠奪するが故のみ、富者と云ふ社会の病的変成分子が跋扈跳梁して同族の好を其の同族の全般に通ぜざるに因由するのみ<sup>二八八</sup>

ここでいう「少数の富者」は資本家で、「最大多数の貧者」や「生産者」は労働者や農民のことと推測される。ここでは資本主義やそこから生じる経済的格差を批判している。さらに節堂は、キリストの「人はパンのみにて生きる者にあらず」という言葉を再び持ち出し、「真に人類の有らん限り我等の鼓膜に響く超世の大梵音」と評している<sup>二八九</sup>。しかし、

このキリストの言葉は「全人類が少くも余りに空腹を感じざる時に於てこそ極めて有用」であり、「今の時は之れ何の時ぞ」と問う<sup>二九〇</sup>。そして、現実世界の「大多数は皆な之れ衣食住のために輾転苦悩に晷も亦足らざる者にあらずや。食ふ可きもの着る可きもの無く」<sup>二九一</sup>として、現状の社会制度を次のように批判する。

今此の世界、夥多の此等の富は世界到る処の倉庫に――貴族、富豪の少数者の名に依て――充滿積堆し居れるにあらずや。少数者の利益――道德的有害なる――のために故意に作られたる今の社会制度の下にありては、万人は不道德ならざるも飢えざるべからず、何にの余裕ありてかパン以上に自己の生命を探求し得るものぞ<sup>二九二</sup>

少数の富者が富を独占する社会制度を批判するとともに、万人はパンのほかを求める余裕はないと、当時の経済状況について述べている。さらに節堂の批判は富者を形成する「紳士閥」にも及んでいる。

吾人は是等少数の所謂僥倖なる世の紳士連が文学を説き宗教を談じて敢て一言の他の大多数同胞の貧困無智なるに説及ばざるを見て、吾人は心窃に彼等紳士閥が其贅沢なる生活の為に蹂躪する多数生民の犠牲の沈痛なるに驚怕すると共に、彼等紳士閥の残忍なる忘恩に憤慨せざるを得ず<sup>二九三</sup>

節堂は、このように「紳士閥」を批判したうえで、「自ら他動物に優れりと誇れる人類にして其の相互扶助の根本義を忘却し、パンを爭奪し合ふて得々たるに至りては、実に沙汰の限りといはざるを得ず」<sup>二九四</sup>と述べ、論説を次回に続けている。

最終の第三回では、社会主義者の自由・平等・博愛の精神と、「パン問題」をはじめて結び付けている。

人間眞の平和自由博愛は、一つに相互扶助の共產制度の下に作られたるパンの豊饒なる晚餐を喫して而して後に出現するものなるを。パン問題は人生問題の全部にあらず。されど、人生一日も之れ無くてかなはぬパンの解決を要するものゝ、豈に人生問題中の一大重要問題ならずとせんや誤解すること勿れ<sup>二九五</sup>

「パン問題」は、「人生問題の全部」ではないが、「相互扶助の共產制度」という「人間眞の平和自由博愛」に関わっていると述べている。この「パン問題」に關係して、節堂は「実に彼の徒らに其の声を大にして、人間の罪惡を説き世の終期の遠からざるを説く一派の宗教者を憎む」と述べ、「更に彼の一派の利己者流——社会民生の生活艱險の状態を他事視し、専ら自己の榮達福利又は自己の宗派のみの眼前の繁榮に汲々たる——の無智頑迷を憫む」<sup>二九六</sup>と、利己主義に陥った宗教者を批判している。節堂は、仏教者であるため、このような宗教者を目撃していたのであろう。そのため、利己主義の宗教者と、自らは異なることを續けて述べている。

吾人は先づ彼等より「人はパンのみにて生くる者に非ず」の時代の推移を無視せる此語の撤回を要求し更に彼等に百尺竿頭歩を進めて明白に現社会の現實を觀取し来らん事を切望するはパン無くして一日も生存し得る者に非ずとせば、今の時においてパン以上の眞理をのみ饒舌して得意なる宗教家ありとせば、吾人は切に其人の宗教家たる可く余りに残忍の素質を有するものなるを悲む<sup>二九七</sup>

これに対して、節堂は「吾人は靈肉一元の信仰に立つ者、先づ此社会に弥満せる飢凍の民生が解決を外にして、別に他に高尚幽玄なるパン以上の問題を發言する能はず」<sup>二九八</sup>と述べている。節堂は沖野岩三郎に「人格的の神を拝する宗教にならねば満足出来ません」



二九九と語っていたことはさきにふれたが、この「吾人は靈肉一元の信仰に立つ者」という一文からそのことがうかがえる。そして、主題の「忘れられたる根本義」とは「即ちパン問題に逢着することを得ん矣」<sup>三〇〇</sup>と、人類が相互扶助の精神を忘れたことが根本であると主張して、この論説を締めくくっている。

論説の冒頭などでキリストの言葉が書かれているが、これはキリスト教社会主義からの影響と思われる。節堂は、キリスト教社会主義者の安部磯雄の著書を読んで宗教は社会主義でなければならないと考えるようになったといわれており<sup>三〇一</sup>、仏教者でありながら、キリスト教社会主義にも関心をもっていた。また、「パン問題」を題材していることもあり、ロシアの無政府主義者ピョートル・クロボトキンの著書『麵麴の略取』<sup>三〇二</sup>からも影響を受けていると推測される。『麵麴の略取』は、一九〇八（明治四一）年に幸徳秋水によって翻訳・秘密出版されており、節堂も大石誠之助を通じて読んでいたと推測される。

ところで、一九〇八（明治四一）年六月一〇日付の『熊野実業新聞』に掲載された伊藤猶吉（独尊）の「居士大内氏の来熊」<sup>三〇三</sup>には、「我熊野の宗教界は、聞く人あれど説く人無きがために、仏教の不信退廃は其極点に達しつゝあり、現在某寺の現住の如き身は仏祖の流れを汲み法衣を纏ひ珠を爪繰り乍ら其一切の言行は社会主義を唱導して憚らず」<sup>三〇四</sup>と書かれている。この記事にある法衣を纏う社会主義者とは、節堂か高木顕明と推測される。当時、社会主義に接近していた仏教者が、いかに批判の対象となっていたのかがうかがえる。これらの節堂の論説は、社会主義に接近していた仏教者への批判に対する反論の意味合いも込めて、節堂が新聞に投稿したものと推測される。

### 第三節 獄中手記「我懺悔の一節」

新宮での大逆事件の捜査は、一九一〇（明治四三）年六月からはじまった。節堂は、七月四日に泉昌寺が承諾捜査を受け<sup>三〇五</sup>、七日に刑法第七三条「大逆罪」の共犯で起訴され、身柄を東京に送られた。事件の公判は二月一〇日からはじめられたが、獄中での節堂は真宗に帰依していた。一九一〇（明治四三）年二月一六日付で沖野岩三郎に寄せた手紙には、「時々ゴルキーの小説にあるような浮浪人や淫売婦のような人世観<sup>マヤ</sup>が起ります。エエ何とでもなれ、世の中なんてクダラナイものだ。併し時折人間以上の神や如来が恋しくなることがあります。ココデ購求して読んだ本は伝習録と親鸞聖人伝です」<sup>三〇六</sup>と記している。一九一一（明治四四）年一月一八日、二四名の被告に死刑判決が出されたが、その翌日の一九日に、節堂は沖野に次のようなはがきを送っている。

拝啓、昨十八日遂に死刑の宣告をうけました。私は今親鸞聖人を通じて如来の子として頂きました。如来の膝下に帰るの信仰をもっております。人間の小智小見、凡慮浅識を以て万事皆不可解なり。人間は到底不完全、殊に私自身は頗るアサマシキ者なり  
の自覚を生ぜざるを得るに至りました。さらば、大兄健在におわせ<sup>三〇七</sup>

「我懺悔の一節」でも「我が愛母は既に早や亡き人の数に入りしにはあらずやと、日頃憂慮してゐる。天幸に此の憐れなるわが母を復活させ給へ。わが母は実に正直にして能く働き能く人生の勤勞を尽せし人なれば也。（略）不孝の児を忘れて如来の慈懷に安らけく永劫に眠り給へ。南無阿弥陀仏」<sup>三〇八</sup>と書いている。管野須賀子の獄中手記「死出の道艸」によれば、死刑判決の翌日、東京監獄教誨師で真宗大谷派僧侶の沼波政憲が、管野のもとを訪れ、「被告の峯尾が死刑の宣告を受けて初めて他力の信仰の有難味がわかったと言つ

て些かも不安の様が見えぬのに感心した」と管野に話したという。そして、沼波は管野にも「宗教上の慰安を得よ」とすすめたが、管野は「私は此上安心の仕様はありません」と答え、「死と当面したからと言つて、遽かに弥陀といふ一の權威に縋つて、（略）安心を得るといふのは些か滑稽に感じられる」と批判している<sup>三〇九</sup>。大逆事件当時、東京監獄教誨師は、沼波のほか、教務所長として浄土真宗本願寺派僧侶の田中一雄がいた<sup>三一〇</sup>。臨済宗の僧侶であつた節堂が、他力本願を宗旨とする真宗に帰依したのは、教誨師の感化もあると思われるが、死刑を目前にして自力による修行の限界に思いあつたため、阿弥陀如来の本願力に頼ることで救済を得ようとしたのであろう。

大逆事件の被告に死刑判決が出された翌日の一月一九日、二四名の被告のうちの半数の一二名が恩赦で無期懲役に減刑された。節堂は、死刑判決を受けたのち、無期懲役となり、佐々木道元・新村善兵衛・新田融とともに千葉監獄に送られた。獄中ではフランス語を勉強しており、三好慶吉が面会に行つた際には「兄は私に二人分の孝行をしてくれと重々くつかえしていました。そうして、将来の歴史家は必らずこの事実を発表するだろうとも云っていました。（略）ここには同志が何名入っている。ことごとく死んでしまう。私だけは宗教があるから、と云つとつた」<sup>三一</sup>という。

事件から五年後の一九一六（大正五）年、節堂は獄中で「我懺悔の一節」を執筆しており、そのなかで大石誠之助への不信を露わにしている。

私は大石といふ人を信じてをらなかつた。大石氏には実にすまぬ訳だが、私は大石氏を信じてゐなくて信じてゐる風の容態を作つて交際してゐたのです。それは其当時私は逆境にをつて、と云ふよりも自ら逆境を作つて不平・不満で日ぐらしをしてを

た事です。自分の周囲は如何も自分を歓迎してくれない。随て温和なく寺院で閉ぢ籠つてゐられなかつた。そして尚他に虚栄心の為めに大石氏の宅に出入したのでした。(略)此人元来何処かに真摯の態度を欠くといった風で、どうも至誠とか敬虔とか渾厚・和楽な思想・精神を有つてをられなかつたらしく私は感じた。故にどうしても私は中「衷」心敬服どころか否却て輕蔑して居つた(略)此人決して自己の血肉を捧げてまで主義やなんかの事に尽す人では無いと私は見縊つてゐたのでした。(略)私は衷心敬服もなんにもして居らない人に対して、虚面を冠り先生々と信じてをる風に見せて平生出入往来して同氏の恩顧を受け、多少御馳走などの餐応になつて得意にゐたとは、何たる厚顔無恥の御愧しいことだろう。慚愧に堪えない。(略)家庭の好楽・平和を犠牲「牲」に供してまでも、主義・主張を牢固に維持する人ではなく、若しそんな騒動でも起きたら、第一番に逃げ出す口舌上の主義者で有る可しと腹の中で私は確信してゐた三二

崎久保誓一は、仮出獄後新宮へ来るたびに三好慶吉のもとへ立ち寄り、節堂の墓にも参つたが、大石の墓は一度も参らなかつたという三三。大石に対して不信を抱いていたのは節堂だけではなかつたことがうかがえる。さらに節堂は、大石のみならず、高木顕明三四や成石平四郎三五に対しても批判的な言及をしている。この「我懺悔の一節」について、千葉監獄典獄・伊藤俊光は「本人が改悛ノ一端ヲ知シ得ベキ資料」三六としてゐる。大石をはじめ顕明や成石を批判的に書くことで、「大逆犯」の社会主義者であつたことを悔悟・改心したとみなされ、早期に仮出獄ができるのではないかと考えたのであろう。そして人物評は、大石・顕明・成石に続いて、崎久保にも及んでゐる。

次は崎久保誓一君、此人も矢張りわが町を距ること五里ばかりの処の住人で、此人は其土地でも相当の財産家の仲間、山林も田畑も乃至住家には歴とした白壁塗の倉庫も建てゝあるといった家の主人で、今迄述べた人々の中では、まあ一等の有福者だつたのです。年齢は左様、私と同年、今年三十二に成ります。此人は斯く家に相当な資材もあり、言へば何一つ不足のない身であるが、先年、新聞記者をして或町に居つた時分、わづかの金の行き違ひから何んでも二・三ヶ月の刑罰を食つて入獄したことがある。無論、ほんの些細の行き違ひから起つた事で、敢て破廉恥罪といふ訳では無かつたが、此れが此人の精神を傷けた事少なからずだと思ふ。／併し私は此処に私の当て推量めいた事を並べずに、此人が自身で語つたことを述べて私の此人に関する談話の御代りとする。私と一諸〔緒〕に刑の宣告を受けて一夜同じ監房に東京で拘禁せられた事がある。此時君は泣きの涙で語つて曰く「どうも私も不真面目であつた。祖父にすまぬ（尤も同君には父亡し既に没せられて）大石氏等と相往来して居たのは大ニ悪かつた。冤罪だが残念だが、如何にも日頃の生活は悪かつた。信仰を求めて宗教の人にならなければならぬ。併し家に残した唯つた一人の子供が可憐だ、既に年を老いて旦夕を計られぬ祖父にすまぬ。子供を思ふ。あゝ！」私の手を握つて泣いてをられた事を回想すれば、同君も、敢て社会主義の為に拘禁の身となるとは夢も覚悟、否予想だにしてをられなかつた事が能く解る三二七

大石らとくらべると、崎久保に関しては批判的な記述があまりみられない。関山直太郎は、崎久保の遺族から「崎久保と節堂とは同年で、しかも文学好み同志なので、宿も節堂のいる寺清閑院に下宿していた。親しい間柄であ」三二八つたと聞き取っている。三好慶吉

も「兄が死一等を減じられて、無期になった晩、崎久保君が移った監房に兄がいて、偶然の出会いに驚いたと出所後の崎久保君が云つとった。二人で死刑を免れてよかったよかった、とにかく無事だったら又逢えると話し合つ」三一九たと述べている。いずれの証言からも、節堂と崎久保はとくに親密な関係であったことがうかがえる。崎久保の人物評に批判的な記述があまりみられないのはそのためであろう。

「我懺悔の一節」という題の通り、節堂は自らの懺悔をこの手記のなかで告白している。しかし、慶吉に「私だけは宗教があるから」と語っていたにもかかわらず、そこには仏教的な懺悔はみられず、「覚書」にも記されている遊郭での放蕩など、むしろ俗人的で卑屈な人間的弱さを露呈した懺悔であった。

今迄の諸君と異つて、家に資産も無ければ、自身に学問・地位の有るでなし、最も真面目に正直に而も謹慎に日常を送らねばならぬ筈の処、御愧しいが一番不真面目であった。(略) 当時は、私は或る売女に恋慕して本心を失ひ、有らう事か母の貯金二百円ばかりの金を盗み出して、日夜其の女の許へ其の歡心を買ふべく湯水三昧の放蕩最中でした。初めから社会主義なる者を真理と信じてゐた訳でもなければ、又そんな主義とか何んとかの公共的事業に携はるべき資格は無論自分自身には無いと自覚してゐながら、唯只地「知」名一部の名望家、即ち多少社会的地位の有る大石と云ふ紳士と交際してゐるといふ事が自己の誇りとやらに思ふて同氏の家に出入してゐたのだから、殊に自分は今申上ぐる通り売女に迷ふて墮落してゐた当時だから、何んの幸徳氏が眼中に在らんや三二〇。

大沢正道は、入獄した社会主義者・無政府主義者が仏教などの伝統思想に「転向」し賛

美することは、大正期にはいるとパターン化すると指摘している三二一。「我懺悔の一節」にはその典型といえることが述べられており、これは社会主義を放棄してから節堂の一貫した思想であったと思われる。

あゝ恐るべきは科学一方で即ち唯物論の見地に立つて世を解釈し人を救ふとするのである。私の失敗・墮落も、元はと云へば如来を信じ乃至天地間に厳たる因果律の存在するといふやうな天地的洪大な東洋思想が欠如して、唯々物慾にかられて其の日を空しく消費してゐた不敬虔な精神に胚胎してゐる。然し幸な事に私は幼時寺に居つた頃から『大道叢誌』といふ頗る保守的とも云はるべきほど厳格な東洋流の文学を読んでゐたから、どうしても科学一点張の人生觀や唯物論的的人生觀に満足が出来なかつた。随而彼の恐ろしい大逆罪などは夢にも自分の意志に上らなかつた。此点は自分で自分の果報を喜んでゐる三二二

節堂は、社会主義から遠ざかると、小僧のころから学んでいた保守的な東洋思想に戻つていったことがうかがえる。もともと仏教者であつただけに、その方向へ向かいやすかつたのであろう。そのため、「御代の光の隅なく天照り給ふ神のみくに有難きかな。然り私は裁判官に依りて死を宣告せられ勿体なくも陛下の御名によつて復活せさせて戴いた。汚れた一個の罪の子であります。陛下は私の生命の親様であります」三二三と天皇尊崇の言葉で「我懺悔の一節」は締めくくられている。この「我懺悔の一節」は、先行研究では、大石への不信、人間的な弱さを露呈した懺悔、伝統思想への「転向」が批判されているが、検事による取り調べの様子三二四や、事件の実相三二五についても書かれており、大逆事件連座者の証言として評価されるべき資料ともいえよう。

## 第四章 井上秀天と初期社会主義との関係について

### 第一節 「神戸平民倶楽部」の会員

井上秀天は一八八〇（明治一三）年三月二日に父・久太郎、母・しなの長男として鳥取県東伯郡中北条村（現・北栄町）大字国坂一八番地で生まれた。幼名は秀夫。家業は日用雑貨・農耕関係の卸問屋を営んでいたが、幼少時に父親がこの事業に失敗したことによって、倉吉の曹洞宗寺院である吉祥院に預けられることになった。当時、アメリカン・ボードの宣教師が鳥取県への伝道をはじめていたので、そのころ独学的に英語に親しむ機会があったという。一八九〇（明治二三）年、地元の米子中学に入学して、卒業後の一八九五（明治二八）年九月に上京して曹洞宗大学林に入学し、鳥取市景福寺の住職でもあった陸鉞巖のもとで印度哲学を学んでいる。翌年二月に秀天と改名し、景福寺に移り、「瑞少峯景福寺第一座」として住職の陸鉞巖を補佐した。一八九七（明治三〇）年末ごろに陸鉞巖が台湾にある曹洞宗台南市布教所に駐在するようになったことにより、秀天も台湾にわたり、陸のもとで布教活動に携わるとともに、台南義塾を開設して日本語の指導にもあたった。一八九九（明治三二）年九月、英語と中国語を得意としていたこともあってか、陸の厦門・福州・広東・香港・シンガポール・コロombo・ボンベイ・バンコクなどへの宗教視察に同行し、一九〇二（明治三五）年に再び台湾にわたった。台湾に在住していたとき、すでに『萬朝報』の幸徳秋水・堺利彦の非戦論に共鳴していたが、台湾から帰国後の一九〇三（明治三六）年一月一五日に幸徳と堺が週刊『平民新聞』を創刊すると、その読者になった。一九〇四（明治三七）年二月に日露戦争が開戦した際には、香川県善通寺の第一師団付の従軍布教師兼通訳として出征するが、一九〇五（明治三八）年春、肺結核の



ため後送され、善通寺予備病院を経て須磨で療養生活を送っている。同年末ごろから神戸市内に移住し<sup>三二六</sup>、一九〇六（明治三九）年五月に「神戸平民倶楽部」の会員となった。

「神戸平民倶楽部」とは、岡林寅松（野花・真冬）と小松丑治（天愚）が中心となって、一九〇四（明治三七）年九月に結成された神戸市の週刊『平民新聞』読者会・社会主義研究会である。「神戸平民倶楽部」の会員について、岡林は大逆事件時の第一回予審調書で、「毎月第二土曜日ニ研究会ヲ開キマシタガ時々出席ノ人モ変ルノデ能クハ覚ヘテ居リマセヌ、尤モ私ト小松丑治ガ其会ノ世話掛ヲ致シ永井実、林謙、北川龍太郎、中村浅吉、井上秀夫等ハ能ク出タ様ニ思ヒマス」<sup>三二七</sup>と述べている。また、小松も検事聴取書で「平民倶楽部ニ出席シタル同志ハ亡北川龍太郎、中村浅吉、井上秀夫、耶蘇教伝道師藤野及宇野等デアリマシタ」<sup>三二八</sup>と供述している。いずれの供述にも会員のひとりとして秀天の名前があげられており、秀天が倶楽部内で積極的に活動していたことがうかがえる。

秀天が入会したところの「神戸平民倶楽部」では、岡林・小松をはじめ、北川龍太郎・中村浅吉・松尾涙村らによって雑誌『赤旗』の発行が計画されており<sup>三二九</sup>、秀天も「忙中閑話」という題の原稿を書いている。そのなかで秀天は、「多年忠君ノ鐘詰ヤ、武士道ノエキスヤ、愛国ノ煮ベヤ、金鵒勲章ノミルクヤ、正〇位ノ飴ヤ、勲〇等ノ砂糖水ニ飽キ果テタ」<sup>三三〇</sup>などの鋭い社会批判の文章を書いていたため、大逆事件の重要参考人としての取り調べの際にその意味をきびしく追及されている。

一九〇七（明治四〇）年十一月二四日、「神戸平民倶楽部」は、元町六丁目にあった元六倶楽部で第一回社会主義講演会を開いた。講師も多彩で、大阪から森近運平・武田九平・荒畑寒村らが出席したのをはじめ、和歌山県新宮からも大石誠之助が出席し、それぞれ講

演している。神戸からは、岡林寅松が開会の辞として「神戸平民倶楽部の歴史」を述べ、秀天も「宗教と社会主義」について講演している。この講演会の模様は、中村浅吉（桐舟）が同年一月五日付の『日本平民新聞』第一三号に通信している。

十一月二十四日、当地元六倶楽部で第一回社会主義講演会を開いた。これ迄同志の研究会は、毎月二回の例会を開いてゐたが、公開したのは今回が初めてである。その前日から、破天荒の広告をなし、三百枚余りのチラシを配つたので、警察はそれ神戸同志が大挙運動をやるのだと、びつくりしたのか刑事が交る交るやつて来る。余は広告がはぎとられはしないかと心配して、市内を歩いてみると、血を以て染めた、大々的広告は、翻々として躍つて居る。午後六時が開会だと、広告してゐたので、会場の準備を整えて待つて居る、声援を願ふてゐた大阪平民社からは、森近君、武田君、荒畑君を先登として七八名の同志がみへる、遠来の同志、大石禄亭君の面影と其服装を見た時は、露国の革命家ではないかと思つた、会場も整ひ、弁士も揃つたが聴衆が少い、少くとも二百人位は来るであらうと予定して居たが、案外三十人許りもない、広告のきゝめがなかつたのかと、又余と南君はチラシを抱へて楠社の門に立ちながら、路傍演説をやつて、面白い話して、誰れでも聞かねばならぬ演説があるから、すぐ元六倶楽部に行けとすゝめた、一時間ばかりたつて帰つてみても其の効能がない。／いよく七時過ぎ開会した、岡林野花君が、開会の辞として神戸平民倶楽部の歴史を述べられ、荒畑寒村君「現時の奴隷」と題し、沈痛なる弁舌もて資本家制度の害毒を罵倒して、労働者の自覚を促がし、武田九平君は、自己の経験に訴へて「職工組合の必要」を説き、次に森近運平君は恐慌の話と題して、快弁縦横、熱誠の意気を表はして、現今経

済組織の矛盾は、必然産出すべき恐慌の母なり、恐慌の来襲は生産の過多より生ずるにあらずして、消費の不足に起る理由を秩序的に経済学上の解釈を試み、次で大石禄亭君起て、「財産とは何ぞや」と叫んで、財産の性質歴史を述べられ、井上秀天君は、宗教と社会主義の題の下に、自己の立場より社会主義の主張を説明された。中にも一異彩を放ったのは、英国同志の列席である。講演されるはずであつたが時間の都合で、次会に譲った、神戸には隠れたる各国の同志が居るであらふ、他日此の会が、拡張して、支那、印度、露国、米国の同志が集ることになったら、所謂万国的の会合が見らるゝであると思ふ<sup>三三</sup>。

中村の通信にある「英国同志」とは、一九〇七（明治四〇）年十一月二日付で、森近運平が秀天に寄せたはがきのなかにある「グリフス」という人物のことと推測される（後述）。吉田久一によれば、グリフスは、森近が主宰する「大阪平民社」の機関紙『大阪（日本）平民新聞』の愛読者で、秀天とは旧知の間柄だったとしている<sup>三三</sup>。神戸での秀天は、インド・コロンボのサンダレサ新聞の特派通信員をつとめるかたわら、神戸女学院や関西学院などのミッション・スクールで外国人講師や校長の相談役をしており、大逆事件当時は神戸女学院で講師をしていたという<sup>三三</sup>。グリフスもミッション・スクールの外国人講師だったであろう。

また、この講演会では、秀天は「宗教と社会主義」という題で「自己の立場より社会主義の主張を説明」したという。秀天は、陸奥巖のアジア諸国への宗教視察に同行した際、現地の大学で原始仏教を研究していたといわれている<sup>三三</sup>。その原始仏教には、「生きものを（みずから）殺してはならぬ。また（他人をして）殺さしめてはならぬ。また他の人々

が殺害するのを容認してはならぬ。世の中の強剛な、また怯えているすべての生きものに  
対する暴力を蔵めて」<sup>三三五</sup>、「かれらもわたくしと同様であり、わたくしもかれらと同様  
である」<sup>三三六</sup>と思つて、わが身に引きくらべて、生きものを殺してはならぬ。また他人をして  
殺させてはならぬ」<sup>三三六</sup>といった教えがある。秀天も、これらの原始仏教の教義を学んで  
いたと考えられる。そのため、講演では、秀天は自らが学んだ原始仏教の教義と、社会主  
義の理論が一致することを説いたと推測される。

一九〇八（明治四一）年末ごろ、岡林寅松はクロポトキン著・幸徳秋水訳の秘密出版『麵  
麴の略取』を四部申し込んでいるが、これは小松丑治・井上秀天・中村浅吉と相談のうえ  
購入したものである<sup>三三七</sup>。なお、大逆事件の自宅捜索では、秀天のもとからこのとき購入  
したであろう『麵麴の略取』が押収されている<sup>三三八</sup>。

『麵麴の略取』の購入と前後して、一九〇八（明治四一）年秋ごろ、秀天と同じ曹洞宗  
僧侶の内山愚童は『入獄紀念 無政府共産』を秘密出版しているが、神戸の岡林と小松の  
もとにも送られている。『入獄紀念 無政府共産』について、小松は検事聴取書で次のよう  
に供述している。

一昨四十一年赤旗事件後ノ事ト思ヒマスガ發送地東京、發送人不明ノ小包郵便ニテ今  
回押収セラレタル無政府共産ト称スル印刷物ヲ三十部程病院（筆者注・岡林と小松の  
勤務先である神戸海民病院）ニ宛テ（名宛ハ私デアツタカ岡林デアツタカ忘レマシタ）  
送付シ来タリマシタカラ私ト岡林トデ開封シ一読シタル処極メテ乱暴過激ナル事ガ  
来際（記載）シアリマシタカラ私共ハ之ヲ他人ニ配布致シマセンデシタガ、只中村浅  
吉ニハ其後岡林カ私ガ二三部分配シタ様ニ思ヒマス<sup>三三九</sup>

小松と岡林は、『入獄紀念 無政府共産』を中村には配布したとは述べていない。次節で後述するが、秀天は暴力といった過激な主張とは一線を画しており、『入獄紀念 無政府共産』を読んでいたとしても、天皇制の否定に関する主張は受け入れなかったと推測される。

その愚童は、一九〇九（明治四二）年五月二二日に曹洞宗の大本山である福井県永平寺での修行からの帰途、神戸の岡林と小松を訪れている。このとき愚童は岡林とともに秀天の自宅も訪問しているが、秀天は不在で会えなかった。しかし実際は、秀天は居留守を使っていたという<sup>三四〇</sup>。この愚童の訪問により、岡林と小松は、愚童の「皇太子暗殺計画」に賛成したとして、大逆事件に連座し死刑判決を受けることになった。秀天が居留守を使わずに愚童と面会したならば、秀天もまた事件に連座していたものと思われる。

ところで、「神戸平民倶楽部」では、社会主義に関する研究や討議を目的とした例会を定期的に開いていたが<sup>三四一</sup>、「宗教と社会主義」がたびたび論議のテーマとなっている。「宗教と社会主義」が論題にあがっていたことについて、小野寺逸也は、倶楽部員のなかにクリスチャンがいたことや、岡林が仏教に関心を寄せていたことが、たびたび例会テーマになった理由であろうと推測している<sup>三四二</sup>。小松の聴取書によれば、岡林は宗教的見地より社会主義を研究しており、小松もこの点については同様としている<sup>三四三</sup>。そのためであろうか、岡林は釈尊の降誕の日に「神戸平民倶楽部」の例会を開いたことに関連して、「四月八日―一切平等絶対非戦主義の親玉お釈迦様の誕生日―に第八例会を東出町一丁目小松天愚宅にて開く」<sup>三四四</sup>と述べている。この通信を秀天がみていたのかは不明だが、秀天が「神戸平民倶楽部」の会員になったのは、宗教的見地から社会主義を研究していた岡林や小松

と思想的に共感できたためと推測される。

## 第二節 中央の社会主義者との交流

一九〇六（明治三九）年八月二〇日発行の社会主義雑誌『光』第一卷第一九号の「知る人知らざる人」という同志の消息欄に、西川光二郎・大杉栄・幸徳秋水・堺利彦らとともに、秀天の消息が次のように伝えられている。

井上秀三君<sup>ママ</sup> は神戸の地を去り、岡山孤児院に入り、同情の爲め、愛の爲め働くべしといふ<sup>三四五</sup>

一九〇六（明治三九）年八月ごろ、秀天は、「あまし得たる後半生を、同情の爲、愛の爲、将た人道の精華の爲に捧げ、いと静謐なる生涯をうみ出さんと欲す」として、神戸を離れ、クリスチャンで慈善事業家の石井十次が経営する岡山孤児院に入った<sup>三四六</sup>。しかし、わずか四ヶ月後の同年一二月ごろ、「一度は「岡山孤児院」に入りしも、名聞うるはしき孤児院のソコ面、何となく氣に喰はず、あきれ果てゝ神戸に舞戻」<sup>三四七</sup>っている。

ところで、週刊『平民新聞』とその後継雑誌である『直言』が廃刊となつたのち、キリスト教社会主義者と唯物派の社会主義者は、それぞれの機関雑誌として、前者は『新紀元』、後者は『光』を創刊した。『新紀元』の中心人物は、安部磯雄・石川三四郎・木下尚江であり、「吾人の所謂革命は（略）物慾の覇者を倒して至愛なる神の王国を建設せんと欲するに在り」<sup>三四八</sup>を基本的な運動の理念としていた。『新紀元』は主に知識人層を対象にした総合雑誌というべき性格をもっていた。一方の『光』は、山口義三（孤剣）・西川光二郎が中心となり、創刊号の第一面の欄外に「凡人主義の新聞」<sup>三四九</sup>と大きく書いているように、大

衆向けの雑誌を理念としていた。

また、地方の運動に対する姿勢も、『新紀元』と『光』では異なっていた。隅谷三喜男が「『新紀元』には地方的組織ないしグループというものは殆んど存しなかった」<sup>三五〇</sup>と指摘しているように、『新紀元』には地方からの通信はほとんど掲載されていない<sup>三五一</sup>。これに対して、『光』は「社会運動彙報」や「同志の運動」といった欄で、地方の社会主義者からの通信を毎号掲載している。幸徳秋水・堺利彦をはじめ、明治四〇年代に活躍する社会主義者の多くはこの『光』を支持しており、神戸在住の秀天も『光』の姿勢を支持していたと考えられる。

中央の社会主義の機関雑誌である『光』に、秀天の消息が掲載されていることから、秀天と中央の社会主義者との間には、一九〇六（明治三九）年八月までに何らかの形で交流があったと考えられる。どのようにして交流をはじめたのかはわからないが、秀天が社会批判や平和論などの論説を数多く寄稿していた『新仏教』を通じてと思われる。

『新仏教』は、一八九九（明治三二）年一〇月に高島米峰・境野黄洋・田中治六・杉村縦横（楚人冠）らによって結成された「仏教清徒同志会」（明治三六年に「新仏教清徒同志会」に改称）<sup>三五二</sup>の機関雑誌として、翌一九〇〇（明治三三）年七月に創刊された。「新仏教清徒同志会」は、社会主義とは一線を画していたが、社会主義者とは親密な関係にあった。高島や境野は官憲から監視されており、田中・杉村・毛利柴庵（後述）は社会主義に関心をもち、社会主義者と親交があった。また、社会主義者で新仏教徒と交流があったのは、幸徳秋水・堺利彦・森近運平・荒畑寒村・木下尚江・石川三四郎などで<sup>三五三</sup>、とくに堺の書籍の多くは高島が経営する鶏声堂や丙午出版社から刊行され、幸徳の遺稿『基督抹殺論』

も大逆事件後まもなくに高島が出版したものである。

さて、一九〇七（明治四〇）年十一月三日、『麵麴の略取』の翻訳と自身の病氣療養を兼ねて、東京から郷里の高知県中村町（現・四万十市）に帰郷する途次に大阪へ立ち寄った幸徳秋水をむかえ、「大阪平民社」で幸徳秋水歓迎会が開かれることになった。その前日の一月二日付で森近運平は秀天にはがきを寄せている。

御手紙拝見、明日幸徳君歓迎会を開きます故グリフス君を伴れて来て下さい、午後三時に中の島公園図書館前に集まってこれより本社へ帰つて談話会を開きます、会費二十銭、すしの弁当<sup>三五四</sup>

はがきの冒頭に「御手紙拝見」とあるため、幸徳が大阪に来ていたことを知った秀天が、森近に幸徳の歓迎会が開かれるかどうか問い合わせの手紙を出し、それに対して森近が返事としてこのはがきを秀天に送ったのであろう。この幸徳の歓迎会の案内のはがきは、秀天に寄せたものしか見つからないが、小松丑治が「森近ニ於テ幸徳が大阪ヲ通過スルニ付キ歓迎会ヲ開クカラ来ナヒカト云フ葉書ヲ寄越シマシタ」<sup>三五五</sup>と述べているため、小松や岡林寅松ら「神戸平民倶楽部」の会員たちにも同様の案内が送られたと思われる。

幸徳の歓迎会には、大阪からは森近運平・武田九平・荒畑寒村らが出席したのをはじめ、神戸からは小松と秀天が出席しており、秀天が歓迎の辞を述べている。歓迎会の様子は森近がくわしく伝えている。

既報の如く本月三日に開いた。来会者二十余名午後四時宿屋の前で幸徳氏と母堂とに出で頂いて、撮影した。夫人は一寸外出中で漏れたのは遺憾であつた。それから一同本社へ帰り談話会は始められた。先づ予は発起人として一言の挨拶を述べ、神戸の井



上秀天氏外一二名の歓迎の辞や感話がすんで幸徳氏の談話があつた。氏は先づバクニンの「労働と科学と反抗」なる語を援き来つて今の世の野蛮なる状態悲惨なる事實は生産の不足にもあらず、圧制に対する反抗心の不足にありてふ道理を簡単に説き将来の運動に就ての注意等も話された。／それから鮓と貰ひ物のビールを出して晚餐の真似事を始めたのである。同志諸君の感話は又現はれた。先づ平井君は所謂罪惡の子として生れ父に棄てられ母と別れ世の荒波に揉まれて遂に社会主義に来れる経歴を語られた。「門閥と富と足らぬことなき人の子にて父の膝下に在り乍ら曾て親の愛と云ふべきものを知らず」の一語今日の貴族紳士の家庭を形容し得て痛快ではないか。次に松尾君は同じく幼少より今日に至るまでの実歴談を試みられた。君も門閥の家に生れ父は早く死し或事情から他家に養はれたのであると云ふ、十三四の頃より「産んだ親と育てた親と何れの恩が重いか」てふ疑問の解決に苦しんだ事、其後黄金の前に膝を屈せずして自信を遂行せんとし非常の貧苦に陥つて其間に最愛の妻君が労働過度と生活難との為に死なれた事などを語られた。「富者が犬の一食に費す金あらば予が最愛の妻は死せざりしものを！」満座面を上げ得る者は一人もない。何と暴悪なる社会では無いか。悲憤に堪へずして荒畑君は立つた「身を挺んで家を忘れて社会の為に尽す人道の戦士を病ましめしものは誰ぞや、親の愛、犬の一食、妻の死、之等の悲惨事を作る者は誰ぞや、諸君は斯かる社会に何時迄耐へ得るか」歔歔の声は座に満ちた。幸徳氏は「吾等の困難は欧米先進者の苦痛に比しては頗る軽きものなり、吾等は困難の内に希望あれども幾億の同胞は一点の希望なき暗黒界裡に消へ行きつゝあり、吾等は之等同胞の為に泣かん」と語られた。来会の同志諸君が曾て見たる事なき悲愴慷慨な

る会合は夜十時を以て散会した 三五六

小松は、大逆事件時の第二回予審調書でも、歓迎会の様子について述べており、そこには秀天らしき人物の名前が出ている。

何ント云フヒトデスカ存ジマセヌガ華族ノ落胤トカ云ツテ身ノ上咄ヲシタヒトガアリマシタ又井上デシタカ誰デシタカ幸徳ノ境遇ハ甚ダ悲惨ノモノデアルト云フ様ナ咄ヲ致シ、荒畑寒村ハ何ンデモ大変ニ央バ泣テ咄ヲ致シマシタガ要点ハ忘レテ仕舞ヒマシタ、幸徳ハ社会ノ進歩ハ科学、労働者ノ生産力、「レボルト」ノ三ツノモノニ拠テ往クモノデアルガ我国ニ於テハ終ノ一ツナル「レボルト」ガ発達シナイカラ社会ガ進歩シナヒ故ニ之レヲ遣ル様ニシナケレバナラヌト云フ主意ヲ陳ベマシタ 三五七

秀天の「幸徳ノ境遇ハ甚ダ悲惨ノモノデアルト云フ様ナ咄」とは、歓迎会の冒頭で述べた幸徳への歓迎の辞と思われる。しかし、「井上デシタカ誰デシタカ」と小松の記憶が明確でないうえ、幸徳の歓迎会における秀天の発言の内容に関する史料が見当たらないため、秀天が歓迎会の席上で「幸徳ノ境遇ハ甚ダ悲惨ノモノデアル」というような辞を述べたのかはあきらかではない。

歓迎会后、秀天は中村にいる幸徳に見舞いの手紙を出しており、これに対する幸徳の返信のはがきが大逆事件の家宅搜索の際に押収されている。

小生よりこそ御無沙汰申訳無之候／歴史は真に繰返すものにや、古来幾多の革命若くば亡国前の状勢は歴々として今日の社会に現出し来ると覚え候、改革者の大に準備を要する時と存し候、小生病状依然碌々として安臥不堪慚愧候、神戸市同市諸君に宜敷御鶴声奉祈候／森近君中々苦戦の体、御心添願上候、頓首 三五八

一九一〇（明治四三）年四月二日に秀天が執筆した「予の予、予の彼（下）」には、「堺利彦、幸徳秋水、この二先生も予の敬愛する思想家である、が悲しいかな、日本の様な旧式な、自分よがりの、窮屈な所謂皇統連綿万世一系の世界無比な国に生れたが因果で、当局者に罪人視されて居て、誠に気の毒な次第である」<sup>三五九</sup>とあり、いずれも秀天が幸徳を敬慕していたことがうかがえる。

「神戸平民倶楽部」に入会し、神戸のみならず中央の社会主義者とも交流していた秀天であつたが、社会主義者からは、秀天は社会主義者とみられていたようである。幸徳は大逆事件での取り調べの際、予審判事から「井上秀夫ハ社会主義者力」と問われ、「左様テアロウト思ヒマスカ、明治四十年十一月帰郷ノ途次、大阪ニテ一寸会ツタ丈ケニテ能クハ存シマセヌ」と答えている<sup>三六〇</sup>。

確かに秀天は「帝王、国家に対する日本人の思想中には、ある欧米人の申す如く、たしかに賞賛すべからざる――寧ろ排除すべき非文明非人道の分子が混入しておると思ふ」<sup>三六一</sup>と社会批判に関する論説を『新仏教』で発表している。しかし、一九一一（明治四四）年一〇月九日の日記には、次のことを記している。

予輩の如き無抵抗主義の人物――「悪に敵すること勿れ、人なんぢの右の頬をうたば、亦左の頬をも之に打たせよ。：汝の敵を愛し、汝を迫害する者のために祈禱せよ：」  
「悪罵の毒を歓喜忍受して、甘露を飲むが如くせよ」と云ふ教に絶対に服従し、その教を信奉しておる予輩を、危険人物視するとは、実に愚の骨頂と云はねばなるまい。  
併し戦争万能主義の信者から見れば、予輩の如き平和主義の人物は、却て彼等の眼には危険人物に見えるのかも知れぬ<sup>三六二</sup>

大逆事件後、秀天は東洋思想や仏教に関する著書を多数刊行しているが、そのうちのひとつである『仏教の現代的批判』（宝文館 一九二五年）でも、「舶来の過激思想」である「新式の危険思想」を批判している<sup>三六三</sup>。秀天がいう「新式の危険思想」とは、テロリズムに訴える手段をとる無政府主義と思われる<sup>三六四</sup>。秀天は、ときには鋭い言葉を用いて、社会批判や平和論を唱えていたが、自らを「無抵抗主義の人物」と称しているように、暴力は正当化していなかった。社会主義者と交流を結んでいた秀天であったが、暴力といった過激な主義や主張とは一線を画していたのである。

### 第三節 井上秀天と大逆事件

秀天は一九一〇（明治四三）年八月九日に「不問答」という論説を執筆している。その内容は、小山内薫の短編小説集『笛』が風俗壊乱で発禁処分になったことに關係して、「実際に於て言論の自由、思想の自由、出版の自由は日本にはないと申しても差支あるまいと予輩は思ふ。併し貴族乱行の自由、高等官吏淫行の自由はたしかに日本にはある」といい、「一宴会の氷代に千幾百円の大金を費し、以て之を光榮とし、学校の校舎で芸妓にとりまかれて大酒宴を張り、以て之を名譽とする貴族大臣の存在する限り、国民に強いて戊申詔書の聖旨を体得実行せしむる事は、絶対に不可能である」としている<sup>三六五</sup>。また、学校火災の際に御真影を取り出すために火中に飛び込んで焼死した学校職員の事件を取り上げて、それが「真正なる愛国者の標本」でなければ、「却て大御心を悩まし奉る事になる」と指摘している<sup>三六六</sup>。さらに秀天はこの論説のなかで次のことを記している。

予輩は昨夏から今夏にかけて、三人の探偵君に五六度訪問せられた。この至つておと

なしい、悪気のない、完全に近い予輩を内務省では社会主義者の連類者爆裂弾組の一  
人と見做しておるとの事。馬鹿々々しくて仕方がないが、こゝ真正なる忠君愛国者の  
本旨に依り、肝癰<sup>マア</sup>玉の破裂は、まづぬきにして、頗る紳士的態度を以て探偵君に会見  
した。探偵君も亦至つて紳士的態度を以て、頗る探偵君らしからぬ、叮嚀此上なき言  
葉を以て予輩に接した。他日閑の時に「内務省廻はしの探偵君の訪問を受ける記」をか  
いて見る積りであるから、探偵君の事に就てはマアこんな事でやめておく三六七

一九〇八（明治四一）年ごろから、政府は社会主義者の動向に目を光らせ、出版物の発  
禁や本人の逮捕などで運動を抑圧していった。一九〇八（明治四一）年八月から翌一九〇  
九（明治四二）年七月までの社会主義者視察経過報告書である「社会主義者沿革」第二に  
よれば、全国の社会主義者四六〇名のうち、兵庫県下の社会主義者は一八名とされている。  
その一八名のうち、「要注意人物」として四名の名前がリストアップされ、その筆頭に岡林  
寅松と小松丑治の名前があげられている三六八。秀天は、『新仏教』に社会批判や平和論に関  
する論説を寄稿していたうえ、兵庫県下の社会主義者のなかでも「要注意人物」として監  
視されていた岡林や小松をはじめ、幸徳秋水や森近運平ら中央でも活動していた社会主義  
者と交流をもっていた。それだけではなく、前節でふれた大阪での幸徳の歓迎会の際、参  
加者たちの記念撮影が行われたが、一九〇八（明治四一）年七月現在の社会主義者視察経  
過報告書である「社会主義者沿革」第一には、その写真に写っている人物の配置が掲載さ  
れている。その人物のなかには、幸徳や森近らとともに、秀天の名前も載っている三六九。  
そのため、一九〇八（明治四一）年夏ごろには、秀天は兵庫県下の社会主義者もしくはそ  
の関係者として、官憲からの監視対象になっていたと推測される。

さて、大逆事件の弾圧は一九一〇（明治四三）年五月末からはじまった。神戸での事件の捜査は、八月三〇日明け方から行われ、この日秀天は神戸地方裁判所判事・矢部克己らによる自宅捜索を受け、幸徳秋水・森近運平・武田生（武田九平と思われる）などからはがきをはじめ、河上肇『社会主義評論』、山口義三（孤剣）『社会主義と婦人』、クロボトキン著・幸徳秋水訳『麵麴の略取』、『東京社会新聞』、『日本平民新聞』、一九〇七（明治四〇）年から一九〇九（明治四二）年までの日記三冊が押収された三七〇。九月二日、秀天は重要参考人として神戸地方裁判所検事局で取り調べを受けた。このときの神戸地裁の警戒は嚴重をきわめ、「本件干与の検事及び裁判書記の外は他の判検事と雖も三階を徘徊せしめず普通人民は二階弁護士詰所と地下室の外は立入らしめず検事正は内藤検事と共に大法院の隣室なる破産決定室会計分室、検事調所等に引致者を一人一人収容し看守、巡查、廷丁等に看守せしめて叮嚀反覆に訊問中なる」三七一というありさまであったという。九月二八日に岡林と小松が起訴され、二人の身柄は東京に移されたが、秀天も一〇月一日に東京地裁検事局に呼び出され、参考人として取り調べを受けた三七二。一九一一（明治四四）年一月一八日、大逆事件の判決が出され、岡林と小松は死刑判決を受けたが、翌一九日に無期懲役に減刑され、長崎県諫早監獄に送られた。秀天は、事件では結局不起訴となったが、大正年間には「要視察人」として官憲の監視下に置かれることになった。

大逆事件後の秀天は、「要視察人」となっていたこともあってか、社会主義者と交流をもったことは確認されていない三七三。しかし、事件後も社会主義者に好感をもっていたようで、『新仏教』に投稿した論説には大逆事件や社会主義に言及したものもある。

一九一一（明治四四）年四月の秀天の「雑記帳」によれば、大逆事件後まもなくにもか

かわらず、高島米峰が大胆にも幸徳秋水の遺稿『基督抹殺論』を出版した勇氣に快意をしめしている<sup>三七四</sup>。同年三月、堺利彦はイギリスの作家ジェローム・K・ジェロームのユーモア随筆集『Idle Thoughts of an Idle Fellow』を、貝塚洪六の名前で翻訳し『ノンキ者のノンキ話』という題で刊行しているが、秀天はその訳書を次のように評している。

堺枯川氏の『ノンキ者のノンキ話』は原著者の筆に劣らぬ面白味のある軽妙な訳筆であるが、予は訳筆そのものより、寧ろその植字の上に存する苦心のあとに感服する。一例をあげると、促音の「っ」を本文のタイプより一層小さくして、「あつた」を「あつた」してあるなどは、確に枯川氏のおてがらであると思ふ。僅一四六頁の小冊子ではあるが、その植字上に払はれた枯川氏の周到なる注意は実に莫大なるものである。

（四月十六日）<sup>三七五</sup>

その堺は、一九一二（明治四五）年六月二八日、高島米峰とともに、ルソーの生誕二〇〇年を記念する晩餐会を東京神田淡路町の料亭・多賀羅亭で開き、その後場所を移して講演会が神田美土代町のキリスト教青年会館で開催された。晩餐会の参加者は、主催者の堺・高島をはじめ、荒畑寒村・大杉栄・三宅雪嶺・高島素之ら約四〇名であり、講演では堺・高島・三宅らがルソーの思想などについて論じた。この講演会の会場は一〇〇名を超える警官隊に取り囲まれていたという<sup>三七六</sup>。一九一二（大正元）年八月の「小噴火口」では、このルソー二〇〇年記念を開催した堺と高島の大膽不敵さを「予は実に敬服の至りである」とたたえ、「世の凡人は徒らに危険思想だとか、無〇〇主義（筆者注・無政府主義）とかを恐怖するが」、貧困や戦争を生み出す「危険政治や無人道政治の方が、ヨツポド戦慄すべきものではあるまいか」と述べている<sup>三七七</sup>。

また、一九一一（明治四四）年九月、平塚らいてうらによって「青鞥社」が結成された。それに関連して、一九一三（大正二）年五月には、「日本にかつて、〇〇〇〇者（筆者注・社会主義者）が出た時に、余はこれを不祥事と思はす、却て日本の思想界が進歩の階梯に一步を高めたのである」という云ふ事実を立証するものであると信じた」が、「青鞥社」の誕生は「久しく旧慣に捕はれて奴隷根性の上に安心立身して居る日本の女性が、やゝ覚醒しかけた兆」であり、彼女たちの主張と行動は「多少批難すべき余地があるにしても、兎に角、「新しい女」は中々面白い種類の女、話相手にする価値ある女」であると書いている三七八。「青鞥社」は機関雑誌として『青鞥』を発行していたが、その編集にはのちに大杉栄の内妻となる伊藤野枝が参加しており、大杉や荒畑寒村も「青鞥社」の運動に関心を寄せていた。伊藤・大杉・荒畑ら社会主義者や無政府主義者が「青鞥社」の運動に関わっていることから、秀天もその運動に関心を寄せるようになったのであろう。

さらに、大逆事件弁護人で、詩歌雑誌『明星』同人の歌人・作家でもあった平出修は、総合雑誌『太陽』一九一三（大正二）年九月号に、大逆事件の裁判を描いた小説「逆徒」三七九を発表した。秀天は、この「逆徒」を一読しており、「斯様な実話に近い小説は後世の歴史家を益すること多大：後世の歴史家が〇〇〇〇（筆者注・大逆事件）の真相を剔抉する上に多大の光明を与へるものである」と推奨している三八〇。しかし、「逆徒」が掲載された『太陽』は、一九一三（大正二）年九月一日に出されるが、その日の未明に新聞や雑誌を規制する新聞紙法によって発禁処分となった。秀天は政府当局による言論弾圧への批判の意味合いを込めて「逆徒」を推奨したのであろう。ただ秀天と同じく発禁となった『太陽』を手にした読者も少なからずいたようで、平出と親交のあった作家の相馬御風は、一



九一三（大正二）年九月四日付で、「僕の知った者の間でも随分もう買つて居た人が多い様子です。あなたの御骨折は決して無駄にはならなかつた事と思ひます。（略）僕も運よく買ふ事が出来まして、昨夜ゆつくり拝見しました」三ハ一と平出に手紙を寄せている。

大逆事件後、日本の社会主義運動は「冬の時代」をむかえた。「冬の時代」における社会主義に関する言論活動は、堺利彦の『へちまの花』や『新社会』、大杉栄・荒畑寒村らの『近代思想』や月刊『平民新聞』があげられる。しかし、秀天のように、大逆事件では重要参考人として取り調べを受けたにもかかわらず、「冬の時代」においても大逆事件や社会主義に関する論説を地方から寄稿していたことは特筆すべきである。

## 第五章 『牟婁新報』と毛利柴庵の思想

### 第一節 『牟婁新報』の創刊と「新仏教徒同志会」との関係

毛利柴庵（清雅）は、一八七一（明治四）年九月二十八日に和歌山県新宮で生まれたが、本人は一八七二（明治五）年九月二八日生まれと言っていたという<sup>三八二</sup>。幼くして両親を亡くし、一八八一（明治一四）年に新宮の遍照院に、一八八三（明治一六）年に和歌山県田辺の真言宗御室派古刹である高山寺にあずけられ、翌年高山寺で得度した。一八八五（明治一八）年に高野山中学林に入学し、一八八九（明治二二）年に中学林を卒業したのは、東京に遊学し『東京日日新聞』の記者として二年余り過ごすが、一八九一（明治二四）年に帰郷し、高野山大学林に入学する。一八九五（明治二八）年に大学林を首席で卒業すると、二四歳という若さで高山寺の住職を拝命した。

一九〇〇（明治三三）年四月、岡本庄太郎・近藤新十郎・小切間権右衛門らとともに田辺で『牟婁新報』<sup>三八三</sup>を創刊し、柴庵は自らその主幹兼主筆となり、のちに社長兼主筆となった。同年四月二二日付の第一号の第一面に掲載された「牟婁新報発刊の辞」で、「第一記者」は「吾輩は唯だ此地方の進運を扶助し、あらゆる方面に於て無二の親友たらんとする外、何等の目的も有せず」<sup>三八四</sup>と述べており、『牟婁新報』創刊の最大の目的は牟婁地方の「進運を扶助」することにあつたことがうかがえる。次いで「第一記者」は、「只だ吾輩は一小地方に於ける所の一小新聞記者として其当に尽す可き適応の任務を遂行し得ば足る敢て其れ以上を望む者にあらず」<sup>三八五</sup>として、政治・経済・教育・宗教・社会の各分野において、当面解決すべき問題を次のようにあげている。

人或は、吾輩の立つ所の極めて卑しく其抱負の頗る小なるを憫笑する者あらんも、ソ

ハ必ずしも吾輩の甚だ恥辱とする所にあらず、寧ろ之れすら吾輩に取りては、多大の任務の一なりと信ずるが故に、尚ほ或は却りて、毎事、予期に違ふものゝみならんとを憂ふる也、試みに之を我「政界」に見て、如何にして地方党争の弊を除却し得可きか、之を我「商界」に見て、如何にして積年の陋習を洗滌し得可きか、之を我「教育」に見て、如何にして此元気を發揚し得可きか、之を我「宗教」に見て、如何にして其真意義を發展し得可きか、之を我「社会」に見て如何にして斯くの如きの墮落を匡救し得可きか 三八六

そして、「之等の事、之を大にすれば則ち、元より国家全体の上に関する所のもの、今則ち之を小にして一地方の上に於てせんとす、其事何ぞ卑小なりと云はんや」<sup>三八七</sup>と主張しており、牟婁地方という地域を基盤として、またそれに目線を置いて各分野の問題に取り組もうとしたのである。これらの問題のひとつに宗教をあげているため、この文章の筆者「第一記者」は、『牟婁新報』主筆をつとめる柴庵であろう。また、「第一記者」がこれらの問題に取り組むにあたって、「吾輩は超乎として一切の政党を離れ、進んで正を扶け、奮て邪を懲し、依て以て其目的に背反するなからん事を確信す」<sup>三八八</sup>と書いていることは特筆すべき点である。

一九〇一（明治三四）年秋、柴庵は東京法学院に入学するため、再び上京した。この東京遊学中の一九〇二（明治三五）年に柴庵は、「新仏教徒同志会」の会員になり<sup>三八九</sup>、さらに評議員となつて、同志会の運動に加わつた。一九〇三（明治三六）年三月二二日、宗教に対する国家の保護ならびに干渉の排斥や信教の自由を主張する同志会は、学問の自由の問題についても関心を寄せ、哲学館倫理学講師・中島徳蔵の「動機が善ならば弑逆も許さ

れるであろうか」という卒業試験での出題を問題視した文部省の弾圧である哲学館事件に  
関して神田錦町錦輝館で倫理問題大演説会を開いた。柴庵も、この演説会に参加し、「哲学  
館事件に就いて」という演題で、「自ら忠孝の親玉なりと称して、文部大臣と忠孝の解釈を  
異にす」と言い、「学理上文部大臣の処置の甚不当なるを非難」している<sup>三九〇</sup>。

柴庵が社会主義に関心を寄せるきっかけになったのは足尾銅山鉍毒問題である。一九〇  
一（明治三四）年十二月一日、田中正造が鉍毒問題について明治天皇へ直訴を行う  
と、柴庵も「此事ありし以来、予も亦世人と共に所謂鉍毒問題なるものに注意す」<sup>三九一</sup>る  
ようになり、田中についても、のちに「田中翁の熱烈なる言動は、僕の夙に敬伏する所何  
んとして須臾も此翁を忘る可き。僕の筆、僕の舌、旧によつて粗笨を極むと雖も、尚ほ時  
に応じ、機に触れ此偉人を語らざるなし」<sup>三九二</sup>と敬意を表している。同年十二月二七日、  
一〇〇〇余名の学生による鉍毒地視察が行われたが、柴庵も参加している<sup>三九三</sup>。その後、  
柴庵は『新仏教』に「予の見たる火事と鉍毒」（『新仏教』第三卷第二号 明治三五年二月一  
日）を寄稿している。そのなかで、柴庵は銅山の鉍毒地やその住民の実態を述べ<sup>三九四</sup>、「此  
広き東京に於て此多くの大学者大宗教家の中に、誰か彼の古河氏を其本性の善に導き、其  
死守する所の財庫を其賑窮の為に打ち開かしむる者のありさうなものと思はずんばあ  
らず」<sup>三九五</sup>と銅山経営者の古河市兵衛を批判している。

一九〇二（明治三五）年四月、鉍毒地救済活動を行っている学生たちによって「青年修  
養会」が結成され、同年六月一日に小石川白山御殿町龍雲院で第一回茶話会が開かれたが、  
その茶話会に柴庵も出席し「仏教より観たる社会主義」について演説している<sup>三九六</sup>。同年  
十一月二三日、牛込西五軒町月花園で「青年修養会」主催による社会主義演説会が開かれ

ており、柴庵も片山潜・西川光二郎とともに演説している<sup>三九七</sup>。同年一月二七日、鉦毒地大挙視察から一年を記念して、神田錦町錦輝館で学生鉦毒地大挙視察記念大演説会が「青年修養会」主催で開かれることになり、それに先立って柴庵は「青年修養会」を代表して大亦墨水とともに鉦毒地を再訪した。大会では、幸徳秋水・木下尚江らとともに、柴庵も弁士に加わり視察報告を行っている<sup>三九八</sup>。この足尾銅山鉦毒問題を通して、柴庵は幸徳や木下ら中央の社会主義者と交流をもつようになり、やがて社会主義に関心を寄せるようになっていったのである。

一九〇三（明治三六）年四月、柴庵は田辺に帰郷すると、「マークス」という名前で『牟婁新報』に社会主義に関する論説を次々と発表した。「社会主義を鼓吹すべし」（『牟婁新報』第二三九号 明治三六年五月六日）で柴庵は社会主義を次のように述べている。

世の社会主義を恐るゝ者よ、汝等は真に社会主義の何者たるかを知れるや、社会主義は貧富問題を解決して真に平等なる真に平和なる真に光明ある新らしき社会を建設せんがために、時代の要求に応じて発生したる所の健全なる主義なり、食なきに苦む者よ、金なきに苦む者よ、家なきに苦む者よ、職なきに苦む者よ、汝等は何んがために斯くも苦まざる可らざるか、汝等が日夜営々として衣食の為に苦みつゝあるの側らには、肥馬に鞭つて揚々たるの公子あり、玉楼に杯を含んで得々たるの紳士あり、彼の公子彼の紳士、知らず彼等何んの功蹟を有してシカク悠々たるや、吾等何んの罪業を有してシカク悶々たるや、ア、自由競争の社会は真に是れ災ひなる哉、咄、咄、自由とや、是れ何んの自由ぞ、赤子の手を捻ぢて是れ何んの自由ぞ、貧民の頭を叩いて是れ何んの自由ぞ、自由競争の社会は断として予等の敵なる事を宣言す<sup>三九九</sup>

柴庵は、社会主義を啓蒙宣伝し、自由競争の資本主義社会と闘うことを宣言し、「ア、当代に不平ある者よ現社会に不満ある者よ、身心の慰安を得んとする者は皆な来つて社会主義を研究せよ、予は日本のカール・マークスと為つて此社会と奮闘せんとするものなり」四〇〇と公言した。「所謂金持を排斥すべし」(『牟婁新報』第二四一号 明治三六年五月一二日)でも、柴庵はキリストや釈尊の名前をあげて社会主義を次のように主張している。

夫れ社会は、人類の共同生活を営む場所にして、人類は平等の権利と平等の義務を担ひて、平等の幸福と平等の生活関係にある可き筈の者なり、然るに少数者なる金持ちなる者のために、社会の大多数は常に之れに随使せられ窘屈せられ圧迫せられ侮蔑せられ、殆ど犬馬に似たるの勞を取りつゝあるは、確かに人類生活の真意義に背馳したる者なり、斯くの如きの傾向はキリストにあらざる者と雖も何んぞ此不平等を黙認するを得ん、釈迦にあらざる者と雖も何んぞ惡左別<sup>ママ</sup>を看通するを得ん、社会主義は斯かる惡社会の惡組織を根本的に改造して、貧富不平等の時弊を剷絶せんがために世界の仁人と学者とが最も誠実に研究しつゝ進み行く所の最も合理的なる最も平和的な穩健の新主義なり、彼の虚無黨彼の無政府黨の如き者と混同せんは甚だ曲解なり。(略)吾等は人類の正義の為に、人類の当然の務めの為に、専横暴戾なる金持ちなる者と不完全なる社会組織とを排斥し、依て以て生財の機関を悉く国有とし其産出を平分するの道を開き真に光明ある国家を建設せん事に努力せざる可らざるなり 四〇一

これらの「マークス」の名前で書かれた柴庵の論説からうかがえるように、帰郷後の柴庵の社会主義的論説の発表によつて、『牟婁新報』は牟婁地方という地域を基盤とした地方新聞というよりも、社会主義の機関紙的な様相を呈しはじめてくるのである。柴庵の社会

主義的論説に對して、読者からも「社会主義を鼓吹すべしと云ふ、予輩は大賛成なり、尚進むで演説会を開き鼓吹せられん事を望む、唯思ふ、偏狭なる〇〇、是れを許すや否」<sup>四〇二</sup>、「近時先生健快の筆を揮て、盛んに社会主義を唱道し筆路漸く適意快興の域に入らんとす、僕積年の瘤飲為めに消散し、肉動き神躍り生氣澆冽黙して閑臥するに堪へざるものあり、思ふに先生赤誠の存する所必らず独り現社会を破壊するに止まらず進んで光明燦爛たる理想的新社会を建設するの意なるべし」<sup>四〇三</sup>といった反応が寄せられている<sup>四〇四</sup>。

「所謂金持を排斥すべし」ではキリストや釈尊の名前をあげて社会主義を説いた柴庵だが、彼にとって宗教（仏教）と社会主義はどのようにして結合されたのであろうか。同じく「マークス」の署名で書かれた「八面鋒学人に答へざる書」（『牟婁新報』第二四六号 明治三六年五月二七日）で、柴庵は自らを「社会主義者」と称したうえで、「社会主義は貧富の懸隔を放任する所の現社会を以て人類生々の原理に戻るものとして学理的に之れ解釈を試むるもの」であり、「人類は宜しく貧者弱者の生出すべき根源を討究し、以て其衣食の爲めに其境遇の爲めに其私慾の爲めに、已むなき罪惡を造り已むなき事情に陥り已むなき害毒を醸すが如き事なかる可き社会を見出さざる可らず」と述べている<sup>四〇五</sup>。つまり、人間は生まれ育った環境によって弱者や貧者を生み出し、さまざまな罪惡を犯すようになるので、そのような環境を作りださない社会を建設しなければならぬと主張した。そして、柴庵が当時の仏教者のあり方に不満をもち、社会主義に関心を寄せるようになったのは、次の一文からうかがえよう。

之等の問題をば單に道德の發達にのみ待たんとしたるは古の宗教家なりき古の道学者なりき、而うして彼等の説く所の道德なるものは多く消極的にして且つ其教ふる所は

孤立せる理想にして一般人類が日用の事物に接触したるとき反対の結果を見る事常なるものなりき、社会主義は経済問題の解釈を中心としたるが故に古来聖賢の教訓上の欠点は殆ど之を補ひ得て尚ほ余りあるものなり四〇六

柴庵は「基督教の拡張を望む」(『牟婁新報』第二五三号・第二五六号 明治三十六年六月一八日・二七日)という論説を二回にわたって『牟婁新報』に掲載しており、そこからも彼の宗教観がうかがえる。

天下は今ま宗教なきに悶へつゝあり。此処に所謂宗教と云ふは、寺院を云ふにあらず教会を云ふにあらず坊主を云ふにあらず牧師を云ふにあらず、時代思想が要求する所のサムシング是れなり、予は是を宗教と云ふ。／今の寺院今の教会今の坊主今の牧師等は、時代思想と何等交渉あるものにあらず、彼れ等が貯ふる所の智識は、既に時代思想に振り捨られたる者にして、従つて彼等が説く所の説教なる者に耳を傾くる者は、同じく時代思想に振り捨られたる愚夫愚婦にあらずんば、未だ常識の充分ならざる癩な頑童の輩なるのみ四〇七

さらに「今の「寺院仏教」、今の「教会耶蘇」なる者は、到底一世を指導するに堪ふべき宗教にあらず」と批判し、「基督教界に於ては内村鑑三氏の如き熱誠家あり海老名弾正松村介石氏の如き勤勉家ありて、常に基督教界の為に最も真面目に新信仰を鼓吹しつゝあり」と賛辞を送っている四〇八。一方、仏教については、「仏教界に於ては「新仏教同志会」の諸氏のみあつて最も盛んに最も大胆に其信仰を告白しつゝありと雖も、各宗派の寺院僧侶は内乱にても企つる者なるが如くに彼等の行動を排斥しつゝあり」四〇九と新仏教運動を称賛している。柴庵は、「今日の社会は如何に腐敗し如何に狡智に長けたければとて、既に一道



清新の気は吾が青少年の間だに漏口しつゝあり、(略)吾輩は此時に當つて、仏教を助けて其改革に急ぐ可きか、基督教を扶けて其革命に急ぐ可きか」<sup>四一〇</sup>と問題提起し、「予が希ふ所は、人の能く之に依て救治せられ、人の能く之れに依て満足するか否かやにあり、其仏教たると否とは、予の必ずしも問ふ所にあらず」<sup>四一一</sup>と述べている。仏教者である柴庵が「仏教の根本義を宣明して、在来諸宗派の陋口妄断を排し、最も明白なる見地に立ちて最も健全なる信仰を鼓吹しつゝあり」と新仏教運動に共感するのは当然だが、「基督教現今の腐敗に悲み、此等の「教会」にも隷属せず、最も熱心に、真の基督教を宣伝せんが為め、あらゆる迫害と、あらゆる窮困に堪へて、二十年來、其筆と其舌とを勞しつゝあり」とクリスチャンの内村鑑三にも理解をしめしている<sup>四一二</sup>。

また、柴庵は、「熱殺録」(『牟婁新報』第一四二号 明治三五年七月九日)でも「今日以後の宗教家は隱遁主義貴族主義では到底ダメだ、現世主義常識主義でなければならぬ、読経や埋葬を以て本職と心得て居るやうな坊主がゴロ／＼して居たからとて、決して仏法繁昌と申すわけには参らぬ」<sup>四一三</sup>と書いている。これとほぼ同時期に柴庵は『新仏教』に「今日の仏教徒はひたすらに富者強者に阿諛して、絶えて貧民問題労働問題に手を仮す者なし、(略)此社会の不公平不秩序を如何にして救済す可きか、之れ仏教徒の最も熱心に研究す可き問題なるに、彼れ等一向に心を勞するなし」<sup>四一四</sup>と述べている。柴庵のいう「現世主義常識主義」とは「貧民問題労働問題に手を仮す」ことと思われる。仏教者による貧民問題・労働問題Ⅱ現世主義・常識主義への取り組みを考えていた柴庵にとって、新仏教運動や社会主義に関心を寄せるようになったのは、これが大きな誘因といえよう。

## 第二節 毛利柴庵の日露戦争観

一九〇四（明治三七）年二月に日露戦争が開戦すると、幸徳秋水や堺利彦ら中央の社会主義者は、非戦論を主張したが、これに対して柴庵は『牟婁新報』の紙面で開戦論を主張した。一九〇四（明治三七）年二月八日、日露両国が事実上開戦すると、『牟婁新報』では同年二月一二日付の第一面に、「謹奉紀元節 天皇陛下万歳 陸海軍万歳」<sup>四一五</sup>と大体的に掲げており、同じく第一面に掲載された柴庵筆の「戦捷の第一報」で、柴庵は戦勝に対して狂喜しているとともに、日清戦後の遼東半島の還付を「我國民が積年の鬱屈なり」と述べ、ロシアへの宣戦布告を歓迎している<sup>四一六</sup>。

日露戦争が開戦してから一ヶ月後の三月三日付の『牟婁新報』第三三五号の「社告」では、軍資献納・恤兵寄贈とともに、「出征軍人の多くは、一家の杖です柱らです、其れが御国のために従軍するのですものあとに残こされた家族の中には随分口糊<sup>マヤ</sup>にすら困まるものも少くないさうであります、之等を扶助するのは決して「軍資献納」や「恤兵寄贈」に比して勝るとも劣らぬのです」<sup>四一七</sup>と出征軍人の家族扶助を呼びかけている。『牟婁新報』では、「出征軍人家族慰問会を組織すべし」（『牟婁新報』第三三八号〜第三四一号 明治三七年三月一二日〜三月二七日）を全四回にわたって第一面に連載し、「速に我各町村に此慰問会を設置致しまして出征軍人をして成る可く後顧の憂ひの無い様に致したい」<sup>四一八</sup>と提唱している。柴庵も、五月九日付の『牟婁新報』第一五五号に「出征軍人家族救護法」を掲載し、地方自治体・義勇奉公会・仏教寺院が速やかに授産場を設けて、地方自治体による軍人家族救護を行うよう主張した<sup>四一九</sup>。また、柴庵は軍人家族の自活を目的とした「軍人家族自助団」を組織し、自らその団長となっている。

『牟婁新報』に開戦論に関する論説を掲載する一方で、柴庵は戦争遂行のための演説会を積極的に開催している。一九〇四（明治三七）年二月一六日、『牟婁新報』主催で日露戦争仏教大演説会を正徳寺で開催しており、神谷墨凱・山本義夫・山敷宗一とともに、柴庵も「戦争と仏教」と題して、「日進春日両艦の安着を祝し次で宣戦の詔勅を拝読して少しく日露戦争の意義を述べた」という<sup>四二〇</sup>。三月六日にも『牟婁新報』は征露戦争仏教演説会を柴庵の自坊高山寺で開催しており、柴庵も毛利心澄・加藤紫海とともに、「戦争と女子」という題で約一時間にわたって演説している<sup>四二一</sup>。

同年八月一日には、『牟婁新報』記者の小田頼造・豊田孤寒らによって「理想青年会」が結成されたが、九月一八日に本町・多屋哲次郎宅で開かれた演説会に、豊田孤寒・森松次郎・山敷宗一・細野南岳・石崎藤吉らとともに、柴庵も「日露戦争と社会主義」という題で演説している。その演説で柴庵は

社会主義の字義より其の自由平等博愛なる理想は絶対真理として、古今賢聖の教説と符合して毫も矛盾せるものに非ずとなし、それより社会主義の主張を詳述する所あり、ラサール（筆者注・ドイツの社会主義者フェルディナント・ラサール）の例を引証して社会主義は要するに国家の上に実現さるべきものなることより、日露戦争論に移りて国家と国家と衝突より起る正義の戦争に対して勢ひ戦ふの至当なること

を「火が出るが如き熱烈なる快弁を揮」って論じており<sup>四二二</sup>、彼が日露戦争を義戦ととらえていたことがうかがえる。「新仏教徒同志会」の高島米峰は、『牟婁新報』に「日露戦争と国民の覚悟」（『牟婁新報』第三三五号）第三三七号 明治三十七年三月三日（三月九日）という論説を三回にわたって連載しており、そこで高島は、日露戦争は「より大なる平和」

のためにやむを得ず起こった義戦であると述べている<sup>四二三</sup>。また、真宗大谷派僧侶の大須賀秀道も、日露戦争に際して、「平和の為に戦ふは、野蛮ではない、平和の敵、人類の讐は之を膺ち懲さねばならぬ。(略)殺生罪を禁じたる仏陀も、一殺多生とて、多数の生命のため、一人を殺すを許された、是は罪惡でない、却つて慈悲である。平和の為の戦争も、全く其意味である」<sup>四二四</sup>と述べている。柴庵も日露戦争を平和のために起こった義戦ととらえていたと思われる。

ところで、日露戦争の戦況を伝える『牟婁新報』の号外が二〇〇三年に田辺市内で新しく見つかった<sup>四二五</sup>。その号外は、「二十四日二十五日又旅順を攻撃し故らに汽船天津丸仁川丸豊国丸武揚丸武州丸を沈め港口を封鎖したり」<sup>四二六</sup>、「愈々〇〇陥落は目前に迫れり／記者曰く我が五千万同胞が一刻千秋の思ひにて待ちに待ち□□〇〇の陥落は今や眼前にブラ下り来れり！待て次の一刹那の大々的快報を」<sup>四二七</sup>など、戦況を伝えるものが大半を占めるが、柴庵自身も「記者云く」という小見出しで、号外に対する意見を書いている。とくに提灯行列を呼びかける文章が多く、「朝霧早鳥二艇風波を侵し十四日未明旅順を襲撃し敵艦三隻を轟沈す吾二艇は無事なり、／今夜午後六時より提灯行列を催す同感の士は提灯と蠟燭とを携帯し新報社前小学校運動場に参集すべし」(明治三十七年二月一七日)<sup>四二八</sup>、「十日の海戦は駆逐艦の激戦にして我軍の勝利に帰し捕虜四名ありし但我駆逐艦に少しの損傷と死傷者二十名あり／右我軍の大捷利を祝し且つは出征軍人家族諸氏に対して慰問の意を表する為め明十四日午後六時より提灯行列を催すべし同感の士は提灯と蠟燭とを用意し本社前の運動場に参集ありたし」(同年三月一三日)<sup>四二九</sup>、「十日攻撃の結果旅順の敵は同地を捨て去りし様子にて船舶出入自由となれり／(略)愈よ今晚は提灯行列を催すべし

／注意 本隊は必ず出征軍人諸氏の宅毎に万歳を三唱する事」（同年三月一日）<sup>四三〇</sup>、  
「昨日ダルニーをも占領したり／万歳。万歳。大万歳。／今晚は是非とも提灯行列の必要  
あり、諸君、曩の如く提灯と蠟燭とを用意して午後七時扇ヶ浜公園に参集ありたし」（同年  
五月八日）<sup>四三一</sup>と数回にわたって呼びかけている。『牟婁新報』が戦勝の提灯行列を催して  
いたことは、読者の「感心生」からの投書からもうかがえる。

▲牟婁新報の先生方は先きには提灯行列の隊長となり、今は社会主義演説会を開いて  
平和を唱へつゝあり、新聞記者も中かゝ多忙なる哉。（感心生）／△征露戦争は我国  
の権利なり、予等は断じて此の戦争に与みせざる能はず、祝捷行列の如き蓋し軍国民  
の感情を表出すべき唯一の方法なるべし、故に予等は行列の隊長たるを辞せず、然れ  
ども之れと同時に社会の貧者弱者を救済すべき大任あるを思ふ。社会問題演説会の如  
きは則ち之れがために開かるべし、而うして多忙は人間の義務なりと予は思惟す。（記  
者）<sup>四三二</sup>

この「感心生」からの質問に答えた「記者」は柴庵本人であろう。『牟婁新報』では、戦  
勝の提灯行列を催すとともに、「社会の貧者弱者を救済すべ」く社会問題にも取り組んでい  
ると述べている。「社会の貧者弱者を救済すべき大任」とはこの出征軍人の家族扶助のこと  
であろう。しかし、一方の提灯行列は参加した「同感の士」が柴庵の予想よりも少なかっ  
たらしく、四月一四日付の号外で読者に行列への参加を呼びかけている<sup>四三三</sup>。

柴庵は社会主義に関心を寄せていたにもかかわらず、日露戦争では開戦論を主張したの  
であらうか。門奈直樹は「基本的には日露戦争に同調してしまったが、しかし、一方で（略）  
民の苦渋に思いをいたす非戦の姿勢を堅持し」ていたとしている<sup>四三四</sup>。門奈は、柴庵が「非

戦の姿勢を堅持し」ていた論説として、「戦争熱の児童に及ぼす弊禍を論ず」（『牟婁新報』第三四六号〜第三四八号 明治三十七年四月一二日〜四月一八日）、「日露両軍の戦死者を弔うべし」（同紙第四〇〇号 明治三十七年九月二七日）、「憐れなる軍人家族」（同紙第四九九号 明治三十八年八月六日）、「何の歎ぶべき事あらむや」（同紙第五二六号 明治三十八年一〇月二七日）をあげている。このうち、「日露両軍の戦死者を弔うべし」は柴庵の論説で、日露両軍の戦死者の追弔を提唱し<sup>四三五</sup>、各宗派・町長・郡会議長・郡長になぜ進んで追弔会の發起人とならないのかと迫っている<sup>四三六</sup>。しかし、「戦争熱の児童に及ぼす弊禍を論ず」は豊田孤寒の<sup>四三七</sup>、「何の歎ぶべき事あらむや」は荒畑寒村の論説であり<sup>四三八</sup>、「憐れなる軍人家族」に至っては無署名の論説であるため<sup>四三九</sup>、これらの論説からは柴庵が「非戦の姿勢を堅持し」ていたとはいえない。佐藤任と武内善信は、いずれも「現実主義」の観点から柴庵は開戦論を唱えていたとしているが、この柴庵の「現実主義」について、佐藤は和歌山県をはじめとする地方の経済発展<sup>四四〇</sup>、武内は戦争の否定はあくまで将来目指すべき「理想」であり、差し迫った「現実」<sup>四四一</sup>日露戦争を優先させた<sup>四四一</sup>、それぞれ異なった見解をしめしている。

柴庵が開戦論を唱えていたことは、当時の『牟婁新報』の読者からも疑問があがっており、「マルクス」という読者は「柴庵先生、足下は社会主義者なりと聞く、社会主義者は皆な絶対的非戦主義者なり、然るに足下独り戦争論者たるは何ぞや」<sup>四四二</sup>と柴庵に質問している。これに対して柴庵は次のように答えている。

柴庵答て曰く、予は仏教を奉ずるものなり仏教広大にして能く社会主義を容る、予が常に社会主義平民主義を唱道するは、仏教より見たる社会主義平民主義にして所謂社

会主義者のとは稍異なる所あるなり、仏教に折伏と撰取との二門あり予が主戦論者たるは折伏門によりたればなり、予を社会主義者なりといふは可なり、然れども予が之れよりも尚ほ大なる仏教主義者なる事を忘れ給はずんば愈よ可なり、解せりや<sup>四四三</sup>

柴庵は、社会主義を仏教的な観点からみていたとともに、日露戦争を折伏<sup>四四四</sup>ととらえていたことがうかがえる。また、柴庵は「皇室に対する敬意」（『牟婁新報』第二〇五号 明治三十六年一月二日）という論説を寄稿しており、そのなかで「皇国の臣民誰れか皇室を敬はざらん、此一事是れ既に吾国民の先天的美性なるが故に、未だ曾て教育の何たるかを解せざる者と雖も、おのずから此美性を具備する事又今更に弁明を要せず／＼本既に尊皇愛国の美性に欠くる所無んば、□ちは妃羅<sup>マヤ</sup>剔扶を須んば却て不敬を構成する事とならん」<sup>四四五</sup>と述べている。一九〇七（明治四〇）年一〇月二四日付の『牟婁新報』第七五九号では、第一面に「最近の御製」として、一八七七（明治一〇）年以降の天皇の御製七万首のうち最近詠んだ歌八首を載せるなど<sup>四四六</sup>、天皇の御製をたびたび『牟婁新報』に掲載している。柴庵も晩年に神武天皇から昭和天皇までの歴代天皇と和歌山県との関係をまとめた『皇室と紀伊』（私家版 一九三五年）を出版している。日露戦争は、日本側によれば、ロシアの南下政策による脅威を防ぎ、朝鮮半島を独占することで、日本の安全保障を堅持するため開戦したとされている<sup>四四七</sup>。柴庵は、日露戦争を南下政策によって日本の平和を脅かす存在であるロシアを折伏させる義戦ととらえていたと考えられる。つまり、日露戦争という日本の平和の危機に対して、彼は社会主義者としてではなく、天皇主義者かつ仏教者として開戦論の立場をとっていたといえよう。

しかし、開戦論は柴庵の個人的な主張であり、『牟婁新報』全体の論調ではなかった。

『牟婁新報』では、日露戦争のさなかでも小田頼造（野声）<sup>四四八</sup>・豊田孤寒（神尚）<sup>四四九</sup>ら社会主義者を記者として迎え入れている。小田<sup>四五〇</sup>と豊田<sup>四五一</sup>は『牟婁新報』に非戦的・厭戦的な記事を寄稿しており、二人に影響されたと推測される<sup>四五二</sup>読者からも非戦的・厭戦的な記事<sup>四五三</sup>や反戦詩<sup>四五四</sup>が投稿されている。柴庵は開戦論を唱えていたにもかかわらず、社会主義者を『牟婁新報』の記者として迎え入れたり、非戦的・厭戦的な記事を紙面に掲載したりしているが、柴庵が執筆したであろう無署名の記事「社会主義者の運動」（『牟婁新報』第三二七号 明治三十七年二月六日）には次のことが書かれている。

近年尤も注目の価値あるものは社会主義者の運動なり。彼れ等は其清新の目的を達せんが為めには、あらゆる困難にもあらゆる迫害にも屈撓せず、到る所に其主義を宣伝し、中央の論壇は絶へず彼等の為めに賑はされつゝあり、予輩は彼等の多くと全く同一意見ある能はざるも、或る点に於ては全く社会主義者を是認するものなり<sup>四五五</sup>

この「彼等の多くと全く同一意見ある能はざる」とは非戦論や国体観のことで、「全く社会主義者を是認する」という「或る点」とは、経済的平等の主張や、公権力に対する抵抗の姿勢と思われる。日露戦争では開戦論を唱えていた柴庵が、社会主義者を『牟婁新報』の記者として受け入れたのは、彼らの経済的平等の主張や、公権力に対する姿勢に共感していたためであろう。結果として『牟婁新報』は、柴庵の開戦論と、小田・豊田らの非戦論・厭戦論双方の論説や記事が掲載されるという論調になったのである。



### 第三節 『牟婁新報』への弾圧

#### (一) 官吏侮辱事件

一九〇五（明治三八）年六月一八日付の『牟婁新報』第四八三号の「編輯局より」で、柴庵は皇族・伏見宮家出身で伯爵の爵位をもち貴族院議員でもある和歌山県知事の清棲家教を次のように批判したという。

前略大臣や知事の巡回は紳士の御馳走をたべに来るのだ紳商は饗応にて御愉快をなさるのだ人民はかういふ風に見て居る又全く其通りだから民は虚礼を以て迎へ厄介払の感を以て送り出すのだ民政の挙がらざるも無理の無い話だ：ナル程此通りだ田辺や新宮へは年に一度や二年に一度位は知事も来ようが大辺路筋や中辺路筋は書記官すらも滅多に通らぬ之までは地方経営とか何んとか立派そうな事をいふたとて何んの効果があらふカイ四五六

同年六月九日付の『和歌山実業新聞』に掲載された「清棲知事の視察談」には、清棲が田辺を視察した際、記者に「田辺町の高井鐘詰製造所に於ては軍人家族中より其の職工を募集し相当の賃金を与へ居るも旧士族のものは之れを嫌ふの傾きあれば同町自助団に於ては旧士族のみを集め手仕事をなさしむるの計画あり」四五七と語ったことが掲載された。これに対して、柴庵は六月一八日付『牟婁新報』第四八二号の「清棲知事の視察談を読む」で、「田辺町の実状を觀更に知事の此視察談を読むに、遺憾ながら清棲知事の視察は、全く肯綮を外れたるやの感あり」四五八と批判している。

これらの柴庵が書いた記事が官吏侮辱罪として起訴され、柴庵は六月二四日に田辺の検事局に呼び出された。公判は七月二〇日から和歌山地方裁判所田辺支部で開かれた。柴庵

は公判で「裁判長閣下に一言致したい、唯今検事の論告中被害者とせられし清棲知事の地位名誉をのみ挙示せられました、被告たる私にも亦相当の名誉はあります故に少しく弁じますが：」とまで述べると、そこで裁判長に発言を遮られ、これ以降柴庵の発言は許されなかった<sup>四五九</sup>。七月二五日に判決があり、柴庵は重禁錮一ヶ月、罰金五円、執行猶予二年の刑となった<sup>四六〇</sup>。この判決直後、柴庵は七月三〇日付の『牟婁新報』第四九七号の「編輯局より」に、「柴生」の名で裁判官や公判を批判している。

全体裁判官といふものは何をするものであるか如何なる職権を有するものであるか、日本の法律は如何に之を規定し日本の法律学者は如何に之を解釈するか、このやうな事は予が説明する限りでは無いが、まさか片言を聴ひて罪を断ずるやうな職権は有つて居まいと信ずる、併し此裁判官は言ふであらふ「被告人には弁護士といふものが附いてある弁護士の弁論をさへ聞けば沢山である」と斯ういふ事をいふであらふ。(略)判決文は告発書を引き延したまでであつて検事の論告を都合よく引き緊めた迄であつて、被告側の申立は殆どゼロである、文中に「被告の弁疏」などとあるは丸つ切り虚偽だ虚構だ、法廷に於て被告の陳弁を許さなかつたのにナニガ弁疏だ、勝手次第に虚偽の判決文を作つて人に刑罰を科するとは驚く可き乱暴である、彼等或は斯ういふ乱暴極まる裁判を遣つて予を激昂させて其激昂によつて予に罪を構成させて二たび予を突き落さうとするのかも知れぬが、予は之に心付かぬではない。(略)無論不埒なる裁判官を取締るのは司法大臣の職分かも知れぬが官民平等の予の眼から見れば、一切衆生は誰れだとして同位同等だ、司法大臣を待つ迄も無い其私曲の精神に一大痛棒を与ふるのが宗教の骨髓だ、新聞記者の天職だ、予は恰も之を与ふるに最も良い機会に遭遇

して居ると信ずるのである<sup>四六一</sup>

柴庵は公判で一切の陳述を許されなかったが、この記事は柴庵が公判への思いや憤りを『牟婁新報』の場を借りて述べたものであると思われる。

柴庵は判決を不当なものとしてただちに控訴した。八月二八日に大阪控訴院で公判が開かれ、その様子は実際に公判を傍聴したという「請川生」の「公判余感」(『牟婁新報』第五〇九号 明治三十八年九月六日)に記されている。それによれば、柴庵は「第一審に於て言はんとし言ふを得さりし満腔の議論を悠揚に且つ謹嚴に演じ起しつ今や庶境に入らんとする利那アワレ裁判長の注意とかにて遂に半途にて止」<sup>四六二</sup>。この日の公判は「実に平路坦々特筆する程のこともなく天下は至て太平無事」<sup>四六三</sup>だったという。「請川生」は最後に「新聞記者が叫ぶ正義の声に対し若し之を妨くるものあらば記者は之を撲ち払ふべし、たとい金蠅にても銀蠅にても果た又知事蠅にても大臣蠅にても容赦は無用なり、白衣の宰相たる新聞記者として大人気なしと嗤ふなかれ」<sup>四六四</sup>と書いている。この「公判余感」からは、公判で自分の新聞記者としての信念を述べたことがうかがえる。

大阪控訴院の判決は九月一日に出され、主文は「控訴ハ之ヲ棄却ス 二年間刑ノ執行ヲ猶予ス」<sup>四六五</sup>であった。その理由は「和歌山県知事伯爵清棲家教ノ職務ニ対シ侮辱ヲ加ヘタルモノトス(略)知事ヤ大臣ノ地方巡回ハ有名無実ニシテ自己口腹ノ慾ヲ充タスニ過ギザルヲ以テ民政ノ挙ラザルハ当然ナリト職務ニ忠実ナラザル事ヲ罵詈シタルモノナレバ侮辱タルヲ勿論ニシテ疑ヲ挿ムノ余地ナシ」<sup>四六六</sup>というものであった。柴庵は判決を不当として即時上告した<sup>四六七</sup>。

大審院での審理の開始時期は、『牟婁新報』にその記事が見当たらないため不明だが、一

九〇五（明治三八）年一〇月はじめごろからはじまったものと思われる。判決は一〇月二〇日にあり、柴庵の上告は棄却され、執行猶予二年の刑が確定した<sup>四六八</sup>。判決後、柴庵のペンネームと思われる「尺蠖將軍」は、「予の見たる日本の裁判所」（『牟婁新報』第五三三号 明治三八年十一月一日）で次のことを述べている。

国法を重しと見たる予は、裁判所に出さへすれば吾が言はんとする所も他の告げんとする所も、具さに言ひも得聴きも得るならんと思ひきや、過ぐる頃より種々の出来事の為に二三の裁判所を見たりしが、さて浅間しや其裁判所といふものは何処も官尊民卑の臭気いや高く猶ほ是れ専制時代の白洲といふものにさも似たらんとは。（略）予等は如く四民を平等なりとする者の眼には日本の裁判所の如きは実に悪差別の甚きものなりとせざる可らず／▲今や牟婁新報社の同人は斯くの如きの法廷に起つて斯くの如きの待遇を受け斯くの如きの迫害を受けつゝあるにあらざるか、予は之を思ふて

熱涙潜々と言ふ所を知らず<sup>四六九</sup>

柴庵は、日本の裁判所は四民平等の国法を重んじているはずにもかかわらず、専制時代のような官尊民卑の姿勢をとっていると鋭い言葉で批判している。この記事を載せることで、柴庵は大審院の審理でも判決を覆すことができなかったことに対して抵抗の意志を表明したといえよう。

しかし、今度は前掲七月三〇日付の『牟婁新報』第四九七号掲載の柴庵による「編輯局より」が、和歌山地方裁判所田辺支部裁判長の山本寛義を批判したとして、柴庵は再び官吏侮辱罪で起訴された<sup>四七〇</sup>。公判は一〇月二八日から和歌山地裁で開かれ、一九〇五（明治三八）年十一月一日付の『牟婁新報』第五三三号に掲載された「吾社の筆禍公判見聞

梗概」で、公判の様子をくわしく伝えているが、その冒頭で山本裁判長を批判している。

山本寛義は吾社の毛利清雅を和歌山県知事清棲家教に対する官吏侮辱被告人として公判を開きながら甘言を以て被告を欺き、法廷に於て一言の陳述をも許さず、斯くして有罪の判決を与へたるは天下に隠れなき一大事実なり、神聖にして公明なる可き筈の法廷に於て斯かる不埒を演ずる以上は、之に向つて一大反抗を試むるは被告人としての正当防衛なり、彼等裁判官は被告人が法律に通曉せざるを幸ひとして種々の陥穽を設け以て巧みに自己の非行を掩はんとするも、吾徒何んぞ斯かる奸手段を恐るゝ者ならんや、故に吾徒は山本寛義一輩の醜陋野卑の心事に対して一大痛棒を与へたり、(略)吾徒を誣ゆるに官吏侮辱罪を以てし、依て以て自己の邪惡横暴を糊塗し去らんとす、思ふに現下の日本国は動もすれば冠履其処を倒にせんとするの折柄、吾徒若し其の意志を弱くし其筆陣を収めば世は恐らく闇黒となり俗吏は到る所に乱行を極め終に天下道なきに至らん事を恐る、仍て吾徒は自ら奮つて彼等と一大決戦を試み以て世の乱臣賊吏の心胆を寒からしめ斯くして以て日本の官吏界中より私曲邪智の徒を剿絶するの端を開かんとせり<sup>四七一</sup>

この文章からは、単に山本裁判長を批判するだけではなく、新聞記者の使命や、法廷闘争を展開することの意義が伝わってくる。この記事は無署名だが、その内容からみて執筆したのは柴庵であろう。公判については、一〇月二八日に第一回公判が開かれ、杉本織之助裁判長より記事に関する追及があると、柴庵は「編輯局より柴生の文字丈けは予の書ける所なるも其他は山本の書きしものにして若し此記事が官吏侮辱罪を構成するならば之を構成せしめたるものは裁判官の山本寛義なり被告の于り知る所にあらず」と答え、「弁護士

も傍聴席も一驚を喫したりと見へ水を打ちたる如く静ま」つたという<sup>四七二</sup>。第二回公判は一月七日からはじまり、証人の小切間権右衛門が「山本裁判長が被告毛利の発言を拒み三回求めて三回ながら許さ」<sup>四七三</sup>なかったことを述べた。判決は一月一日に出され、柴庵は重禁錮四五日、罰金七円の刑となった。柴庵は判決を不当なものとして即日控訴している<sup>四七四</sup>。

大阪控訴院での公判は、翌一九〇六（明治三九）年一月八日に開かれたが、開廷に際して、栗本勇之助弁護士より柴庵に「本日の法廷にては沈黙を守られたし」<sup>四七五</sup>との注意があった。公判では、黒田莊次郎弁護士が山本裁判長の証人喚問を要求したが却下された<sup>四七六</sup>。大阪控訴院の判決は一月一二日に出され、主文は「本件控訴ハ之ヲ棄却ス」であり、その理由は「官吏ノ職務ニ対シ侮辱ヲ加フルモノナル」ハ其文詞自体ニ徴シ認め得ヘク從テ之ヲ掲載セシメタル被告ニ於テ無事ノ意思アリシ事モ亦明白ナリトス」であつた<sup>四七七</sup>。柴庵はこの判決を不当なものとして即時上告した<sup>四七八</sup>。

大審院では、二月二七日に開廷し、弁護士は高木益太郎がつとめたが<sup>四七九</sup>、三月二日に重禁錮四五日、罰金七円の刑という判決が出された<sup>四八〇</sup>。三月一二日、柴庵は田辺監獄に収監され、『牟婁新報』は記者の荒畑寒村・管野須賀子が編集を担当することになった。柴庵が住職をつとめる高山寺も、柴庵の知己である京都の清滝智龍に託された。なお、事件で起訴された際、柴庵は真言宗御室派に僧籍を返上している。形式上は僧籍返上届を提出して自ら返上したとなっているが、実際は御室派から僧籍を返上するよう圧力をかけられての返上ではなかっただろうか。

柴庵の入獄について、『牟婁新報』の読者では、成石平四郎が「一夜獄中の柴庵師を想ふ」

（『牟婁新報』第五七七号 明治三十九年四月六日）という文語の詩を寄せ、「吾も眠らん夢見んと、枕につけど眼は冴えて、想はこれより彼にはせ、ひとやの中は如何かと／勝気気丈の人なれど、さわる事などあらざるか、自由の御身となる日を、指折数ふ夫や弟子／吾等は夢に教うけ、吾等は夢に語れども、囚屋のうちの柴庵師、夢見る安き床あるか」<sup>四八一</sup>と詠んでいる。成石は「噫 悲なる哉」（『牟婁新報』第五八〇号 明治三十九年四月一日）でも「我を教ゆるの師よ我が敬慕する師よ鶴首して出獄を待つる吾等をおもひ希くは身を大切にせられん事を」<sup>四八二</sup>とエールを送っている。和歌山県請川村（現・田辺市本宮町請川）で生まれた成石は、『牟婁新報』の早い時期からの読者で、「新進気鋭の牟婁新報の愛読者となりし以来多くの点に於て智脳<sup>マヤ</sup>の開発を受け、現に先生等の名文佳章に対しては一字を味ひ一句を称しつゝ修養向上の一転路を求めつゝあり。（略）此新報の爲めには死を厭はざる一人なり」<sup>四八三</sup>と書くほど『牟婁新報』に入れ込んでいた。一九〇八（明治四一）年三月、高木顕明が住職をつとめる浄泉寺に『牟婁新報』の新宮支局が設けられると、成石は支局員として熊野地方での読者の開拓に力をいれた。同年一〇月には、「小生今夜も更深きまで起信論を読み居候」<sup>四八四</sup>と、大乘仏教の代表的な概説書である『大乘起信論』を読んでいるが、これは柴庵からの影響と思われる。

この事件は中央の社会主義雑誌でも報じられた。『光』では、清棲知事への官吏侮辱事件に対する大審院での上告審の際には、清棲知事への管理侮辱事件に対する大審院での上告審の際には、「毛利柴庵氏 は和歌山県知事侮辱事件に坐し近々入獄する由なり」<sup>四八五</sup>、「毛利柴庵氏 の和歌山県知事侮辱事件は大審院にても有罪の宣告を受けしが刑の執行猶予により入獄はせなくともよきことゝなりたる由」<sup>四八六</sup>と簡略ながらも伝えている。山本

裁判長への官吏侮辱事件で大審院の上告審が敗訴すると、柴庵は収監直前に「小生只今より入獄します、始めは巢鴨にて貴兄等の受けし如き経験をと思ひゐたりしも種々の事情ありて田舎の監獄に這入り升」<sup>四八七</sup>と書いた手紙を寄せている。『光』では山本裁判長への官吏侮辱事件について、「毛利柴庵氏の主管する牟婁新聞<sup>マロウ</sup>又復官吏侮辱の告訴を受けたりと、侮辱する者も悪いが無暗に侮辱される様な官吏は上等の官吏ではない」<sup>四八八</sup>と評している。

一九〇五（明治三八）年夏ごろ、木下尚江は関西地方での遊説を兼ねて柴庵の応援のため紀州に向かおうとしたが<sup>四八九</sup>、自身の病気のため計画を断念した<sup>四九〇</sup>。また、堺利彦も同年六月二〇日ごろ、柴庵に「貴兄の処にも裁判沙汰で御慰みのよし、当方にも政府の押合に色々面白い事があります、只罰金には閉口いたす」<sup>四九一</sup>とのはがきを送っている。中央の社会主義運動に対して、田辺では毛利柴庵（金一元）・豊田孤寒（金五〇銭）・石浪粟洲（金五〇銭）・吉村郡吉（金二〇銭）・榎本良吉（金五銭）・加藤紫海（金三〇銭）・山中定吉（金一元）・岡本庄太郎（金二元）・野村第一風（金二〇銭）・奥野健太郎（金五〇銭）・小切間権右衛門（金五〇銭）・某（金二〇銭）・池田博（金二〇銭）・近藤新十郎（金一元五〇銭）・岡本与三郎（金五〇銭）・笠松昱三（金一〇銭）・室井源吉（金一五銭）・石浪安吉（金二〇銭）・戸田三綱（金三〇銭）・富幸呉服店（金二〇銭）の二〇名が資金を寄付しているが<sup>四九二</sup>、そのほとんどは『牟婁新報』の社員とその後援者であり、なかには町の有力者もいた<sup>四九三</sup>。この寄付は柴庵の呼びかけによるものであろう。

「新仏教徒同志会」でも、高島米峰は『新仏教』第六卷第九号（明治三八年九月一日）に「官吏侮辱とは何ぞや」を発表し、「官吏といふ特殊階級に、侮辱罪といふものが成立するならば、（略）四民平等の大義に則りて、商人侮辱罪、職工侮辱罪、百姓侮辱罪の如きを



も規定」<sup>四九四</sup>したほうがよいと述べている。高島は、『牟婁新報』にも「官吏侮辱事件の判決を評す」(『牟婁新報』第五〇四号 明治三十八年八月二一日)を寄稿しており、「一般的の記事を以て独り和歌山県知事を指すものとして起訴し論告し判決したる判検事諸君こそ却つて新聞記者としての毛利柴庵兄を侮辱したるものにしてさしづめ「新聞記者侮辱罪」にも問はるべき」と批判し、前掲「編輯局より」に「大臣や知事」と書かれていることに関係して、「単に清棲知事に対してのみ侮辱罪が構成し知事より余程エライ高等なる大臣様に対して侮辱にならぬといふは何たる辻褃の合はぬ話」であると論じている<sup>四九五</sup>。高島と同じ「新仏教徒同志会」会員の渡辺海旭も、「毛利柴庵の入獄は、新仏教史に特筆大書すべき一大功業也。第二世出て、第三世第四世之に続き、罪弥重く、刑益厳なるに迫びて、新仏教の光彩方めて赫焉日の如く、寰宇を照灼せむ。ブラボー柴庵！」<sup>四九六</sup>と述べている。「新仏教徒同志会」は柴庵の入獄を批判する立場をとっていたことがうかがえる。

一九〇六(明治三九)年四月二七日、柴庵は四五日間の刑期を終えて田辺監獄から出獄した<sup>四九七</sup>。同日付の『牟婁新報』第五四八号は「出獄記念号」として、清滝智龍「柴庵兄の出獄を迎ふ」<sup>四九八</sup>、境野黄洋「柴庵出獄頌」<sup>四九九</sup>、高島米峰「前科者毛利柴庵」<sup>五〇〇</sup>、荒畑寒村「柴庵君足下」<sup>五〇一</sup>、大石誠之助「法律何物ぞ」<sup>五〇二</sup>、杉村縦横「出獄乎入獄乎」<sup>五〇三</sup>を掲載した。『新仏教』第七卷第六号(明治三十九年六月一日)でも、「毛利柴庵入出獄記念」として、これらの文章のうち、杉村の「出獄乎入獄乎」、境野の「柴庵出獄頌」、高島の「前科者毛利柴庵」が転載された<sup>五〇四</sup>。

出獄後、柴庵は「清棲知事の来郡を迎ふ」(『牟婁新報』第六五二号 明治三十九年一月二四日)を発表しているが、そのなかで次のことを述べている。

和歌山県知事伯爵清棲家教君足下、昨年五月六月の交、足下が我熊野を巡視せらるゝや、予は足下を迎て一文を発表しき。次で足下が、其所謂巡視なるものを終りて阪庁の後ち「巡視談」なるものを発表せらるゝや、予は足下が巡視の粗漏と不親切とを訝りて二たび一文を発表して我地方の為に弁明の労を取りたりき。然るに予が此等の文章は、足下の職務を侮辱するものなりと認められ足下の率ゆる警官は予をば官吏侮辱罪を犯すものとして告発し、日本帝国の司法官は数々予を法廷に召喚し、世にも不可思議千万なる印象を予の脳中に留しめき。斯くして予は内ち吾社の財政難に堪え外は足下の下僚輩の迫害に苦められつゝ、遂に四拾有余日の間獄中に投ぜられ、鉄窓の下寒苦と戦ひそるゝに人の運命の微妙のものたるを味ふ夜もありたり（略）苟くも筆を執て社会に起つ以上は眼中貴賤の別ある可らず、其尊ぶ所は赤誠忠良の士なり其卑んずる所は輕薄不信の徒なり、足下をして若し能く民人のために赤誠を發揮するの紳士ならしめば、仮令足下をして知事たらしむるも予は足下のために頌徳の辞を綴るを辞するものにあらず、足下をして若人民の為に不信を図るの人たらしめば縦令伯爵たりとも予豈之れを不問に附し去るを得んや、斯くして予の筆路は明々白々たり、足下の予を見る猶路傍の人の如からんとも足下にして赤誠忠良の紳士ならば争か予の筆路の明々白々たるを喜ばざるの理あらんや五〇五

この文章からは事件に対する反省は一文もない。一九〇五（明治三八）年八月一二日付の『牟婁新報』第五〇一号掲載の「吾社の革命——今後の小生——」で、柴庵は「牟婁新報にして幫間的新聞にあらざる以上は、県当局の御機嫌マツマを向ふる如き追従輕薄の態度を取るを得ず、時には苦言をも呈せざる可らず、時にはお氣に障る事を、申述べざる可らず」五〇六

と書いている。柴庵の新聞記者としての姿勢は、官憲による弾圧で入獄したあとも変わることはなかった。

## (二) 大逆事件

大逆事件の捜査が紀州に及んだのは、一九一〇（明治四三）年六月である。六月三日、田辺で家宅捜索が行われ、柴庵宅も家宅捜索を受けた。柴庵宅の家宅捜索の理由について、七月二〇日に和歌山県知事・川上親晴が内務大臣・平田東助に出した秘密文書「社会主義者陰謀事件検挙の顛末報告（和歌山県）」によれば、柴庵は幸徳秋水・管野須賀子・堺利彦らとたびたび文通し、大石誠之助・成石平四郎とも親密な関係にあり、とくに大石は一九〇八（明治四一）年に東京から幸徳の意を受けて帰途の際<sup>五〇七</sup>、田辺に上陸して柴庵と面会した事実もあって、事件と関係があると推測して捜索を行ったとしている<sup>五〇八</sup>。

この日の柴庵宅の捜索は、午前五時から午前七時四〇分に至るまで行われ、捜索の様子は和歌山地裁田辺支部予審判事・平田二郎、同裁判所書記・福田権八の名前で書かれた家宅捜索調書で知ることができる。

和歌山地方裁判所田辺支部予審判事平田二郎、裁判所書記福田権八ハト共ニ明治四十四年六月三日和歌山県西牟婁郡田辺町大字上屋敷丁毛利清雅方ニ出張シ同人（明治五十年九月二十八日生）ヲ立会セシメ宅内無限搜索シタル処本件証拠タルヘキ物発見スル能ハス／此処分ハ前同日午前五時二初メ同七時四十分ニ終了即時同所ニ於テ此調書ヲ作リタルヲ以テ所属庁印押捺スル能ハス<sup>五〇九</sup>

調書では、柴庵のもとはらば事件の証拠になるものは何ひとつ見つからなかったという

が、六月六日付の『牟婁新報』第一〇六二号に発表した「吾社の家宅搜索―今後も毎年一二回づゝ希望す―」で、柴庵は自らが受けた家宅搜索のことを報じ、それに対する皮肉を付け加えている。

家宅搜索を受くるが如きは個人たる予に取りても牟婁新報社主たる予に取りても凌辱の極たるを思ふ、但し予審判事は予及び本社に関する公私一切の信書類を大柳行李にギッシリ一杯詰込みて帰られたるが故に其以来仔細に検閲せられつゝあらんと信ず、此点よりいへば此種の家宅搜索は国家から信認の裏書をせられるのと等しく、寧ろ光榮の至りなれば今後毎年一二度づゝ遣つてお貰ひ申し度しと希望し居れり<sup>五一〇</sup>

柴庵本人が「公私一切の信書類を大柳行李にギッシリ一杯詰込みて帰られた」と書いているにもかかわらず、調書では「宅内無限搜索シタル処本件証拠タルヘキ物発見スル能ハス」となっているのは、押収した資料からは事件に証拠になりそうなものは見つからなかったためと思われる。

ところで、田辺在住の博物学者・南方熊楠は、この日の柴庵宅の家宅搜索について、翌日湯屋にいた藍染屋の老人からその話を聞き、自身の日記の六月四日のページに、「片町に之、入湯。紺治老人にあふ。話しに、一昨<sup>マ</sup>朝四時頃警官多く裁判所に集り、判官と共に牟婁新報社を取囲み、毛利氏の書類を搜索し持去る。これは東京にて社会党破<sup>マ</sup>烈弾を作りしによるとのこと」<sup>五一</sup>と書いている。家宅搜索で柴庵のもとから多数の資料が押収されたことは、搜索直後から町でも噂になっていたのであろう。南方は、当時和歌山県下で社会問題となっていた神社合祀への反対や県下の環境問題などに関する論説を『牟婁新報』に数多く寄稿しており、柴庵とも親交があった。なお、大逆事件では柴庵をはじめ、成石平

四郎<sup>五二</sup>や、画家の川島友吉（破裂・草堂）、芸妓の田野サエ（栄）ら<sup>五二三</sup>、南方と親交があった者も家宅搜索や証人訊問を受けている<sup>五一四</sup>。

六月二九日、田辺では二回目の家宅搜索が行われ、このときは柴庵のほかに、『牟婁新報』編集長の小守重保、社会主義者と疑いのあった田辺教会牧師の伊藤貫一と田辺聖教会伝道師の堀内穰も搜索を受けた。南方は、その日の夜に柴庵のもとを訪ねており、柴庵から直接話を聞き、同日の日記に「夜牟婁新報社を訪、毛利氏朝十時過より夕五時迄家宅搜索を受け、職工等一切身体を裸にして検査の由。警官の話には成石蛙聖に関する事なり」と。之と同時に小守重保、伊藤貫一、堀内穰二牧師亦家宅搜索を受し由」<sup>五一五</sup>と書いている。南方のいう「成石蛙聖に関する事」とは、「成石平四郎爆発物取締規則違反被告事件」のことである。田辺と新宮で家宅搜索が行われていた六月三日、請川村の成石平四郎宅も家宅搜索を受けており、成石自身も新宮警察署に連行された。家宅搜索では成石宅から魚捕り用のダイナマイト四個と導火線が発見された<sup>五一六</sup>。成石は、六月二八日に爆発物取締罰則違反で拘引されたが、のちにこのことが大逆事件に結びつけられ、七月一四日には大逆事件の共犯として起訴された。

二回目の柴庵宅の家宅搜索は、午前一〇時五五分から午後三時五〇分に至るまで行われ、平田予審判事と福田書記が作成した家宅搜索調書にその様子が書かれている。

成石平四郎爆発物取締規則違反被告事件ニ付和歌山地方裁判所予審判事ノ囑託ニ基キ署名判事ハ署名書記ノ立会ヲ以テ証拠蒐集ノ為メ明治四十三年六月二十九日西牟婁郡田辺町大字上屋敷丁毛利清雅宅ニ臨ミ同人ニ来意ホ告ケ同人ヲ立会セシメ家宅内搜索シタルニ何等本件証拠タルヘキモノ発見スル能ハス／其処分ハ前同日午前十時五十五

分ニ初メ同日午後三時五十分ニ了ス即時同所ニ於テ此調書ヲ作りタルヲ以テ所属庁印  
押捺スル能ハス<sup>五一七</sup>

七月三日付の『牟婁新報』第一〇七一号の「牟婁日誌」では、この家宅搜索を次のように記している。

「家宅搜索目的物」に關係の無い私信や新聞原稿やノートブックの如きものは速に返却して戴きたい、日々の營業上実に困入る点もある、其れから押収物中長い間留置の必要あるものは御面倒でも目錄を頂戴して置きたい、公刊書籍の如きは元と元と政府が発売を許されてあるにより、財囊を絞つて購求したものゆえ成る可く速に御返却を願ひたし、社会主義の書籍が危険ならばナニ故其危険な書籍の發行を我政府は許可せしか、僕は之がドウも腑に落ちぬゆえ今一度読み直して見たい<sup>五一八</sup>

家宅搜索調書と『牟婁新報』の報道で、またしても家宅搜索の押収資料について相違がみられる。調書がいかにずさんに書かれていたことがうかがえよう。

七月一〇日、柴庵は成石の証人として和歌山地裁田辺支部に呼び出された。取り調べでは、六月三日の柴庵宅の家宅搜索での押収資料のなかに、「短銃」や「爆裂弾」と書かれた成石のはがきがあったため、当局は成石宅から発見されたダイナマイトに結びつけ、爆発物取締罰則違反被告事件の証拠に取り上げた。しかし、柴庵は、このはがきは一九〇七（明治四〇）年九月ごろに送られたもので、当時柴庵は「県會議員撰挙ノコトニ付テ意見ヲ新聞紙上ニテ發表シマシテ即チ県政刷新ノ為メ旧議員ヲ排斥シ全部新議員ヲ撰挙センコトヲ發表シ合セテ当局ノ撰挙法違犯事件ヲ同紙上ニ於テ痛論」していたので、成石はそれを声援する意味で激しい言葉を使ったに過ぎなかったと供述している<sup>五一九</sup>。

田辺を含む西牟婁郡では、柴庵をはじめ二〇名も家宅搜索を受けたが<sup>五二〇</sup>、結局大逆事件ではひとりの連座者は出なかった。しかし、『牟婁新報』の関係者では、記者であった管野須賀子や、紀州からは大石誠之助・成石平四郎・崎久保誓一が事件に連座し、管野・大石・成石<sup>五二一</sup>は死刑に処され、崎久保は無期懲役となった。

一回目の家宅搜索を受けたとき、柴庵は『牟婁新報』に「家宅捜査大賛成論」(『牟婁新報』第一〇六三号、第一〇六七号 明治四三年六月九日、二一日)を全四回にわたって連載している。この論説は、大逆事件で家宅搜索を受けた柴庵が、事件に対してどのような反応をしめしたのかがうかがえる重要な資料である。

「家宅捜査大賛成論」を発表する理由について、その冒頭に「社主 毛利柴庵」の名で次のように書いている。

日本帝国の新聞社が其事の何んたるに關せず帝国政府より家宅搜索を受くるが如きは、不名誉の極なりと雖も、其結果帝国政府の疑念を払ひ得たりとせば帝国政府は之によりて自ら省みて何等の教訓を得たるなる可く、吾社と及び予は偶然にも国家より特別の信認を享け得たるやの感あり。予は帝国政府と戦ひて捷てりとは言はず、国家及び社会に対する予が宗教上の使命は今後益々拡大せられたるを覚ふ<sup>五二二</sup>

つまり、日本帝国の新聞社である『牟婁新報』が政府より家宅搜索を受けたことは、きわめて不名誉だが、国家や社会に対する自分の宗教的使命はさらに拡大すると考えて、「家宅捜査大賛成論」を発表することにしたとしている。続いて柴庵は「無政府党の連中が爆裂弾を製造して居たとやらで、政府者は大騒ぎ、全国の検事局は一斉に奮起した、一面は新聞社に戒飭して事件の報道を禁止し、一面は予審判事や警察官を督して途方も無い方面

をまで物色されて居る」<sup>五二三</sup>と官憲の事件への捜査や新聞社への報道禁止を批判し、自身が受けた家宅搜索を次のように評している。

日本帝国の臣民として憲法の保障を受け法律の保護に信頼し、安んじて生を享け樂んで業を営み、一片耿々の志を以て新聞事業に従事するの外、更に他意なき予の如き者ですから、事もあらうに、無政府主義者の爆裂弾事件に関連するとの名の下に、家宅搜索を享くるが如き、意外も意外大意外、殊に、朝ぼらけ眠り未だ覚めざる臥床を敲き起され、帶劍の官人拾数人に圍繞せられ、斯くの如きの凌辱を受くるが如き、万事に無頓着なる予でさへ頗る面喰はざるを得なんだ、若しも此時予が、仏教上の信念なく単に野人的元氣のみを有するものならしめば、瞬時も此凌辱に堪ゆる能はず必ず、国家を怨み、或は妻子諸共毒を仰いで自殺したかも知れ無い<sup>五二四</sup>

そして、「全体、吾社の家宅搜索は、如何なる原因、如何なる理由に基づくか、予は政府当局に向つて先づ此一事からお尋ねしたいのである、只だ法律の命ずる所、職権の存する所だといふて、無闇みに家宅搜索なんぞを遣るといふのは、政府自ら秩序を壊敗する事になりはせぬか、予は甚だ遺憾に思ふのである」<sup>五二五</sup>と述べている。文中に「仏教上の信念」とあるが、別の箇所でも「仏教にも下らぬ事は多いが、併し仏教には動かす可らざる真理がある、僕は此教理を、神経過敏な今の政府当局者や、今の狂ひ染みた社会党の面々へ時々お召し上りになるやうにお願い申度いのである」<sup>五二六</sup>と記している。柴庵のいう「仏教上の信念」について、この論説では明確に書かれていないが、次の文章はその手がかりになるであろう。

吾輩なぞの学んだ学問などから行くと、「人間といふものは互に相信ずる所に人とし



ての品位があるのである」、無闇に人間同士疑ふて居た日には逆も一日として安穩に居る可きワケのもので無い。国家が、倫理や道徳や宗教を尊重するも、ツマリ人間同士互に相信ずる道を教へんがために外ならぬのである。国家も政府も人民も此法則を踏み外してはならぬ。大臣が相場を遣つたり、お役人が場朽をしたり、国民が国法に背くやうでは、到底「信」といふものが立たう筈が無い、古聖曰く「道は須臾も離る可らず離る可きは道にあらず」と、要点はこゝぢや五二七

「吾輩なぞの学んだ学問」というが、柴庵は高野山大学林を首席で卒業している。柴庵は大学林で「人間といふものは互に相信ずる所に人としての品位があるのである」ということを学んだと考えられる。彼のいう自らの「仏教上の信念」は、高野山大学林で学んだ仏教が基礎になっているといえよう。

柴庵の論説はさらに続き、中央の社会主義者と交流があるというだけで、家宅搜索を行った官憲に批判の矛先を向けている。

堺枯川氏とは三四年前東京で全国新聞記者大会が開かれた時、始めて会ふたのであるが、顔を見たのは此時きりである、其以来一度もお眼にかゝらぬが、枯川君の名は「読売新聞」紙上「不知所往伝」を書かれた時分から記憶メモして居る、幸徳秋水氏とは未だ一度も面談した事はないが、中江兆民先生の「一年有半」の筆者として知つて居る、堺幸徳二氏の文章は、萬朝報紙上で数年間愛読した、二氏の学識及び筆力には今以て敬伏して居るのである。斯ういふ俊秀が何故没常識な行動を取られるのか、予は実に衷心から痛惜して居るのである。「平民新聞時代」にはチョイ／＼書面を呉れて、予の戦争論に反対せられた事もあるが、一兩年來トンと便りも無い、然るに俄然、今回爆

発物製造事件が持ち上がり、其の為に吾社が巻き添へを喰つて、家宅搜索を受けたといふに至つては、政府当局者の不明を悲まざるを得ぬ、何んとなれば、今日の所謂無政府主義者、社会党なんぞといふものゝ内容政府当局に於て、予々チャンと調査してあらねばならぬ筈では無いか、単に其人の顔を知つて居るといふ点だけで吾社に巻き添へを喰はすといふならば、吾社よりも警視庁の諸君の方が彼等と密接な関係を持つて居る筈だから、吾社よりも先きに警視庁関係者の家宅搜索を為すのが順序であらふと思ふ、(略) 今後も此様な事で家宅搜索を受けるのは、他人は知らず頗る迷惑だから、ナニか政府に於て吾社に対し尚ほ御疑念の点があるなら、今後も毎年一二度づゝ公式に家宅搜索を遣て貰ひたいと告白するのである 五二八

柴庵は、堺利彦と面会したのは一度きりだというが、官吏侮辱事件の際には堺からはがきが送られてきたり、『牟婁新報』に堺が寄稿したりしている 五二九。幸徳秋水も名前は知っているが、実際に会ったことはないと述べているが、渡米の際の思い出を綴った「狂瀾余抹―伊予丸船室に於て」を『牟婁新報』第五五四号(明治三十九年一月二十四日)に 五三〇、西洋雑誌に掲載されたという「阿布利加に於ける文明」を幸徳が翻訳した「文明の徳沢」を『牟婁新報』第六六四号(明治四〇年一月一日)に寄稿している 五三一。幸徳とは面識がなく、堺とは一度しか会っていないという柴庵だが、二人とは「チョイ／＼書面」のやりとりをしていただけではなく、『牟婁新報』への寄稿などを通じても交流があった。

文中に、「今後も此様な事で家宅搜索を受けるのは、他人は知らず頗る迷惑だから、ナニか政府に於て吾社に対し尚ほ御疑念の点があるなら、今後も毎年一二度づゝ公式に家宅搜索を遣て貰ひたいと告白するのである」と書いている。前掲「吾社の家宅搜索―今後も毎

年一二回づゝ希望す―」（『牟婁新報』第一〇六二号 明治四三年六月六日）でも、柴庵は「此種の家宅搜索は国家から信認の裏書をせられるのと等しく、寧ろ光荣の至りなれば今後毎年一二度づゝ遣つてお貰ひ申し度しと希望し居れり」<sup>五三三</sup>と述べている。共通しているのは、今後も毎年一、二回ずつ家宅搜索を行つてもらいたいという皮肉を記していることである。「家宅搜索大賛成論」は、この「吾社の家宅搜索―今後も毎年一二回づゝ希望す―」が国家権力の不当な搜索に対する柴庵の反骨精神のもとで発展して書かれた論説であるといえよう。

柴庵は、この論説でさらに、日蓮・西郷隆盛・佐久間象山・吉田松陰・佐倉宗五郎ら、いずれも当時の国家に対して反抗した人物たちの名前をあげ、その人物たちの後世での評価から、法律や秩序について次のように書いている。

日蓮上人は日蓮宗の御開祖であるが時の政府者と衝突して非常な御難儀をなさつた、又、西郷南洲は我国の大功臣であるが城山原頭の露と消へた時は逆賊の名を負ふてムつた。国法は正しいものであるが此国法を執行する人が善くない人々である場合には、惜しい人が罪名を被むつたり種々な御難儀を為さる事がある、今でこそ日蓮上人は仏教界の大豪傑だが其頃は謀反人であつた、若しもアノ竜口で、死刑に処せられてあつたならば、日蓮上人は今尚ほ反逆僧の汚名を被つて居るか、但しは又国家自身が非常な汚名を被むる事であらふ、誠に危険千万の次第である、現に佐久間象山先生や吉田松陰先生を殺した徳川政府<sup>マ</sup>は、後世の史家から何んと評されて居るか、佐倉宗吾郎<sup>マ</sup>を磔刑にした佐倉藩は之で秩序の維持が出来たと安心したかも知らぬが、其秩序破壊者は今現に神さまとして祭祀せられて居るでは無いか、全体、秩序などといふものがお役

人の手に独占せられて居る時代ほど危険な事は無いのである、彼等少数者の意見に逆へば忽ち破壊者になる謀反人になる、コンナ乱暴な事がドコの国の聖人の教にあるか、あらば承はりたいもんだ 五三三

柴庵によれば、幸徳秋水らは「天皇暗殺」を企てた「大逆犯」として死刑に処されたが、それは「少数者の意見に逆へば忽ち破壊者になる謀反人になる」ような時代のもつて出された判決である。もし、「秩序などといふものがお役人の手に独占せられて居る時代」でなくなれば、彼らは「神さまとして祭祀せられ」るかもしれないということを、日蓮・西郷・佐久間・吉田・佐倉との名前をあげて暗示したものと思われる。

杉中浩一郎によれば、一九三二（昭和七）年に、田辺で発行されていた『南紀大衆雑誌』という雑誌の第二号に「幸徳秋水一派の大逆事件」について、「毛利柴庵氏の回想を聞く」という柴庵が記者からの質問に答える記事が掲載されているという。その記事で柴庵は、家宅搜索で多くの書籍を持っていかれたことで、「やけっ腹で家宅搜索大賛成論を書いたところ、今回の事件は事皇室に関するのだから、不謹慎な言葉をつつしめ、と或筋から注意を受けたよ」と語っているという 五三四。この「或筋」について、杉中は柴庵が所属していた真言宗ではないかと推測している 五三五。しかし、柴庵は官吏侮辱事件に際して僧籍を真言宗御室派に返上している。柴庵が大逆事件に連座しなかった理由について、『牟婁新報』の社員であった雑賀貞次郎は、「田村検事が毛利の思想をよく知っていて、さうしたことに与みするような者ではないことを主張したことなどから、遂にそのまゝとなつた」 五三六と回想しており、事件以前から柴庵と田辺区裁判所検事の田村四郎作とは交流があったことがうかがえる。そのため、この「或筋」とは、真言宗御室派ではなく田村検事と考えられ

る。「或筋」と表現したのも、捜査を行った検事と、捜査を受けた柴庵との間に交流があったことは、柴庵は官憲のスパイであつたと疑われる可能性があるので、このような表現にしたのであろう。

柴庵は、一九一〇（明治四三）年一〇月一二日付の『牟婁新報』第一一〇四号で発表した「感じた事のくさぐさ（一）」で、

「爆発物事件」とは何等の事ぞや。我政府は明さまに此事件を真相若くは要点丈けにても周知せしめ、而うして後ちに所謂「危険思想」の取締策も実行せられざるか、只だ危険々々大危険とのみにて、其事柄の一端だにも国民に告げず、漫然社会主義は危険なり、此種の書籍を所有するものは危険なりとて、何等正当の理由もなきに「爆発物事件の嫌疑」なりとの名の下に家宅搜索を断行するが如き、余りに法律上の權威を振ひ過ぎはせざりしか五三七

と主張した。一九一一（明治四四）年七月七日付の『牟婁新報』第一一九〇号でも、大逆事件後に新たに設置された特高警察に関連して、監視社会は「各人の行動を監視し得可し」と雖も未だ形に顕れざる自他の思想を取締り之をして純良ならしむるの点に於て、終に全く効果を失はん事を虞る」だけであり、「危険思想取締とあらば、宜しく碩学高儒若くは德行高き宗教家に懇囑して、国民の道念に培う可き」であると主張している五三八。いずれも政府の思想弾圧を批判している文章である。大逆事件で柴庵は、官憲の家宅搜索を受けたにもかかわらず、事件後も『牟婁新報』に社会主義者の論説を掲載し、自身も同紙で政府の思想弾圧を批判し続けたのである。

## 結章

内山愚童・高木顕明・峯尾節堂・井上秀天・毛利柴庵の五人は、愚童と秀天は曹洞宗、顕明は真宗大谷派、節堂は臨済宗妙心寺派、柴庵は真言宗御室派と、異なった宗派に属している。彼らの差異は、宗派だけではなく、思想や行動も異なっていた。

愚童は、週刊『平民新聞』の「予は如何にして社会主義者となりし乎」で仏教經典の一節と社会主義の主張が一致するため、社会主義に接近するようになったと述べていた。しかし、のちに天皇制を批判するなど急進的な無政府主義の思想を抱くようになり、愚童の秘密出版や獄中手記には、仏教者に対する批判はみられるが、仏教に関係する思想や用語は用いられていない。法学者・市場学而郎による東京監獄教誨師・沼波政憲からの聞き取りには、愚童が大逆事件に連座し死刑に処される際の様子が述べられているが<sup>五三九</sup>、その様子などから愚童は棄教したとの解釈があるという<sup>五四〇</sup>。しかし、白仁成昭は道元の教義からこれを否定している<sup>五四一</sup>。大逆事件で刑死した無政府共産主義者というイメージが強い愚童だが、最期まで仏教を棄教していなかったことがうかがえる。また、天皇制を明確に批判していた愚童であったが、柴庵は天皇を終始尊崇していた。このような柴庵の天皇観は、当時の社会主義者の一般的な傾向からみれば異端的であり、むしろ一般的な明治人と変わらないものであったと考えられる。

愚童が急進的な無政府主義の思想をもっていたのに対して、顕明や節堂の思想は穏健なものであった。顕明は、『日蓮宗非仏教』で日蓮を差別的な言葉で批判していたが、浄泉寺の被差別部落の門徒との交流のなかで、部落民の生活の実態や戦争に協力している姿をみて、被差別部落解放・非戦論に思想を変化させていった。そして、日露戦争のさなかに執

筆した「余が社会主義」では、浄土真宗の教義からどのようにして社会主義が可能なのかを説いた。愚童が秘密出版などで仏教に関係する思想や用語は用いなかったのに対して、顕明は自らの信仰の立場に立って社会主義の主張を展開したのである。

節堂は、安部磯雄の著書を読んで社会主義に接近し、一時期は無政府共産主義に関心をもったり、地元新聞に寄稿していたりしていたが、最終的に社会主義から遠ざかった。大逆事件後、秀天は『新仏教』で大逆事件や社会主義に関する論説を発表し、柴庵は『牟婁新報』に社会主義者の論説を掲載し、自身も同紙で政府による思想弾圧を批判し続けた。これに対して、節堂の場合は、獄中という環境もあるのか、真宗に帰依し、保守的な思想に「転向」している。しかし、「転向」する前に書かれた「忘れられたる根本義」では、キリストの言葉を引用して人類が相互扶助の精神を忘れたことを批判しており、節堂は仏教もキリスト教も帰するところはひとつであるとして、自らの思想にキリスト教社会主義の考えを取り入れることに、抵抗を感じなかったと思われる。

秀天は、「神戸平民倶楽部」の会員になったり、幸徳秋水ら中央の社会主義者と交流をもっていたりしていた。また、『新仏教』に社会批判や平和論に関する論説を寄稿するほか、社会主義に言及した論説も発表しており、社会主義者とはいえないが、大逆事件の家宅捜索での押収資料などからは、社会主義を研究していたことがうかがえる。そのため、同じ曹洞宗の愚童が天皇制を批判していたのに対して、秀天は暴力といった過激な主張とは一線を画していた。

宗派のみならず、社会主義に関する思想や行動も異なっていた五人だが、共通していた部分もあるといえよう。

まず、大逆事件に連座した愚童・顕明・節堂の三人だが、彼らの寺院の檀徒や門徒は、小作人や被差別部落民など経済的に貧しい者が多かった<sup>五四二</sup>。彼ら三名は、自身の寺院の信徒の生活の実態を目の当たりにして、その生活状況を精神的なものではなく、現実社会で解決するために社会主義に接近したものと考えられる。

そして、五人に共通しているのは、中央の社会主義者と交流していたことや、仏教のみならずキリスト教の方面にも交友関係をもっていた<sup>五四三</sup>こともあげられる。しかし、仏教者である彼らが、社会主義に接近したのは、当時の仏教者や仏教教団に批判的であったことが大きな要因といえよう。愚童は、秘密出版や獄中手記で当時の仏教者を批判し、伊藤証信への手紙でも「何人も今の世に在つて、真面目に道の為に働かんとする者は、魔窟より発する本山の偽法には堪えられません」<sup>五四四</sup>と書いている。顕明も「余が社会主義」において仏教者でありながら開戦論を主張する南条文雄や大谷派法主を批判している。秀天は「宗教の上に国境はない、宗教の教祖の眼から見れば、四海はすべて皆同胞、人類はすべて兄弟姉妹である、(略)予輩は、(略)仏教僧侶の大多数が、自己の教祖の一大信念、一大理想を閑却して、徒らに宗教を以て生活の資を得る材料に使用しをれるを見て、実に人道のために浩嘆にたへぬのである」<sup>五四五</sup>と述べている。柴庵も、「吾徒は仏教の健全なる信仰を根本義とす」、「吾徒は信仰及道義を振作普及して社会の改善を力む」、「吾徒は宗教に関する政治上の保護干渉を斥く」<sup>五四六</sup>などを主張した「新仏教徒同志会」の評議員として新仏教運動に参加している。節堂は最終的に社会主義から遠ざかるが、これは節堂が事件に関係した仏教者のなかで一番若く<sup>五四七</sup>、思想的に不安定であつたためと思われる。しかし、「忘れられたる根本義」では、利己主義に陥った宗教者を批判しており、当時の仏教



者や仏教教団に対しても批判的であったと推測される。

社会主義と仏教との関係をあきらかにすることは、大逆事件に連座した三人の僧侶をはじめ、社会主義に関心を抱いていた仏教者の思想や行動を単にあきらかにするだけではない。それは当時の仏教教団と国家との関係をあきらかにすることにもつながっているといえよう。愚童・顕明・節堂の三人を出した曹洞宗・真宗大谷派・臨済宗妙心寺派は、それぞれ三人を擯斥処分（永久追放）にするとともに、門末寺院に諭達を発し<sup>五四八</sup>、曹洞宗・臨済宗妙心寺派では宮内省にうかがいを立てたり、陳謝したりした<sup>五四九</sup>。このような当時の仏教教団と国家の関係が、五人の教団批判の背景の一端にあったと推測される<sup>五五〇</sup>。

愚童・顕明・節堂・秀天・柴庵の五人は、宗派をはじめ、社会主義に関する思想や行動にはそれぞれ差異があった。しかし、彼らの交流関係や、教団に対する姿勢については共通していた。仏教は、精神的な平等は唱えているが、現実世界での平等は唱えていない。五人は、仏教は精神のみならず、経済問題など現実の社会問題にも関係しているとらえていたと推測される。そして、それとともに、国家に協力するなど当時の教団のあり方に対する不満も抱いていたと考えられる。そのため、自由・平等・博愛を唱えるなど思想的に共感できる社会主義に接近し、社会主義者とも交流を結ぶようになったのであろう。

一九九〇年代以降、教団内で愚童・顕明・節堂の復権が行われ<sup>五五一</sup>、その思想や行動は現代では先駆的なものであったと評価されている。五人は、自らの仏教思想を現実社会で実現させるために、制度改革理論である社会主義に接近し、自らの運動や主張を展開させていったのである。五人の思想は、限界や弾圧もあったが、仏教（宗教）を基盤とした社会主義を展開できる可能性をしめしたものであった。

一

「宣言」週刊『平民新聞』第一号 一九〇三（明治三六）年十一月一日（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集別冊三 週刊平民新聞 I』明治文献資料刊行会 一九六二年 一頁）。

二

堺利彦「平民社より」『直言』第二卷第二号 一九〇五（明治三八）年二月一二日（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集第一集 直言』明治文献資料刊行会 一九六〇年 一四頁）。

三

太田雅夫『明治社会主義史の研究 明治三〇年代の人と組織と運動』（新泉社 一九九一年）九頁。このような状況下での初期社会主義の研究について、山泉進は「初期社会主義」というものを取りあげる意義が問題になっていることは確かです。（略）これは「社会主義」を研究することが、世の中一般の傾向としては、魅力がなくなっているということがあり、その状況で敢て日本の「初期社会主義」を研究していくことに、どういう意味があるのだろうという疑問がある。恐らく研究者個人個人の裡に研究を進めることに対して「不安感」をもっていると思う」（山泉進・岡野幸江報告「初期社会主義の現状と課題」『初期社会主義研究』創刊号 初期社会主義研究会 一九八六年 七二頁）と述べている。一九八三年に設立された初期社会主義研究会でも、「初期社会主義―私たちが八〇年代のはじめに考えた言葉の響きとは、現在ではだいぶ違ってきました。「社会主義」の 아우라 が剥げ落ちてくると同時に、「初期社会主義」に込めた私たちの希望もいくぶん薄くなってきました」と述べている。しかし、研究会自体については、「社会主義国家」が崩壊しはじめた以前のことでしたが、どちらかというと「社会主義」の現実を批判し、その理念を救出しようという志向をもった人たちの集りであつたように思います」と書いており、初期社会主義研究の意義についても、「初期社会主義―指令経済と共産党独裁に帰結するロシア革命後の「社会主義」に対して、「初期」にイメージされる、「未熟」で「曖昧」で、「多様」で「理念的」であるものだけを対置するだけで、この歴史的状況に私たちの定点を見つけだすことが出来るのだろうか。（略）しかし、私たちは近代のプロジェクトが未だに「未完」であることを知っている。貧困や飢餓が地上から追い払われたわけでもなく、戦争や殺戮が消滅しているわけ

でもない。近代の理想的統禦のなかに自然の破壊や人間への卑下が潜んでいることがわかったとしても、すべてを市場という（神）の手にゆだねるわけにはいかない。「初期社会主義」に含まれていた、あのイメージのエネルギーを、この小さな研究会に保持し、あの時代の遺産を現在に受け継いでいきたい」と述べている（『初期社会主義研究会より』『初期社会主義研究』第五号 一九九一年 頁数なし）。

「社会民主党宣言」『毎日新聞』・『萬朝報』一九〇一（明治三四）年五月二〇日（労働運動史料委員会編『日本労働運動史料 第二巻』 労働運動史料刊行委員会 一九六三年 三四六～三四七頁）。

松沢弘陽『日本社会主義の思想』（筑摩書房 一九七三年）四～五頁。松沢は、この著書で日本の社会主義を「明治社会主義」、「大正社会主義」、「昭和のマルクス主義」に分類している。しかし、荻野富士夫は「橋本さん（筆者注・橋本哲哉）は明治社会主義というような形で、大逆事件までを終期としますね。また大正社会主義という言葉を大正社会主義そのものに対する概念を明確にしないで、やや不用意に使っています。（略）初期社会主義の中の明治社会主義、大正社会主義というふうに元号を使って分けるのも、あまり適当ではないと思う」（成田龍一・岡野幸江・堀切利高・荻野富士夫・山泉進・岡崎一・後藤彰信談「初期社会主義の現状と課題」『初期社会主義研究』創刊号 初期社会主義研究会 一九八六年 八七～八八頁）と述べている。また、太田雅夫は初期社会主義の時期設定を社会問題解決のための結社が結成された一八九七（明治三〇）年から堺利彦らの売文社が解散した一九一九（大正八）年までとしている（前掲三『明治社会主義史の研究 明治三〇年代の人と組織と運動』一〇頁）。

柏木隆法『大逆事件と内山愚童』（JCA出版 一九七九年）、森長英三郎『内山愚童』（論創社 一九八四年）、眞田芳憲『大逆事件』と禅僧内山愚童の抵抗』（佼成出版社 二〇一八年）、『曹洞宗ブックレット 宗教と人権 8 仏種を植ゆる人―内山愚童の生涯と思想―』（曹洞宗二〇〇六年）、『曹洞宗人権学習小冊子 No. 1 仏種を植ゆる人―箱根林泉寺と内山愚童』（曹洞宗 二〇一二年）。

森長と柏木の著書は、いずれも序文で大逆事件について記すなど、大逆事件や初期社会主義運動との関係から愚童の生涯を扱っている。愚童の社会主義思想に関する研究は、眞田芳憲『大逆事件』と禅僧内山愚童の抵抗』（佼成出版社 二〇一八年）と、『曹洞宗ブックレット 宗教と人権 8 仏種を植ゆる人―内山愚童の生涯と

思想―』（曹洞宗二〇〇六年）がある。眞田は、仏教思想や曹洞宗の教義と比較しながら、愚童の思想を考察しているが、「宗教的倫理」の観点から愚童の思想を考察している。曹洞宗のブックレットでは、「愚童師の社会主義思想とその行動」という項目があげられており、愚童の社会主義思想について論じられている。しかし、曹洞宗が宗門近代史の再検討と人権啓発のために発行したブックレットであるため、明治期における曹洞宗と国家との関係に対する反省から、愚童の思想を人権擁護の先駆的な業績と位置付けている。

『眞宗ブックレットNo. 8 高木顕明 大逆事件に連座した念仏者』（眞宗大谷派二〇〇〇年）、「高木顕明の業績に学ぶ学習資料集」編集委員会・大阪教区高木顕明の業績に学ぶ実行委員会・解放運動推進本部『高木顕明の業績に学ぶ学習資料集』（眞宗大谷派二〇一〇年）、大東仁『大逆の僧 高木顕明の眞実 眞宗僧侶と大逆事件』（風媒社二〇一一年）、菱木政晴『極楽の人数 高木顕明「余が社会主義」を読む』（白澤社・現代書館二〇一二年）。そのうち、眞宗大谷派のブックレットや資料集は、明治期の眞宗大谷派と国家との関係に対する反省の観点に立ち、そのうえで顕明を被差別部落解放・非戦論・廃娼やその実践の先駆者と位置づけている。大東の著書は、顕彰的な立場ではなく、顕明の生涯を全体的にあきらかにしている。しかしその一方で、大逆事件の取り調べの際に検事・予審判事の誘導尋問を受けた顕明を「弱虫」と批判したり、顕明の僧侶として名誉欲を指摘したりしている。菱木は顕明の小論「余が社会主義」を『教行信証』などに書かれている眞宗の教義や親鸞の思想に引き付けて評価している。

末木文美士『近代日本の思想・再考Ⅰ 明治思想家論』（トランスビュー二〇〇四年）二五〇～二五四頁。

臨済宗妙心寺派人権擁護推進委員会編『大逆事件に連座した峰尾節堂の復権にむけて』（臨済宗妙心寺派一九九九年）、中川剛マックス『峯尾節堂とその時代 名もなき求道者の大逆事件』（風詠社二〇一四年）、田中伸尚『囚われた若き僧 峯尾節堂 未決の大逆事件と現代』（岩波書店二〇一八年）。そのうち、臨済宗妙心寺派のブックレットは先行研究の引用が内容の大半を占めており、中川は節堂の獄中手記「我懺悔の一節」を取り上げておらず、田中は節堂の妻・龍神ノブエに関する調査についての記述で多くのページを割いている。

中川剛マックス『峯尾節堂とその時代 名もなき求道者の大逆事件』（風詠社二〇

一二

一三

一四

一五  
一六  
一七

一四年）四八頁。  
辻本雄一「冬構えの覚悟―第四回『大逆事件サミット・IN熊野、新宮』に向けて―」（『大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース』第五六号 大逆事件の真実をあきらかにする会二〇一七年 五八頁）。  
佐橋法竜『井上秀天』（名著普及会 一九八二年）、福島寛隆「帝国主義成立期の仏教―『精神主義』と『新仏教』と―」（二葉博士還暦記念会編『仏教史学論集』永田文昌堂 一九七七年）、赤松徹真「井上秀天の思想―その生涯と平和論及び禅思想―」（『龍谷大学論集』第四三四・四三五号 龍谷学会 一九八九年）、近藤俊太郎「井上秀天の仏教と平和論」（『仏教史研究』第四〇号 龍谷大学仏教史研究会二〇〇四年）、守屋友江「世紀転換期における仏教者の社会観―『新仏教』における鈴木大拙と井上秀天の言説を中心に―」（『近代仏教』第一二二号 日本近代仏教史研究会二〇〇六年）、石井公成「明治期における海外渡航僧の諸相―北畠道龍、小泉了諦、織田得能、井上秀天、A・ダルマパーラー―」（『近代仏教』第一五号 日本近代仏教史研究会二〇〇八年）。  
これらの秀天に関する研究のなかで、社会主義者との関係や大逆事件について扱ったのは、佐橋と赤松だが、佐橋は吉田久一『日本近代仏教史研究』（吉川弘文館 一九五九年）の引用のみで社会主義者との関係や大逆事件について考察していない。赤松は雑誌『赤旗』の発行計画や第一回社会主義講演会の内容などの「神戸平民倶楽部」の活動といった秀天と社会主義者との関係に誤りがみられる。  
吉田久一『日本近代仏教史研究』（吉川弘文館 一九五九年）五二五―五二六頁。  
不二出版から全三三巻・補刊一・別冊一で復刻。  
佐藤任『毛利柴庵―ある社会主義仏教者の半生』（山喜房仏書林 一九七八年）、門奈直樹「明治地域主義言論の担い手―毛利柴庵と『牟婁新報』」（『総合ジャーナリズム研究』第二〇巻第三号 総合ジャーナリズム研究所 一九八三年）、武内善信「新仏教徒・毛利柴庵の思想と行動」（『同志社法学』第三七巻第五号 同志社法学会 一九八六年）、堀口節子「毛利柴庵に於ける明治社会主義の受容―足尾鉍毒問題を契機として―」（『龍谷史壇』第九九・一〇〇号 龍谷大学史学会 一九九二年）。明治期の『牟婁新報』に対する弾圧は、一九〇五（明治三八）年の官吏侮辱事件と、一九一〇（明治四三）年の大逆事件があげられる。柴庵に関する主な先行研究のなかで、これらの事件を取り扱ったのは、佐藤任・門奈直樹・武内善信である。佐藤はこの

一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八

ふたつの事件について論じているが、官吏侮辱事件で誤りがみられる。門奈は、柴庵執筆ではない『牟婁新報』掲載の論説を柴庵執筆するなど、これらの事件を含めた論考全体で誤りが多く、武内は大逆事件のみを取り上げている。

前掲一五『日本近代仏教史研究』五一五頁。

「被告人成石平四郎第二回訊問調書」(神崎清所蔵・大逆事件の真実をあきらかにする会刊『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八巻』近代日本史料研究会 一九六〇年二八一頁)。

前掲二「平民社より」『直言』第二巻第二号 一九〇五(明治三八)年二月一二日一四頁。

堺利彦「七種の人物」『牟婁新報』第七八〇号 一九〇八(明治四一)年一月一日(関山直太郎編著『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』吉川弘文館 一九五九年 二二六頁)。

母方の縁者には仏教哲学者の井上円了がおり、小千谷を出て得度するまでの間、愚童は井上のもとに住み込んでいたといわれている。

「予は如何にして社会主義者となりし乎」週刊『平民新聞』第一〇号 一九〇四(明治三七)年一月一七日(前掲『明治社会主義史料集別冊三 週刊平民新聞I』八五頁)。

塚本啓祥・磯田熙文校註『新国訳大蔵経 大般涅槃經(南本) I』(大蔵出版 二〇〇八年)二九五頁。

「如来性品 第十二」のほか、巻の第十九「光明遍照高貴徳王菩薩品 第二十二の一」(塚本啓祥・磯田熙文校註『新国訳大蔵経 大般涅槃經(南本) III』大蔵出版 二〇〇九年 七一・七四・七七頁)や、巻の第二十五「師子吼菩薩品 第二十三の一」、巻の二十六「同二十三の二」、巻の二十九「同二十三の五」、巻の三十一「同二十三の六」(同書 二二七・二三五・二三七・二四〇・二五〇・二七二・三五五・三七五・三八〇・三九〇・三九一頁)、巻の三十二「迦葉菩薩品 第二十四の二」(塚本啓祥・磯田熙文校註『新国訳大蔵経 大般涅槃經(南本) IV』大蔵出版 二〇〇九年 一二一頁)にも載っている。

中村元・紀野一義訳註『般若心経 金剛般若経』(岩波書店 一九六〇年)一〇八頁。

坂本幸男・岩本裕訳註『法華経(上)』(岩波書店 一九九一年)一九八頁。

淫欲と食欲がある衆生が住む世界で、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六種の世

二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇

界のこと。

淫欲と食欲を離れた衆生が住む世界で、清らかで純粹の物質だけがある。物質的なものから完全に離れた衆生が住む世界で、物質がまったく存在しない。

前掲二七『法華経（上）』二〇〇頁。

「今村公判ノート 内山愚童」（専修大学今村法律研究室編『今村力三郎訴訟記録第三二卷 大逆事件（三）』専修大学出版局 二〇〇三年 八六頁）。

森長英三郎『内山愚童』（論創社 一九八四年）七四頁より援用。

大逆事件の供述調書は、予審判事による誘導尋問や、調書の改ざんなどによって、供述者の発言がそのまま書かれていない可能性もあるため、注意が必要である。

愚童は小千谷を出て得度するまでの間、中国にわたったとも、上京して母方の縁者である井上円了の書生になったともいわれている。

「読書と記者」週刊『平民新聞』第一二二号 一九〇四（明治三七）年一月三十一日（前掲一『明治社会主義史料集別冊三 週刊平民新聞Ⅰ』一〇三頁）。

同右 一〇三頁。

「普達 甲第十一号 全国末派寺院」の内容は次の通りである。

「今般露西亜帝国ニ対シ宣戦ノ詔勅ヲ発セラレタルニ就テハ全国末派寺院及一般僧侶タル者深ク歎慮ヲ奉戴シ左ノ件々ヲ得シテ忠君報国ノ志ヲ發揮シ此国家有時ノ際ニ於ケル各自ノ本分ヲ完ウスヘシ

一 各寺院毎朝特ニ天皇陛下ノ玉体康寧聖寿無疆ヲ奉祝シ帝国陸海軍人ノ身体健全武運長久ヲ祈念スヘシ

二 各寺院僧侶説教若クハ法話ヲ為スノ際檀家信徒ニ対シ其職務ヲ励ミ且忠勇ノ精神ヲ以テ節儉ノ美風ヲ養ヒ切ニ帝国陸海軍人ヲ慰恤スルコトヲ奨ムヘシ

三 各寺院僧侶ハ此際各自ノ衣資ヲ節シテ当局告示ノ旨趣ニ準シ応分ノ恤兵金ヲ寄附スルコトニ努ムヘシ」

（「普達 甲第十一号 全国末派寺院」『宗報』第一七二号 工藤英勝「日露戦争関連公文書―曹洞宗『宗報』における近代戦争―」『曹洞宗研究員研究紀要』第二四号 曹洞宗宗務庁 一九九三年 一三四頁所収）。

内山愚童「兵士の母」週刊『平民新聞』第一五号 一九〇四（明治三七）年二月二一日（前掲一『明治社会主義史料集別冊三 週刊平民新聞Ⅰ』一一九頁）。

内山愚童『帝国軍人座右之銘』（柏木隆法「資料編」『大逆事件と内山愚童』JCA

出版一九七九年二〇四頁所収)。この秘密出版は、フランスのアナキズム雑誌『ラ・ナルシー』掲載の論文を大杉栄が翻訳し、日本の社会主義雑誌『光』第二六号(明治三十九年一月二五日)に掲載したものである。柏木の解説によれば、文中の傍線の部分は愚童が印刷の段階で省略、もしくは活字の不足でそのまま転載できなかった部分である。括弧内は愚童がその部分を当て字などで補った部分である。前掲三三『内山愚童』三七頁。

現在の貨幣価値で約一〇〇万円。

四  
四

堺利彦「獄中より諸友を懷ふ」『日本平民新聞』第一七号 一九〇八（明治四一）年二月五日（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集第五集 大阪平民新聞』明治文献資料刊行会 一九六二年 二六六頁）。

石川三四郎「函根大平台小集」週刊『平民新聞』第四五号一九〇四（明治三七）年九月一日（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集別冊四 週刊平民新聞Ⅱ』明治文獻資料刊行会 一九六二年 三六七頁）。  
同右 三六七頁。

古い習慣や考えに固執して、新しいものを好まないこと。また、そのさま  
前掲四五「函根大平台小集」三六七頁。

「社会主義者沿革」第二（松尾尊允編『続・現代史資料Ⅰ 社会主義沿革1』みず書房 一九八四年 七一頁）。

「地方通信」週刊『平民新聞』第三六号 一九〇四（明治三七）年七月一七日（前掲四五『明治社会主義史料集別冊四 週刊平民新聞Ⅱ』二九一頁）。



六一	五〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一
前掲五八『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一一〇～一一一頁。	前掲四五『函根大平台小集』三六七頁。	当時、谷中村に隣接する赤麻池の堤防が決壊し、たびたび洪水を引き起こしていたが、谷中村の買収を画策する栃木県は、決壊箇所を修復拒否を通告した。これに対して、残留民たちは生活維持のため、堤防の決壊箇所を自費で修復したが、県から河川法違反とみなされ、修復箇所の破壊命令が出された。	前掲四五『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一一〇～一一一頁。	石川三四郎『自叙伝 上巻 青春の遍歴』（理論社一九五六年）一一三頁。石川は、別の自伝『浪』でも愚童について、「ボンズ（筆者注・坊主）の心理的鍛練には仲々むずかしい難解な点も多いのですが、クレチャン（筆者注・クリスチャン）などの経験しない別の世界があるのです。内山愚童君はこの鍛錬によって、真に生死を超越したのです。幸徳等ともに死刑に処せられた時でも、いささかも心を動かす様子さえ現わさず、極めて平静に且ほがらかに、絞首台に登ったということです。立会った教師も、これには頭を下げたそうであります」（石川三四郎『浪』ソオル社一九五六年 七四～七五頁）と書いている。	前掲四五『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一一〇～一一一頁。	前掲四五『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一一〇～一一一頁。	前掲四五『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一一〇～一一一頁。	前掲四五『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一一〇～一一一頁。	前掲四五『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一一〇～一一一頁。	小田と山口は、一九〇四（明治三七）年一月一五日に東海道での「社会主義伝道行商」の途次に林泉寺に立ち寄り、その日の夜七時から寺で談話会を開いている。翌一六日には談話会に参加していた青年三名が社会主義協会に入会している（小田生・山口生「伝道行商日記（二）・（三）」週刊『平民新聞』第五〇号・第五一号一九〇四（明治三七）年一月二三日・三〇日 前掲四五『明治社会主義史料集別冊四 週刊平民新聞Ⅱ』四〇九・四一五頁）。

六二	前掲五八『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一一一頁。
六三	「平民の信仰」『新紀元』第九号 一九〇六（明治三九）年七月一〇日（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集第三集 新紀元』明治文献資料刊行会 一九六一年一三二頁）。
六四	「石川君の信書」『世界婦人』第一号 一九〇七（明治四〇）年六月一日（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集別冊（一） 世界婦人』明治文献資料刊行会 一九六一年八三頁）。
六五	「石川三四郎氏の書面」『世界婦人』第一五号 一九〇七（明治四〇）年八月一五日（前掲六四『明治社会主義史料集別冊（一） 世界婦人』一二二頁）。
六六	「石川三四郎兄より」『世界婦人』第一八号 一九〇七（明治四〇）年一〇月一日（前掲六四『明治社会主義史料集別冊（一） 世界婦人』一四五頁）。
六七	前掲五八『自叙伝 上巻 青春の遍歴』一四七頁。
六八	石川三四郎「虚無の靈光」（鶴見俊輔編『近代日本思想大系一六 石川三四郎集』筑摩書房 一九七六年 一五頁）。
六九	同右 一六頁。
七〇	「内山愚童 伊藤証信宛手紙（明治三八年一月はじめごろ記）」（前掲四〇「資料編」『大逆事件と内山愚童』二三〇頁）。『無我の愛』第一三号（明治三八年一月一〇日）の八頁の「四面呼応」欄にも、この愚童の手紙が載っているが、こちらは一部内容が異なっている（『復刻版 無我の愛』第一巻 不二出版 一九八六年）。
七一	『無我の愛』第六号 一九〇五（明治三八）年八月二五日 七頁（前掲七〇『復刻版 無我の愛』第一巻）。
七二	伊藤証信「無我苑生活（七）」『無我の愛』第八号 一九〇五（明治三八）年九月二五日 七頁（前掲七〇『復刻版 無我の愛』第一巻）。
七三	千葉耕堂『無我愛運動概観』（無我愛運動史料編纂会 一九七〇年）三一頁。
七四	「内山愚童 伊藤証信宛はがき（明治三九年九月二六日）」（前掲四〇「資料編」『大逆事件と内山愚童』二三二頁所収）。
七五	「四面呼応」『無我の愛』第七号 一九〇五（明治三八）年九月一〇日 七頁（前掲七〇『復刻版 無我の愛』第一巻）。
七六	「内山愚童 伊藤証信宛手紙（明治三九年一月一八日）」（前掲四〇「資料編」『大逆事件と内山愚童』二三三頁所収）。

七 七	「個人消息」『日刊平民新聞』第一号 一九〇七（明治四〇）年一月一日（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集第四集 日刊平民新聞』明治文献資料刊行会一九六一年二頁）。
七 八	「新刊紹介」『日刊平民新聞』第五三三号 一九〇七（明治四〇）年三月二〇日（前掲七七『明治社会主義史料集第四集 日刊平民新聞』二二七頁）。
七 九	前掲四五「函根大平台小集」三六七頁。
八 〇	前掲七〇「内山愚童 伊藤証信宛手紙（明治三八年一月はじめごろ記）」二三〇頁。
八 一	一九〇六（明治三九）年六月二八日、アメリカから帰国した幸徳秋水は、その帰国歓迎会で労働者の直接行動「ゼネラル・ストライキ」を重視する直接行動論を主張した。秋水の直接行動論は中央の社会主義者の間で急速に広がり、片山潜・田添鉄二ら議会政策派との対立が次第に目立つようになり、一九〇七（明治四〇）年二月一七日の日本社会党第二回大会では、秋水らの直接行動派と田添ら議会政策派とがはげしく対立している。
八 二	「内山愚童 伊藤証信宛はがき（明治四一年一月一日記）」（前掲四〇「資料編」『大逆事件と内山愚童』二三九頁所収）。
八 三	逮捕者に対する判決では、大杉栄・堺利彦・山川均・森岡永治・荒畑寒村・宇都宮卓爾・百瀬晋・村木源次郎・佐藤悟・徳永保之助・大須賀里子・小暮れいが有罪となり、神川松子・管野須賀子は無罪となった。
八 四	『入獄記念 無政府共産』を秘密出版したのち、愚童は『帝国軍人座右之銘』や『無政府主義道徳非認論』を次々と秘密出版した。
八 五	内山愚童『入獄記念 無政府共産』（日本アナキズム運動文庫 二〇〇七年復刻）五頁。
八 六	同右 六頁。
八 七	同右 七頁。
八 八	同右 五頁。
八 九	同右 七・八頁。
九 〇	同右 三・八・九頁。
九 一	同右 三・四・一〇・一一頁。
九 二	前掲四〇『帝国軍人座右之銘』二〇五頁。
九 三	同右 二〇五頁。

九四	眞田芳憲『〈大逆事件〉と禅僧内山愚童の抵抗』（佼成出版社 二〇一八年）二一四頁。
九五	前掲八五『入獄紀念 無政府共産』三頁。
九六	同右九・一〇頁。
九七	幸徳秋水は、獄中から磯部四郎・花井卓蔵・今村力三郎三弁護人に出した「陳弁書」で、「無政府主義者の革命成る時、皇室をドウするかとの問題が、先日も出ましたが、夫れも我々が指揮・命令すべきことではありません。皇室自ら処すべき問題です。前にも申す如く、無政府主義者は、武力・権力に強制されない万人自由の社会の実現を望むのです。其社会成るの時、何人が皇室をドウするといふ権力を保ち、命令を下し得る者がありませう。他人の自由を害せざる限り、皇室は自由に勝手に其尊榮・幸福を保つの途に出で得るので、何等の束縛を受くべき筈はありません」（幸徳秋水「暴力革命について 仮題」神崎清編『大逆事件記録第一巻 新編獄中手記』世界文庫 一九七一年 二九〇三〇頁）と書いています。
九八	前掲三三『内山愚童』一三七頁より援用。
九九	「大逆事件判決書」（専修大学今村法律研究室編『今村力三郎訴訟記録第三〇巻 大逆事件（一）』専修大学出版局 二〇〇一年 一二〇頁）。
一〇〇	ドイツの無政府主義者であるマックス・バシンスキーの著書を、和歌山県新宮の大石誠之助が翻訳し秘密出版したとされている。
一〇一	内山愚童『無政府主義道德非認論』（前掲四〇「資料編」『大逆事件と内山愚童』二〇六頁）。
一〇二	同右二一〇七頁。
一〇三	前掲八五『入獄紀念 無政府共産』一一・一三頁。
一〇四	「内山愚童 岡林寅松・小松丑治宛書簡（明治四二年九月一二日消印）」（大逆事件記録刊行会編『大逆事件記録第二巻 証拠物写（下）』世界文庫 一九六四年 五八八頁）。
一〇五	一九〇八（明治四一）年一一月に静岡出身の足尾銅山坑夫を泊めたところ、その坑夫が郷里まで帰るための路銀がないと言うので金五〇銭を貸した。ダイナマイトはその際に坑夫がお礼として置いていったものである。
一〇六	治安を妨げ、人の身体・財産を侵害する目的による爆発物の使用などを処罰することを規定した太政官布告であり、一八八四（明治一七）年一二月二七日に制定され、

一〇七	内山愚童 無題「遺稿」(前掲四〇「資料編」『大逆事件と内山愚童』二二二頁)。
一〇八	内山愚童「平凡の自覚」(前掲九七『大逆事件記録第一巻 新編獄中手記』三七一頁)。
一〇九	同右 三七一〜三七二頁。
一一〇	同右 三七二頁。
一一一	同右 三七二頁。
一一二	同右 三七二頁。
一一三	同右 三七三頁。
一一四	同右 三七四頁。
一一五	同右 三七五頁。
一一六	同右 三七七頁。
一一七	同右 三七六〜三七七頁。
一一八	同右 三八〇頁。
一一九	同右 三八二〜三八三頁。
一二〇	同右 三八四頁。
一二一	同右 三八五〜三八七頁。
一二二	同右 三八九〜三九〇頁。
一二三	前掲一〇七 無題「遺稿」二一〇〜二二二頁。
一二四	同右 二二二頁。
一二五	神守空観(一八一八〜一八八九)は、東本願寺の高倉学寮で講師(現在の学長職に相当)をつとめていた大含(一七七三〜一八五〇)に師事していた、江戸後期から明治にかけての学僧である。顕明は、神守の近世仏教の思想の影響を受けていたと推測される。
一二六	顕明以外の同時代の真宗による日蓮宗批判は、一八九三(明治二六)年七月一六日、日蓮宗非仏教論ヲ唱へテ著名ナル」という真宗門徒の石上敬虔が、金沢市公会堂で仏教大演説会を公開で開いており、「耶蘇教ノ国安ヲ害スルヲ且ツ日蓮宗ノ非仏教ナルヲ証明シテ一步モ仮スヲナク是ヲ痛論シ是ヲ排撃シ」ている(石上敬虔述『日蓮宗非仏教論』雲根堂 一八九三年 一頁)。また、一八九四(明治二七)年六月一日に、真宗門徒の松下義子が名古屋市伏見町音羽座で日蓮宗非仏教の講演

会を行っており、その講演を聴講していた日蓮宗僧侶・有元日仁と討論になったという（法華講史編集委員会編『日蓮正宗 法華講百年史年表』日蓮正宗法華講連合会一九七三年五〇頁）。

これらの真宗関係者による日蓮宗批判に対して、日蓮宗の側からも反論があがっている。日蓮宗信者の窪田貞二は、一八九三（明治二六年）九月二四日に『日蓮宗非仏教論弁妄 破邪顯正論』（池善書店・棚田書店 一八九三年）を出版し、「日蓮宗ヲ非仏教ナリト称フル妄言家アリ余ハ固ヨリ牽強付会ノ説ナルヲ信シテ疑ハサルト雖迷夢ヲ信スル俗者アラント恐ル余浅学不才ナリト雖法華ノ正法ヲ説クニ邪弁ヲ要センヤ」（窪田貞二「破邪顯正論序」四頁）『日蓮宗非仏教論弁妄 破邪顯正論』池善書店・棚田書店 一八九三年）、「釈尊ノ本法末法宗教ノ上乘トス可キモノ独我日蓮宗アルノミ奸者曲筆シテ他力ノ妙用ヲ唱道シ釈尊ノ神通力ヲ奪ハントスル」（同書 四頁）、「釈迦諸仏共ニ法華ノ為ニ出生ス一弥陀本願ヲ説クヘキニ非ス」（同書 三一頁）、「法華經ヲ誹謗スルモノハ（略）釈尊ヲ誹謗スルモノナリ（略）無間地獄へ墮落スルハ明文ニ炳々タリ」（同書 三八頁）と、石上の『日蓮宗非仏教論』への反論とともに、真宗を批判している。

窪田と同じく日蓮宗信者の吉村智俊も、一九〇一（明治三四）年八月二十九日に『日蓮宗対真宗 孰非仏教 上巻』（大成堂 一九〇一年）<sup>二二六</sup>を刊行し、「専修念仏ノ緇徒、邪教ノ執情転深フシテ、既倒ノ腐難ヲ復述シ、以テ念仏無間ノ義ヲ僻難ス」（吉村智俊『日蓮宗対真宗 孰非仏教 上巻』大成堂 一九〇一年 四頁）、「他ノ宗祖ノ俗姓ヲ評論スルヤ。是却テ真宗ハ非仏教ニシテ。汝等亦タ外道魔賊タルノ証拠ナリ」、「親鸞ノ如キ。非僧非俗ノ禿頭ハ。釈氏ニ非ス」（同書 一五頁）、「日蓮今生ニハ貧窮下賤ノ者ト生レ施陀羅力家ヨリ出タリ等トノ玉ヘリ。然ルヲ中古已来。其宗（筆者注・真宗）ノ禿頭等。此ノ施陀羅ノ梵語ヲ牽強付会シテ。吾国ノ穢多ナリトシ」（同書 一六頁）、「尊貴ニ生ル、ヨリ。寧口卑賤ニ生スルハ其功德遙カニ勝レタリ。故ニ聖祖若シ施陀羅ノ家ニ生レ玉ハ。弥々大慈大悲ノ広大ナルヲ信ズベシ。（略）親鸞モシ実ニ俗姓高貴ナラハ（略）無間ニ墮スヘシ」（同書 一九頁）と、真宗による日蓮宗批判への反論とともに、日蓮宗の立場から真宗を非難している。とくに吉村は、この書籍を出版する理由について、「頃日客アリ、日蓮宗非仏教ト題スル、一小冊子ヲ袖ニシテ来リ、余ニ示シテ、之カ反駁ヲ請フ把テ之ヲ展開スル

二、之則チ、尾張国西春日井郡平田村ノ鸞徒、高木顕明ト呼ベル禿頭ガ、去ル明治廿七年中、京都ニ於テ演説会ヲ開キ吐露スル所ノ邪説ノ筆記ニシテ全編都テ存覺及ヒ靈城ガ涕唾ノミ、此レ僉既倒ノ腐論ナレバ、齒牙ニ係ル足ラサレモ、黙シテ之ヲ攻メズンバ、童蒙太ク迷ヒ易ク、流毒幼稚ヲ傷メン歟」(同書 四頁)と、顕明の「日蓮宗非仏教」の演説に対する反論をあげている。	一二七
日蓮が他宗を邪宗として非難したときに用いた「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」の四句のこと。	一二八
題目を唱えれば、即身成仏できるということ。	一二九
同右五・六頁。	一三〇
高木顕明述『日蓮宗非仏教』(法蔵館 一八九四年) 三七頁。	一三一
同右四一、四二頁。	一三二
日蓮が他宗を邪宗として非難したときに用いた「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」の四句のこと。	一三三
題目を唱えれば、即身成仏できるということ。	一三四
前掲一三〇『日蓮宗非仏教』三頁。	一三五
同右二頁。	一三六
同右一二、一三頁。	一三七
同右二三頁。	一三八
同右四四頁。	一三九
同右六頁。	一四〇
同右八頁。	一四一
同右一〇頁。	一四二
石上敬虔も『日蓮宗非仏教論』で「日蓮ハ幼名善吉ト云フ貞応元年壬午二月十六日房州長狭郡東条郷市河村小湊ニ生ル父ハ旃陀羅(茲ニ穢多ト訳ス)団五郎ト云ヒ母ハ同村漁夫蓮次郎ノ下女お長ト云フ(日蓮深密伝ニお長ハ蓮次郎ノ長女トアレト予力取調ヘタルニ從ヒハお長ハ遠江国周智郡貫名村ノ者ナリ)密通シテ孕ム蓮次郎ノ之ヲ知ルヤ穢多トノ密通ヲ大ニお長ヲ放逐スお長力鉄面是レヲ幸ヒノ事トシ自ラ団五郎方ニ行テ婚ス其孕ム所ノ子団五郎ノ賭場ニ於テ生ル(略)日蓮カ棟梁トハ即チ穢多ノ棟梁ニシテ語ヲ代ヘテ云ヘハ穢多ノ頭ナリト云フヲナリ日蓮ハ何ノ頭テモ頭ハ良イモノト思ヒ自慢シタルヲナラン笑フヘシ笑フヘシ(略)穢多ノ分際	

- ヲ忘レ国法ヲ恐レス又天道人理ニ背ク如キハ憎テモ猶ホ余リアルナリ」(前掲二六『日蓮宗非仏教論』二〇三・三四〇三六頁)と、部落差別を利用して日蓮を批判している。そのため、真宗による日蓮宗批判で、日蓮の出生について部落差別を利用して批判することは、真宗にとっては常套手段だったと推測される。
- 一四三 「高木顕明 調書」(神崎清所蔵・大逆事件の真実をあきらかにする会刊『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第五卷』近代日本史料研究会 一九六二年 九六頁)。資料中の「名」は「戸」の誤りと思われる。
- 一四四 一九〇四(明治三七)年の記録によれば、新宮の被差別部落の戸数と人口は、戸数六八戸、人口三六六人(男性一九四人、女性一七二人)だったという(『人権からみた新宮のあゆみ(草稿)』新宮市教育委員会 二〇〇五年 四頁)。新宮の被差別部落の多数、もしくははそのすべてが浄泉寺の門徒であったことがうかがえる。
- 一四五 藤林深諦「復命書」(高木顕明の事績に学ぶ学習資料集)編集委員会・大阪教区高木顕明の事績に学ぶ実行委員会・解放運動推進本部『高木顕明の事績に学ぶ学習資料集』真宗大谷派 二〇一〇年 七八頁)。
- 一四六 沖野岩三郎「彼の僧」(『煉瓦の雨』福永書店 一九一八年 二八四〇二八九頁)。
- 一四七 沖野岩三郎「日記を辿りて」(『失はれし真珠』和田弘栄堂・警醒社書店 一九二一年 一三四〇一三五頁)。
- 一四八 沖野岩三郎「大逆事件の思い出―回想の人々―(一)」(『文芸日本』昭和三〇年九月号 文芸日本社 一九五五年 一三頁)。資料中に「水平社」とあるが、水平社が結成されたのは一九二二(大正一一)年であるため、ここでは沖野が被差別部落民を意味するニュアンスとして「水平社」という言葉を使ったと推測される。
- 一四九 峯尾節堂「我懺悔の一節」(前掲九七『大逆事件記録第一巻 新編獄中手記』四八六頁)。
- 一五〇 同右 四八六頁。
- 一五一 浄泉寺には、顕明が部落民の子どもや学生の学習支援に使ったと思われる、自筆の地蔵の絵や、新宮出身の童謡作家・東くめが作った「鳩ぼっぼ」の詩が写されたふすま紙などが残されている。
- 一五二 「平出修宛 沖野岩三郎書簡」(『定本 平出修集 続巻』春秋社 一九六九年 四九八頁)。
- 一五三 藤林深諦「復命書」には「町内門信徒ハc。(筆者注・新宮の被差別部落)ノ門徒新



一五四

平民ナルコトヲ輕蔑シテ淨泉寺ニ於テ布教ノ時ニモ彼レト同座スル事ヲ嫌ヒ」という記述がある（前掲一四五『高木顕明の事績に学ぶ学習資料集』七八頁）。

一五五

以前から高木君は私の居る教会員や牧師と交流をし始めた」という記述がある（前掲一五二『定本 平出修集 続巻』四九八頁）。

一五六

大石は、同志社を中退後アメリカで医師免許を取り、一八九五（明治二八）年に帰

国すると、翌年四月から新宮の仲之町で「ドクトル大石」の看板を掲げて医院を開業した。その後、シンガポールやインドにわたり、伝染病などの研究を行うが、インドでカースト制度を実際に見たことにより、社会主義に関心を抱くようになった。一九〇一（明治三四）年一月、再び新宮に戻ると、「無請求主義」を掲げ、貧しい者からは診療費を取らず、金持ちからは多額の診療費を取った。幸徳秋水や堺利彦らと交流し、週刊『平民新聞』などの社会主義新聞・雑誌にも数多くの文章を投稿している。

大石が新聞などに寄稿した文章には、被差別部落民のことを言及したと思われるものもある。「紀伊より」（『光』第一巻第六号 明治三十九年二月五日）には、「貧民部落」の「独身の大工」の話をしている。

「寒いについて未だ悲惨な話があります。此間貧民部落へ行つて聞きましたのに、或独身の大工が長らくの病気で困窮に陥り、道具も着物も蒲団も有りたけの質草は皆置きつくし、唯破れたる袴と襦袢一枚になり、此頃の寒さに暖をとる為め棚や床板を取りはずし、之を細かく削つて燃やして居りましたが、或時不図眠む気がさしてトロ／＼と寝入つてしまひ、傍にある木に燃移るのを知らずに居たのを、丁度其所へ来合はした近所の人が見附けて消し止めたさうです。寒いのに着物が少ければ火を焚かねばならず、眠むくなれば寝入つて行かねばならぬは甚だ自然な事であるが、斯う言ふ所から火事が起つたら誰の責任に帰するものでしょうか」

（新宮禄亭生「紀伊より」『光』第一巻第六号 明治三十九年二月五日 森長英三郎・仲原清編『大石誠之助全集 1』弘隆社 一九八二年 八四頁）。

また、「貧者の心得」（『家庭雑誌』第四巻第五号 明治三十九年五月一日）では病氣の子どもを見舞ったときの母親の言い訳の真相を次のように述べている。

「昨年夏の事である。或貧民部落に一人の病児を見舞ふたのであるが、其家は九尺四方程の物置小屋へ三枚の畳を敷いて、其畳と言ふものは表が全く破れ去つて、唯藁ばかりが残つて居るので、其上へ薄き蒲団をのべて、骨と皮とに瘠せ果てた子供が伏して居た。片方の板間には一つの瓦竈に古びたる土鍋が掛けられ、その前に茶碗と皿と箸の様な食器が五六点無造作に並べられてある。又後ろの方の竹竿には泥に塗れた股引と手拭と襦袢の様な古切れが打懸けられてある。余が此家へ這入つた時母と覺しき一人の女が、病児の側に座つたまゝ俄かに容を正して表の方へ向き直つたが、之に目を注めて見ると上には袖の短い中形の襦袢を着、下には唯腰巻と前垂を巻附けたばかり、着物と言ふものを着て居ないのである。斯う言ふ無様な風体をして居るからでもあらう、彼は起ち上つて余を迎へる事も為し得ず、故らに我子を恤はるが如く粧ひ、唯言葉を改めて「子供が悪戯をしてコンナに取散らしまして」とか「暑いので斯う言ふ容姿をして誠に済みません」などゝ、連に言訳をして余が来訪を謝して居た。此家に入つて一目にその哀れなる状態を観察し得た余は、今此婦人の言葉を聞き、更に非常の感慨に打たれたのである。此家の穢汚いのは決して子供があつて物を取散らした為でなく、寧ろ取散らすべき物が欠乏して居るからではないか。又此母が着物を着て居ないのも決して暑いからでなく、着るべき物を有たぬからではないか。それはもう何の位隠さうとしても、明かに見透いて居る作言であるが、斯う言ふ偽りを曰ふても、自分の醜い有様を隠さうと思ふは如何ばかり可憐き事であらう。余は此親子を慰めての帰り道、これ等の事を胸に繰返して計らず暗涙に噎んだのである」

（大石禄亭生「貧者の心得」『家庭雑誌』第四卷第五号 明治三十九年五月一日 同全集九四〇九五頁）。

大石は、「今の感想」（『牟婁新報』一〇一三号 明治四三年一月一日）で、自らの使命について次のように述べており、大石の被差別部落民をはじめとする「貧者」に対する取り組みの思想的な根底がうかがえよう。

「自分が畢生の事業として恥かしからぬ事は人類を愛する事だと信ずる。殊に貧者と青年を愛する事が僕の使命であると思うて、如何なる場合にも彼等に同情を寄せる。それだから僕は常に彼等の状態を研究して、其心を汲み取る事に努めて居る。若しも貧民や青年に見捨てられたと知ったら、自分は時勢に後くれたやうな心地がするだらう。僕にとつてはそれほど寂しい、恐ろしい事はない」

- (大石禄亭「今の感想」『牟婁新報』一〇一三号 明治四三年一月一日 同全集 三〇七頁)。
- 一五七 新宮市史編さん委員会編『新宮市史』(新宮市役所 一九七二年) 四八九頁。
- 一五八 前掲一五二「平出修宛 沖野岩三郎書簡」 四九八頁。
- 一五九 同右 四九八頁。
- 一六〇 前掲一四七「日記を辿りて」 一三二頁。
- 一六一 辻本雄一「高木顕明と紀州新宮・年譜的事柄の背景」(『身同 同和推進本部』第一八号 真宗大谷派同和推進本部 一九九八年 八〇〇八頁)。
- 一六二 週刊『平民新聞』第一四号(明治三十七年二月一四日)の「社会運動彙報」には、「紀州熊野の社会主義 紀州熊野に社会主義の輸入されしは今より数年前にして、其の輸入者は日本基督教教会派の牧師間宮小五郎氏なるが、今は医師大石誠之助氏等専ら斯主義の伝播に尽力し居れり」(前掲一『明治社会主義史料集別冊三 週刊平民新聞I』一二二頁)と、間宮と大石のことが紹介されている。
- 一六三 『牟婁新報』一九〇六(明治三九)年一月三〇日(新宮市史編さん委員会編『新宮市史 史料編下巻』新宮市役所 一九八六年 六一二頁)。
- 一六四 「小野日記」一九〇八(明治四一)年一月三日(前掲一六三『新宮市史 史料編下巻』八七〇頁)。
- 一六五 前掲一四七「日記を辿りて」 一三二〜一三三頁。
- 一六六 『熊野新報』一九〇九(明治四二)年一月一八日(前掲一六三『新宮市史 史料編下巻』六一二〜六一三頁)。
- 一六七 守安敏司「新宮の部落史」(前掲一四四『人権からみた新宮のあゆみ(草稿)』三八頁)。
- 一六八 前掲一四八「大逆事件の思い出―回想の人々―(一)」 一三頁。
- 一六九 前掲一四七「日記を辿りて」 一三五〜一三六頁。
- 一七〇 同右 一三三頁。
- 一七一 「彙報」『宗報 号外』一九〇四(明治三七)年二月一五日(『宗報(四)「宗報」等機関誌復刻版一二』真宗大谷派 一九九四年 一九〇二頁)。
- 一七二 戦闘がはじまったのは二月八日だが、宣戦布告は二月一〇日である。
- 一七三 大谷派法主「御垂示」『宗報 号外』一九〇四(明治三七)年二月一五日(前掲一七一『宗報(四)「宗報」等機関誌復刻版一二』一七頁)。

一七四	真諦・俗諦が協力し合うこと。真俗二諦論ともいう。真諦は浄土真宗の教義で、俗諦は国の教えだが、近代では真諦Ⅱ浄土往生の信心、俗諦Ⅱ国家への忠誠と説示されていた。
一七五	本来の意味は、念仏を弾圧する天皇や、それに従って念仏を嫌う人たちのために念仏しなさいということ。つまり、念仏を弾圧する人たちであつても排除してはいけないという教え。
一七六	前掲一四三「高木顕明 調書」九六頁。
一七七	同右 九六頁。
一七八	「高木顕明 証人調書」(塩田庄兵衛・渡辺順三編『秘録・大逆事件(下巻)』春秋社一九六一年一〇六頁)。
一七九	高木顕明「余が社会主義」(前掲一四五『高木顕明の事績に学ぶ学習資料集』一〇四頁)。
一八〇	同右一〇四頁。
一八一	同右一〇四頁。
一八二	同右一〇四頁。
一八三	同右一〇四頁。
一八四	同右一〇五頁。
一八五	同右一〇五頁。
一八六	同右一〇五頁。
一八七	同右一〇五頁。
一八八	同右一〇六頁。
一八九	同右一〇六頁。
一九〇	同右一〇六頁。
一九一	同右一〇四頁。
一九二	同右一〇五頁。
一九三	同右一〇六頁。
一九四	同右一〇四頁。
一九五	法主の「直命」の内容は、次の通りである。

「執れも予て承知の通日露開戦に就ては陛下に於せられては昼夜御心配のこと誠に一般臣民にとりては畏れ入る次第である就ては二諦相依の宗旨に流を汲む輩

一九六

一、今度露国と戦端を啓かれ既に宣戦の詔勅も公布に相成りしは実に開国以来未曾有の一大事にして

一一  
九九  
八七

一九九

二〇〇	日、「超戦争観」(『精神界』第四卷第一号 明治三十七年一月一日)、暁烏敏「徴
二〇一	兵に就き家事に苦悶する人に与ふる書」(『精神界』第五卷第五号 明治三十八年五月
二〇二	一〇日)、「国家及び国民に対する警告」(『精神界』第五卷第八号 明治三十八年八月
二〇三	一〇日)といった戦争に関する論説を多数掲載している。
二〇四	大須賀秀道『戦時伝道大観』(法蔵館 一九〇五年)一六頁。
二〇五	南条文雄「身心二命談」(『戦争法話』法蔵館 一九〇四年 一四三頁)。
二〇六	前掲一七九「余が社会主義」一〇六頁。
二〇七	泉恵機「高木顕明―近代日本における仏教者の一軌跡」(大谷大学真宗総合研究所
二〇八	編『親鸞聖人七百五十回忌御遠忌記念論集下巻 親鸞像の再構築』筑摩書房 二〇
二〇九	一年 三三九頁)。
二一〇	大逆事件記録刊行会編『大逆事件記録第二巻 証拠物写(上)』(世界文庫 一九六
二一一	四年)二六二頁。
二一二	前掲一五二「平出修宛 沖野岩三郎書簡」四九八頁。
二一三	前掲一五二「生を賭して」一五七頁。
二一四	前掲一五二「平出修宛 沖野岩三郎書簡」四九九頁。
二一五	前掲一四三「高木顕明 調書」九六〇九七頁。
二一六	同右 九六頁。
二一七	前掲一七八「高木顕明 証人調書」一〇五頁。
二一八	「大石誠之助 徳美夜月宛はがき(一九〇八年一月六日消印)」(前掲一〇四『大逆
二一九	事件記録第二巻 証拠物写(下)』六〇八頁)。「未来の経済組織」は幸徳秋水の秘
二二〇	密出版『経済組織の未来』(アーノルド・ローラー「ドイツ社会民主党員ジークフリ
二二一	ート・ナハト)『社会的総同盟罷工論』の翻訳)と思われる。
二二二	前掲一五二「平出修宛 沖野岩三郎書簡」四九九頁。
二二三	前掲一四三「高木顕明 調書」九八頁、「高木顕明 聴取書」(前掲一九『大逆事件
二二四	訴訟記録・証拠物写 第八巻』三八二頁)。
二二五	前掲一四三「高木顕明 調書」九八頁。
二二六	同右 九八頁。
二二七	前掲一四七「日記を辿りて」一三六頁。
二二八	「高木顕明 第三回調書」(前掲一九『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八巻』一
二二九	〇七頁)。

二一八 「証人高木顕明第二回訊問調書」(前掲一九『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八

卷』三五七頁)。

二一九 平出修「大逆事件意見書」(『定本 平出修集』春秋社一九六〇年三三二頁)。こ

の意見書で、平出は「本件に於て板倉検事は、被告新村善兵衛の不利益なる証拠として、武田万亀太の証言を援用せられて居る、武田万亀太は耶蘇教の信者である、此男は新村兄弟(筆者注…新村善兵衛・忠雄兄弟)にメソヂスト教会に入会せよとすすめたけれど、彼等は、無政府主義者だから、耶蘇教へは這入らないと云うたと証言して居る、検事は之を援用して、新村善兵衛は無政府主義者であるから耶蘇教へ帰依しなかつた、誠に危険な思想であると論下せられて居る」(同書三三一頁)と述べている。平出は、顕明の思想が危険思想でないことを弁論するために、顕明の信仰を取り上げたと思われる。

二二〇

顕明は、当初は大逆事件の証人として東京で取り調べを受けたが、帰郷後に刑法第七三条「大逆罪」の共犯で起訴された。帰郷後に沖野岩三郎が顕明のもとを訪問していたらしく、沖野の「事実小説」である「われ患難<sup>なやみ</sup>を見たり(四)」(『婦人倶楽部』第六卷第一号 大正一四年一月一日)には、顕明と沖野の次のようなやりとりがある。

「同じく家宅捜査を受けた私(筆者注・沖野)は、二三日の後に彼(筆者注・顕明)を訪問して、「何かの間違ひさ。」と暢気なことを言つて笑ひ乍ら話してゐるうちに、彼はこんな事を言つた。

「沖野さん、あなたは警察で宗旨の事を訊かれましたか。」

「え、訊かれました。新教か旧教かつて訊かれました。」

「僕には、あなたの一番有難いと思つてゐるのは何であるかと訊きましたよ。」

「さうですか。それで、あなたは何う答へましたか。」

「僕は阿弥陀如来だと答へました。」

「それで、もう先方は何とも尋ねませんでしたか。」

「阿弥陀如来の外に尊いと信じるものはないかと念を押すので、僕は其他に何物もないと断言しました。」

「ふん？」と太息を吐くやうにした私は、「先方は別の意味で夫れを訊いたのぢやないでせうか。仮令ば国民として最も尊しと信じてゐるといふやうな、国民として

二二一	『熊野新報』一九〇八（明治四一）年八月六日（和歌山県立図書館所蔵）。
二二二	「小野日記」一九〇八（明治四一）年八月三日（前掲一四四『人権からみた新宮のあゆみ（草稿）』七四～七五頁）。
二二三	前掲一四三「高木顕明 調書」九八頁。
二二四	同右九七～九八頁。
二二五	同右一〇〇頁。
二二六	今村力三郎「公判摘要」（前掲三二『今村力三郎訴訟記録第三二卷 大逆事件（三）』七八頁）。
二二七	前掲一四九「我懺悔の一節」四八五頁。
二二八	「新村忠雄 今村力三郎宛書簡（明治四三年一月二四日消印）」（前掲一七八『秘録・大逆事件（下巻）』二〇四頁）。
二二九	「新村忠雄 高木顕明宛書簡（明治四二年一〇月一四日消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（上）』二六七頁）。
二三〇	「新村忠雄 高木顕明宛書簡（明治四三年二月六日消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（上）』二六八頁）。
二三一	「新村忠雄 高木顕明宛書簡（明治四三年春ごろ消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（上）』二六五頁）。
二三二	「新村忠雄 高木顕明宛書簡（明治四三年四月一八日消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（上）』二六七頁）。
二二三	前掲一五五「生を賭して」一五九～一六〇頁。
二三四	「大石誠之助 聴取書」（前掲一四三『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第五卷』一四頁）。
二三五	前掲一四九「我懺悔の一節」四八七頁。

の常識を目的として訊いたので、そんな宗旨的の返事を要求したんぢやないでせう？」と言った。すると彼は愕然としたやうに顔を仰向けて、ちつと私を見詰めたまゝ暫く黙つてゐた」

（沖野岩三郎「われ患難を見たり（四）」『婦人倶楽部』第六卷第一一号 大正一四年一月一日（一三五頁））。

このやりとりからは、顕明は「一番有難いと思つてゐる」ものを訊かれて、阿弥陀如来と答えただけで、皇室の否定に関する供述はしていない。

『熊野新報』一九〇八（明治四一）年八月六日（和歌山県立図書館所蔵）。

「小野日記」一九〇八（明治四一）年八月三日（前掲一四四『人権からみた新宮のあゆみ（草稿）』七四～七五頁）。

前掲一四三「高木顕明 調書」九八頁。

同右九七～九八頁。

同右一〇〇頁。

今村力三郎「公判摘要」（前掲三二『今村力三郎訴訟記録第三二卷 大逆事件（三）』七八頁）。

前掲一四九「我懺悔の一節」四八五頁。

「新村忠雄 今村力三郎宛書簡（明治四三年一月二四日消印）」（前掲一七八『秘録・大逆事件（下巻）』二〇四頁）。

「新村忠雄 高木顕明宛書簡（明治四二年一〇月一四日消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（上）』二六七頁）。

「新村忠雄 高木顕明宛書簡（明治四三年二月六日消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（上）』二六八頁）。

「新村忠雄 高木顕明宛書簡（明治四三年春ごろ消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（上）』二六五頁）。

「新村忠雄 高木顕明宛書簡（明治四三年四月一八日消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（上）』二六七頁）。

前掲一五五「生を賭して」一五九～一六〇頁。

「大石誠之助 聴取書」（前掲一四三『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第五卷』一四頁）。

前掲一四九「我懺悔の一節」四八七頁。



二三六

当時、三重県度会郡には東二見村と西二見村は実在していたが、「二見村」という地名は存在しない（角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典 第二卷 三重県』角川書店 一九八三年 九四五頁）。

二三七

「峯尾節堂 調書」（前掲一四三『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第五卷』六一頁）。

二三八

「証人峯尾節堂訊問調書」（前掲一九『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八卷』三三四頁）。

二三九

「四面呼応」『無我の愛』第九号 一九〇五（明治三八）年一〇月一〇日 八頁（前掲七〇『復刻版 無我の愛』第一卷）。

二四〇

大石の通信は「兼て噂にて聞き居候通、兄等が熱心と真摯なる態度、確に見届候」（前掲七五「四面呼応」『無我の愛』第七号 七頁 前掲七〇『復刻版 無我の愛』第一卷）という内容である。このほかにも大石は「科学の発明に関して」という質問状を出しており、『無我の愛』第一一号（明治三八年一月一〇日）の四頁に伊藤の回答とともに掲載されている。

「▲問ふ、吾人が民衆の物質的苦痛を除去せんとする社会的革命は、無我愛に背けるもの也と聞く。知らず、科学の発明によりて、天災地変の如き自然力に抗せんとするも亦非なりや（紀伊 大石誠之助）」

●答ふ、吾人は民衆の物質的苦痛を除去するの企てを以て必ずしも無我愛に背けるものと思はざること、猶ほ医術を以て必ずしも無我愛に背けるものと思はざること、之と同じく吾人は科学の発明によりて、民衆の利便を計るの企てを以て無我愛に背けるものと思はざること、猶汽車汽船の発明を以て無我愛に背けるものと思はざることが如し。只、多くの社会主義者の唱ふるが如く単に財産を共有にすることによりて、完全なる自由平等博愛の理想郷を実現し得べしと為すことの無謀なること、猶、医術の発達や汽車汽船の発明によりて、理想郷を実現し得べしと為すことの無謀なるが如きを云ふのみ。君よ、完全なる自由平等博愛は只我執妄念を除く去して、直に個人の心霊の上に獲得すべきものなるか」

二四一

（前掲七〇『復刻版 無我の愛』第一卷）。  
成江からの通信は、「小生は基督教徒にして、職を小学教師に奉ずるものに候、そして無我愛は小生の信ずる基督教と一致する処多きを見て、甚だ愉快に思ひ居るものに候。小生も、貴兄等が現時の真宗に慊らざる如く現時の基督教に慊らざるも

- のにて、目今甚だ心淋しく存じ居り候、折柄、当地大石禄亭氏の好意によりて、無我愛を拝見することを得て喜び居り候」(「四面呼応」『無我の愛』第一七号 明治三十九年二月一〇日 七頁 前掲七〇『復刻版 無我の愛』第一卷)というものである。
- 二四二 『熊野新報』一九〇八(明治四一)年十一月二十四日(和歌山県立図書館所蔵)。
- 二四三 前掲一五五「生を賭して」一五〇〜一五一頁。一九〇八(明治四一)年八月二十四日付の『熊野新報』と同日付の『熊野実業新聞』によれば、この日浄泉寺で談話会が開かれ、その講師に新宮を訪れていた山本秀煌ら数名をむかえて宗教談について談話を行っている(『熊野新報』明治四一年八月二十四日、『熊野実業新聞』明治四一年八月二十四日 和歌山県立図書館所蔵)。節堂が山本に「後鉢巻に玉襷と云ふ様」な態度で質問したのは、この浄泉寺での談話会のことと思われる。
- 二四四 永広柴雪『新宮あれこれ』(紀南新聞出版部 一九六一年)には、清水礁波が仲之町で経営していた文具店に、丸山円山が「オイ草声和尚を引っ張って来た」と言い、節堂・清水・丸山の三人で俳句の運座会をはじめた風景が書かれている(永広柴雪『新宮あれこれ』紀南新聞出版部 一九六一年 七八〜八一頁)。
- 二四五 「吹雪会五句集(第四回)」(『はまゆふ』第二巻第一号 浜木綿社 明治四一年八月一〇日 一六〜一七頁)。
- 二四六 節堂が『はまゆふ』に投稿した俳句のなかで、確認できるものは次の通りである。
- 「傘さして一里を来たり月の雨」
- 「野施行の歌うたひ行く薄哉」
- 「茸禅師松の雫の露衣」
- 「はまゆふ」第一五号 浜ゆふ発行所 明治三十九年九月二五日 一七頁)。
- 「はまゆふ」第一六号 浜ゆふ発行所 明治三十九年十一月二五日 一四頁)。
- 「ふゆの蠅死せば弾丸黒子かな」
- 「居酒屋の浅き帳場やふゆの蠅」
- 「むめ散るや大工を使ふ二三日」
- 「毛布着て時雨るゝ寺を叩きけり」
- 「乾鮭の洒蛙々々として茶漬かな」
- 「はまゆふ」第一八号 浜ゆふ発行所 明治四〇年二月二五日 一四〜一六頁)。
- 二四七 前掲一五『日本近代仏教史研究』五〇二頁。
- 二四八 三好五老「兄、節堂と大石さんのこと」(『熊野誌』第六号 熊野文化会・新宮市立

- 図書館 一九六一年 六一頁)。
- 二四九 堺とはその後も交流が続いていたらしく、赤旗事件で千葉監獄に入獄していた堺は、一九〇九(明治四二)一月二一日付で、妻・為子に送った書簡で「新宮の峰尾節堂君の送つて呉れた四分律、此頃ヤツト読んだ」(「堺利彦 堺為子宛書簡(明治四二年一月二一日)」) 堺利彦獄中書簡を読む会編『堺利彦獄中書簡を読む』青柿堂 二〇一一年 一五一頁)と書いている。「四分律」とは僧侶についての規定や禁止条項などについて説かれた聖典のこと。
- 二五〇 前掲二三八「証人峯尾節堂訊問調書」三一四〜三一五頁。
- 二五一 前掲一五『日本近代仏教史研究』五〇二頁。
- 二五二 前掲一五五「生を賭して」一五一頁。
- 二五三 沖野岩三郎「大逆事件の思い出―回想の人々―(二)」(『文芸日本』昭和三〇年一〇月号 文芸日本社 一九五五年 一四頁)。
- 二五四 同右 一五二〜一五三頁。
- 二五五 『はまゆふ』第一九号(浜ゆふ発行所 明治四〇年四月一五日) 一九頁。作者は落丁のため不明である。
- 二五六 峯尾節堂「覚書」(専修大学今村法律研究室編『今村力三郎訴訟記録第三一巻 大逆事件(二)』専修大学出版局 二〇〇二年 三三頁所収)。なお、当時の二〇〇円は現在の貨幣価値で約七六万円に相当する。
- 二五七 「峯尾節堂 成石蛙聖宛はがき(明治四一年二月四日消印)」(前掲二〇四『大逆事件記録第二巻 証拠物写(上)』三五〇〜三五二頁所収)。
- 二五八 前掲一五五「生を賭して」一五一〜一五二頁。
- 二五九 前掲二三七「峯尾節堂 調書」六三頁。
- 二六〇 「新村忠雄 第一三回調書」(神崎清所蔵・大逆事件の真実をあきらかにする会刊『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第四巻』近代日本史料研究会 一九六〇年 二二頁)。
- 二六一 「峯尾節堂 第二回調書」(前掲一四三『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第五巻』一七頁)。
- 二六二 前掲二六〇「新村忠雄 第一三回調書」二二頁。
- 二六三 前掲一四九「我懺悔の一節」四九五頁。
- 二六四 前掲二三七「峯尾節堂 調書」六七頁。
- 二六五 前掲二五六「覚書」三五〜三六頁所収。

- 二六六 「峯尾節堂 大石誠之助宛はがき（明治四二年一〇月三日消印）」（前掲二〇四『大逆事件記録第二巻 証拠物写（上）』二五二頁所収）。はがきに書かれている山路二郎は、大石と親交があった歯科医。
- 二六七 この公判で『京都市日出新聞』は罰金一〇〇円（現在の貨幣価値で約三八万円に相当）に処せられた。
- 二六八 「高木顕明 第二回調書」（前掲一四三『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第五巻』一三〇～一三一頁）。一九〇九（明治四二）年九月ごろ、顕明は京都医大病院に入院していた節堂に、「新村カラ君ハ娼妓ノ如ク蔵替シタト云フテ来タ之レカラ本山ノ汚役人ニ阿諛シテ出世シ給ヘ」（『峯尾節堂 聴取書』前掲一九『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八巻』三七九頁）と書いたはがきを送ったという。
- 二六九 前掲二六一「峯尾節堂 第二回調書」一二八頁。
- 二七〇 前掲二五六「覚書」三四頁所収。
- 二七一 前掲二六六「峯尾節堂 成石蛙聖宛はがき（明治四一年二月四日消印）」三五〇～三五一頁所収。
- 二七二 前掲二四八「兄、節堂と大石さんのこと」六一頁。
- 二七三 関山直太郎「幸徳事件のひとびと」『和歌山大学新聞』一九五七（昭和三二）年五月一日（脇田憲一「大逆事件」犠牲者紀州新宮グループ 峯尾節堂と三好慶吉父子の生涯―未発表の遺稿と聞き取りを中心に―『熊野誌』第五一号 熊野地方史研究会・新宮市立図書館 二〇〇五年 一二三頁所収）。
- 二七四 節堂は、当初は大逆事件の証人として東京で検事の取り調べを受けたが、帰郷後に刑法第七三条「大逆罪」の共犯で起訴された。
- 二七五 前掲一五五「生を賭して」一五三～一五四頁。
- 二七六 同右 一五一頁。
- 二七七 峯尾節堂「啓蒙録」（『熊野実業新聞』明治四二年一月一二日 和歌山県立図書館蔵）。
- 二七八 一九〇九（明治四二）年一月一〇日付の『熊野実業新聞』の読者投稿欄「よしあし草」に、「某院に住職したる某肺病僧は某院に奉職するや直ぐ様吾が檀家中より頌ち置きたる大切の霊牌数百枚を焼き捨てたり又は本山の僧徒と同服して贋せの法階職状を幾通りも持ち来たりする之は同院檀徒一同の不帰依なり依て速かに辞職

二七九	前掲二七七「啓蒙録」。文中に「イレモノフタゲノ」という表現があるが、これは入れ物のふたのようなものを意味する表現と推測される。
二八〇	同右資料。
二八一	二〇一七年一〇月、元新宮市立図書館司書の山崎泰によって、和歌山県立新宮高校所蔵の『熊野新報』のマイクロフィルムから発見。
二八二	草声生「忘れられたる根本義（一）」（『熊野新報』明治四二年六月一二日 和歌山県立新宮高校所蔵）。
二八三	前掲一五五「生を賭して」一五三頁。
二八四	前掲二八二「忘れられたる根本義（一）」。
二八五	同右資料。
二八六	同右資料。
二八七	同右資料。
二八八	草声生「忘れられたる根本義（二）」（『熊野新報』明治四二年六月一五日 和歌山県立新宮高校所蔵）。
二八九	同右資料。
二九〇	同右資料。
二九一	同右資料。
二九二	同右資料。
二九三	同右資料。
二九四	同右資料。
二九五	草声生「忘れられたる根本義（三）」（『熊野新報』明治四二年六月一八日 和歌山県立新宮高校所蔵）。
二九六	同右資料。
二九七	同右資料。
二九八	同右資料。
二九九	前掲一五五「生を賭して」一五四頁。
三〇〇	前掲二九五「忘れられたる根本義（三）」。
三〇一	前掲一五五『日本近代仏教史研究』五〇二頁。

三〇二

『麵麴の略取』の内容は、「無政府共産主義」を実現するためには、破壊と建設の部分が必要ではあるが、その建設的側面、とくに経済的側面について論じている。「無政府共産主義」は、人間的欲求のすべてを満たす社会であり、「個人の絶対的自由を認め、いかなる権威をも容認せず、「人間を駆つて労働せしむべき強制のなき社会」である。その社会は、集権的な中央政府をなくし、各地域の「コンミュン（筆者注・コミューン）」が自立的に生活の必要物資を生産・配分して、消費するといふものである。クロポトキン<sup>マ</sup>は、そのために分権的な農業生産方式、とくに都市農業の可能性や、資源の公開かつ網羅的なリスト化に基づく配分の効率化を訴えた。また、革命に際しては、早急に解決を迫られるのは「食物」の問題だが、その事例として「麵麴」の配分の問題をあげ、「総ての地方に於て、一個の男子も麵麴に窮する者なからしめ、一個の婦人も疲労する群集と共に麵麴屋の門に立ちつくして、偶然の慈善で粗悪な一塊を投げてくれるのを待たねばならぬやうの」と無からしめ、一個の小児も食物欠乏の為に瘦衰へることなからしむべく力めねばならぬ」、「麵麴問題を解決するには、吾人は平等の原理に依らねばならぬ、之を外にしては、他に執るべき解決法はないのである」と、国家や民間が保有している食物をはじめ住居・衣服・財源といった資源一式を、一旦「コンミュン」で「収用」し、「コンミュン」による適切な管理・配分を主張した。そして、このような社会を実現するためには私有財産制を廃止する必要があるが、革命を達成する過程の段階では、「強権的共産主義」や「強権的社会主义」は個人の自由を侵害するとして反対している。さらに、私有財産制をそのままにして議会政治と賃金制度によつて社会主義の実現しようとする社会民主主義にも反対している（クロポトキン著・幸徳秋水訳『麵麴の略取』岩波書店 一九六〇年一二一～一二八七頁）。

三〇三

「大内氏」とは仏教界の重鎮・大内青巒のこと。一九〇八（明治四一）年六月二日から一四日まで新宮を訪れ、臨済宗妙心寺派の松巖院や浄土真宗本願寺派の長徳寺で演説している。

三〇四

独尊「居士大内氏の来熊」（『熊野実業新聞』明治四一年六月一〇日 和歌山県県立図書館所蔵）。

三〇五

家宅搜索の際、節堂のもとからは「十五円は慥かに落掌せり、新宮は面白きにやよく行くだないか（略）禄翁（筆者注・大石誠之助）に逢いし後、五点（筆者注・沖

- 野岩三郎）醒庵（筆者注・成江秀治）の「サンセット」（筆者注・大石と沖野が共同で発行していた新聞）面白しと見た、併し五百も売れまい、高木和尚変らず元氣なりや会つたらよろしく、市木（筆者注・現在の三重県御浜町、崎久保誓一の郷里）もあまりほつこりせぬが仕方なし」（「崎久保誓一 峯尾節堂宛はがき（明治四三年三月七日消印）」前掲二〇四『大逆事件記録第二卷 証抛物写（上）』二六八頁）と、大石誠之助や高木顕明ら新宮の人たちの様子を伝えた崎久保誓一のはがき一通しか見つかったくない。
- 三〇六 「峯尾節堂 沖野岩三郎宛はがき（明治四三年一月一日）」（前掲一七八『秘録・大逆事件（下巻）』二三四頁所収）。
- 三〇七 「峯尾節堂 沖野岩三郎宛はがき（明治四四年一月二一日）」（前掲一七八『秘録・大逆事件（下巻）』二三四頁所収）。
- 三〇八 前掲一四九「我懺悔の一節」四九八頁。
- 三〇九 管野須賀子「死出の道艸」（前掲九七『大逆事件記録第一卷 新編獄中手記』七四～七五頁）。
- 三一〇 教誨百年編纂委員会編『教誨百年 上巻』（浄土真宗本願寺派・真宗大谷派 一九七三年）三三七頁。
- 三一 前掲二四八「兄、節堂と大石さんのこと」六三頁。
- 三一二 前掲一四九「我懺悔の一節」四八一～四八四頁。
- 三二三 前掲二四八「兄、節堂と大石さんのこと」六四頁。節堂と大石の墓は、ともに新宮市の南谷墓地にある。
- 三一四 節堂は顕明について次のように述べている。
- 「先づ高木顕明氏、此人は真宗東派の坊さんで、各宗寺院十三ヶ寺所在の私の町の或る一寺の住職であつた。此人は常に語つてをつた。僕の社会主義は絶対に暴力手段を非とする者である。随つて世の直接行動派と相容れざる者である。平和に温和に仏陀の慈悲・光明の下に貧富相握手すべき理想の実現を企図する者である。如斯き宣言といつては可笑しいが、言葉を私などは始終同人から聴聞してをつた。（略）／元来同氏も大いに矛盾性に富んだ人間であつたやうに思はるゝ。此人の寺の檀信徒の約半数は新平民、所謂穢多と輕蔑せられる階級の人々であつた。随つて同氏の寺も、他の各宗の寺院達より彼れは穢多寺の住職であるとかやうに少々輕蔑的待

遇を受けてゐた。併し彼れは其の品行の点に於て蓋し鶏群中の一鶴であつた。町の各宗寺院とはいへないが、概して墮落してをつた。賭博はやる。茶屋あそびはやる。金貸はやる。曰く何をやる彼をやるで、一般に傾向が宜しからざるものであつた。が此人は決してそんな悪い所作はやらなかつた。穢多の小供を集めて、読書を授けたり、御堂の賽銭を集めて筆・紙・墨を買つて学生に与へたり、拙づかつたらしいが、御説教も毎月欠かさずにやつたやうである。常に曰く僕は檀家の者がひどいどぶ漕へなんかした錢や下駄なんかを修覆したゼニを貰つて活きてをるのは、どうも堪えられない。寺の飯を食ふのは罪だ、厭やだと、つまり同氏の檀家の或一面の者に大いに同情を寄せて、それが寄附を受けるに忍びないといふかと思ふと、又反面には大金を本山に奉納して寺格や自己の僧官を昇進させて、美々しき法服などを作つて之れを着装ふて町を其披露に歩き廻つたと云ふやうな事実も有る。

矛盾は此人のみでないで敢て此人を特に咎め立てするは酷できあるが、併し此人は此矛盾性のために遂に一身を没了し了つた。と云ふのは此人元來至極の平和好きで有りながら、どうしたものか兎角声誉を好み、人と異を立て寄「奇」を弄して之れを喜ぶといった風な傾向が大に有つた。人に穢多寺といわるゝ事を大いに心外に思ふてゐたらしく、随つて地方一部の名望家たる大石氏の宅に出入するを稍々私等と同じ意味合ひで大に之れを光榮としてゐたのではないか知らん。尤も之は私の想像だが、中らずと雖遠からずといった正直の処だらうと思ふ。貧人に対する同情は勿論ある。之れが救済は、唯だ宗教・教育のみによるべからず、社会問題として生産機関の共有、分配の平均乃至貧富あまりに隔絶せざるやう平和な手段・方法を以て之れが理想の実現を謀ると云ふのは、此人の主義であつたらしい。併し一寸警察へ来いといわれても戦慄する底の弱虫で、大喝一声、汝社会主義を奉ずる者は軟と硬と有と無と普通選挙や議會政策や講壇社会主義や乃至国家社会主義といわず、何でも社会主義と名のつく者は一切合財三日の拘留に処すとの嚴命有りとせんか、我が高木先生は真先きに其の平生抱持せる主義・主張を放擲し去り、わが一身の平和・安泰を計られしならんと私は確信して居る」

（前掲一四九「我懺悔の一節」四八五〜四八七頁）。  
成石については次のように述べている。  
「成石平四郎君、此人も私の見る処真面目な生活をして居らなかつた。尤も此事件



發生五・六ヶ月も前に此人大病に罹り、夫れ以来思想の大變化を來したそうで、其の公開演説を私の町でやつたそうです。私は自身に其演説を聞いた訳で無いので委細ハ解らないが、何んでも社会主義は一個の學說で要するに実行の出来ない空論・空義たるに過ぎない。自分も従来同主義者と目せられ且つ自身でも而かく信じてゐたが、今回感ずるところ有之断然同主義と關係を断ち、爾來実行の出来る真面目の処世をやる云々。こんな告白で有つたそうです。これがやはり、四・五月後逆徒の仲間として拘引せられたのですが、其の原因を例に由つて私から考へて見ると、此人元來豪傑肌の人で、又容貌・風采も立派に出来てをつた。銜つたのか生れつきか、能く大言・壯語を快とすると云つた性質のところ有つて、どうも敬虔な愛神的態度・精神に於て欠如するところがあつたやうに思はる。私なども此人の此欠点を看破して居りながら、稍々煽動的に君は快活だ、偉壯な男だなんて、日常交際・周旋の間に道德上多少悪い方面へ此人を誘導した罪は、確にのがれることは出来ないと思ふ。

中央大学の法律科を出た男だそうだが、頭腦粗大で到底学力・識見を以て世に立つ事の出来る人ではなかつた。私も二・三年來の交際で能くも此人の人となりを知つて居らなかつたが、要するに彼の為めにも、又私の為めにも相互に悪い友達で有りました。いわば飲み連れで共に酒を飲み遊樂をなしたままで、主義・精神を以て成立した信友でも同志でもなんでもなかつたので、最後に私も此の人と交際するのを厭はしく感じ、成るべく遠ざかるやうにしてをつた。そして私は、この人の処へ「僕は社会主義などは我々の乳臭児の口にすべき事ではない。我々は空しく先づ自己一身の安泰や一家の安泰を計らねばならぬと思ふ。随て自今大石などの宅には余り行かないやうにする決心である」云々のハガキを遣つて、自分の立場を告白して居「置」いた事もありました。併し腹の黒い人では決して無かつた。仁「任」俠、義を見て起つといった処も有つて、よく人の為めに惜しげもなく財布の底をはいた事も少なからずあつたらしい。私なども始終御馳走になつた方で、此点に就ては、今尚此人の好義を忘れはしない」

(同右 四八八〜四九〇頁)。

三一八	関山直太郎「和歌山県における初期社会主義運動」(安藤精一編『紀州史研究 2』)
三一九	国書刊行会 一九八七年 百三九頁。
三二〇	前掲二四八「兄、節堂と大石さんのこと」六四頁。
三二一	前掲一四九「我懺悔の一節」四九三、四九四頁。
三二二	大沢正道「アナキズム思想の土着―大逆事件に連座した三人の僧侶」(中村雄二郎編『思想史の方法と課題』東京大学出版会 一九七三年 三九六、三九七頁)。
三二三	前掲一四九「我懺悔の一節」五〇九頁。
三二四	同右 五一一頁。

「我懺悔の一節」には、武富済東京地裁検事による和歌山県田辺でのきびしい取り調べの様子ついて、次のように書かれている。

「私は田辺へ着いたのは朝まだ明けたばかりの頃、終日警察署の狭い一室へ巡査四・五人護衛して押込められた。其の日の暑さと来たら全身玉のあせ水、其の夜の夜中頃不図起され訊問所にて武富検事の訊問を受く。多年強盗とか殺人とか放火とか強い猛烈な人々を取りあつた、鋭い眼付を以つて、きつと私を真夜中ににらみ付け、曰く「お前は新村からおやちをやつつけると云ふ事を聞いたことがあるだらう」先づ一着に荒胆を抜かれたやうな気がした。「そんな事を聞いたことはありません」「真直ぐに自白せぬと、偽証罪に陥すぞ」段々恐ろしくなつて来た。「真実は左様な事は聞きません。而して私は社会主義は既にやめてをります」「其方は大石から幸徳から四・五十名の者を集めて諸官庁の焼打をやるといふことを聞いた事があるだらう」此時私は既に全く此事を忘却してをつたので、一寸思ひ出すのに困難であつた。(略)／検事は始終私を恐ろしい権まくで白眼みつけてぴり／詰問する内に、時々私を見返へり「お前は直接関係が無いと云ふ事は解つてをる。唯事実さへ言へば直ぐに帰らしてやる」といつた風の口吻をもらさるゝので、彼の一場の馬鹿噺の時、敢て私はやりますともやりませぬとも、そんな賛否的確定辞を吐いた覚は無かつたのでしたが、勿論噺其物が一場の茶話だから何も賛否同不同の語を吐く必要は無かつたのであり、併し検事から「そんな一大事を明かされながら、何んにも知らない、云はない、覚えなかつた」とは、愈々以つてうるんだ。社会主義を廃めたなどは真赤な嘘だ。お前は仲々狡猾なずるい熱烈な主義者だ。油断はならぬ。承知せぬ」との言葉にのせられ私は、真実、既に口先きばかりの同主義も既に早や絶縁してゐる今日、そんな事で私に同主義に尚ほ執着してをると見らるゝは

残念と妙な処へ気がつき、且つ信州で新村君等が拘引になつた原因は何だか要領は得ないが、此の嘶とは全然別問題らしいので、随てかく言へば検事は真に自分を解放するならんと浅はかな見込を付け、遂にとんでもない返事をしてつた」

(同右 四九八～五〇一頁)。

三二五

資料中にある幸徳秋水の「四・五十名の者を集めて諸官庁の焼打をやる」とは、「一一月謀議」のことである。この「謀議」は、一九〇八(明治四一)年十一月、東京・巢鴨の幸徳宅において、幸徳と和歌山県新宮から上京中の大石誠之助、幸徳宅の近くに住んでいた森近運平、熊本から上京中の松尾卯一太らとの間で交わされた皇居・諸官庁襲撃計画実行のための「謀議」とされている。実際は、具体的計画はなく、病氣と官憲からの弾圧で運動に行き詰っていた幸徳の放談に過ぎなかった。しかし、一九〇九(明治四二)年一月の大石宅での新年会で、節堂は東京帰りの大石からこの土産話を聞いたとして大逆事件に連座した。

節堂は、事件の実相について、「我懺悔の一節」で次のように書いている。「殊にあの事件の如き大包容的判決審判には、各個の犯罪者の心理が如何して世間の人に公平に明白に読めやう筈は無かつた訳だと思ひます。何しろ一味徒党の死を決して一致・同盟した共(者)共が、相互に名前も知つてをらないなんて、此んな間の抜けた一味・徒党が又と世界の何処の国に有らうぞや。私にしる法廷で知つてをるのは、わが郷里の人達と其他一度来町せられた幸徳氏や森近氏(筆者注・森近運平)ばかり、此の監獄(筆者注・千葉監獄)でも先程迄同じ工場で永らく一諸(緒)に働いてゐた佐々木道元君にしる、名前も聞いた事も無ければ顔を見た事が無い人、こんな者共と世間では一致・共同して大逆を企図したと(云ふ)やうに心得て居るんだ。なんてなんて情無い事だらう。全く此の事件の真相は以(意)外なるを以て、聞く人或は信じないかも知れないが、実相如実の事は以上斯くの如くにて有之候」

三二六

当初は神戸市下山手通七丁目二五九の三に居住していたが、のちに中山手通二丁目四二番地へ転居した。(同右 五〇七～五〇八頁)。

三二七

「岡林寅松 調書」(「森長訴訟記録Ⅳ」森長英三郎所蔵 八〇頁)。

三二八

「小松丑治 聴取書」(「森長訴訟記録Ⅳ」森長英三郎所蔵 五〇頁)。

三二九

同右資料 五〇頁。この『赤旗』は、資金不足や印刷を引き受けってくれるところが

三三〇	前掲三三『内山愚童』一八五頁より援用。
三三一	中村桐舟（浅吉）「第一回社会主義講演会」『日本平民新聞』第一三〇号 一九〇七（明治四〇）年一月二十五日（前掲四四『明治社会主義史料集第五集 大阪平民新聞』一九五頁）。
三三二	前掲一五『日本近代仏教史研究』五二六頁。
三三三	日本宗教思想史研究者の守屋友江は、神戸女学院五十年祝賀会編『神戸女学院史』（神戸女学院五十年祝賀会 一九二五年）に掲載されている教員リストに秀天の名前が載っていないことから、秀天が神戸女学院で講師をしていたことを疑問視している（守屋友江「世紀転換期における仏教者の社会観―『新仏教』における鈴木大拙と井上秀天の言説を中心に―」『近代仏教』第一二二号 日本近代仏教史研究会二〇〇六年 五六頁）。しかし、秀天は、大逆事件では重要参考人として取り調べを受け、大正年間には「要視察人」として官憲から監視されていた。『神戸女学院史』を編さんする際、官憲からの弾圧を恐れた学院側は、教員リストから秀天の名前を削除せざるを得なかったのではないかと推測される。
三三四	前掲三三『内山愚童』一八五頁。
三三五	中村元訳『ブッダのことば―スッタニパータ』（岩波書店 一九五八年）六九頁。
三三六	同右 一一八頁。
三三七	神崎清『革命伝説 大逆事件② 密造された爆裂弾』（子どもの未来社 二〇一〇年復刻）九六―九七頁、「岡林寅松 第二回聴取書」（『森長訴訟記録Ⅳ』森長英三郎所蔵 七七頁）。
三三八	前掲一〇四『大逆事件記録第二巻 証拠物写（下）』（世界文庫 一九六四年）五九七頁。
三三九	前掲三二八「小松丑治 聴取書」五〇頁。岡林は、一九一〇（明治四三）年一月二日付で、弁護士の中村力三郎に送った書簡で「無政府共産の小冊子は決して配布しませぬ只小松中村と私と見たのみで中村は神戸平民クラブの残員で此三人は同志として懇親し東京より来る雑誌通信何ても共に見て居たので報告的に届けた

- ので其には訳ある事で病院（筆者注・神戸海民病院）に於ても中村に渡しました」（岡林寅松 今村力三郎宛書簡（明治四三年一月二二日））前掲二五六『今村力三郎訴訟記録第三一卷 大逆事件（二）』七〇頁所収）と書いている。
- 三三〇 前掲一五『日本近代仏教史研究』四六一頁。
- 三四一 当初は、当番となった会員宅を会場にして、毎月第二土曜日に例会を開いていたが、一九〇七（明治四〇年）六月からは、夢野村の熊野神社付近の岡林と小松が共同で借りていた借家を会場にして、毎月第二・第四土曜日に例会を開催している。
- 三四二 小野寺逸也「神戸平民倶楽部と大逆事件」（『歴史と神戸』第一三卷第二号 神戸史学会 一九七四年 一〇頁）。
- 三四三 前掲三二八「小松丑治 聴取書」五〇頁。岡林は、自らの思想について、一九一〇（明治四三）年一月二二日付で、弁護士の中村力三郎に送った書簡でも「私の無政府主義は聞取書もあらん通り勿論理想ではは仏教の思想加はり（新仏教は十二年前より見てる）寧ろ思想の一致点を認め私共は死後の極楽天国とせず此世界に理想郷を作る、これは世が進めば来るべき理と信じて漠然ながらも数世紀の後の光明を望み、向上発展してゆくのが人生の帰趣であり生活の意義と考へ、所謂宗教的信念で」前掲三三九「岡林寅松 今村力三郎宛書簡（明治四三年一月二二日）」六九頁）あると述べている。
- 三四四 岡林寅松「神戸平民倶楽部第八例会」『直言』第二卷第一号 一九〇五（明治三八）年四月一六日（前掲二『明治社会主義史料集第一集 直言』八七頁）。
- 三四五 「知れる人知らざる人」『光』第一卷第一九号 一九〇六（明治三九）年八月二〇日（労働運動史研究会編『明治社会主義史料集第二集 光』明治文献資料刊行会 一九六〇年 一五三頁）。
- 三四六 「人間消息」（『新仏教』第七卷第九号 明治三九年九月一日 七二六～七二七頁）。
- 三四七 「人間消息」（『新仏教』第八卷第一号 明治四〇年一月一日 四六頁）。別の秀天の論説によれば、ある日の晩、收容されている孤児が一人行方不明になった際、石井は「イヤ、心配するには及ばぬ、あすの朝になれば知れるだろー、かまうに及ばぬ、ホツテおけ」と言って、その孤児を探さなかった。しかし翌朝、その孤児が院内のプールで溺死しているのが見つかり、石井は「溺死をしたと云つては世間体が悪いから、早く着物を持つて行つてきせて帰れ」と命じた。このとき、秀天は「こ

三四八	の石井院長は夜叉気のある先生であると悟つて、間もなく孤児院にサヨナラと宣言してしまつた」という（井上秀天「予の予、予の彼（下）」『新仏教』第一巻第五号 明治四三年五月一日 四七〇～四七一頁）。
三四九	『日本国民の使命』『新紀元』第一号 一九〇五（明治三八）年十一月一日（前掲六三『明治社会主義史料集第三集 新紀元』四頁）。
三五〇	『光』第一巻第一号 一九〇五（明治三八）年十一月二〇日（前掲三四五『明治社会主義史料集第二集 光』一頁）。
三五一	隅谷三喜男『新紀元』解説（前掲六三『明治社会主義史料集第三集 新紀元』VIII頁）。
三五二	一九〇五（明治三八）年十一月一日発行の『新紀元』第二号に、「湘南平民倶楽部の移転」として、「湘南平民倶楽部は横須賀逸見四、九四平民舎に移転す、又同所に於て機関雑誌、書類取次、又小説貸本等の事を営む」という通信が掲載されているのみである（『新紀元』第二号 明治三八年十一月一日 前掲六三『明治社会主義史料集第三集 新紀元』二五頁）。
三五三	秀天がいつごろ「新仏教徒同志会」の会員になったのかは不明だが、一九〇四（明治三七）年五月一日発行の『新仏教』第五巻第五号の「会員動静」には、「井上秀天君 曹洞宗軍隊布教師となる。（第十一師団附）」（「会員動静」『新仏教』第五巻第五号 明治三七年五月一日 四〇六頁）とあり、一九〇四（明治三七）年五月までには会員になっていたことは確かである。
三五四	岡林寅松と小松丑治も『新仏教』の読者であり、岡林は岡林真冬の名前で「私は、新仏教第一号よりの読者です。自ら新仏教徒を以て任じて居ます。森近赤人（筆者注・森近運平）君は、よく通常会へ出ますねエ。神戸で新仏教の読者は、井上秀天君と、小松天愚君と二人知ツて居ます」と通信を寄せている（「人間消息」『新仏教』第八巻第二号 明治四〇年二月一日 一一二頁）。
三五五	「森近運平 井上秀天宛はがき（明治四〇年十一月二日消印）」（前掲一〇四『大逆事件記録第二巻 証拠物写（下）』五九六～五九七頁所収）。
三五六	「小松丑治 第二回調書」（「森長訴訟記録IV」森長英三郎所蔵 五八頁）。
	森近運平「幸徳秋水歓迎会（大阪）」『日本平民新聞』第一二二号 一九〇七（明治四〇）年十一月二〇日（前掲四四『明治社会主義史料集第五集 大阪平民新聞』一九一頁）。

三五七

前掲三五五「小松丑治 第二回調書」五八頁。幸徳が歓迎会で話したという「レボルト」の意味について、小松は「幸徳ノ咄ニハ反抗ト云フ意味ダト申シマシタカラ、従来ノ習慣ニ反対スル事ト解釈致シテ居リマシタ」、「例ヲ挙ゲテ見マス、幸徳秋水ナドノ抱ク無政府共產主義ノ如キモノガ其習慣ニ反対スルモノト思ヒマス」と述べている（同資料 五八〜五九頁）。

三五八

「幸徳秋水 井上秀天宛はがき（消印日付不明）」（前掲一〇四『大逆事件記録第二卷 証拠物写（下）』五九六頁所収）。

三五九

前掲三四七「予の予、予の彼（下）」四七〇頁。

三六〇

「幸徳伝次郎 第十三回調書」（前掲一九『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八卷』七頁）。

三六一

井上秀天「不問答」（『新仏教』第一一卷第九号 明治四三年九月一日 一〇九七頁）。

三六二

井上秀天「無毒日記」（『新仏教』第一二卷第一号 明治四四年一月一日 一〇八九頁）。

三六三

井上秀天『仏教の現代的批判』（宝文館 一九二五年）二二頁。なお、この『仏教の現代的批判』で、秀天は「危険思想」を次のように批判している。

「現今世の中には、国家と云ふものが、家屋の如くに、古くなれば、直に全部を破壊して、新しく改造の出来るものであるかの如く思つて居るものが、可なり多くある様であります。私の確信する所から云へば、これは確に大なる誤謬の見解であるのみならず、実に人類の平和、幸福のために、大なる危険思想であります。斯の如き謬見、斯の如き危険思想を以て、国家の改造を企図したものが、歴史上に活躍して居ないでもありませんが、その様な人物の企図、活躍は、何れもすべて大失敗に終つて居るのであります。国家は家屋の如くに建てたり壊はしたりすることの出来る性質のものでは、決してありません。国家の改造は、丁度私共の互の身体の生理的、精神的改造の如く、合理的に、徐々に行はるべきものであります。いくら私共の互の身体の調子が悪いからと云つて、四支五体、五臓六腑を支離滅裂にして、その改造の目的を達し得られざるが如く、国家の改造も、その様な風にして行はるべきものでは、断じてありません。国家の構造分子たる国民の各自が、自己を生理的に、且つ精神的に、改造して、自己の身心を、生理的にも、精神的にも、健全なるものにする。これが国家改造に必須の努力であります。然るに、現代の多くの人々は、国家の四支五体、五臓六腑を支離滅裂にすることを以て、国家改

造の第一歩と心得て居る様でありますが、実に危険此上なき事であります。その様な改造は、実は改造ではなく、永久の滅亡であります。私共お互は、各自大に慎重の態度を執り、この世界的危険思潮に極力反抗して、国家の平和と幸福と安全と栄存と繁栄のために、日夜努力すべきではありませんまいか。(略)／わけのわからないものを神秘がり難有がると云ふのは、人間固有の多くの弱点の一であります。この弱点は、東洋人、殊に日本人には、別してひどい様に思はれます。この弱点を摘へて、悟りを売物にして居るのが、かの職業的師家連中であります。元来仏教は合理的宗教であり、殊に禅は明晰な理性を要する宗教であるのに、彼等師家連中は、神秘相に聞える文句の復誦にすぎないお悟りを売物にして、骨董好きの謂ゆる紳士連中を籠絡して居るのであります。禅の厚生利用的価値は、彼等のために没却されてしまつて居ると云つてもよい位であります。私の所信を忌憚なく云へば、彼等は旧式の危険思想者であります。私はこの旧式の危険思想は、かの新式の危険思想と等しく、日本国民を思想的に攪乱し、彼等を邪徑に彷徨せしめて居るものと信じて居ます。旧式の危険思想は、新式の危険思想が急性的であるのに反し、云はゞ、慢性的ではありますが、どちらにしても、人間の思想上に於ける合理的進化を阻害するものであります。

新式の危険思想とは、舶来の過激思想——革命気分を多量に含有せる新思想——であります。この新思想の社会上に於ける害毒は、実に戦慄すべきものであります。現に世界民衆は、多少その害毒に中てられて居るのであります。私は少なくとも、この日本には、その様な急性的過激病を流行させたくないと念願して居るのであります。労使問題とか地主対小作人問題とか云ふものも、煎じ詰めて見ると、この急性的過激病の黴菌の活動に外ならないのであります。而して、私の排他的論難は、常に如上両種の危険思想に対する私の義憤より思はず発する衷心の声であります。私怨とか、私憤とか云ふ性質の動機は、私の論難の中には、毛頭その痕跡を存して居ないのであります。

(同書 一七〇—二二頁)。

秀天の『仏教の現代的批判』が刊行される三年前の一九二二(大正一一)年、中浜哲(鉄)・古田大次郎・倉知啓司・河合康左右らによつて無政府主義結社「ギロチン社」が結成されている。「ギロチン社」は、理論的な論争を嫌い、テロリズムに訴える手段をとっていた。秀天の「新式の危険思想」に対する批判には、この「ギ



ロチン社」の活動が背景にあると推測される。

三六五 前掲三六一「不問答」一〇九六頁。

三六六 同右一〇九七頁。

三六七 同右一〇九七頁。

三六八 前掲四九「社会主義者沿革」第二七一頁。そのほかの二名は、一九〇七（明治四〇）年二月に起こった足尾銅山暴動事件の関係者で、鉄道工場の井守伸午と、川辺郡

荻野村（現・伊丹市）の浄土真宗本願寺派源正寺住職で、「大阪平民社」の森近運平と連絡をとって大阪府豊能郡池田町（現・池田市）で借家人運動や小作人運動を展開していた葛野教譲（枯骨）である。

三六九 「社会主義者沿革」第一（前掲四九『続・現代史資料Ⅰ 社会主義沿革Ⅰ』二七頁）。写真に写っている参加者たちの配置は、前列は写真の右側から幸徳多治（幸徳秋水

の実母）・永田はる（岡本穎一郎の内妻・薮田ハルと思われる）・村田ケヨ・森近繁子（森近運平の妻）・森近菊代（森近の長女）・荒畑寒村・森近運平。中列は松本仙之助・尾崎菊次郎・三浦安太郎・百瀬晋・福田武三郎・幸徳秋水・一木幸之助・深尾文三。後列は石原橘治・松永伊太郎・岩出金次郎・平井迪・井上秀天・松尾卯一太（松尾は熊本出身なので別人と思われる）・岡本穎一郎・武田九平・尾池義幹・長谷川貞蔵・小松丑治。「社会主義者沿革」第一には、写真は掲載されていないが、岡山県井原市の「森近運平を語る会」代表の森山誠一がその写真を所蔵している。前掲一〇四『大逆事件記録第二巻 証拠物写（下）』五九六～五九七頁。

三七〇 『大阪朝日新聞』一九一〇（明治四三）年八月三十一日（大阪府立中之島図書館 森山誠一提供）。

三七二 森長英三郎によれば、そのときの秀天の供述調書と、彼が検察に提出した長文の弁明書が事件の訴訟記録に残っているとのことであるが（森長英三郎「大逆事件と大阪・神戸組」『大阪地方労働運動史研究』第一〇号 一九六九年 一七頁）、筆者未見である。

三七三 大逆事件後の社会主義者との交流は確認されていないが、一九一四（大正三）年に第一次世界大戦が勃発した際、日本は日英同盟を理由に、アメリカ・イギリス・フランスなどの連合国陣営に加わり、ドイツ領であった中国・山東省や南洋諸島などに兵を進めると、秀天は「須磨の浦より」（『新仏教』第一六卷第一号 大正四年一月一日）や「日英同盟病を診察す」（『現代通報』第二号 大正四年四月二一日）、「軽

佻なる政府と国民」(『現代通報』第三号 大正四年五月二一日)で日本の参戦を批判した。そのため、一九一四(大正三)年七月から一九一五(大正四)年六月までの社会主義者視察取締経過報告書である「特別要視察人情勢一斑」第五の第六款「時事問題ト要視察人」の「欧州戦乱及我帝国ト独奥両国トノ国交断絶ト要視察人」の項目には、安部磯雄・荒畑寒村・石川三四郎・堺利彦らとともに秀天の名前が載っている。

#### 第六款 時事問題ト要視察人

茲ニハ時事問題又ハ時々ノ出来事ニ対スル要視察人ノ行動及其ノ感想等ヲ蒐集セリ(略)

(1) 欧州戦乱及我帝国ト独奥両国トノ国交断絶ト要視察人

大正三年六月二十八日「ボスニア」州ノ首都「サラジエヴォ」ニ於テ同地巡遊中ナリシ奥匈国皇儲「フエルヂナンド」大公殿下及同妃殿下カ「ボスニア」州民ニシテ塞爾維種ニ属スル井土青年ノ為ニ暗殺セラル、ヤ政治上、人種上、地理上又ハ国際關係等種々ナル事情ヨリシテ欧州ノ風雲頓ニ險惡トナリ同年七月二十八日奥匈国ハ塞爾維ニ対シ宣戦シ次テ独逸及土耳其古ハ奥匈国側ニ立チ露、仏、英、白耳義、黒山国、伊太利ノ各国ハ塞爾維側トナリ各其ノ對手国ニ対シテ宣戦シ我帝国モ日英同盟協約ノ關係上英国ト行動ヲ共ニスルノ已ムヲ得サルニ至リ同年八月十六日独逸ニ対シ同月二十三日正午迄ノ回答期限ヲ附シテ最後通牒ヲ発シ期日ニ及フモ応諾ノ回答ナキ為同月二十三日同国ニ対シ宣戦ヲ布告セラレ延テ奥匈国トノ国交モ亦断絶シ奥匈国皇儲殿下及同妃殿下ノ薨去ハ茲ニ乃チ十一個ノ交戦国ヲ存スル一大戦乱ト化シ于今其ノ状態ヲ持續シ居ルノミナラス殆ト其ノ終局ノ予測シ得ラレサルモノアリ(略)ノ叙上ノ戦乱ニ付テハ要視察人ノ一般ハ独逸ノ横暴カ斯ル事変ヲ發生セシメタルモノナルコトヲロニシ殊ニ日独開戦ニ対シテハ三国干渉當時ヲ追懷シ宿怨重ナル独逸ハ飽迄モ之ヲ膺懲シテ国民ノ鬱憤ヲ霽サ、ルヘカラスト為セルモ主義信念ノ深キ者ニ在リテハ筆ニ口ニ或ハ戦争ノ罪惡ナルヲ述ヘ、軍務ニ服スルノ悲惨ナルヲ説キ或ハ戦後主義者ノ運動ノ激烈ナルヘキヲ唱ヘ、日独開戦ヲ非議シ其ノ他注意ヲ要スル言動ニ出テタルモノナキニアラス今是等ノ重ナルモノヲ取テ左ニ之ヲ掲ク(略)

(ク) 井上秀夫(兵庫)

○大正四年一月一日発行雑誌「新仏教」(東京ニ於テ高島大円ノ経営セルモノ)第

十六卷第一号掲載「須磨の浦より」題スル記事ノ一節抜萃

今や世界列強と申す大馬鹿者がダムダム弾や飛行機の爆弾投下をトヤカク申し居ますがこれもたしかに天下至愚の一種に相違ありませんダムダム弾や飛行機の爆弾投下が野蛮の行動であると思ふほどマダ多少なりとも人間せしい考を持つて居る列強が動物地味<sup>マ</sup>た戦争に従事するとは実に矛盾至極のことではありませんか要するに有為天変定まりなきこの無常の娑婆に在てヤレ英国ヤレ日本ヤレ独逸ヤレ露国ヤレ何ト水の上に漂泊して居るこの国土に執著して互ニ我見我慢の押合をしてをる〇〇〇〇(筆者注・帝国主義)信者こそ実に凡夫迷妄のはなはだしきものでハありますまいか……実に人間の愚ほど憐れなものはありません

○大正四年四月二十一日発行雑誌「現代通報」(発行地東京以下同じ) 第二号掲載「日英同盟病を診察す」ト題スル記事ノ一節

あゝ、日英同盟の妙薬も、かゝる危篤に相成候ては、逆も馬糞ほどの効能もありますまい。ソレニ日英同盟を第一の理由として、あわてがましくも、独逸に對して、戦争するとは、これこそ、頭痛膏薬を肛門にはりつけて、痔をいぢめようとして居る様なもので、はられた膏薬こそヨイつらの皮とでも申すべきであります。

○大正四年五月二十一日発行雑誌「現代通報」第三号掲載「輕佻なる政府と国民」ト題スル記事ノ一節

海軍が南洋に出動しました。陸軍が青島に出征しました。これで、金錢を一攫したものは、陸海軍の高級武人と御用商人のみ。国民の大多数は、高い税金を払はせられて、その上に、馬鹿を見せられておまけに、ひどい目に逢はせられるのであります。元来、戦争に提灯行列なんかやる人間が馬鹿の骨頂と申すべきであります。

(「特別要視察人情勢一斑」第五 前掲四九『続・現代史資料 I 社会主義沿革 1』四二三・四三六(四三七頁)。

また、秀天は一九一八(大正七)年に知人に出した年賀状でも第一次世界大戦を批判しており、そのことが一九一七(大正六)年五月二日から一九一八(大正七)年五月一日までの社会主義者視察取締経過報告書である「特別要視察人情勢

一斑」第八の「欧洲戦乱ト要視察人 附露国第二次革命ト要視察人」という項目に、堺利彦・安部磯雄らとともに秀天の名前が掲載されている。

「(二) 欧洲戦乱ト要視察人 附露国第二次革命ト要視察人

欧洲戦乱ニ対スル要視察人其ノ後ノ言動中重ナルモノヲ掲クレハ左記ノ如クニシテ彼等ハ其ノ会合又ハ刊行物誌上等ニ於テ戦乱ニ関スル論議ハ常ニ之ヲ試ミツ、アルモ其ノ多クハ第五篇以下ニ叙スル処ト大同小異ナルヲ以テ茲ニ之ヲ省略シ重複ヲ避クルコト、セリ(略)

七 井上秀夫(兵庫在住)ハ大正七年一月一日知人ニ発送セシ年賀端書中ニ左記ノ字句ヲ刷入セリ

世界的大戦乱の中に、また新しき年が来しました、この貴重なる生命と光陰とを、血腥き戦争のために浪費することは実に愚の至りです狂の極です戦争は神が人類に与へ給ふた特権―自由意思―の濫用ですその濫用より来る罪惡です」

(「特別要視察人情勢一斑」第八 前掲四九『続・現代史資料Ⅰ 社会主義沿革1』五九〇～五九一頁)。

井上秀天「雑記帳」(『新仏教』第一二巻第四号 明治四四年四月一日 三七八頁)。

井上秀天「日記から」(『新仏教』第一二巻第六号 明治四四年六月一日 五七四頁)。

一 参会者記・高島米峰評「ルソー」記念晩餐会の記 附、記念講演会」(『新仏教』第一三巻第八号 大正元年八月一日 八二四～八二七頁)。

井上秀天「小噴火口」(『新仏教』第一三巻第八号 大正元年八月一日 八六〇頁)。

井上秀天「牛糞録」(『新仏教』第一四号第五号 大正二年五月一日 四五四頁)。

平出の「逆徒」は、「判決の理由は長い長いものであつた。それもその筈であつた。之を約めてしまへば僅か四人か五人かの犯罪事案である」と書き出され、「若い弁護士」(平出修と思われる)による法廷の手記のスタイルで書かれている。主人公は事件に連座させられた大阪のブリキ職人の三浦安太郎(作中・三村保三郎)で、脇役に幸徳秋水(作中・秋山亨一)や管野須賀子(作中・真野すゞ子)を配している。内容は、弁護士からみた理不尽な容疑をかけられ「大罪人」とされた三浦の監獄や法廷での様子などを描写し、国家権力に迎合して司法権の独立を最初から捨て去った裁判官の姿、死刑判決を受けたあとの管野の「皆さん左様なら」やその直後の三浦らの「無政府党万歳」(作中・伏せ字)という叫び、それらを見た「若い

三 八 〇	井上秀天「牛糞録」(『新仏教』第一四卷第一〇号 大正二年一〇月一日 八七九頁)。
三 八 一	「相馬御風 平出修宛書簡(大正二年九月四日消印)」(前掲一五二『定本 平出修集』三〇七、三二六頁)。
三 八 二	関山直太郎「解説」(前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二九二頁)。
三 八 三	『牟婁新報』は、四六判四頁で、最初は月三回、ついで週一回、さらに月六回、一〇回、一五回となり、一九一六(大正五)年に日刊となったが、翌年一月から月一五回に戻った。一九二六(大正一五)年、柴庵が和歌山市に出て、『紀伊毎日新聞』を経営することになったため、同年四月二〇日の三八〇〇余号をもって休刊となった。価格は一部一錢五厘。発行部数は三〇〇〇部。
三 八 四	第一記者「牟婁新報発刊の辞」『牟婁新報』第一号 一九〇〇(明治三三)年四月二二日(『復刻版 牟婁新報』第一巻 不二出版 二〇〇一年 一頁)。
三 八 五	同右 一頁。
三 八 六	同右 一頁。
三 八 七	同右 一頁。
三 八 八	同右 一頁。
三 八 九	柴庵は、「新仏教徒同志会」の正式な会員となる以前から、同志会とは関係があつたと思われる。『牟婁新報』には『新仏教』最新号の「特別広告」がたびたび掲載されており、一八九九(明治三二)年八月には新仏教運動の先輩格にあたる古河老川が療養先の須磨から田辺の柴庵の自坊を訪問している(毛利柴庵「前号評判」『新仏教』第二号第九号 明治三四年八月一日 四四二頁)。また、『新仏教』第一巻第二号(明治三三年八月一日)で「印度飢民の為に哭す」として印度飢饉救済募金を呼びかけると(「印度飢民の為に哭す」『新仏教』第一巻第二号 明治三三年八月一日 六二、六三頁)、『牟婁新報』でも同年八月五日以降の各号の第一面の「社告」に「義捐金募集内規」を掲載し義援金の募集を訴えており、同年九月ごろに金一〇七円二八銭が東京の同志会のもとへ送られた(毛利柴庵「社告」『牟婁新報』第二号 明治三三年九月九日 前掲三八四『復刻版 牟婁新報』第一巻 七九頁)。同志会

が大日本廃娼会に加盟し、『新仏教』第一卷第三号（明治三十三年九月一日）に「公娼の廃止（仏教徒の廃娼運動を促す）」が掲載されると（「公娼の廃止（仏教徒の廃娼運動を促す）」『新仏教』第一卷第三号 明治三十三年九月一日 一一〇～一一八頁）、一九〇〇（明治三三）年九月三〇日付『牟婁新報』の第一面に「娼妓と仏教徒」を載せ、「娼妓をして其意志に反して淫を囂ぐを強るさへあるに、肯ぜざれば、之を鞭撻し、之を窘窮し、牛馬の如く其自由を緊縛し、瓦石の如く樓主の蹂躪に委せんこと、鬼ならでは、蛇ならでは、為し得可らざる事、見得可らざる事どもなり」と娼妓を訴えた。そして、娼妓をクリスチャンだけではなく、「凡そ娼妓問題の如きや、宗教の異同、教義の異同を反目す可きものにあらざ」として、仏教徒も力をいれて取り組むよう主張した（毛利柴庵「娼妓と仏教徒」『牟婁新報』第二十四号 明治三十三年九月三〇日 前掲三八四『復刻版 牟婁新報』第一卷 九三頁）。日露戦後の和歌山県下で娼妓問題が起こると、娼妓をはじめ、記者の荒畑寒村・管野須賀子（幽月）らによって、『牟婁新報』では娼妓の論陣がはられ、一九〇六（明治三九）年二月には新宮の大石誠之助も医学的見地から公娼を批判した「排娼論」（『牟婁新報』第五五七号、第五六〇号 明治三十九年二月三日、三月一二日）を全四回にわたって連載している。

三九〇 杉村縦横「倫理問題大演説会（三月二十二日神田錦輝館に於て）」（『新仏教』第四卷第四号 明治三十六年四月一日 三四三頁）。

三九一 毛利柴庵「谷中村の滅亡」『牟婁新報』第七二二号 一九〇七（明治四〇）年七月三日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二一四頁）。

三九二 毛利柴庵「柴庵申す」『牟婁新報』第一〇一三号 一九一〇（明治四三）年一月一日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二六七頁）。

三九三 木下尚江「野人語」『牟婁新報』第一〇一三号 一九一〇（明治四三）年一月一日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二六四～二六五頁）。柴庵とともに同

行した木下尚江によれば、鉾木県の古河停車場で内村鑑三・安部磯雄らとともに柴庵も熱弁をふるっており、そのときの柴庵の印象を木下は「議論激越、弁舌縦横―其の透徹する音声―で「白面短身、而して精悍の氣眉宇の間に溢れて人を襲ふもの」をもつ「雄弁家」と評している（同書 二六五頁）。

三九四 柴庵は、銅山の鉾毒地やその住民の実態について、「被害地を見れば、彼等十年の苦厄、遺恨既に骨髓に徹し、古河氏を見る真に蛇蝎の如く然り。悲しむ可き哉彼等

- の生活は今や乞食のそれにも劣れり。或者は穴居し或者は土を食ふ。人の彼等に移住を勧むるあれば彼等則ち奮然として云ふ、之れ僕等墳墓の地死すとも去らじと。人の彼等に希望を問ふあれば彼等則ち慨然として云ふ、僕等未だ父母の仇を報ぜざるを憾むと。吁々彼等の前途や如何がある可き其子女の将来や如何がある可き。是大宗教育家大教育者の共に心を痛めて救済の手を下だす可き所にあらざるか」と書いてゐる（毛利柴庵「予の見たる火事と鉋毒」『新仏教』第三卷第二号 明治三五年二月一日 六二、六三頁）。
- 三九五 同右 六三頁。なお、同号は冒頭の社説に「『新仏教』子」の「鉋毒問題につきて仏教徒に告ぐ」を掲載し、政府の責任や製鍊所の移転とともに、仏教各派が合同でこの問題にあたるよう訴えている（同号 五七、六一頁）。
- 三九六 大亦墨水「東京より 第九信」『牟婁新報』第一三三号 一九〇二（明治三五）年六月一〇日（『復刻版 牟婁新報』第二卷 不二出版 二〇〇一年 一七頁）。柴庵の演説の内容に関する記述はなし。
- 三九七 「戦報」『労働世界』第六年第二三三号 一九〇二（明治三五）年一二月三日（労働運動史研究会編『明治社会主義資料集補遺Ⅳ 労働世界Ⅲ』明治文献資料刊行会 一九六三年 九一六頁）。柴庵の演説の内容に関する記述はなし。
- 三九八 大亦墨水「有題無題」『牟婁新報』第一九六号 一九〇二（明治三五）年一二月二一日（前掲三九六『復刻版 牟婁新報』第二卷 二六五頁）。この大演説会で、柴庵は「既に昨冬惨の劇甚なるに驚きたる僕等は、本年の洪水により昨年の惨状に又数層の惨を加へたと称せらるゝ該地を視なば、奈何の感想を吾が胸裡に画く可きぞ、而も政府の鉋毒調査会は、何を調査しつゝあるや其設けられてより半歳に余る今日、何等の声をも聞かず」と述べたという。
- 三九九 マークス「社会主義を鼓吹すべし」『牟婁新報』第二三九号 一九〇三（明治三六）年五月六日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』九頁）。
- 四〇〇 同右 九頁。
- 四〇一 マークス「所謂金持を排斥すべし」『牟婁新報』第二四一号 一九〇三（明治三六年）五月一二日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一〇、一一頁）。
- 四〇二 長嘆子「傀儡子」『牟婁新報』第二四〇号 一九〇三（明治三六）年五月九日（『復刻版 牟婁新報』第三卷 不二出版 二〇〇一年 九一頁）。
- 四〇三 八面鋒学人「マークス先生に与て 田辺町の近状を論ず」『牟婁新報』第二四二号

四〇四	一九〇三（明治三六）年五月一日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一一頁）。
	読者からの反応のひとつに「演説会を開き鼓吹せられん事を望む」とあるが、柴庵はこのころ地域の有志で結成されていた「牟婁講話会」に参加しており、一九〇三（明治三六）年五月一日に片町キリスト教会で開かれた第一回講話会で「宗教家として予が見たる社会主義発生の原因」について一時間余にわたって演説し、来場者から「満場の大喝采を博し」ている（「牟婁講話会発会式」『牟婁新報』第二四四号 明治三六年五月二一日 前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一五頁）。
四〇五	マークス「八面鋒学人に答へざる書」『牟婁新報』第二四六号 明治三六年五月二七日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一五頁一六頁）。
四〇六	同右 一六頁。
四〇七	マークス「基督教の拡張を望む（一）」『牟婁新報』第二五三号 一九〇三（明治三六）年六月一日（前掲四〇二『復刻版 牟婁新報』第三卷 一四一頁）。
四〇八	同右 一四一頁。
四〇九	同右 一四一頁。
四一〇	同右 一四一頁。
四一一	マークス「基督教の拡張を望む（二）」『牟婁新報』第二五六号 一九〇三（明治三六）年六月二七日（前掲四〇二『復刻版 牟婁新報』第三卷 一五三頁）。
四一二	同右 一五三頁。
四一三	毛利柴庵「熱殺録（三）」『牟婁新報』第一四二号 一九〇二（明治三五）年七月九日（前掲三九六『復刻版 牟婁新報』第二卷 五三頁）。
四一四	梁山泊（毛利柴庵）「予の郷里」（『新仏教』第三卷第九号 明治三五年九月一日 四五九頁）。
四一五	『牟婁新報』第二一九号 一九〇四（明治三七）年二月二二日（『復刻版 牟婁新報』第四卷 不二出版 二〇〇一年 一五頁）。
四一六	毛利柴庵「戦捷の第一報」『牟婁新報』第二一九号 一九〇四（明治三七）年二月二二日（前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 一五頁）。この記事で、柴庵は日露両国が開戦したことについて、次のように書いている。 「愈快く大愈快斯くの如きの愈快が何んの時にあらうぞ、吾等は電報を手にして狂呼し、号外を刷つて万歳を叫び、殆ど何事も手につかず、果ては頭痛を起し、眼



が眩らみ、昏倒せんとして破れ椅子に支へらるゝもの数回、二たび氣力を回復して突つ起ちたるの時、国旗！国旗！真ツ先きに国旗を門頭に掲げたり、吾等は此れ以外に於て何等の感情をも表出する能はざりき。世に何事が愈快なりとも戦さに捷つた電報を貰つたほどの愈快が、ドコにあらうぞ

幾度びか編輯局裡を徘徊すれども他事にはドウしても筆が把れず、無意識に社を出で、街頭に立てば、ドコもカシコも、老いも若きも、号外を手にするもの、軍艦の話をするもの、「雪」「氷」「ロシヤ」「大砲」「轟沈」「仁川」「旅順」「万歳」<sup>く</sup>、噂さは只だ戦捷の上であり、或る翁なは予の肩を打つて「目出度し<sup>く</sup>」とて大に笑へり。予も大に笑へり。或る老婆は「捷つたのぢやろうですなア」とて嬉し泣きに泣けり。予も亦泣けり。昨朝来電報毎に、泣たり笑ふたり予は全く子供に似たり。戦捷の人を狂せしむる事真に斯くの如し

今も忘れず日清戦役の後ち、露が我れに對する措置や如何「遼東還附」只だ是四字、此四字は我國民が積年の鬱屈なり、憤懣なり、臥薪も嘗胆も幾度びか之れが爲めに口破せられたり。煮へ返れる血を、抑へ切れぬ涙を、抑へ<sup>く</sup>て辛抱せしも単へに、聖陛下の大御心を畏み奉りたればなり。然るに彼れの暴慢なる、昨年来の挙動や如何、コハ滿天下の既に<sup>く</sup>憤慨する所にして今更ら数へ立つるを須みず、天誅は当然彼れの頭上加へられざる可らず、露伐たずんば東洋の平和を如何せん、国論は沸騰せり、征露論は決せり、ナニを内閣がグヅ<sup>く</sup>して居るぞや、現内閣が戦争を開始口可く余りに躊躇したりしが爲めに國民の鋒先きは先づ現内閣を仆す可しとまで激昂しつゝある折柄一片の電音、闇みを劈いて仁川港外海戦の快報を齎らし、アナヤと驚くひまに旅順の総攻撃となり是れ亦我海軍の大勝利たりア、電報なる哉、電報来たる毎に國民が歓呼の聲は市区に満てり、快や快や、待ちに待つたる日露開戦の時機は到来し神州男子が世界列強環視の前に神来の武勇を振ふこと実に此時此際にあるにして一撃先づ彼れの数艦を轟沈し以て高慢なる暴露鼻先きを凹まし得たる事何共以て愈快千万の至りならずや、

然ども真の戦ひは今日以後にあり、吾等が真の大人となつて真の祝意を表せん事は真に今後の大海戦大陸戦を経たる上にあらざる可らず、而して深き注意を以て現内閣の総ての遣り口を監視せん事は我國民の大なる任務なりと信ず（柴庵）<sup>一</sup>なお、この記事によれば、柴庵は日露開戦を電報によつて知ったというが、『牟婁新報』では開戦に際して特派員を東京に派遣していたと考えられる。二〇〇三年

四一七 牟婁新報社「社告を拡張しました（日本人は必ず読め）」『牟婁新報』第三三五号一九〇四（明治三七）年三月三日（前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 三九頁）。  
 四一八 「出征軍人家族慰問会を組織すべし（上）」『牟婁新報』第三三八号一九〇四（明治三七）年三月一二日（前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 五一頁）。  
 四一九 毛利柴庵「出征軍人家族救護法」『牟婁新報』第三五五号一九〇四（明治三七）年五月九日（前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 一一七頁）。  
 四二〇 毛利柴庵「日露戦争仏教大演説会」『牟婁新報』第三三一号一九〇四（明治三七）年二月一八日（前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 二四頁）。  
 四二一 「征露戦争仏教演説会」『牟婁新報』第三三七号一九〇四（明治三七）年三月九日（前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 四八頁）。演説の内容に関する記述はなし。  
 四二二 「理想青年会演説会」『牟婁新報』第三九七号一九〇四（明治三七）年九月一八日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』九〇頁）。  
 四二三 高島米峰「日露戦争と国民の覚悟（上）」（下）『牟婁新報』第三三五号第三三七号一九〇四（明治三七）年三月三日、三月九日（前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 三九・四三・四七頁）。この論説で、高島は日露戦争について、「この戦は、決して人を殺すのが目的でもなければ、国を奪ふのが目的でもなく又戦をするのとそれ自身が目的でもありません。どうかして、世界の各国が、相互にその権利を保護し実行し、平和に国と国とのや□□けるやうにしやうといふのが、その大目□、つまり「より大なる平和」を求めたいために、万已むを得ずして行ふところの最後の手段であります。それで私共は、どうかして世界の各国が、戦争といふものは善くないものだといふことを痛切に自覚して、一日も早く、全く銃砲の音の聞えない時代を見るやうにしたいと思つて居るのであります。（略）戦は決して戦のための戦ではなく、又国を奪ふための戦でもない、たゞ「より大なる平和」のための戦であるのでございます。若し戦といふものが、単に人を殺すを目的とし、国を奪ふを能事とするものでありますならば、私共は、絶対的に非戦論を唱へなければなりません。がしかし、この「より大なる平和」のために、たゞ最後の手段として、□已

むを得ざるの場合に限り、稀に戦を起すといふことは、これは当然是認しなければならぬことゝ信じます。そこで、この度我邦が露西亜と戦争するに居たりましたのは、果して何のためであるかと申しまするに、つまり「より大なる平和」を求めやうがために外ならぬのであります。(略)海に陸に、連戦連勝して、思ふ存分彼が不義不徳(筆者注・ロシアによる満州の軍事的支配)を懲して、一日も早く「より大なる平和」を求めなければなりません(同書 三九・四三・四七頁)と述べている。

四二四 前掲二〇〇『戦時伝道大観』三頁。

四二五 二〇〇三年に和歌山県田辺市内の古書店で、一八五枚もの『牟婁新報』の号外が発見され、二〇一七年に面白い書店から復刻された。

四二六 『牟婁新報号外』一九〇四(明治三七)年二月二六日(熊野歴史懇話会・久保卓哉企画『日露戦争を伝える牟婁新報号外 明治三七年』明治三八年 全一八五枚)『日露戦争を伝える牟婁新報号外』一九〇四(明治三七)年二月二四日深夜に日本海軍が行った第一回旅順口閉塞作戦を伝えている。

四二七 『牟婁新報号外』一九〇四(明治三七)年八月五日(前掲四二六『日露戦争を伝える牟婁新報号外 明治三七年』明治三八年 全一八五枚)『七六頁』。記事の「〇〇」とは、日本陸軍が一九〇四(明治三七)年七月三〇日までに包囲を完成し、八月一九日より総攻撃を開始する旅順のことと思われる。

四二八 『牟婁新報号外』一九〇四(明治三七)年二月一七日(前掲四二六『日露戦争を伝える牟婁新報号外 明治三七年』明治三八年 全一八五枚)『九頁』。

四二九 『牟婁新報号外』一九〇四(明治三七)年三月一三日(前掲四二六『日露戦争を伝える牟婁新報号外 明治三七年』明治三八年 全一八五枚)『一四頁』。

四三〇 『牟婁新報号外』一九〇四(明治三七)年三月一四日(前掲四二六『日露戦争を伝える牟婁新報号外 明治三七年』明治三八年 全一八五枚)『一五頁』。

四三一 『牟婁新報号外』一九〇四(明治三七)年五月八日(前掲四二六『日露戦争を伝える牟婁新報号外 明治三七年』明治三八年 全一八五枚)『三六頁』。

四三二 「投書函」『牟婁新報』第三七〇号 一九〇四(明治三七)年六月二四日(前掲二〇〇『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』六五頁)。

四三三 『牟婁新報号外』一九〇四(明治三七)年四月一四日(前掲四二六『日露戦争を伝える牟婁新報号外 明治三七年』明治三八年 全一八五枚)『二三頁』。この号外で、

柴庵は提灯行列への参加を次のように呼びかけている。

「記者云く（略）我軍の大捷利敵の大敗北一目瞭然たり。今や我郡の壮丁諸君は昨日来遠征の途に上りつゝあり、此時に當りて我軍の大捷報に接す、提灯行列を催すは正に此時なり、苟も帝国の男子たるものは今夜午後七時を期し各提灯を手にして吾社前に参集ありたし／注意 今夜の提灯の行列は群集甚しかりしも、却つて活気に乏しく隊伍も亦整はざりき 今夜の行列は大に勇まし大に勇ましく各自大なる責任を帯びて進行ありたし、於くて笑はれな、慌てゝうろたへな、真面目にドシドシ遣りたまへ、子供ばかり出して、於やじ傍觀のテイは頗るよろしからず、齋藤実盛ぢやねエがしらがあたまも皆な出て御座れ今夜うまく提灯行列のけいこをして置かんとハ露軍全滅我軍凱旋の時になつて提灯の持ち方も知らずにまごつく事が起つたらドーする」

門奈直樹「明治地域主義言論の担い手―毛利柴庵と『牟婁新報』」（『総合ジャーナリズム研究』第二〇巻第三号 総合ジャーナリズム研究所 一九八三年 四七―五一頁）。

四三五

柴庵は、日露兩軍の戦死者の追弔について、次のように提唱している。

「敵となり味方となりて戦ふも、皆な国の為めなり、個人として何んの怨念を蔵せんや。／されば赤十字旗の動く所彼我の別なし。／今や開戦以来日露兩軍の戦死者□□、万を以て戦ふべし、吾人は我宗教家諸君が、茲に怨親平等の觀念を振ひ起して、此兩軍戦没者の為めに一大追弔会を開催せんことを望むものなり／是れ一は以て戦死者の遺族を慰安し、一は以て戦捷に狂する者に良き反省を与へ、一は以て宗教の真髓を発揮するものなり、旅順陥落は此追弔会を催す事に於て最も適せり」（毛利柴庵「日露兩軍の戦死者を弔ふべし」『牟婁新報』第四〇〇号 明治三十七年九月二十七日 前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 二八三頁）。

四三六

同右資料 二八三頁。

四三七

豊田孤寒「戦争熱の兒童に及ぼす弊禍を論ず（上）」（下）『牟婁新報』第四一六号（四一八号 一九〇四（明治三七）年四月一二日）四月一八日（前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 八一・八六・八九頁）。

四三八

荒畑寒村「何の飲ぶべき事あらんや」『牟婁新報』第五二六号 一九〇五（明治三八）年一〇月二十七日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一〇四頁）。

四三九

「憐なる軍人家族」『牟婁新報』第四九九号 一九〇五（明治三八）年八月六日（『復

四四〇	刻版『牟婁新報』第五卷 不二出版 二〇〇一年 二四五頁。
四四一	佐藤任『毛利柴庵―ある社会主義仏教者の半生』(山喜房仏書林 一九七八年) 七四〇七五頁。
四四二	武内善信「新仏教徒・毛利柴庵の思想と行動」(『同志社法学』第三七卷第五号 同志社法学会 一九八六年 四〇〇四頁)。
四四三	「投書函」『牟婁新報』第三三七号 一九〇四(明治三七)年三月九日(前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷 四九頁)。
四四四	同右 四九頁。
四四五	仏・菩薩に祈つて、悪魔や敵を降伏させること、もしくは身心を整えて悪行を押さえ伏せること(須藤隆仙『仏教用語事典』新人物往来社 一九九三年 二七七頁)。
四四六	毛利柴庵「皇室に対する敬意」『牟婁新報』第二〇五号 一九〇三(明治三六)年一月二一日(前掲三九六『復刻版 牟婁新報』第二卷 三一四頁)。
	「最近の御製」『牟婁新報』第七五九号 一九〇七(明治四〇)年一〇月二四日(『復刻版 牟婁新報』第八卷 不二出版 二〇〇二年 二三九頁)。掲載された御製は、次の八首である。
	「言の葉のまことの道を月花のもてあそびとは思はざらん」
	「窓の裡に扇とりてもあつき日に照るひをうけて小草刈る見ゆ」
	「開けゆく時にいよく仰かれぬ聖人の御世の高きをしへは」
	「たらちねのおおやのみよは白雲のよそちよろになりになるかな」
	「たらちねの親の教を守る子は学び乃道もまどはざるなん」
	「思ふこと思ふが儘にいひいづるをさなこゝろやまことなるらん」
	「たらちねのおおやのみよに事たる老いもすくなくなりになるかな」
	「時はかる器の針のともすれば狂ひがちなるよにこそありけれ」
四四七	『国史大辞典』第一卷(吉川弘文館 一九九〇年) 二九〇三〇頁。
四四八	一九〇四(明治三七)年三月から同年八月まで在社。小田が入社した際、「東京塵外生」から「貴社の野声君は社会主義者、非戦主義者にして何故牟婁新報社に入社せるか」と質問が寄せられており、小田は「僕は御説の通り非戦論者だが僕等現在の境遇致し方ないと思ふて呉れ給へ僕は貴君が僕等社会主義者、平和主義者たる新聞記者の日本に於ける境遇を察せんことを望む」と回答している(「投書函」『牟婁新報』第三八二号 明治三十七年七月三〇日 前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四

卷二二五頁）。『牟婁新報』の記者を辞めたのちは、運動から離脱し、トルストイアンになったが、伊藤証信が主宰する「無我苑」にも参加し、やがて高野山にはいる。一九一七（大正六）年には「大法師」の資格を授与されたといわれている。一九〇四（明治三七）年五月から翌一九〇五（明治三八）年一〇月まで在社。『牟婁新報』を退社したのち、豊田は清国にわたり、支那革命党関係の中学や山東省曹州府普通師範学堂で教師をしていたが、やがて社会主義運動から離れ、「新仏教徒同志会」の同人でもあったことから仏教研究に取り組んだ。

小田は『牟婁新報』で「新時代の警鐘」（『牟婁新報』第三四二号〜第三七三号 明治三七年三月三〇日〜七月三日）という論説を全二三回にわたって連載しているが、その最後に社会主義の要求を細別したなかに「軍備を全廃し、戦争を禁絶し、一切の国際的紛争を万国仲裁裁判所の採決に依りて決すること」との一項をあげている（小田野声「新時代の警鐘」（二三）」。『牟婁新報』第三七二号 明治三七年七月三日 前掲二二『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』五七頁）。

豊田は入社前に『牟婁新報』に寄稿した「戦争熱の児童に及ぼす弊禍を論ず」（『牟婁新報』第三四六号〜第三四八号 明治三七年四月一二日〜四月一八日）で「戦争熱が保育および小学教育を通して無邪気の児童に波及する所の弊害や、実に測るべからざるものあるを知るに足らん、今や全国の少年少女は、戦争熱の渦中に溺れて、殺伐たる争闘に長ぜんとし、財富の如何に作らるべきかを知らずして、乱りに軍資献納の虚栄に耽らんとす、而かも社会はこれを制止することを知らず、却つて之を奨励扇動するに至つては、言語道断のことならずや」（豊田孤寒「戦争熱の児童に及ぼす弊禍を論ず」（下）」。『牟婁新報』第四一八号 明治三七年四月一八日 前掲四一五『復刻版 牟婁新報』第四卷八九頁）と述べている。入社後も「殖民事業を論ず」（『牟婁新報』第三七五号〜第三八〇号 明治三七年七月九日〜七月二四日）で「地狭くして人多し。民族膨脹の声は自然の結果として絶叫せらるゝも亦已むを得ざるなり。彼の日清役といひ、今回の日露戦争といひ、其裏面に潜在せる原因を叩かは、共にこの民族膨脹に原由せずんばあらざるなり。（略）我が国は世界の最大強国と角逐して連戦連捷を博し、其勇武義烈なる、各国の均しく称誉讃嘆措く能はざる所なり。然れども翻りて国の内情を顧みれば日清戦局以来、異様の膨脹をなしたる我日本は経済的食傷に罹り国民の下痢を来し、已に貧弱の病膏盲に入りて、将に経済的はた精神的滅亡の窮境に転落せんとしつゝあるにあらずや。（略）今や

## 四五二

滔々たる国民は戦争熱に麻痺せられ、我軍の連戦連勝の名声、世界に轟くに反して、国民は益々萎縮退嬰しつゝあるの傾向あるは是果して何等の兆ぞや」(豊田孤寒「殖民事業を論ず」(一)・(五))『牟婁新報』第三七五号・第三八〇号 明治三十七年七月九日・二四日 前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』六七・七六頁)と厭戦的な文章を書いている。

日露戦後に記者をつとめた荒畑寒村によれば、「この新聞(筆者注・『牟婁新報』)には以前、同志の豊田孤寒君や小田頼造君もしばらく居たこともあり、その感化で職長の石浪栗洲君をはじめ、十五、六歳の少年ばかりだった文選工や植字工がみな社会主義者と称していた」(荒畑寒村『新版 寒村自伝』上巻 筑摩書房 一九六五年一〇四頁)という。『牟婁新報』の社員だけではなく、読者も小田・豊田らに影響されていたと推測される。

## 四五三

一九〇四(明治三七)年九月三日付の『牟婁新報』第三九二号には、「息子取られ翁」という戦争で息子を失った父親と思われる人物の寄稿と、それに対しての「記者」の感想が掲載されている。

「▲馬鹿騒ぎも可い加減にせよ、戦捷々々として何処が芽出度い。戦捷の裏面にはドンナ悲惨があるか御存じか。ア、俺等の息子も既に国のために殺されて了つた。勿論国家の為に一身を捧げたる彼を惜んで彼は云ふのではないけれどもその後遺つて居る妻子や老人をどうして呉れるのだ、ナニ家族救護費は出して居ると。馬鹿云へ僅かばかりの金で一家六人のものが糊口することが出来ると思つてゐる乎。浮いた／＼と馬鹿騒ぎを遣らかす連中に戦争より来る悲惨に対して果して一点の同情の涙があるのか、斯様な躍鬼連の騒げは騒ぐ程俺い等は益々困るばかりだ。実際己ぬ等に何の関係もないから芽出度いと騒ぐのだらう。そんな自分勝手な祝捷は少しも祝捷ぢやないぞ、ソリヤ亡国祭りと云ふものだ。ア、亡国の民! 亡国の民! (息子取られ翁)」

▲旅順陥落に熱狂しつゝある今日此頃この老翁の痛言に接す、真に霹靂一声の感なきを得ずである。軍人家族救護に冷淡なる国民は宜しく三省せなければなるまい。(記者)」

(「すゞみ台」『牟婁新報』第三九二号 明治三十七年九月三日 前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』八八頁)。

また、一九〇五(明治三八)年八月一日付の『牟婁新報』第五〇三号には、

四五四

戦死した兵士には名誉が与えられるのに対して、傷病兵には何の名誉も与えられないことを記した「はら夕風」の「病傷兵」が掲載されている。

「冷露愁風に驚く秋の千艸の上、其所に悄として疼める病傷兵は夕に座しぬ。彼の心は、瞳に迫る闇黒の影に蔽はれて、寂寞の牢獄に繋がれぬ。「想ふ去年の春、出征の天命を奉じ、人と旗と万歳の声に送られたる時、既に眼裏に敵なく胸中に恐れなく、報国の丹心に、燃ゆる血液は一波々々剛勇の氣を生ず、強力は全身に満ち溢れぬ。欧露の誇りの精兵を、必ず恥辱の大敗に墮走せしめ、我軍毎に歓呼くす。奮戦三千里、一身の功亦数へがたし。日露兩軍、命脈の分るゝ所、奉天の猛戦に、衆の耳目を驚破するの偉名、あはれ遂に敵弾に傷む。薬の香、身に辛かりし病院の窓より自由になりて、山河樂土を展開する南紀伊のほとり、なつかしき故里の我に返れば、何ぞや、皆輕侮の眼は以て、我を迎へぬ。命を誓ひてし人、そも同じく我に背きぬ。吁、悲しい哉、戦死者は甚だ名誉にして、病傷兵は甚だ不名誉なるか。」「彼が無声の血泣の声を聞かずや、具眼の人よ人よ、現世に於ける彼が光明は消えにたり。希くば、彼をして、再起の勇士、永く一郷の誇りたらしめよ。夜は襲ひ来るも彼は猶黙想に沈みぬ、暗黒の底に、寂然として一人残りつ」

（はら夕風「病傷兵」『牟婁新報』第五〇三号 明治三十八年八月十八日 前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』九五頁）。

一九〇四（明治三七）年九月一二日付の『牟婁新報』第三九五号には、「千伏花子」の反戦詩「提灯行列と老母の声」が掲載されている。

「一、戦さは勝ちぬ関の声！ 戦は勝ちぬ万々歳！

老も若きもおさなきも 声はりあげて祝ひつゝ

国の宝貨をつひやして 提灯行列に狂ひけり

二、聞け寒灯の下に兀座して 盲目の老母の語るをば

可愛い吾が子に先立たれ 如何で名誉のことやある

よしや食はずに居るとても よしや破衣まとふとも

吾が子と二人すみ居れば 三尺四方の賤か家も

此の世ながらの極樂や さるをさなるを誉れとや

折からとゞろく花火一発 続いておこる万々歳！



四五五	老母は泣き伏しつぶやきぬ あわれ吾子の死は万歳かと」 （千伏花子「提灯行列と老母の声」『牟婁新報』第三九五号 明治三十七年九月一二日 前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』八九〇頁）。
四五五	「社会主義者の運動」『牟婁新報』第三二七号 一九〇四（明治三七）年二月六日（前 掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二〇頁）。
四五六	「官吏侮辱事件判決文」『牟婁新報』第四九七号 一九〇五（明治三八）年七月三〇 日（『復刻版 牟婁新報』第五卷 不二出版 二〇〇一年 二三五頁）。『復刻版 牟婁新 報』第五卷の一八四頁に所収されている同年六月一八日付の『牟婁新報』第四八三 号は、この文章が掲載されていると思われる部分が「原紙破損」として欠落してい る。
四五七	梁山泊（毛利柴庵）「清棲知事の視察談を読む」『牟婁新報』第四八二号 一九〇五 （明治三八）年六月一五日（前掲四三九『復刻版 牟婁新報』第五卷 一七九頁）。
四五八	同右 一七九頁。
四五九	「官吏侮辱事件公判筆記概要」『牟婁新報』第四九七号 一九〇五（明治三八）年七 月二七日（前掲四三九『復刻版 牟婁新報』第五卷 二三一頁）、「官吏侮辱事件公判 筆記概要（承前）」『牟婁新報』第四九七号 一九〇五（明治三八）年七月三〇日（前 掲四三九『復刻版 牟婁新報』第五卷 二三五頁）。
四六〇	前掲四五六「官吏侮辱事件判決文」『牟婁新報』第四九七号 一九〇五（明治三八） 年七月三〇日 二三五頁。
四六一	毛利柴庵「編輯局より」『牟婁新報』第四九七号 一九〇五（明治三八）年七月三〇 日（前掲四三九『復刻版 牟婁新報』第五卷 二三六頁）。
四六二	請川生「公判余感」『牟婁新報』第五〇九号 一九〇五（明治三八）年九月六日（前 掲四三九『復刻版 牟婁新報』第五卷 二七五頁）。この「請川生」という人物につ いて、佐藤任は柴庵と親交があった成石平四郎としている（前掲四四〇『毛利柴庵 ―ある社会主義仏教者の半生―』一〇一頁）。しかし、「公判余感」のなかに「われ毛 利君とは面識なきにあらざるも今度は久し振なり」と書かれており、成石は柴庵よ りも年少であるため、「毛利君」という言い方には違和感がある。したがって、筆 者は、この論説は柴庵自身が書いたものと考ええる。
四六三	同右 二七五頁。
四六四	同右 二七五頁。

四六五 「官吏侮辱事件判決文」『牟婁新報』第五一〇号 一九〇五（明治三八）年九月九日

（前掲四三九『復刻版 牟婁新報』第五卷 二八〇頁）。

四六六 同右二一八〇頁。

四六七 上告の理由について、「上告趣意書」（『牟婁新報』第五一〇号 明治三八年九月九日）

で次の三点をあげている

「原判決援用の牟婁新報第四百八十三号の記事中、大臣や知事とあるは相違なきも是官職にして官吏にあらず、従て官吏侮辱罪の目的とならず、然るに原院は如上の官吏にあらざる官職を以て直ちに本罪の目的なりとし、不当な法律を適用せられたり、故に原判決は不当なり（目的物に就て）」

単に「知事」の文字を使用しあるの故を以て清棲知事に対して官吏侮辱罪を構成するものなりとせんか、然らば何故に「大臣」の文字に対しては犯罪不成立なるか、告発者の告発の趣旨実に一を知て二を知らず、然るに原院に於ても亦前者に対してのみ罪を科し後者に対して黙々たるは明かに論理の一貫を失する者たり、即ち「大臣」の文字に対して犯罪不成立なりとせんか、知事の文字に対しても亦犯罪不成立たる可きや勿論なり、然るに原院は之に対して不当に法律を適用せられたり、故に原判決は不当なり（範圍）

独逸刑法によれば「侮辱」の文字は第百六十六条中に *Beschimpfen* *Vnfug* なる文字を使用しあり「フランク」の（千九百三年出版二二八頁）解説によれば『不敬なる行為の表示』とあり然るに本件に於て新聞紙記載の記事は官職に対して何故不敬なるか被告は単に希望の意志を表示せるのみ、如何なる点が不敬なるか、如何なる点が侮辱なるか、実に原判決は被告の意志を曲解し併せて日本刑法百四十一条中の侮辱なる文字の意義を誤用して与へられたる不当な判決なり（侮辱罪とは何ぞ）

（「上告趣意書」『牟婁新報』第五一〇号 明治三八年九月九日 前掲四三九『復刻版 牟婁新報』第五卷 二八〇頁）。

四六八

「大審院の判決書」『牟婁新報』第五三三三号 一九〇五（明治三八）年十一月八日（『復刻版 牟婁新報』第六卷 不二出版 二〇〇一年 二二頁）。一〇月二〇日に出された判決が、この日の新聞に掲載されたのは、審理は柴庵不在で行われ、十一月一

四六九	五日に『牟婁新報』に判決書が郵送されてきたためである。 尺蠖將軍「予の見たる日本の裁判所」『牟婁新報』第五三三号 一九〇五（明治三八）
四七〇	年一月一八日（前掲四六八）『復刻版 牟婁新報』第六卷 二二頁）。
四七一	柴庵に関する先行研究では、清棲知事への官吏侮辱事件と、この山本裁判長に対する官吏侮辱事件が混同されて、ひとつの事件として扱われていることが多い。
四七二	「吾社の筆禍公判見聞梗概」『牟婁新報』第五三三号 一九〇五（明治三八）年一月一八日（前掲四六八）『復刻版 牟婁新報』第六卷 二二頁）。
四七三	同右 二二頁。
四七四	「筆禍判決」『牟婁新報』第五三三号 一九〇五（明治三八）年一月一八日（前掲四六八）『復刻版 牟婁新報』第六卷 二二頁）。
四七五	T・F生「官吏侮辱控訴公判見聞記」『牟婁新報』第五五三号 一九〇六（明治三九年一月二一日）（前掲四六八）『復刻版 牟婁新報』第六卷 一〇七頁）。
四七六	同右 一〇七頁。
四七七	「筆禍判決」『牟婁新報』第五五三号 一九〇六（明治三九年一月二一日）（前掲四六八）『復刻版 牟婁新報』第六卷 一〇七頁）。
四七八	同右 一〇七頁。
四七九	「東京来電」『牟婁新報』第五五六号 一九〇六（明治三九年三月三日）（前掲四六八）『復刻版 牟婁新報』第六卷 一六〇〜一六一頁）。
四八〇	「東京来電」『牟婁新報』第五六七号 一九〇六（明治三九年三月六日）（前掲四六八）『復刻版 牟婁新報』第六卷 一六四〜一六五頁）。審理の様子や判決書の記述はなし。
四八一	成石蛙聖「一夜獄中の柴庵師を想ふ」『牟婁新報』第五七七号 一九〇六（明治三九年四月六日）（前掲二一）『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一五三〜一五四頁）。
四八二	成石蛙聖「噫 悲なる哉」『牟婁新報』第五八〇号 一九〇六（明治三九年四月一五日）（前掲二一）『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一六四頁）。
四八三	請川村蛙聖「鉄壁先生に寄す」『牟婁新報』第五四五号 一九〇五（明治三八）年二月二四日（前掲二一）『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一二一〜一二二頁）。
四八四	成石蛙聖「川湯温泉より」『牟婁新報』第七五九号 一九〇七（明治四〇）年一〇月二四日（前掲四四六）『復刻版 牟婁新報』第八卷 二三九頁）。

四八五	「知れる人、知らざる人」『光』第一卷第一号 一九〇五（明治三八）年十一月二〇日（前掲三四五『明治社会主義史料集第二集 光』三頁）。
四八六	「知れた人知らざる人」『光』第一卷第二号 一九〇五（明治三八）年十二月五日（前掲三四五『明治社会主義史料集第二集 光』一五頁）。
四八七	「知れる人、知らざる人」『光』第一卷第九号 一九〇六（明治三九）年三月二〇日（前掲三四五『明治社会主義史料集第二集 光』七三頁）。
四八八	「知れる人、知らざる人」『光』第一卷第一四号 一九〇六（明治三九）年六月五日（前掲三四五『明治社会主義史料集第二集 光』一一三頁）。
四八九	「木下尚江氏の遊説」『直言』第二卷第二四号 一九〇五（明治三八）年七月一六日（前掲二『明治社会主義史料集第一集 直言』一八七頁）。
四九〇	「木下尚江氏の遊説」『直言』第二卷第二五号 一九〇五（明治三八）年七月二三日（前掲二『明治社会主義史料集第一集 直言』一九六頁）。
四九一	「堺利彦 毛利柴庵宛はがき（明治三八年六月某日消印）」（池田千尋「堺枯川から毛利柴庵へ―明治三八年六月某日の葉書から―」『初期社会主義研究』第一二号 初期社会主義研究会 一九九九年 三三七頁所収）。
四九二	「社会主義運動基金寄附広告」『直言』第二卷第一号 一九〇五（明治三八）年二月五日（前掲二『明治社会主義史料集第一集 直言』六頁）。
四九三	前掲三八二「解説」『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二九四頁。
四九四	高島米峰「官吏侮辱とは何ぞや」（『新仏教』第六卷第九号 明治三八年九月一日 七三九〜七四〇頁）。
四九五	高島米峰「官吏侮辱事件の判決を評す」『牟婁新報』第五〇四号 一九〇五（明治三八）年八月二一日（前掲四六八『復刻版 牟婁新報』第五卷 二五五頁）。
四九六	渡辺海旭「壺中乾坤」（『新仏教』第七卷第一〇号 明治三九年一〇月一日 七六一頁）。
四九七	柴庵が田辺監獄を出獄した際の様子について、柴庵の「出獄小話（下）」（『牟婁新報』第五八五号 明治三九年四月三〇日）によれば、一九〇六（明治三九）年四月二七日午前〇時、柴庵が看守部長に見送られて出獄すると、雨の降る深夜にもかかわらず、田辺町長の奥野健太郎や、記者の管野須賀子ら大勢の人びとが手に提灯を持って迎えたという（毛利柴庵「出獄小話（下）」『牟婁新報』第五八五号 明治三九年四月三〇日 前掲四六八『復刻版 牟婁新報』第六卷 二三〇頁）。成石平四郎は、

当日は東京にて出獄を迎えに行くことができなかったが、五月三日付で「早速ながら第一回出獄を奉祝候」とのはがきを柴庵に寄せている（「成石蛙聖 毛利柴庵宛はがき（明治三十九年五月三日消印）」杉中浩一郎「毛利柴庵側面私記」『熊野誌』第五八号 熊野地方史研究会・新宮市立図書館二〇一一年二一頁所収）。

清滝は、柴庵の人柄や、柴庵入獄後の『牟婁新報』などについて次のように評している。

「紀念すべき哉、四月二十七日！

歡喜すべき哉、這の月這の日！

我が友柴庵兄は、実に這の日を以て、苦々しき田辺監獄を出で、自由の身となりし也。柴庵兄と知れる者、誰れとか之を紀念し、之を歡喜せざらんや。

予は満腔の歡喜を傾倒し以て、兄の出獄を迎ふ。

柴庵兄足下、足下罪なくして（予敢ていふ）配所の月に苦吟すること、こゝに一ヶ月有半。其間、足下の苦痛は果して如何ばかりなりしぞ。曾つては足下、莞爾として獄に臨み、平然として「理想郷」に遊ぶむと称し、意気昂然、毫も意に介せざるものゝ如かりき。而も足下。毫邁にして尚ほ寒苦と物相飯の悪食を訴ふるを聞くごとに、予は真個に断腸の思に堪へざりし也。足下の体格、あまりに強壯ならず、況んや春来、風邪に冒され喉頭加答兒に苦しめられつゝありしといふに於てをや、足下獄中に於ける苦痛、察するに堪へたり、予は足下の健康に、頗る懸念なき能はず。

果然、予の懸念は不幸にして杞憂に止まらざりき。

足下大に健康を害せりといふに非らずや、頃日寒村君東帰の途次、予は寓を訪ひ、足下の健康破れたるを説き、幽月（筆者注・管野須賀子）、東淵の両君亦た其の然るを報じ来る、予は、足下の出獄を喜ぶと同時に、多少の悲痛を感じずんばあらず。

柴庵兄足下、足下が這般によりて法律に払ひたる代価は、あまりに高価なりき、否な、あまりに過当なりき、是れ啻に予の推測のものにあらざるべし、思ふに、冷静に公平に、足下に関する事件の真相を観察するものは、必ずや「然り」と答ふべきを確信す、而して足下も亦た而か断信しつゝあるならん。

然るに足下之れを控訴院に争ひ、大審院に糺したるも、一も足下に利ならずして、這回の奇禍を買ひたるは何故ぞ。

柴庵兄足下、暫らく予をして直言するを得せしめよ。

足下はあまりに率直家也、あまりに極論家也、而してまた、あまりに独断家ならざるなき乎、足下が見て以て正と信ずる所、是と断ずる所には、直往邁進、毫も仮借する所なく、些も他を顧みる所なく、对者を追窮し窘迫せずんば止まざらんとす、而うして足下密かに以て快となす、是れ足下が一大所にして、やがては又一大短所たらざるなきか。

予は常に足下の言ふ所、正義にして、足下の行ふ所、毫も私曲を混へず、言行共に公明正大なるを見、尠からず尊敬を払ふものなり。然れ共、足下が正義を主張し、実行し社会を改良せんとする方法に於て、予は足下の一顧を煩はさんと欲するものなり。

昔者、大聖世尊「四十余年未顕真実」と喝破し、機を熟せしめて、初めて真実の法義を説く、是れ豈に救世利人を以て任とし、社会改革を以て本願とするもの大に取て以て範とすべき事ならずや。

足下の正義を主張するや、あまりに過激にして、あまりに直面的也。对者をして反省せしめんとはせず、詰難窮迫す、悔悟せしめんとはせず、嘲笑弄殺す、是れ足下が這回の奇禍を買ひたる以所にあらざるなきか。

足下の如き、才氣横溢せる者にありては、如上の態度は免るべからざる自然の勢にして、快は則ち快なりと雖も、是れ決して己が主張を社会に貫徹せしめんの良法にあらず。予は足下に、少しく大聖世尊の方便説を顧みんことを、切に望まざるを得ず。

足下よ、婆言として一笑に附し去る勿れ。足下を知り足下を思ふの友は、予と感を同うするもの多々あれば也。足下は才智余りありて、思慮時に之を伴はず、其論議するや、直面的にして、時に側面、若しくは反面を忘るゝことあらざるなきか。足下の誠しむべきは、正に此に存せずや。

足下、獄に在る事こと、四十有五日。一日の読書力、四百頁なりしと。予は足下が通読せし書目を知悉せずと雖も、別世界の一室の裡、時に読書し、時に瞑想す、其の修養に資したること、頗る多大なるありしならむ。足下の才、能く這般の事に想到し大に悟る所ありたりしと信ず。足下果して首肯するや否や。

柴庵兄足下、予は足下の正義を尊重し足下の知友たるの故を以て、足下を迎へて獄中の労苦を慰藉するの遑なく、真直に足下に対する衷情を吐露し、肝胆を披瀝せり。足下の寛容なる、太甚しく予の無礼を咎むるなく、足下一顧の資となる

を得ば、予の望みは足れり。  
柴庵兄足下、予は終に臨んで足下に告げざるを得ざるものあり。何ぞや。  
足下の入獄中、『牟婁新報』の編輯に於ける、幽月女史は手腕と黽勉と、即ち是れ也。  
幽月女史が手腕は、足下の能く知了する所、而も足下が入獄以来の同女史の手腕は、更らに敬服と感歎を禁ずる能はざるものあり。  
素より寒村君といへる健筆家のあるありて、同女史を助くる所、多かりしと雖も、同女史のチャームに富める筆、感興に満てる文なかりしならんには、『牟婁新報』は太甚しく殺風景となり、太甚しく寂寥となり、読者の不満と嫌厭とを招致せむことは、読者は均しく認むるところならむ。  
啻に同女史の筆致の多趣味なるのみならず、其編輯の整頓せる、記事の精選せる、主義の一貫せる、地方新聞として、又終に見るべからざる好新聞を発行し得たるは、一に幽月女史の手腕の非凡なりしに依らずんばあらず。  
柴庵兄足下、幽月女史は非凡の手腕に加ふるに、非常の努力黽勉を以てせり。文筆に従事せる者の太甚しき苦痛は、脳痛にあり。同女史は、足下が入獄以来、一日として之れに悩まされざるはなく、殊に近來只愛妹子の急性肺炎に罹り、次で肋膜炎に變ずるの不幸に遭遇せらるゝあり。自らの病に心労するのみならず、愛妹子の看護に心を碎き且つ毎時足下の病夫人を訪ふて慰藉す、通常の巾幗者流ならんには、只これにのみても身心綿の如く疲憊し何事も手を着くる脳はざるべき也。然るに女史の意志の強固なる、職務に忠実なる、這等人道に於ける尽すべき務は、遺憾なく尽して後、編輯の事に従ふ。其精力の非常なる、予は転た感歎の声を禁じ能はざる也。  
況んや健筆家の寒村君、又頃日「牟婁社」を去りたるをや。独歩君入りて之れを助くるありと雖も、幽月女史の苦心は察するに余りあらずや。  
柴庵兄足下、足下万事を放棄して獄に入りたりと雖も、足下の新報をして毫も声価を失墜せしむる事なく、否な或意味に於て、より已上の喝采を博し、声価を高めたるものあるは、一に幽月女史の手腕と努力の致す所たらざるばあらず。  
本庄一郎と思われる（其他の人に向つて感謝すべく、編輯に關しては大に幽月女史に感謝せらるべき也）。

足下の明なる予じめ今日あるを知りて而して女史を聘して記者とせられしならんか、而も如何に手腕ありとも、女史に誠実の精神なくんば、能く今日能はざる也。足下の明、驚くべく、女史の手腕と努力に至りては、更らに驚嘆せざるを得ざる也。

柴庵兄足下、予は足下の出獄に際して親しく足下を田辺監獄の門に迎へ、如上の言を述べて足下に望み且つ告げんと予期したりし也。而も予か任務の多忙は終に予をして予期を果たすを得せしめき。予の頗る遺憾とする所にして、且つ足下に謝する所也。足下幸に之を諒せよ。

柴庵兄足下、足下苦役に服する一ヶ月有半、寒苦と悪食とに大に健康を害したりと聞く、幸に静養加餐、以て健康を復し、出獄当日を一新紀元とし、一層の熱誠と、一層の思慮を傾倒して、社会、人道の為に努力あらんことを至嘱に堪えざる也。足下大に自重自愛せよ。

嗚呼紀念すべき哉、四月二十七日！  
嗚呼歎喜すべき哉、この月這の日！

（清滝智龍「柴庵兄の出獄を迎ふ」『牟婁新報』第五八四号 明治三九年四月二七日

前掲四六八『復刻版 牟婁新報』第六卷 二一五頁）。

境野も清滝と同じく柴庵の人柄に敬意を表している。

「柴庵圀圀の人となる柴庵の任之より重きを加へたるもの幾何ぞ

柴庵初めより唯口の人唯筆の人にあらず然れども彼の真に社会の総べての機関が強者を保護すべく造られたるものなることを切実に実際に見得たりしは蓋し這回にあり柴庵は益々弱者のために戦はざるべからず

余が柴庵を畏敬し之によりて学ぶところのもの常に多ししかも特に柴庵に尚ぶ所は其の意氣にあり柴庵は意氣の人なり

意氣の前には権力なし意氣の前には富豪なし唯彼は一意氣を以て驀進に突進し前後に顧慮するの閑なし彼は男子中の男子也

意氣一たび投ずれば哀情を開いて相許し貴なく賤なし学不学なく唯心友を以て相見る彼は小なりといへどもなほ平等の権化也

柴庵獄を出でんとす、余が今柴庵のために祝せんとするところは其の嘗めたる経験が柴庵の意氣を駆りて何事をなさしむべきかを予知し得るが如きするがためなり



彼の周囲には今より常に平等の小国を有すること曩日の如くならん而して彼は之がためになほ奮闘するの意氣旧に十倍するものあらん」

（境野黄洋「柴庵出獄頌」『牟婁新報』第五八四号 明治三十九年四月二七日 前掲四六八『復刻版 牟婁新報』第六卷二一五頁）。

高島は、法律の不備や欠陥によって起こることを次のように指摘している。

「畏友毛利柴庵兄、この度いよく前科者となりて、戸籍に赤い肩書を有する身分となりぬ、まづ以て芽出度いかな。」

日本の国民は、日本の国法の前には従順ならざねべからず。然り、国法の命ずるところ、死も亦すべからざるなり。

されど、判官と称し、司直の吏と呼ぶもの、時に迷雲に蔽はれて、過誤の断定をなすことなきにしもあらず、夫は第一審の判決が第二審に破れ、第二審の判決は更に上告審に破棄せらるゝが如きこと、敢て珍しからざるにあらずや。

国法厳として犯すべからず、されど、此くの如くむば、世の以て国法を犯せりと定められたるもの、未だ必ずしも、真に国法を犯せるものなりや否やを知ると、頗る難かるべきなり。況んや、国法尚不備欠陥頗る多くして、その定めて以て罪となすところのもの、未だ悉く罪にすべきにもあらざるに於てをや。

世人は国法に従順なる、寧ろその度を超え、却つてこれを恐怖するものあり。この故に、苟も国法に問はれたりとさへ言へば、一も二もなく、たゞ恐しき悪人なるかの如き感想を以て、これを待たむとす、謬れりといふもなか／＼おろかなり。

悪人は多し、されど彼等は、巧に国法の裏をかいて、未だ刑せらるゝに至らざるなり。善人は少し、されど彼等は行動云為や、正々堂々たり、己の公明を以て人を付るが為に、時に群小の憚るところとなりて、陥擠せらるゝことなきにしもあらず。悪人必ずしも法に問はれずして、善人却つて刑に処せられる。今の世、悪人たる是歟、善人たる非歟、人恐らくは迷はむ。

畏友毛利柴庵兄、この度いよく前科者となつて、戸籍に赤い肩書を有する身分となりぬ。僕のこれを芽出度しといふは、この事偶々以て、如上の疑問を解決し去るを得べしと信ずるがためなり」

（高島米峰「前科者毛利柴庵」『牟婁新報』第五八四号 明治三十九年四月二七日 前掲四六八『復刻版 牟婁新報』第六卷二一六頁）。

荒畑は柴庵の事件から自らの運動への決意を述べている。

「柴庵毛利君足下、先きに兄が獄に入らんとするや、僕実に編輯局の一隅にありき、爾來茲に四十有五日、いま兄が獄を出で、青天白日を仰ぐの日、僕実に二百里をへだてたる家郷にあり、此れを思ひ彼れを想へば、万感胸にあふれて涙□めに滋し、あゝ兄よ、僕は遂に師友に対して不親の弟子となり了れり。」

柴庵君足下、兄が獄に入らんとするの日、僕等を警しめたる言は、僕今も尚ほよく記憶せり、然れ共今出獄せるの足下に対して、僕はかつて僕等が編輯の任に当れる牟婁紙を呈するに忍びざるなり、而して僕はいまは乃ち奈何、獄裡の兄に背むき、幽月管野君を残して、独り遠く去つて故山に皈れり、嗟呼足下、僕豈兄に対して慚愧の念なからんや。

柴庵君足下、僕が独り恣まゝに退社したるに就ては、希くば深く咎むるをやめよ、僕は決して僕の罪を塗抹し去らんとする者に非ず、只だ僕が心を知れる者は実に兄なる事を知るが故に、敢て謹しむで兄の叱責を受けんのみ。

柴庵君足下、兄の入獄するの間も無く東都に於ける吾党の同志の多数は、兇徒嘯集の名の下に羅織せられたり、兄よ、吾党の運動が之れに依て些の挫折を見るが如き事は無きも、然も又此れ吾党にとりて打撃たるを失なはず、嗟呼兄よ僕微力短才何のなすなしと雖ども、立ちて戦ふべきの秋に非ざる莫らんや、足下希くはゆるせ、僕が退社は決して自己一身のためにせるに非ず。

柴庵君足下、吾党の運動はこれより漸く熾んならんとしつゝあり、僕また先輩の麒麟尾に附して大に戦かはんと欲す、嗟呼前途を望めば雲漠々たり、道暈々たり、压制、迫害、艱難、侮辱は雨の如く吾等に向つて降り来たらんとす、想ふに疎狂僕が如きもの、兄がなめ来れる苦がき経験に接する日の、必ずや遠からざるべきを想ひて、独りひそかに微笑を禁じ得ざるなり。

短かしと雖ども四十有五日、囚獄の疲労或は兄が身に累わひせざらんやを恐る、足下希くば自重加餐せよ」

（荒畑寒村「柴庵君足下」『牟婁新報』第五八四号 明治三十九年四月二七日 前掲四六八『復刻版 牟婁新報』第六卷 二一六頁）。

のちに荒畑も柴庵と同じく官憲による弾圧で刑に服している。一九〇八（明治四一）年六月二二日、赤旗を持った社会主義者たちと、それを待ち構えていた警官隊との衝突である赤旗事件が東京・神田で起こった。事件では、堺利彦・大杉栄・山川均らとともに、荒畑も逮捕されており、裁判で荒畑は重禁錮一年六ヶ月と罰金一

五円の刑を受けた。

大石は、高島と同様法律の不備や欠点によって起こることを指摘し、それが原因で柴庵は官吏侮辱罪に問われたとしている。

「吾人が究極の理想は、法律の必要な社会を、地上に建設するにある也。

左れど此理想を達するの日に到る迄、姑らく善を保護して悪を懲罰する、法律なるものゝ必要を認めざるべからず、然り吾人が希望する所のものは、唯善を護り悪を懲らすの法律のみ、現社会存在せん事之なり。

若し夫れ斯の如き法律の行はるゝ世ならんか、人は必ずしも繁瑣なる法文を精読するに及ばず、面倒なる条項を記憶するを要せず、唯善を行ひ悪を避くるのみにして、安穩なる生涯を過ごし得べき筈なり、然るに現時の法律なるものは、往々無辜の良民を罪して、奸悪なる醜奴を庇護するの実あるが故、之を恐るゝは皆に悪人のみならず、善者も亦之に對して戦々競々たらざるを得ざる也。

左れど吾人は之を見て甚だ奇怪なる現象なりとせず、竊かに法律の製造者と共に取扱人の誰なるかを考へ、斯の如き不正なる法律の行はるゝの当然なりと思ふなり、見よ現時の立法議員は地主と資本家の利害を代表するものに非ずや、司法官吏は貴族と富豪の意志を遂行するものに非ずや、然り、彼等の心中に潜めるものは、唯情実のみ私利のみ、其間何等の正義なく公益なきは、寧ろ自然の数なるに非ずや。茲に於てか吾人は此法律に感服する事能はず、唯之に従ふべく強ゐらるゝにより、止むを得ず之に屈服せん事を勉むるのみ、奚が之に對して尊敬の念を抱き得るものならんや、但だ吾人は無政府主義の徒にあらざるが為、現時の法律を全滅する事によりて、直ちに理想の天地を現出し得べしと信ずるものにあらず、却つて此法律の範圍内に於て、議院と政府を变革するの運動を為し、以て公正なる法律を制定するの資に供せんとする也。

然りと雖も人は到底感情の動物なるが故、冷静なる条理のみを以て律せらるべきに非ず、苟も一箇の理想を抱き主義を鼓吹し、国利民福を圖らんとするもの、赤誠事を執るに當り、其進路を遮るものあるに逢はんか、之れが障害を打破せん為熱烈の迸る所、図らず法網を触るゝの挙に出づるは往々免れ難き所、惟ふに柴庵兄が此回の筆禍も亦此類に属せし事ならん、左れど吾人は危険なる現行法律の下にありて、兄が行動を庇保するに充分の自由を有するものに非ず、惟兄が出獄に際して

満腔の同情を寄せて止まんのみ」

（大石禄亭「法律何物ぞ」『牟婁新報』第五八四号 明治三十九年四月二七日 前掲四六八『復刻版 牟婁新報』第六卷 二一七頁）。

五〇三

杉村は出獄によつて柴庵が果たして真の自由の身になるのかと疑問視している。

「柴庵今将に出獄せんとすといふ、出獄と入獄とを知らず其差幾何ぞや

出獄は果して獄を出づるの謂なるか獄を出づれば果して能く自由の人となり得るか、自由の人とは国庫支弁の経費の下を脱して地方税支弁の経費の下に立つて謂ふか、田辺監獄支署長の治下が暗黒にして不自由にして地獄なるか和歌山県知事清棲某の治下が青天白日にして自由にして娑婆なるか、獄内に果して花の咲くを見、鳥の歌ふを聞き得ざりし乎、獄外に果して能く怨嗟の声を聞き鳴咽の涙を見るを得ざるべき乎、桎梏圀は地獄の専売特許品なるか、牛頭馬頭は竟に青天白日の下、横行せざるか、嗚呼入るが不幸か出づるが幸か、柴庵幸にして毫すること勿れ

柴庵の出獄に際して且つ疑い且つ疑ふ、疑ふと雖も必ずしも解き来るを須ゐず、乃ち出獄を迎ふるの辞を叙せずして之を疑ふの文を綴る」

（杉村縦横「出獄乎入獄乎」『牟婁新報』第五八四号 明治三十九年四月二七日 前掲四六八『復刻版 牟婁新報』第六卷 二一九頁）。

五〇四

「毛利柴庵入獄紀念」（『新仏教』第七卷第六号 明治三十九年六月一日 四二五〜四二七頁）。

五〇五

毛利柴庵「清棲知事の来郡を迎ふ」『牟婁新報』第六五一号 一九〇六（明治三九）年一月二四日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一九五〜一九六頁）。

五〇六

毛利柴庵「吾社の革命―今後の小生―」『牟婁新報』第五〇一号 一九〇五（明治三八）年八月一二日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』九一頁）。

五〇七

「一月謀議」のこと。

五〇八

「社会主義者陰謀事件検挙の顛末報告（和歌山県）」（前掲一七八『秘録・大逆事件（下巻）』一六四頁）。

五〇九

「毛利清雅 家宅搜索調書」（前掲一四三『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第五卷』一一〜一二頁）。

五一〇

毛利柴庵「吾社の家宅捜査―今後も毎年一二回づゝ希望す―」『牟婁新報』第一〇六二号 一九一〇（明治四三）年六月六日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新

報抄録』二七〇頁。

五  
一  
一

『南方熊楠日記3』（八坂書房 一九八八年）三六六頁。

南方は、一九一一（明治四四）年一月二五日付で、知人の西面欽一郎に寄せた書簡で「新宮は尤も神社濫滅の行はれし処にて、そこに此度の逆徒六人迄出しも多少かかる濫政が人氣を狂奔されしことも被思候」（中瀬喜陽編「西面欽一郎・西面寛五郎宛南方熊楠書簡」『熊楠研究』第八号 南方熊楠研究会 二〇〇六年 一四九頁所収）と書いていたが、実際は成石平四郎と交流があった。南方の日記によれば、南方と成石の最初の出会いは、一九〇五（明治三八）年七月二八日で、共通の友人であつた川島友吉が成石を南方のもとを連れていつて引き合わせた。同日の南方の日記には、「川島氏、成石氏つれ来り酒のみに之く。予は不行」（前掲五一）『南方熊楠日記3』（三七頁）とある。四日後の八月一日の日記にも「朝川島氏来る。成石氏帰るをおくり万呂に到り大なるケムリタケとり来る」（同書三八頁）と書かれている。それからの三年ほど直接の交流はなかったが、一九〇七（明治四〇）年一月十三日のページに、「松枝（筆者注・南方の妻）は午後菊枝（筆者注・松枝の妹の菊重）及下女にチヨコ六（筆者注・南方の長男の熊弥）負せ、大黒屋へ請川村成石氏の娘（筆者注・成石の妹のともと思われる）を訪に之」（同書一三一頁）という記述がある。一九〇八（明治四一）年一月二三日の夜、熊野川上流方面への採取旅行で川湯温泉の旅館にいた南方のもとに、成石が訪ねてきており、同日の日記には「夜鳴石四郎（筆者注・成石平四郎）氏来り一寸話す。予田辺にて一度あひしことあり」（同書二二六頁）とある。これ以降、一九〇九（明治四二）年三月二九日（同書二五八頁）、一九一〇（明治四三）年一月二日（同書三二九頁）、同年一月一日（同書三三一頁）と、たびたび手紙を交わしている。

五  
一  
三

川島と田野は七月二日に家宅搜索を受けている（前掲五〇八「社会主義者陰謀事件 検挙の顛末報告（和歌山県）」一六八頁）。南方の日記にはこの二人の家宅搜索に関する記述はない。

五  
一  
四

杉中浩一郎「南方熊楠と大逆事件」（『くちくまの』第八三号 紀南文化財研究会 一九九〇年 九三頁）。

五  
一  
五

前掲五一「『南方熊楠日記3』三七三頁。

このときは、成石は所持の事実をすぐに認めたため、事件につながる直接的な証拠とならず、処分保留のまま釈放された。釈放後、新宮教会牧師の沖野岩三郎のもと

を訪ねた成石は、「実は川の鮎をとるために坑夫からダイナマイトを買っておいた。社会主義をやめているんだが、それを差しおさえられた」といい、「へたをすれば、爆発物取締罰則違反で二、三日やられるぞ」と笑って帰っていったという（神崎清『革命伝説 大逆事件③ この暗黒裁判』子どもの未来社 二〇一〇年復刻 一九九頁）。成石は、請川村に帰ると、柴庵に手紙を出しており、それが六月一日付『牟婁新報』第一〇六六号の「牟婁日誌」に掲載されている。

「十六日（雨）請川村蛙聖の通信に云く、「私も三日の朝寝込みへ踏込まれスグ新宮へ連れて行かれました。何んの嫌疑かさっぱりわかりません。私は人相が好く無いから人殺しの嫌疑か知らんと思ひます。新宮署へ着いてバクダン事件と聴きヤレヤレひどい目に遭ふものだと思ひました。ちよつとココで一句「雲晴れて後の氣持ちや夏の月」はドウです」

（毛利柴庵「牟婁日誌」『牟婁新報』第一〇六六号 明治四三年六月一日 前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二八八頁）。

当時、ダイナマイトによる川魚の密漁は、公然の秘密のように行われていたので、地方警察にとつて大した犯罪ではなかった。成石も、ダイナマイトを魚捕り用として所持していることは、重大な犯罪にはつながらないと考えていたことが、これらの発言や手紙からうかがえる。

「毛利清雅 家宅搜索調書」（前掲一九『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八巻』三九八頁）。

毛利柴庵「牟婁日誌」『牟婁新報』第一〇七一号 一九一〇（明治四三）年七月三日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二七八頁）。

「証人毛利清雅訊問調書」（前掲一九『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八巻』三九一頁）。

前掲五〇八「社会主義者陰謀事件検挙の顛末報告（和歌山県）」一六六―一六九頁。大逆事件の死刑判決は一九一一（明治四四）年一月一日に出されたが、その翌日南方熊楠は自身の日記に、「昨日大逆事件の言渡あり。幸徳、管野以下二十四名死刑。（知人成石平四郎及其兄（予知ず）勘三郎もあり、明治十三年と十五年生れ也。）他二人懲役。理由書二百枚ありし由、鶴裁判長之を読み」（『南方熊楠日記4』八坂書房 一九八九年 一〇頁）と書いている。成石らの死刑執行は、一月二四日に行われ、南方はその日の日記に、「本日午前九時より午後には渉り幸徳伝次郎以下十二名

死刑執行、成石平四郎もあり」(同書 一二頁)と書き、翌二五日には「川島氏来る。成石平四郎最後のハガキ川島氏に來りしを見る」(同書 一二頁)とある。一月十九日、成石は川島友吉にはがきを出しており、それを南方は紙片に書き写し、二四日付の日記に添付している。その内容は次の通りである。

「暫ク交誼ヲ忝シ千万感謝、小生事十八日死刑ノ宣告ニ接シ申候、就ハ遠カラズ此肉骸ハ斷頭台上ノ露ト消エ可キ申候、今更何事をも語り不申候、然し小生ハ死を以テ 暗黒と感ぜず光明ある浄土ニ至る事と信し歡喜ノ中ニ瞑目ス可ク候、先ハ此世の御暇まで／四十四年一月十九日 牛込 同日ノ消印」(同書 一二頁)。

死刑執行の直前、成石は南方にもはがきを送っており、そのはがきは執行後の一月二八日に送られ、三〇日に南方のもとに届いている。南方はそのはがきも同日付の日記に書き写している。

「和歌山県田辺町 南方熊楠先生と表宛し、／先生是迄眷顧を忝しましたが、僕はどうとう玉なしにしてしまいました。いよいよ不日絞首台上の露と消え申すなり。今更何をかなさんや。唯此上は、せめて死にぶりなりとも、男らしく立派にやりたいとおもっています。監獄でも新年はありましたから、僕も三十歳になったので、随分長生をしたが何事もせずに消えます。どうせ此んな男は百まで生たつて小便たれの位が関の山ですよ。娑婆におつたて往生は畳の上ときまらん。そう思ふと、御念入の往生もありがたいです。右は一寸此世の御暇まで。東京監獄にて成石平四郎四十四年一月下旬」(同書 一四頁)。

毛利柴庵「家宅捜査大賛成論(上)」一九一〇(明治四三)年六月九日(前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二七一頁)。

同右 二七一頁。

同右 二七一～二七二頁。

毛利柴庵「家宅捜査大賛成論(中)」一九一〇(明治四三)年六月一二日(前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二七四頁)。

毛利柴庵「家宅捜査大賛成論(中)続」一九一〇(明治四三)年六月一五日(前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二七五頁)。

同右 二七四頁。これに関連して、柴庵は『牟婁新報』に小田頼造・豊田孤寒・荒畑寒村・菅野須賀子ら社会主義者を記者として迎えたことにふれ、社会主義者のみ

ならず、彼らと交流があつたというだけで官憲の監視対象となつた、柴庵自身が評議員をつとめる「新仏教徒同志会」に対する弾圧を批判している。

「予はこゝに、有の儘に告白するが、実際の所、今の政府当局者のする事には感伏の出来ぬ事が多い。官吏なんぞにも善く無い奴が沢山ある、予が之を、ソウいふたとて、予を無政府党の仲間に加はるゝのは随分ヒドイ。明治三十八年の頃、堺枯川氏や幸徳秋水氏が万朝報を退社して平民新聞を発行し、盛んに非戦論を唱へた為め、時の政府の忌諱に触れ手厳しい圧迫を受けた事がある、予は此頃此牟婁城に拠て、「軍資」を募集する「恤兵金」も募集する「慰問袋」を満州へ贈れと周旋する「軍人家族自助団」も組織した。「提灯行列」も盛んに遣つた、予は大の戦争好きぢや。併し平民新聞社を追はれて熊野へ落ちて来た小田野声をも豊田孤寒をも収容した。次で、荒畑寒村や管野幽月をも収容した、無論、予は社会主義の主張は確に予の奉ずる仏教の教理の一部に叶ふて居ると信じて居たがである、仏教は極重惡の罪人でも之を保護せよと教へてある、況や其頃の社会主義者は主として「普通選挙」を主張した「生財機關」の公有を主張した「戦争の罪惡」を主張した、之等は決して没条理の主張でない、確に時弊に命中して居る、故に予は東京から落ちて来た右等の青年を収容し予の出来る範圍で応分の保護をしたのである。之が為めに、無学な警察官などは間々予をば社会主義の領袖かの如くに見て居た案配ぢや。併し、堂々たる我中央政府が之が為めに、予をば社会党の一員と見て居たとすれば粗漏も亦甚しと云はざれを得ぬ、予は仏教信者である。仏教の健全なる信仰を根本義とし社会の改善を力むる「新仏教同志会」の評議員の一人である、知らず政府者は爆裂弾製造云々の名によつて我新仏教同志会をも、危険極まる無政府党の団体に捲き込んで之に圧迫を加へんとせらるゝか」

（前掲五二二「家宅捜査大賛成論（上）」二七二頁）。

『牟婁新報』社員であつた雑賀貞次郎の回想によれば、柴庵は「小田、豊田、荒畑を記者としたのは同志を擁護するというよりも、他の寺院の徒弟を一時自坊に預り寄食せしめるような気分で「頼まれたから預つてゐるのだ」というていた」（雑賀貞次郎「大逆事件と田辺の追想」『田辺文化財』第四号 田辺文化財審議会 一九六〇年 五四頁）という。当時の政府の弾圧の対象である社会主義者を記者としていたのは、「極重惡の罪人でも之を保護せよ」という仏教の教義に基づいたもので



あった。柴庵は「寒村でも幽月でも野声でも孤寒でも、敬愛す可き青年として待遇した、ソシて社会主義よりも拡大なる仏教を説いた、仏教の教理を基礎としたる社会主義でなければ本当で無いと話し」（前掲五二六「家宅捜査大賛成論（中）」二七三～二七四頁）ており、彼らに対する自らが説いた仏教の影響を次のように記している。

「其お蔭かドウかは知らぬが豊田孤寒の如きは全く社会主義を棄て真面目な仏教信徒として今は熱心な教育者になつて居る、小田野声の如きも社会党を脱して「無我愛」に入り「トルストイの田園生活」に入り今は三転して真言宗の阿字観を修行し、モウ二年も前に剃髪得道の身となつてたといふ噂ぢや、寒村と幽月とは不幸にして益々極端に走せ、イツ逆も感伏の出来ぬ事ばかりして居る」

（前掲五二六「家宅捜査大賛成論（中）」二七四頁）。

豊田と小田らの仏教への帰依は、柴庵の仏教思想が少なからず影響されていると考えられる。しかし、荒畑と管野は、豊田や小田とは対照的で、荒畑は赤旗事件で入獄し、管野は宮下太吉・新村忠雄・古河力作らとともに大逆事件の中心人物として死刑に処せられた。この二人については、柴庵も「僕は今でも此兩人を我仏教によつて救ひ得なんだ事を甚しく遺憾に思ふて居る」（前掲五二六「家宅捜査大賛成論（中）」二七四頁）と悔やんでいる。

五二九

大逆事件以前の堺の『牟婁新報』への寄稿は、「管野須賀子君の入社に就て」（『牟婁新報』第五六一号 明治三十九年二月五日）、「東京より」（『牟婁新報』第五八七号 明治三十九年五月六日）、「子なり親なりを読む」（『牟婁新報』第五九四号 明治三十九年五月二七日）、「貧乏人の見識（礼服廃止説）」（『牟婁新報』第六六四号 明治四〇年一月一日）、「七種の人物」（『牟婁新報』第七八〇号 明治四一年一月一日）である。

五三〇

前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』一三四～一三六頁。

五三一

同右二一〇四～二一〇五頁。

五三二

前掲五一〇「吾社の家宅捜査―今後毎年一二回づゝ希望す―」二七〇頁。

五三三

毛利柴庵「家宅捜査大賛成論（下）」一九一〇（明治四三）年六月二一日（前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二七六～二七七頁）。

前掲四九七「毛利柴庵側面私記」二六頁。この『南紀大衆雑誌』は筆者未見のため、杉中の説明を援用している。

五三四

- 五三五 前掲四九七「毛利柴庵側面私記」二六頁。
- 五三六 前掲五二八「大逆事件と田辺の追想」五四頁。
- 五三七 毛利柴庵「感じた事のくさぐさ」(一)『牟婁新報』第一一〇四号一九一〇(明治四三)年一〇月一二日(前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二八〇頁)。
- 五三八 毛利柴庵「評論」『牟婁新報』第一一九〇号一九一一年(明治四四)年七月七日(前掲二一『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』二八三頁)。
- 五三九 沼波が市場に語った愚童の死刑執行の様子は次の通りである。
- 「内山愚童 刑の執行を宣告せらるるや、沼波教誨師は彼愚童に対つて、「貴方は元僧侶の方であるのだから、せめて最期の際に、念珠を手にかけられたがよからうと思ふがどうですか」と尋ねると、彼は暫くの間、黙然として考へてゐたが、唯一語「止ませう」と答へた。そこで沼波氏は「それはまだどういふ訳ですか」と反問すると、彼れは又一語「どうせ浮ばれない方ですもの」と、寂しく笑つたさうである」(市場学而郎「幸徳一派の刑死刹那」『日本犯罪学会報』一九二五年 前掲三三『内山愚童』七頁より援用)。
- 五四〇 前掲四三『曹洞宗ブックレット 宗教と人権 8 仏種を植ゆる人―内山愚童の生涯と思想―』三四頁。
- 五四一 白仁は「死刑執行にあつて、沼波教誨師が念珠を手にすることをすすめたところ愚童は一言「止ましよう」と答えた」と伝えられ、これが信仰を捨て去つたと解釈されることがあるが、道元に「数珠を持して人に向ふは是れ無礼なり」(『永平寺衆寮蔵規』)の言葉があり、信仰を捨てたという解釈はあたらない」と愚童の棄教を否定している(白仁成昭「内山愚童」日本アナキズム運動人名事典編集委員会編『日本アナキズム運動人名事典』ぱる出版 二〇〇四年 九二頁)。
- 五四二 秀天は寺院の住職の経験はなく、柴庵が住職をつとめる高山寺は田辺の名刹として知られている。
- 五四三 愚童は、仏教の伊藤証信のみならず、キリスト教社会主義者の石川三四郎とも親交があつた。顕明と節堂は、新宮教会牧師の沖野岩三郎と親交があつた。秀天が会員をつとめる「神戸平民倶楽部」には、キリスト教社会主義者の中村浅吉や、キリスト教伝道師の藤野某と宇野某がいた。柴庵はクリスチャンの荒畑寒村と菅野須賀子を『牟婁新報』の記者に抱えていた。また、田辺での大逆事件の家宅搜索では、田辺教会牧師の伊藤貫一と、田辺聖教会伝道師の堀内穰も搜索を受けているが、彼

ら二人は柴庵と交流があつた人物と推測される。

五四四 前掲七〇「内山愚童 伊藤証信宛手紙（明治三八年一月初旬ごろ記）」二三〇頁。  
五四五 井上秀天「平凡極まる平和論」（『新仏教』第一二巻第一二号 明治四四年一二月一日 一一一―一四頁）。

五四六 「綱領」（『新仏教』第一巻第一号 明治三三年七月一日 頁数なし）。

五四七 大逆事件当時、節堂は満二五歳だった。  
五四八 一九一一（明治四四）年二月一日付で、曹洞宗は宗務当局の総務・財務・人事・

「謹ミ惟ミルニ我 高祖承陽大師  
王 霸隆替封家危急ノ秋ニ当リ偏ニ尊  
皇 護国ヲ以テ立教ノ本義トシテ此ノ宗門ヲ開創セラレ 太祖常済大師切ニ其ノ貽  
範ニ依遵シテ光緒ヲ紹隆セラレ爾後 両祖大師ノ法子法孫ハ綿々相承シ一ニ 両  
祖ノ洪範ニ随順シ宗門凡百ノ施設皆則ヲ此ニ取り七百年來末々曾テ一日モ尊  
皇 護国ノ家訓ヲ遵行セサルコトナシ是ヲ以テ  
歴朝天皇乃至  
今上天皇陛下ノ我宗門ニ至重ノ眷顧ヲ垂レタマフコト蓋シ世ニ多ク其ノ匹儔ヲ見  
ルコトナク宗門上下一般ハ常ニ優渥ナル

天恩ニ感激シ奉リ日夜孜々トシテ報効ノ実蹟ヲ奏センコトヲ熱衷スルノ際ニ於テ  
豈ニ図ランヤ今般空前ノ大逆ヲ企図セシ幸徳等兇徒ノ党中ニ曾テ宗内ニ在リシ内  
山愚童ナル者ヲ出サントハ上

皇室ニ対シ又 両祖大師ニ対シ誠惶誠懼ノ至リニ勝ヘサルノミナラス下国家公衆  
ニ対シ実ニ分疏ノ道ナク宗門千載ノ恨事復之ニ加フルモノナシ  
両本山貫主猊下ハ恐懼措カル、所ナク直ニ謹慎セラレ又管長猊下ハ一宗本末ヲ代  
表シ直ニ

闕下ニ趨リテ恐惶陳謝ノ道ヲ尽サレ又両本山貫主猊下ハ直ニ両祖大師ノ真前ニ恐  
惶哀謝セラレ吾等補佐ノ責ニ任スル者ハ管長猊下ニ対シ謹テ其ノ進退ヲ伺ヒ又曾  
テ補佐ノ責ニ任セシ者モ齊ク謹テ陳謝ノ道ヲ致シ又神奈川県第六宗務所長心得三  
輪淵龍ハ平素管内不取締ノ廉ニ依リ神奈川県海蔵寺認可僧堂師家佐藤実英ハ愚童  
掛錫中教育其ノ道ヲ尽サハリシ廉ニ依リ林泉寺本寺香林寺住職中津清定並ニ林泉  
寺法類總代鈴木太翁ハ愚童ヲ選舉シテ住職セシメ及平素ノ行為ヲ知ラサリシ廉ニ

依各其ノ不行届ヲ管長猊下ニ陳謝セリ

蓋シ逆徒内山愚童ハ最モ晩年ニ得度シ僅ニ其ノ経歴ヲ備ヘテ神奈川県足柄下郡温泉村林泉寺ニ住職シタル者ニシテ住職ノ後末タ久シカラスシテ明治四十二年七月出版法及爆発物取締規則違反ニ依リ縲紲ノ身ト為ルヤ宗務院ハ其ノ犯罪ノ容易ナラサルヲ知リ直ニ干与者ヲ召シ旨ヲ諭シテ住職ヲ辞セシムルノ手續ヲ了シ尋テ客年五月其ノ懲役五年ノ刑ニ服罪スルニ当リ直ニ僧侶懲戒法ニ依リテ宗内擯斥ノ処分ヲ了セシニ何ソ料ラン今回ニ大逆事件ノ党与トシテ其ノ曾テ宗内ニ在リシ日既ニ此ノ滔天ノ罪惡ヲ企図シアリシトハ誠ニ戦慄ノ至リニ勝ヘサルナリ

伏シテ惟ミルニ  
天恩洪大海涵地要幸ニ  
両祖大師以還ノ尊

皇護国ノ宗風ヲ照鑑アラセラレ戒飭ヲ宗門ニ垂レタマフコトナク政府亦宗門ニ於ケル偶然發生ノ事件ニシテ敢テ問責スル所ナシト雖モ苟クモ宗門ニ在籍スルノ僧侶ハ誠恐誠懼齊ク今回ノ大事ニ省悟スル所アルハ無論自今以後一層深ク  
両祖大師ノ遺訓ヲ遵守シ自他相警戒シテ切ニ尊

皇護国ノ道念ヲ淬礪シ濟世利民ノ行願ヲ發揮シ日夜ニ檀徒信徒ヲ化導シテ報効ノ實蹟ヲ奏シ宗門ニ於ケル此ノ千載唯一ノ過咎ヲ購フコトヲ期スヘシ

〔「諭達」〕『宗報』第三四〇号 明治四四年二月一五日 曹洞宗 前掲四三『曹洞宗ブツクレット 宗教と人権 8 仏種を植ゆる人―内山愚童の生涯と思想―』八七〇八頁所収。

真宗大谷派では、一九一〇（明治四三）年十一月一〇日に、次のような「諭達」を出している。

「我カニ諦相依ノ宗風ハアナカチニ出家発心ノカタチヲ本トセス捨家棄欲リスカタヲ標セス王法ヲ本トシ仁義ホ履ミ而モ内心ニハ信心ヲタクハヘテ報恩ノ称名ヲタシナミ報土ノ得生ヲ期スルニ在リ是レ即チ本為凡夫ノ本願ヲ開闡スル所以ニシテ一トシテ正依ノ経説ニ濫觴セサルハナシ五逆ノ重罪正法ヲ無ミスルヨリ生シ正法中ニ仁義礼智信アルヘキハ註家ノ指南ニシテ二諦相依ノ宗教ハコハニ濫觴シ特ニ悲化段ノ金口ニ至リテハ明ニ或ハ世間ノ人民父子兄弟室家夫婦都ヘテ義理ナク法度ニ順セサルヲ悲ミ或ハ臣其君ヲ欺キ其父ヲ欺キ兄弟夫婦中外知識更々相欺誑スルヲ誠メ今世ニ現ニ王法ノ牢獄アリ罪ニ随ヒテ趣向シテ其殃罰ヲ受クト開示シタマヒ正依ノ経説人生彝倫ノ紊ル可ラサルヲ教ヘタマフハ明鏡ヲ懸クルカ如ク

孰シカ疑点ヲ容ルル余地アラシヤ

今上陛下教育ニ関スル勅語並ニ戊申ノ詔ニ於テ宣示シタマフ叡慮ト其旨ヲ一ニシ倫理ヲ紊サス秩序ヲ保チ社会ノ安寧ヲ希図スルハ本宗信徒ノ本領ニ有之誤認アルヘカラス処近來社会ノ文物日ニ進ミ月ニ移ルト共ニ奇ヲ好ミ新ヲ競フノ余或ハ国家組織ノ必要ヲ認メス社会財産ノ平均ヲ唱ヘ国体ヲ更メ政府ヲ毀タント欲シ之ヲ言論ニ発シ尚之ガ実行ヲ試ムル者アルニ至ル豈懼レサルヘケンヤ

抑社会平等ノ一面ハ我仏教平等門ノ教理ト相近キガ如キモ因縁所成ノ差別ヲ亡シ惡平等ノ邪見ニ墮ス仏教多門ナルト雖モ容ル、所アルヘカラス別シテ本宗ノ宗旨トハ根本的ニ背馳致候ニ付僧俗ヲ論セス此際特ニ心得違アルヘカラス万一右等ノ僻說妄見ニ随逐候モノ有之ニ於テハ遠ク大聖金口ノ勸誡ニ戻リ近クハ朝家ノ御為メ国民ノ為メ念仏スヘシト祖訓ニ背キ候條生々ニウケシ生ヨリハコノタヒト人身モトモヨロコバシク世々ニカウムリシ国王ノ恩ヨリハコノコロノ皇恩コトニオモシノ遺誡ヲ忘レスニ諦相依ノ宗風ヲ發揚センコトニ心懸ケ僧侶ノ面々ハ布教上殊ニ此等ノ警告ニ怠ラサル様コレアルヘシ

右稟命諭達ス

（「諭達」第五号『宗報』第一一〇号明治四三年一月三〇日真宗大谷派前掲

一四五『高木顯明の事績に学ぶ学習資料集』七三、七四頁所収）。

臨濟宗妙心寺派は、一九一一（明治四四）年一月一三日付で、管長・豊田毒湛名義で次のような「宣示」を出しており、これが寺院や檀信徒への諭達にあたる。

「我國に於ける臨濟宗立教開宗の要旨は興禪護國に在り是の故に本宗一般寺院の本尊前には今上天皇陛下聖寿万歳の尊牌を奉安し国家鎮護の道場たることを表示し三時の勤行旦望の祝聖には陛下聖寿の万歳国家の安康を懇禱し以て本宗の教徒信徒をして依準する所を知らしむ而して布教伝道の目的も亦衆庶をして転迷開悟安心立命の要路を知らしめ以て国法を遵守し倫常を保持して愛国尽忠の志念を体認せしむるに在り今上陛下曩に教育勅語并に戊申詔書を煥發し給ひ帝国臣民の依るべき大道を宣示し給へり叡旨炳乎として日星の如し我國民たるもの誰か感奮せさらんや然るに近來一種不穩の思想を鼓吹し国家の秩序を紊乱せんと企つる者あり惟うに是等危険なる思想は我宗立教開宗の精神に反するのみならず仏陀所説の因果の理法を無し惡平等の邪見に墮在するより生ぜしものに外ならず夫れ国法を遵守し彝倫を保持するは生民遂生の要務なり況や本宗立教の主旨は興禪護國の精神

に基けるに於て於や故に本宗の教徒信徒たるものは社会の邪見僻説に蠱惑せらるゝ事なく須らく陛下の聖旨に基き仏祖の勸誡に従ひて因果の理法を尊信し尽忠報国の志念を体認すへし至嘱」

（「宣示」『正法輪』第二八三三号 正法輪発行所 明治四四年二月一二日 一頁）。

また、柴庵が属していた真言宗も、一九一一（明治四四）年一月二五日に、真言宗各宗派連合長者・密門有範の名前で、各寺院に次のような「臨時諭告」を出している。

「這般畏レ多クモ皇室ニ対シ奉リ大逆罪ヲ企ツル者アリタルハ我国振古未曾有ノ不祥事ニシテ忠良ナル帝国臣民ノ均シク憤慨恐懼措ク能ハザル所ナリ我宗元ト即事而真ヲ宗体トシ鎮護国家ヲ規模トスルヲ以テ苟クモ我宗徒タラム者ハ固ヨリ斯カル不心得ノ者之アル可ラズト雖モ今後益々仏祖ノ聖旨ヲ体シ万国無比ノ国体ヲ重シ即事而真ノ宗風ヲ宣揚スルト俱ニ愈々国体ノ精華ヲ發揮スルニ努力セザル可ラズ特ニ各々其ノ檀信徒ニ対シテハ懇ニ忠孝ノ大義ヲ諭シ順逆ノ理ヲ誤マル者無之様留意戒勗ス可シ」

（「臨時諭告」『六大新報』第三八六号 明治四四年二月一二日 国立国会図書館蔵）。

一九一一（明治四四）年一月二三日、曹洞宗は管長・森田悟由名義で、宮内大臣・渡辺千秋に対して、次のような陳謝表文を提出した。

「今般兇徒幸徳伝次郎等ノ企図ハ実ニ千古ノ恨事ニシテ上ハ至尊陛下ノ

宸襟ヲ煩シ奉リ下ハ臣民ノ驚愕ヲ招カシムル至リタルハ平素布教伝道ノ責ニ任スル本職等ノ誠ニ恐懼ニ勝ヘサル所ナルニ況ヤ内山愚童ノ如キ曾て宗門ノ末流ニ在リシ者アルニ至リテハ開教以来常ニ尊

皇護国ヲ以テ本義トスル宗門ニ於テ誠ニ恐懼ノ至リニ勝ヘスシテ身ヲ容ルハノ地ナク深ク慚謝シ奉ル就テハ今後一層宗内僧侶ヲ指導啓発シ切ニ其ノ本分ニ尽瘁セシメ以テ報効ノ実蹟ヲ挙ケシメンコトヲ期ス

右御執奏被成下度奉願上候」

（「陳謝表文」『宗報』第三四〇号 明治四四年二月一五日 曹洞宗 前掲四三『曹洞宗ブックレット』宗教と人権 8 仏種を植ゆる人―内山愚童の生涯と思想―』九二

頁所収)。

また、臨済宗妙心寺派も、豊田管長が病気で上京できなかったため、妙心寺派の元老である天沢文雅に打電して、「内務省に陳情書を提出し、尋で宮内大臣へ上申書を提出して、今回の大逆事件に付ては、陛下の宸襟を悩まし奉り殊に教化に従ふ者の責通るゝ途なく恐懼の情に堪へず、将来は末派提誨の任を完ふし国家の隆治を万一に裨補し奉らんことを誓ふ、趣を執奏せられんことを上申」(「興禅護国」『正法輪』第二八三号 正法輪発行所 明治四四年二月一二日 二頁)したという。

五五〇 五人のうち、秀天は「為政者に利用された宗教は去勢された牛馬の如きもので、宗教としての生命は絶無である。自己の宗教を去勢された牛馬に等しからしめて貰いたくて大騒ぎをやる宗教家こそ至愚」(井上秀天「忙人閑話」『新仏教』第一二巻 第三号 明治四四年三月一日 二七四頁)と、当時の宗教と国家や政治権力の関係を批判している。

五五一 内山愚童は一九九三年四月一三日に、高木顕明は一九九六年四月一日に、峯尾節堂は一九九六年九月二八日に、曹洞宗・真宗大谷派・臨済宗妙心寺派によって復権がなされた。

## 参考文献

- 吉田久一『日本近代仏教史研究』(吉川弘文館 一九五九年)  
吉田久一『日本近代仏教社会史研究』(吉川弘文館 一九六四年)  
吉田久一『日本人の行動と思想六 日本の近代社会と仏教』(評論社 一九七〇年)  
神崎清『革命伝説 大逆事件 全四巻』(子どもの未来社 二〇一〇年復刻)  
森長英三郎『風霜五十余年』(私家版 一九六七年)  
絲屋寿雄『増補改訂 大逆事件』(三一書房 一九七〇年)  
幸徳秋水全集編集委員会編『大逆事件アルバム 幸徳秋水とその周辺』(日本図書センター 一九七二年)  
田中伸尚『大逆事件 死と生の群像』(岩波書店 二〇一〇年)  
大逆事件の真実をあきらかにする会編著『大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース 第一号―第四八号』(ばる出版 二〇一〇年)  
神崎清編『大逆事件記録第一巻 新編獄中手記』(世界文庫 一九六四年)  
大逆事件記録刊行会編『大逆事件記録第二巻 証拠物写(上)・(下)』(世界文庫 一九六四

- 年)
- 神崎清所蔵・大逆事件の真実をあきらかにする会刊『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第四巻』  
 (近代日本史料研究会 一九六〇年)
- 神崎清所蔵・大逆事件の真実をあきらかにする会刊『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第五巻』  
 (近代日本史料研究会 一九六二年)
- 神崎清所蔵・大逆事件の真実をあきらかにする会刊『大逆事件訴訟記録・証拠物写 第八巻』  
 (近代日本史料研究会 一九六〇年)
- 塩田庄兵衛・渡辺順三編『秘録・大逆事件(上巻)』(春秋社 一九五九年)
- 塩田庄兵衛・渡辺順三編『秘録・大逆事件(下巻)』(春秋社 一九五九年)
- 労働運動史研究会編『明治社会主義史料集 全一四巻』(明治文献資料刊行会 一九六〇～一九六三年)
- 労働運動史料委員会編『日本労働運動史料 第二巻』(労働運動史料刊行委員会 一九六三年)
- 松沢弘陽『日本社会主義の思想』(筑摩書房 一九七三年)
- 太田雅夫『明治社会主義史の研究 明治三〇年代の人と組織と運動』(新泉社 一九九一年)
- 荻野富士夫『初期社会主義思想論』(不二出版 一九九三年)
- 山泉進『社会主義事始 「明治」における直訳と自生』(社会評論社 一九九〇年)
- 山泉進『平民社の時代 非戦の源流』(論創社 二〇〇三年)
- 山泉進編著『大逆事件の言説空間』(論創社 二〇〇七年)
- 大原慧『幸徳秋水の思想と大逆事件』(青木書店 一九七七年)
- 松尾尊允編『続・現代史資料Ⅰ 社会主義沿革Ⅰ』(みすず書房 一九八四年)
- 専修大学今村法律研究室編『今村力三郎訴訟記録第三〇巻～第三二巻 大逆事件(一)～(三)』(専修大学出版局 二〇〇一～二〇〇三年)
- 近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会運動史人物大事典』全五巻(日外アソシエーツ 一九九七年)
- 日本アナキズム運動人名事典編集委員会編『日本アナキズム運動人名事典』(ぼる出版 二〇〇四年)
- 赤松徹真・福岡寛隆編、二葉憲香監修『『新佛教』論説集 上・中・下』(永田文昌堂 一九七八～一九八〇年)
- 赤松徹真・福岡寛隆編、二葉憲香監修『『新佛教』論説集 補遺』(永田文昌堂 一九八二年)
- 須藤隆仙『仏教用語事典』(新人物往来社 一九九三年)



- 木村壽・吉岡金市・木村武夫・森山誠一編『森近運平研究基本文献 上・下巻』（同朋舎出版 一九八三年）
- 絲屋寿雄『大石誠之助 大逆事件の犠牲者』（濤書房 一九七一年）
- 濱畑栄造『大石誠之助小伝』（荒尾成文堂・成江書店・宮井書店 一九七二年）
- 森長英三郎『禄亭大石誠之助』（岩波書店 一九七七年）
- 森長英三郎・仲原清編『大石誠之助全集』（弘隆社 一九八二年）
- 熊野新聞社編『大逆事件と大石誠之助―熊野100年の目覚め』（現代書館 二〇一一年）
- 辻本雄一『熊野・新宮の「大逆事件」前後 大石誠之助の言論とその周辺』（論創社 二〇一四年）
- 杉中浩一郎『紀南雜考』（中央公論事業出版 一九八一年）
- 野口存彌『沖野岩三郎』（踏青社 一九八九年）
- 関根進『大逆事件異聞 大正靈戰記―沖野岩三郎伝』（デジタル・パブリッシング・サービス 二〇〇八年）
- 『定本 平出修集』（春秋社 一九六〇年）
- 『定本 平出修集 続巻』（春秋社 一九六九年）
- 『定本 平出修集 第四巻』（春秋社 二〇一五年）
- 管野須賀子研究会編『管野須賀子と大逆事件 自由・平等・平和を求めた人びと』（せせらぎ出版 二〇一六年）
- 新宮市史編さん委員会編『新宮市史』（新宮市役所 一九七二年）
- 新宮市史編さん委員会編『新宮市史 史料編下巻』（新宮市役所 一九八六年）
- 『熊野誌 第六号』（熊野文化会・新宮市立図書館 一九六一年）
- 『熊野誌 第四六号』（熊野地方史研究会・新宮市立図書館 二〇〇〇年）
- 『熊野誌 第四六号別冊』（熊野地方史研究会・新宮市立図書館 二〇〇一年）
- 『熊野誌 第五四号』（大逆事件の犠牲者を顕彰する会・熊野地方史研究会・新宮市立図書館 二〇〇八年）
- 『熊野誌 第五七号別冊』（熊野地方史研究会・新宮市立図書館 二〇一一年）
- 『熊野誌 第五八号』（熊野地方史研究会・新宮市立図書館 二〇一一年）
- 『人権からみた新宮のあゆみ（草稿）』（新宮市教育委員会 二〇〇五年）
- 稲垣真美『近代仏教の変革者』（大蔵出版 一九七五年）
- 市川白弦『市川白弦著作集 第三巻 仏教の戦争責任』（法蔵館 一九九三年）

末木文美士『近代日本の思想・再考Ⅰ 明治思想家論』（トランスビュー二〇〇四年）  
 大阪宗教者9条ネットワーク編『日本における宗教教団の戦争責任』（大阪宗教者9条ネットワーク二〇一一年）  
 『日本宗教界と戦争／平和 日清戦争から120年の軌跡』（中外日報社二〇一五年）  
 ブライアン・アンドレー・ヴィクトリア著、エイミー・ルイズ・ツジモト訳『禅と戦争――禅仏教の戦争協力』（えにし書房二〇一五年）  
 『初期社会主義研究』創刊号／第二七号（初期社会主義研究会一九八六／二〇一七年）  
 吉田久一「内山愚童と高木顕明の著述」（日本歴史学会編『日本歴史』第一三一号 吉川弘文館一九五九年）  
 大沢正道「アナキズム思想の土着――大逆事件に連座した三人の僧侶」（中村雄二郎編『思想史の方法と課題』東京大学出版会一九七三年）  
 赤松徹真「近代天皇制国家と仏教 「大逆事件」 に連座した僧侶をめぐって」（『仏教史研究』第八号 龍谷大学仏教史研究会一九七五年）  
 赤松徹真「近代日本における政治と宗教――新仏教運動の場合――」（『佛教大学総合研究所紀要』一九九八年別冊号 佛教大学総合研究所一九九八年）  
 関山直太郎「和歌山県における初期社会主義運動」（安藤精一編『紀州史研究 2』国書刊行会一九八七年）  
 中川剛マックス「大逆事件に連座した僧侶の各宗派における復権過程」（『東海佛教』第六三輯 東海印度仏教学会二〇一八年）  
 柏木隆法「解説」（『無我の愛 解説・総目次・索引』不二出版一九八六年）  
 『復刻版 無我の愛』第一巻（不二出版一九八六年）  
 『新仏教』各号（大谷大学図書館・龍谷大学図書館所蔵）  
 『熊野新報』各号（和歌山県立図書館・和歌山県立新宮高校所蔵）  
 『熊野実業新聞』各号（和歌山県立図書館所蔵）  
 小山松吉述『日本社会主義運動史』（司法省刑事局一九二九年）  
 沖野岩三郎「生を賭して」（『生を賭して』警醒社書店・弘栄堂一九一九年）  
 沖野岩三郎「大逆事件の思い出し回想の人々」（一）・（二）（『文芸日本』昭和三〇年九月号／一〇月号 文芸日本社一九五五年）

・内山愚童関係

- 森長英三郎『内山愚童』（論創社 一九八四年）
- 柏木隆法『大逆事件と内山愚童』（JCA出版 一九七九年）
- 眞田芳憲『大逆事件』と禅僧内山愚童の抵抗』（佼成出版社 二〇一八年）
- 『曹洞宗ブックレット 宗教と人権 8 仏種を植ゆる人―内山愚童の生涯と思想―』（曹洞宗 二〇〇六年）
- 『曹洞宗人権学習小冊子 No. 1 仏種を植ゆる人―箱根林泉寺と内山愚童』（曹洞宗 二〇一二年）
- 石川三四郎『自叙伝 上巻 青春の遍歴』（理論社 一九五六年）
- 石川三四郎『浪』（ソオル社 一九五六年）
- 鶴見俊輔編『近代日本思想大系 一六 石川三四郎集』（筑摩書房 一九七六年）
- 『西さがみ庶民史録』第九号（西さがみ庶民史録の会 一九八四年）
- 塚本啓祥・磯田熙文校註『新国訳大蔵経 大般涅槃經（南本）I』（大蔵出版 二〇〇八年）
- 塚本啓祥・磯田熙文校註『新国訳大蔵経 大般涅槃經（南本）III』（大蔵出版 二〇〇九年）
- 塚本啓祥・磯田熙文校註『新国訳大蔵経 大般涅槃經（南本）IV』（大蔵出版 二〇〇九年）
- 中村元・紀野一義訳註『般若心経 金剛般若經』（岩波書店 一九六〇年）
- 坂本幸男・岩本裕訳註『法華經（上）』（岩波書店 一九九一年）
- 千葉耕堂『無我愛運動概観』（無我愛運動史料編纂会 一九七〇年）
- 柏木隆法『伊藤証信とその周辺』（不二出版 一九八六年）
- 芹川博通『内山愚童―その無政府主義の思想―』（峰島旭雄編『近代日本の思想と仏教』東京書籍 一九八二年）
- 石川力山『大逆事件』と仏教―内山愚童の事件連座と曹洞宗の対応―（真宗大谷派同和推進本部編『身同―同和推進本部紀要―』第一四号 真宗大谷派 一九九五年）
- 眞田芳憲『大逆事件と禅僧内山愚童の「仏教社会主義」とその行動の軌跡―禅僧愚童の抵抗の宗教的倫理と責任―』（『中央学術研究所紀要』第四五号 中央学術研究所 二〇一六年）
- 上山慧『内山愚童の仏教社会主義』（『治安維持法と現代』第三三号 治安維持法犠牲者国家賠償請求同盟 二〇一七年）
- 岩崎正純『内山愚童覚書』（『神奈川県史研究』第二〇号 神奈川県史編集委員会 一九七三年）
- 岩崎正純『小田原藩における木工芸生産の展開』（『小田原地方史研究』第一号 小田原地方史研究会 一九六九年）

茂木恵太「石川三四郎の思想形成と仏教―内山愚童との関係を契機として―」（『社会学研究』第二十七号 早稲田大学大学院社会科学研究所 二〇一六年）

工藤英勝「日露戦争関連公文書―曹洞宗『宗報』における近代戦争」（『曹洞宗研究員研究紀要』第二四号 曹洞宗宗務庁 一九九三年）

『収蔵資料（古文書）目録 大平台藤曲家文書』（箱根町立郷土資料館 二〇一六年）

・高木顕明関係

『真宗ブックレットNo. 8 高木顕明 大逆事件に連座した念仏者』（真宗大谷派 二〇〇〇年）

「高木顕明の事績に学ぶ学習資料集」編集委員会・大阪教区高木顕明の事績に学ぶ実行委員会・解放運動推進本部編『高木顕明の事績に学ぶ学習資料集』（真宗大谷派 二〇一〇年）

大東仁『大逆の僧 高木顕明の真実 真宗僧侶と大逆事件』（風媒社 二〇一一年）

菱木政晴『極楽の人数 高木顕明「余が社会主義」を読む』（白澤社・現代書館 二〇一二年）

山内小夜子述『戦争と仏教―戦争は戦争の顔をしてこない―』（真宗大谷派大阪教区会議員教学振興委員会 二〇一七年）

『宗報（四）「宗報」等機関誌復刻版一二』（真宗大谷派 一九九四年）

赤松徹真ほか編『真宗人名辞典』（法蔵館 一九九四年）

高木顕明述『日蓮宗非仏教』（法蔵館 一九九四年）

法華講史編集委員会編『日蓮正宗 法華講百年史年表』（日蓮正宗法華講連合会 一九七三年）

村越末男「近代仏教者の社会意識―「精神界」の差別用語をめぐる―」（『精神界復刻版 解説 近代の宗教運動―「精神界」の試み』法蔵館 一九八六年）

泉恵機「高木顕明と部落差別問題（一）」小説「彼の僧」に見られる顕明の被差別部落観（感）」（『大谷学報』第七七巻第一号 大谷学会 一九九七年）

泉恵機「高木顕明―近代日本における仏教者の一軌跡―」（大谷大学真宗総合研究所編『親鸞聖人七百五十回御遠忌記念論集下巻 親鸞像の再構築』筑摩書房 二〇一一年）

井之上大輔「高木顕明の真宗信仰―先行研究の再検討と『日蓮宗非仏教』の分析」（『佛教史研究』第五一号 龍谷大学仏教史研究会 二〇一三年）

山口範之「浄泉寺と高木顕明」（『同和推進フォーラム 第二四号』真宗大谷派同和推進本部 一九九七年）

辻本雄一「高木顕明と紀州新宮・年譜的事柄の背景」(『身同 同和推進本部』第一八号 真宗大谷派同和推進本部 一九九八年)  
 前田賢龍「高木顕明述『日蓮宗非佛教』について」(『身同 同和推進本部紀要 第一九号』真宗大谷派 一九九九年)  
 福井敬「高木顕明の僧籍復権と部落解放同盟 同朋会運動の展開を中心に」(『大正大学大学院研究論集』第四二号 大正大学大学院 二〇一八年)  
 上山慧「明治期真宗僧侶の国家観・平等観 高木顕明『日蓮宗非仏教』を中心に」(真宗連合学会第六五回大会発表資料 二〇一八年)  
 『精神界』各号(大谷大学図書館所蔵)  
 大須賀秀道『戦時伝道大観』(法蔵館 一九〇五年)  
 『戦争法話』(法蔵館 一九〇四年)  
 沖野岩三郎「彼の僧」(『煉瓦の雨』福永書店 一九一八年)  
 沖野岩三郎「煤びた提灯」(『失はれし真珠』和田弘栄堂・警醒社書店 一九二一年)  
 沖野岩三郎「日記を辿りて」(『失はれし真珠』和田弘栄堂・警醒社書店 一九二一年)  
 沖野岩三郎「われ患難を見たり」(四)(『婦人倶楽部』第六卷第一号 一九二五年一月一日)

・峯尾節堂関係

中川剛マックス『峯尾節堂とその時代 名もなき求道者の大逆事件』(風詠社 二〇一四年)  
 田中伸尚『囚われた若き僧 峯尾節堂 未決の大逆事件と現代』(岩波書店 二〇一八年)  
 臨濟宗妙心寺派人権擁護推進委員会編『大逆事件に連座した峰尾節堂の復権にむけて』(臨濟宗妙心寺派 一九九九年)  
 角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典 第二四卷 三重県』(角川書店 一九八三年)  
 永広柴雪『新宮あれこれ』(紀南新聞出版部 一九六一年)  
 堺利彦獄中書簡を読む会編『堺利彦獄中書簡を読む』(菁柿堂 二〇一一年)  
 クロポトキン著・幸徳秋水訳『麵麴の略取』(岩波書店 一九六〇年)  
 教誨百年編纂委員会編『教誨百年 上巻』(浄土真宗本願寺派・真宗大谷派 一九七三年)  
 仲原ヒノキ「新宮の人たち」(『熊野誌』第二一号 熊野地方史研究会・新宮市立図書館 一九八五年)

辻本雄一「大逆事件」の犠牲者 峯尾節堂の振幅」(『燔祭』第四〇号 燔祭社 一九九一年)  
 脇田憲一「大逆事件」犠牲者紀州新宮グループ 峯尾節堂と三好慶吉父子の生涯―未発表  
 の遺稿と聞き取りを中心に―」(『熊野誌』第五一号 熊野地方史研究会・新宮市立図書館 二  
 〇〇五年)  
 辻本雄一「冬構えの覚悟―第四回『大逆事件サミット・IN熊野、新宮』に向けて―」(『大  
 逆事件の真実をあきらかにする会ニュース』第五六号 大逆事件の真実をあきらかにする  
 会 二〇一七年)  
 上山慧「峯尾節堂の生涯と思想」(『熊野誌』第六四号 熊野地方史研究会・新宮市立図書館  
 二〇一八年)  
 『はまゆふ』各号 (和歌山県新宮市立図書館所蔵)  
 『正法輪』第二八三号 (正法輪発行所 一九一一年二月一二日 大谷大学図書館所蔵)

・井上秀天関係

佐橋法竜『井上秀天』(名著普及会 一九八二年)  
 中村元訳『ブッダのことば―スッタニパータ』(岩波書店 一九五八年)  
 森長英三郎「大逆事件と大阪・神戸組」(『大阪地方労働運動史研究』第一〇号 大阪地方労  
 働運動史研究会 一九六九年)  
 中村隆「井上秀天のこと」(『歴史と神戸』第四巻第四号 神戸史学会 一九六五年)  
 小野寺逸也「神戸平民倶楽部と大逆事件」(『歴史と神戸』第一三巻第二号 神戸史学会 一  
 九七四年)  
 福嶋寛隆「帝国主義成立期の仏教―「精神主義」と「新仏教」と―」(二葉博士還暦記念会  
 編『仏教史学論集』永田文昌堂 一九七七年)  
 赤松徹真「井上秀天の思想―その生涯と平和論及び禅思想―」(『龍谷大学論集』第四三四・  
 四三五号 龍谷学会 一九八九年)  
 近藤俊太郎「井上秀天の仏教と平和論」(『仏教史研究』第四〇号 龍谷大学仏教史研究会 二  
 〇〇四年)  
 守屋友江「世紀転換期における仏教者の社会観―『新仏教』における鈴木大拙と井上秀天  
 の言説を中心に―」(『近代仏教』第一二号 日本近代仏教史研究会 二〇〇六年)  
 石井公成「明治期における海外渡航僧の諸相―北畠道龍、小泉了諦、織田得能、井上秀天、  
 A・ダルマパーラー」(『近代仏教』第一五号 日本近代仏教史研究会 二〇〇八年)

上山慧「井上秀天と初期社会主義者との関係について―神戸平民倶楽部における活動と大逆事件を中心に―」（『歴史と神戸』第五七卷第三号 神戸史学会 二〇一八年）  
『大阪朝日新聞』一九一〇（明治四三）年八月三十一日（大阪府立中之島図書館所蔵 森山誠一提供）  
井上秀天『仏教の現代的批判』（宝文館 一九二五年）  
「森長訴訟記録Ⅳ」（森長英三郎所蔵）

・毛利柴庵関係

佐藤任『毛利柴庵―ある社会主義仏教者の半生』（山喜房仏書林 一九七八年）  
関山直太郎編著『初期社会主義資料 牟婁新報抄録』（吉川弘文館 一九五九年）  
熊野歴史懇話会・久保卓哉企画『日露戦争を伝える牟婁新報号外 明治37年〜明治38年 全185枚』（あおい書店 二〇一七年）  
『復刻版 牟婁新報』第一巻〜第一五巻（不二出版 二〇〇一〜二〇〇二年）  
『復刻版 牟婁新報』第Ⅰ期 解説・執筆者索引（不二出版 二〇〇二年）  
『復刻版 牟婁新報』第Ⅱ期／第Ⅲ期 解説・執筆者索引（不二出版 二〇〇六年）  
『国史大辞典』第一巻（吉川弘文館 一九九〇年）  
荒畑寒村『新版 寒村自伝』上巻（筑摩書房 一九六五年）  
絲屋寿雄『管野すが―平民社の婦人革命家像―』（岩波書店 一九七〇年）  
田中伸尚『飾らず、偽らず、欺かず 管野須賀子と伊藤野枝』（岩波書店 二〇一六年）  
堀和恵『評伝 管野須賀子―火のように生きて―』（郁朋社 二〇一八年）  
『南方熊楠日記3』（八坂書房 一九八八年）  
『南方熊楠日記4』（八坂書房 一九八九年）  
神坂次郎『縛られた巨人―南方熊楠の生涯』（新潮社 一九九一年）  
中瀬喜陽・長谷川興蔵編『新装版 南方熊楠アルバム』（八坂書房 二〇〇四年）  
門奈直樹『明治地域主義言論の担い手―毛利柴庵と『牟婁新報』』（『総合ジャーナリズム研究』第二〇巻第三号 総合ジャーナリズム研究所 一九八三年）  
武内善信『新仏教徒・毛利柴庵の思想と行動』（『同志社法学』第三七巻第五号 同志社法学会 一九八六年）堀口節子『毛利柴庵に於ける明治社会主義の受容―足尾鉍毒問題を契機として』（『龍谷史壇』第九九・一〇〇号 龍谷大学史学会 一九九二年）  
上山慧「毛利柴庵と『牟婁新報』への弾圧」（『大谷大学史学論究』第二三号 大谷大学文学

部歴史学科 二〇一八年）  
杉中浩一郎「南方熊楠と大逆事件」(『くちくまの』第八三号 紀南文化財研究会 一九九〇年)  
中瀬喜陽編「西面欽一郎・西面寛五郎宛南方熊楠書簡」(『熊楠研究』第八号 南方熊楠研究会 二〇〇六年)  
雑賀貞次郎「大逆事件と田辺の追想」(『田辺文化財』第四号 田辺文化財審議会 一九六〇年)  
『六大新報』第三八六号 一九一一(明治四四)年二月一二日(国立国会図書館所蔵)